さ 上にさわぐそふる辭也、萬十二、さひのくまひのくまはにさまをまをして馬に水かへわれよそに見むくまは、中に添ることは也、古下、我名さはさね、日仁

さ 總、はやふさ天にのぼりとひかけりいつきかうへのさゝきとりわれ、萬十九、鵜川たちとらさむあゆのしかはたわれにかさむけたもひしもはゝ、楢

さ 下こゝに有、辭也、萬十、秋の空のよさ、同、たゝひとりこに有かくるしさ、楢

さ すべて、さの一詞に、三の意有、少き事をもいひ、狹き事をもいひ、またすべて發語にもいふなり、又のぶれば、志賀の二言に成ゆゑ、さこそ、さもあらぬ、さなきの如きい、皆志加の意にて、よく聞ゆる也、發語 古事記上、天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒、打折三段而、奴那登母由良爾、振滌天之眞名井而、佐賀美爾迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神名云々、大和物語上、さもこそいみねの嵐もあらからめなびきし枝をうらみてぞこし、我いさゝ雪ふるそらにきえねとや 立かへれどもあけぬ板戸は、今思ふに、このさもこそ、さの類ひのさの一言い、あかの二言をつゞめたるなり、然もこそ我いさゝはといひて、聞ゆるなり、又あかい、にすかの約めなれば、我いさすがに雪ふる空にとつらねても、きこゆ

さ さあ 人を率なふ辭にいへりあいさの轡也

○さあさこし 小狹輿の儀後奈良院の御時に疫癘行れて貴布禰の神輿を造りしより起れりといへり、

国立国会 27.5.1 図書館 666712

新撰字鏡に涙をあめの小雨の義にも

國初の令にも紗綾をあやといへりもやはた也

萬葉集に見ゆ只青き也今もあををといへり

○あを　俗に皺にもよる物をもよるは通衆の意訂也○秋田に口語の結末に

あををといふ○俊名抄に頭子を髪大のあををといふより采の音也職人歌合にも

しらがのあを大造物のあをめなど見えたり○犀の音をもよめり昔し信州

犀川に犀住たり新朝卿泉小二郎親衡に命して捕しむと異本東鑑に

見えたり泉小二郎勁力勇氣也し筑摩郡の泉の産成へし今も飛騨の奥

山に住といふ小犀山犀の異地明和の年に見せ物にせしへ角新上にありて

本より二ツに分れたり頷まで垂れて圓なり夫木集に　うき身にたぐふ

いき角得し哉袖のなみだも遠さかるやと是歟犀の放事たよめる也○北

山抄大嘗會の條に前後拂犀角鏡等と見えたり

あいか　雜賀は紀州也○財賀は二州也財賀寺は大江定基の建立也定

基は三河守たりし時ねび人力詩が事によりて出家し渡唐す朱彖漆が書

に見えたり

あいかね　皂角子といふ音の轉訛せるなるへし猪牙皂角あり本邦に生せ

す○肥皂莢は別種なり又波羅門皂莢あり

あいきよ　漢書に陛下載詐之見ゆ○あいなん載判也

あいぐさ　孝德紀に藺草を菁る本義成へしされどあいぐさといふ藺菁に三

枝をよめるは義訓せしなり延喜式に朱草の別名とし瑞草也といへり俊名

抄に見なし枝々相値葉々相當也と見え姓氏錄に三葉の草のよしいへ

古事記に如三枝押圓坐といふ詞あり押圓は押葉に同しけれは葉

も三つ並びなるにや○萬葉集にある草の中になんといへるも三葉あるもの

にや必ず中あるゆゑにかくいふなり○古今集の序になぞらへの三葉四葉は

このつくりもやうにいふもみつはの枕詞に用たるなるへし○俊名抄に藤花を

さきそ二にこそなのはを見えたりのはつくに同し呂氏春秋にも三葉蘇

を見ゆ○神祇令に三枝祭義解に謂二竿一川、祉、祭也以三枝、華飾二酒

罇一祭故曰三枝一也と見ゆ是かさゆりの北なるへしさゆりの一本の末に三の

枝ありしく分れ葉の末に葉の相當れるさふにも近けれはかの福草に擬

せしならんさゆりの本の名なるさふよし古事記に見えたりさゐ草さ草

音通ひて其祭も四月にさゆりの咲頃なれはかなふへしといへり○

萬葉集抄に神は宮木なとに攀て用ゐられさればふ木なれはさぞといへり

ふと見えたり古今集の序に殿つくりよりて懸り傳へたる說なるへし顯昭

說に三枝にからまあふき也徒草末葉廢けれは祝にさゆるゆゑかと

愚考る○延喜式雜菜の條に凶草牛膝各七斤と見ゆ爾雅に凶芝鄧

註に一年三花爲二瑞草一也と見ゆ

あいこう　在鄉を語り略して在のみもいへり在々處々なといへる意也○

罪業は梵書の語也

あいそ　源氏にかいねりのあいそといへり清々しき義なり

あいさき　幸福の義也前を義通へり○飛驒の金山にては自然銅をも稚

玉比賣云云他云或伊豆國賀茂郡佐伎太末古事記前

わかへしきなつかしき意歟一種の草なるへし和名抄佐伊多津萬

也所以拘束冠他不墜也うつの保奈美かたけ

にあまりそうそあるかなるものつかへしもの

ゆひつけてさいしきの例のやうにはならこになれおさ

てゐなみあはれにの花女房みな髮

あけてさらしきたり保古本冲津白波御く

しのてうとすひたひよりはしめさいしきもゆひたに

ほんてうしきも林葉

纏着　さいしやく裝束のたけを其人のたけさひ

としくするを云也宴餘裝束抄に纏着タケトニ

トシキ事ナリサイセハヨナヒトヨウシタカニコソ

トモ也名目の習也とあり貞五

さいそく　催促後漢書六十九上楊倫傳詔書

勅司隸催促發遣白氏文集卅三冬深夏高

相催促乖老光陰遂侶飛

さいたつま　顯昭和歌色葉集さいたつま以淺

青和名集號佐伊多津萬と云り長嘯山家記

の文にもあり書言字考に東風菜を訓して云本草云東風菜先生枚名菫二三尺葉

似杏葉而長とも云り信按此說にたれは先

立妻の義にて妻は若草のつまとも云に由あり

音如字見ゆ

さいそんはる　再進体と書り今俗さいしんなどいふ是也

さいそよ　在處也西土に處在さいふ如し○在地在郡の稱へ安東郡等當沙汰文に見えたり

さいせん　賽錢成へし或ハ散錢をもいへるにや

さいだつ　神代紀に先〻字をよめり先立の義也前も同し

さいだて　倭名鈔に蹴射をよめり小射楯さいふにや郭璞方言〻注に平題者今之蹴鞠篇也と見ゆ

さいたづま　唯草をいふをも又いたどり也をもいへり菖蒲式にさいたづまが草葉にたろ〳〵と見え又若詠草時さいたづまさいふをも見えたり

さいつころ　前頃の義つゐ休め字也東鑑に近曾〻字をよめり

さいつち　倭名抄に修撰をよめり小椎の義いゐ休め字畿内に番匠つち西國四國にさいづちさいふ

さいとり　彈丸をよめるハ謬る鈷幸也則捕の義也今さいとりさいふハ重言也さいとりさいとりさいなどいふにや

さいなむ　源氏河流に罪〻字をよめり災難の音なるにや呵責するの意也又新撰字鏡に譴をさいなむとよめれハ此義成へし

さいのかわら　俗に幼少なる者死ぬれハさいの河原に玉り小石を積て遊居るさいふ佛經に見えたり此〻邦にても歳言也河原に小石を積ハ鐵六の局に似たりよて然の川原さいふにや一說に大和國狹井の河原に古石像の地藏ありしよりいへりそ○奥州南部領人の戸に近き大畑さいふ土音如字見ゆ

さいのかみ　幸〻神と書り男女を幸し婚を結ふ神也さいへり道祖の轉成へし道祖を倭名鈔にさへ訓せり行神也朝野群載に出〻京師〻間本〻幣〻道〻神事を見えそれの神さいひ幸〻神と書る是也塵袋抄に小社まるき石を置さいへり○陸奥〻國名取郡笠島の道祖〻神ハ京の出雲路の幸〻神の娘なりさいふ事古き物に見えたり一說に出雲路ハ本出雲寺に地名也幸〻神ハ齋神にて式に所謂出雲非於神社を寵り混したる也さもいへり○常陸〻國高道祖村道祖の祭に大きなる男根を木もて造り鳥居に掛さいふ○上州あんなかの幸神の小石を美濃のたはなのあたりの幸〻神に奉りて所願を○信州松本の城下正月に市井の衢の中央に長き十間餘はかりの大柱を心とし松竹等をかざる是も幸〻神を祭る又御柱さよふ小童多く集り柱の下をくゞり童謠の内に一人を別當と名つけ水あびせて是を鎭まるまもりぞと三度杖を辻祭の幸神を混せし風俗にやさいへり諏訪〻社三月中〻酉祭日にも御柱を立る事あり

さいはひ　幸福を訓せり幸を助字に用る時ハ俗語のさわせにさいふ意なり字彙に非所當得而得與〻不可〻免而免皆曰幸と見ゆ又書牘に用るも願ふ辭となる前延の義にや佛足石の跡にさはひに作るも祝詞にさきはくとも萬葉集にさきはふとも見えたり今も前行のさいふ意なるにや仁明紀に減劾庶鯉之愆を見ゆこゝの都賦に景

慮比陛命神社〻また武藏埼玉郡前玉神社二座あり萬葉集カ〻前玉之小埼乃沼鴨曾とよめるにかをにふりかける霜をはらふとならし又十四〻佐吉多萬能津爾乎流布禰乃今狹〻此那後に東西に分よひしにや鎌倉大草子に武州埼西郡〻東鑑治承六年六月〻武藏國埼西足立兩郡內〻大河土御厨〻

さいつあ　サイツチのサイ同意かう保歷原君〻くれのあしたはさてさいつあつさて林葉

さいはい　采配か紫日記上〻人のはさよりかさいはいこよなくれ給へるなりかし

さいはて　最果〻枕冊子十〻さいはての車にはくらん人かく桑花抄後〻又さいはてにかゝなき心ちそれ〻狹衣二〻さいはての車にはくらん人はいかでかさゝはせ給へりなくらん綺語抄さゝ〻あしきさ魚のたまりありはくまし也なやだのまん〻童蒙抄〻山さはにあるの小魚也〻あめ過る田のきのさゝの水たまりありはくまし也なやだのまん〻童蒙抄〻山さは田のきのはくむくさ云〻奥義抄〻山さはたのきのさゝくきにたしれはまさてけふめくらしつ〻八雲御抄三下〻魚部〻さゝ山田のさゝらさゝくにさいへり〻或號草〻俊頼號小魚〻後度〻今ふかなしろのさゝにたしめてまれにさゝらさゝくにさいへり〻或號草〻俊頼號小魚〻後度〻今ふかなしろのさゝにたしめてまれにたてるひつなのいね〻注〻まうす也〻なゐはさゐ井のあと也〻

さう　象和名抄牧佐〻本草象〻天智紀〻天皇遣使奉象牙於法興寺佛〻延喜踏正式〻凡內命婦三位以上聽用象牙櫛若狹國守謀職次

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

外開、又讀經念佛與慈心方等、抱扣等、念不動本誓也、間願全錄給口やうに被、告給之後、知々

ざうざ　掌座、樂花音樂、二三人ぐして、二三えはこぶ座などいふものもあり、

ざうざう〳〵し　寂々、寂寞閑寂が閑同、寂々の音語歟、さびしき事也云、今俗にも騷動の事をいふ、それとは異也、徒然草上、よろづにみだれさわぐ色このまるんのこゝろをさうざうしくおぼえ、伊勢家集、大和にて二月ばかりにまだにさうざうしく寺めぐりせんと思ひたちありきけるに、りうもんといふ寺にまうでゝ云々、源氏物語、わかき人々悲しきことをさうざうしくもあはれ、うちおわたる朝夕にならひて、いとさうざうしくうくの御ありさまなどを思ひきこゆれば、

ざうざう〳〵し　信云、これかゝるべき物かゝるべき事のなくてたらぬが淋しきをいふ、つれづれ〳〵の身、此ばかりめにて心得べし、

ざうさく　造作、明月記天福二年八月五日、一昨日火事實說、烏丸油小路東、七條坊門南八條坊門北、卅地燒亡、土倉不知員數、商賈充滿、海內之財貨、只在其所云云、貴金之中整爲其最、自翌日皆造作云々、

ざうし　冊子、雙紙、草紙、拾玉集奧書、雙紙、草紙、

第、應永十五年六月廿二日に南蕃船着岸云々、彼帝より日本の國王への進物生象一疋、

ざうがん　雜中群要、白張單布可、着靑、或者極熱之間、云云、但可、重、狹眼下數、

糟雞　さうけい、庭訓往來に點心者水纖溫糟、糟雞とあり、尺素往來にも酢蟹糟鷄とあり、それ以、淡醬、煮者也、云々、此心かこんにやくを切て、即醬、詢、薪、明和四年金地院言ヲ、京都土和尚ニ答也、眞六

ざうけん　細流識言ヲ、源相ホ、いかなるさうけんなどのあるにかと、是なん此世のうれへにて云々、

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

ざうごん　雜言、今思ふに、中古いひ、なにのわかちもなく、諺語の如くいふまゝをいふ、無心所着のまゝ也、今俗にいふ、惡口雜言をいふ也、俗にいはゞあくたいなどいふがごとき此、物の氣にもよれ、狂ひ給ひし所に、雜言明月記に、滕原敎賢公のやまかり給ひんとする時、又はこゝろふかゝるまたくはこゝろふかゝるまゝ也、明月記に、文曆二年三月十八日、須臾之間猶可聞由被仰、又今取給之間、御氣色忽然變、雜言大略如例、咲御證不安、高聲惛

さうして　左右して也、さかしてといふ意也、竹取物語に、下野守のもとにつかはしける、見四

さうし　精進、もろ〳〵精進の音語也、土佐日記に、いでやたゞみなさうし、精を熟さうび、進を知武のこゝろを美にかよはしていふ也、或說にもろ〳〵の音語也といへるはあたらず、藤原仲文集、御禊のさうしまで、右山にこもりたる女房、人まいりあひて愛を侍りければ、いつくにも身をしかくれねば雲かゝる山ふし見てぞこがれをりける題を

さうし　信云、後拾遺、かねのさうしに書付侍けるに、狹衣、少しはなれたる所のかきうつしなどばかりにて、あら〳〵しきかりのこゝろ、

雜事　源帝木、さまくからん雜事ゝうは給へらんと、同澤瀉、殿にめし侍りしかは云云、雜事ともおほせられつるついでに、

雜色　候々間書に云、武家に雜色を申、中間より下り馬屋の者より上る也、公家にも中間を雜色と被仰候、又公方樣の御雜色を申、又別にて候、大方の人の雜色などゝて、重々にも候間、馬屋の者うつぼをゝひ弓をかけ候、頗朝の雜色の名、時澤鶴太郎宗光定遠信方、なども有、保元物語に、源太がうちの雜色ども、丸どもに、おもく〳〵に係ふものなれば、さうしきはなきにして、左右しても也、さかしてといふ意也、竹

紙、武代雜ユ、人の雙紙をかゝせ云云、

さうじ　精進、もろ〳〵精進の音語也、土佐日記にいでやたゞみなさうじ、精を熟さうじ、進を知武のこゝろを美にかよはしていふ也、或說にもろ〳〵の音語也といへるはあたらず、藤原仲文集、御禊のさうしまで、右山にこもりたる女房、人まいりあひて愛を侍りければ、いつくにも身をしかくれねば雲かゝる山ふし見てぞこがれをりける題を

さうと　信云、後拾遺、かねのさうしに書付侍けるに、狹衣、少しはなれたる所のかきうつしなどばかりにて、あら〳〵しきかりのこゝろ、

雜事　源帝木、さまくからん雜事ゝうは給へらんと、同澤瀉、殿にめし侍りしかは云云、雜事ともおほせられつるついでに、

雜色　候々間書に云、武家に雜色を申、中間より下り馬屋の者より上る也、公家にも中間を雜色と被仰候、又公方樣の御雜色を申、又別にて候、大方の人の雜色などゝて、重々にも候間、馬屋の者うつぼをゝひ弓をかけ候、頗朝の雜色の名、時澤鶴太郎宗光定遠信方、なども有、保元物語に、源太がうちの雜色ども、丸どもに、おもく〳〵に係ふものなれば、さうしきはなきにして、左右しても也、さかしてといふ意也、竹

さうじ　相應を書り口語にいふ是也、○四神相成といふ地相の天象に相應するといふ居家必用に居宅欲左有流水是云青龍右有長道是云白虎前有汗池是云朱雀後有丘陵是云玄武為最貴之地を見えたり、

さうかう　相應を書り口語にいふ是也、○四神相成といふ地相の天象に相應するといふ居家必用に居宅欲左有流水是云青龍右有長道是云白虎前有汗池是云朱雀後有丘陵是云玄武為最貴之地を見えたり、

さうく　篇海に祈備ユ日、竦々と見えたり、

さうかう　相應を書り口語にいふ是也、○四神相成といふ地相の天象に相應するといふ居家必用に居宅欲左有流水是云青龍右有長道是云白虎前有汗池是云朱雀後有丘陵是云玄武為最貴之地を見えたり、

さうか　源氏に見ゆ唱歌也といへり今ぞうがよりの轉源抄に唱歌の詞は百濟國の語也たりの類是也と見えたり、○早歌の義もあり徒然草職人歌合などに見えたり神樂のはやうたは別也といへり

さうかい　西宮記に摒擋主上及僧家貴女之所用とみえ摒擋草にも作る假借也天子著御の物ハ淺履の形にて錦もて張れりといへり、○常に草鞋をいふわらつつ也、○借擋の字西土の書に見えたり制度なにも僧家にハ鞋をおいの音によれり、

さうかう　書法にいふ草頭也或ハ草勾を書り、○草藁ハ下書也、○草敎は足利家の時五月五日兵を習ふの基業とし兩陣の形勢を張て鏑吹なならし五回旗を揚て互に主客の用をなし挑合て凱旋の仰あるを武家の嘗祿とするをいへりと

さうがう　大智度論に相好と見えたり今俗にいふ所是也

さうがん　紫花にさうがんする物と見え侍中華要に下髮夏家服と見ゆうものゝ名ならんといへり古今著聞にふた藍のさうが又ふかみどりのさうがなどいへるも是成べし、○刀劍の具なにいふ識懸の字成べし又鎺懸なりともいへり

さうさ　閑居の友に山のふもとにいはかたのやうがまくてさうさといふものを日に三つゝ此むすめもとうりに出しけると見えたり床机の義成べし、

さうげん　源氏にみゆ讖言の音也といへり、

さうぐわん　古今序にみゆ假名抄に史をよめり佐官の音也省に鎌倉に屬司に令史諸使諸衛に志諸國に目太宰府に典堪同じ、

さうし　物　土佐ぶなどをもてあそびそうしものなけれは午の時より後に云々源ッカノ上御あるしのことなどそうし物にうつるついしからず　なまかしくせさせ給ふ

さうそこ　消息　みやこのことを消息をとふ　それより轉て　裏内さへ事なき云云所によるべし　源氏物語の抄物に消ハ死也息ハ生也と注して死生をさす心也といへり　源氏物語　くれまどふ心のやみもたくかたきかたはしもたにはるゝはかりに聞えまほしう侍るを　おたしにも心のさかにきり立より給ひし物を　かゝる御口にて見奉るかなく　年比うれしくもたゝしきつゐてにて

さうそつろたん　早卒露脚　拾玉集二　都遠かの山寺にはなをなる兒有けりと云々　十二月十一日の申の時はかりより十三日の午の時はかりまでに　それもひさうけもなくひまくにてよみはしたりけるとて云々　そして此百首の名を早卒露脚の百首と名つけて披露しけり

さうたう　相當　官と云ハ　此官ハ此位を定りて　官と位と懸る重きのつゐてあるを云也　重き官ハ位も重し　輕き官ハ位も輕し　是を相當と云也　大臣ハ正一位從一位　左大臣右大納言ハ正二位從二位　大納言ハ正三位　中納言ハ從三位なとゝ　官と位と相應の定め有るなり

さうし　物　土佐ぶなどをもてあそびそうしものなければ午の時より後に云々源ッカノ上御あるしのことなどそうし物にうつるついしからず　なまかしくせさせ給ふ

さうそこ　消息　みやこのことを消息をとふ　それより轉て　裏内さへ事なきを云云所によるべし　源氏物語の抄物に消ハ死也息ハ生也と注して死生をさす心也といへり　源氏物語　くれまどふ心のやみもたくかたきかたはしもたにはるゝはかりに聞えまほしう侍るを　おたしにも心のさかにきり立より給ひし物を　かゝる御口にて見奉るかなく　年比うれしくもたゝしきつゐてにて

さうそつろたん　早卒露脚　拾玉集二　都遠かの山寺にはなをなる兒有けりと云々　十二月十一日の申の時はかりより十三日の午の時はかりまでに　それもひさうけもなくひまくにてよみはしたりけるとて云々　そして此百首の名を早卒露脚の百首と名つけて披露しけり

さうたう　相當　官と云ハ　此官ハ此位を定りて　官と位と懸る重きのつゐてあるを云也　重き官ハ位も重し　輕き官ハ位も輕し　是を相當と云也　大臣ハ正一位從一位　左大臣右大納言ハ正二位從二位　大納言ハ正三位　中納言ハ從三位なとゝ　官と位と相應の定め有るなり

さうそこ　消息　みやこのことを消息をとふ　それより轉て　裏内さへ事なきを云云所によるべし　源氏物語の抄物に消ハ死也息ハ生也と注して死生をさす心也といへり　源氏物語　くれまどふ心のやみもたくかたきかたはしもたにはるゝはかりに聞えまほしう侍るを　おたしにも心のさかにきり立より給ひし物を　かゝる御口にて見奉るかなく　年比うれしくもたゝしきつゐてにて

さうそつろたん　早卒露脚　拾玉集二　都遠かの山寺にはなをなる兒有けりと云々　十二月十一日の申の時はかりより十三日の午の時はかりまでに　それもひさうけもなくひまくにてよみはしたりけるとて云々　そして此百首の名を早卒露脚の百首と名つけて披露しけり

さうたう　相當　官と云ハ　此官ハ此位を定りて　官と位と懸る重きのつゐてあるを云也　重き官ハ位も重し　輕き官ハ位も輕し　是を相當と云也　大臣ハ正一位從一位　左大臣右大納言ハ正二位從二位　大納言ハ正三位　中納言ハ從三位なとゝ　官と位と相應の定め有るなり

さうし　常に草子と書り　草紙の意也　東鑑に雙紙と見ゆ　又冊子の轉なるへし　山谷詩に綠出蠻箋草紙と見えたり　發草紙に造紙と書り　類聚雜要に造紙管見ゆ　後拾遺集にかゝるし見ゆ　草紙の名成へし　○草紙合といふ事あり　○勅撰の詠草紙ハ外題の端に書物語の草紙ハ中に書と令泉記にあるし　埃嚢抄に見えたり　○曹司ハ局也

さうなみ　源氏にみゆ正身の音轉なりといへり　古事記に其神之正身と見え三代實錄に正身固爭不承伏と見えたり　明衡にも見ゆ

さうそく　裝束　物にかくいへり　又さうそくと見えたりさうそくの義と反也　又さうそかさうそくさせ也　さうそくと反也　伊勢物語に女の裝束といふはさせ也　後世男より男くも女の裝束をかつく事あり

さうそめく　紫式部日記に上らう中らうのはそそあまりひさうそめきてのみ侍ると見えたり　是は山田のそほつに喩へてビタヅ向に言動なき意にいへるなるへし

さうち　掃除の音也　字國語に出　○國俗の風に元日より三日の間ハ掃除せぬハ間中　俗不除　十義と五雜俎にいへる如し　○源氏紫花なとに精進をかくいへり　兼盛百首忠度集なとに詞書にさうぢと見え　歌にものゝさとめり　大和物語にさうぢものなしと見えたり　○精進ハ開葷といふ開ハ杜詩の比年病酒開涓滴とある開の字義に同し　陳氏の說に精其心進其志と見えたり　○歌の前書なとにさうぢに歌書付るなとあるは今ある所のやうなる也　今いふものは宛障子也　衫障子庇訓に見ゆ　衣障子類聚雜要に見ゆ　又布障子　旦障子　脇障子　押障子　遣戸障子　鳥居障子等みゆ　賢聖障子紫宸殿にあり　宇多帝の時に起ると禁秘抄にみゆ　帝王編年紀に荒海の障子　昆明池の障子　淸涼殿の北に孝武元狩二年繪　昆明池と見ゆ　年中行事の障子あり　形障子あり　通障子あり

さうさう　騷動の音也といへり

さうさん　本朝式に淸涼殿設錦茵褥と侯名抄に見ゆ　名目抄に茵敷　陪膳采女座と見えたり　後世の圓座ハ此遺制なるへしともいへり

さうなり　撰集抄に多く見ゆ　然諾の辭とみゆれはなりともかなりともいふに同し　今俗さうおそといへり

さうのこと　侯名抄にみゆ　箏のことも又さうのことゝも見えたり　琴のことにかんてんふ　樂編に箏本頌琴別名といへり　今筑紫ことゝいふ曲の條に就て樂箏に異れるといふ　花鳥に自一至五大緒といふ自六至十を中緒と云自十一至巾細緒といふと見えたり　○隋音樂志に箏十三絃と見えたり　琴にも十三絃なるものあり　西京雜記に見えたり　○謂會に箏古以竹爲之と見ゆ　日本紀の歌古事記の詠にも竹やことを造りし事をいへり

さうのふえ　笙の笛也　竹ハ七本あり　頭ハ桐にて筑あり　鍮銅也　笙石といふものなるへし

さうふう　雙方と書り

さうふれん　平調樂にて雛なし　相府蓮に晉の王俊か家に蓮を愛し時の樂也　想夫戀と書ハ誤なりといへり

さうまき　庭訓に左右巻と見ゆ　太刀の事成へし

さうめん　索麵の音轉也　又索にその音あり　索餅も同し　七月七日に索麵

を用ゐん十節記に是日食染綱主年中無疵病さいふに據る也○海さうめんあり藻の品也牛のさうめんと呼草に見絲子也さうめん○蟹もて煮たる煮麺を雑ずにうめんさよふ音を引たる也

さうもん　萬葉集に相聞の部を立たり惣目抄に相聞は戀の歌也と見ゆ

さうもつ　臓物を書り盛物をいふ也俗に病根を何がさうもつになさいふ是也

さうやく　浴浴の音を誌る也さいふり湯、酒手也浴、洗身也と見え儒行に儒有澡身而浴德と見えたり酒飯、洗古字通ず

さうやく　駅驛と書り北馬をいふ也一誌に雑役の義牛にもいふり古事談にも見えたり

さうらい　文選の注に草菜謂山野採薪之人也と見えたり俗に時宜にうとき人をさして草菜子さいふも粗刀をもいふも其人のさまをもてなり

さうり　草履也倭名抄に見ゆ江戸にわらうり仙臺にわらうりさいふ○金剛さいふ名は安然和尚貴ヶ時作草履人問之曰金剛之性體是堅如金剛さいふ主意をもて造り出せる物ゆゑに此名ありともいふり全浙兵制に女鞋をこゞと譯せり職人歌合に板こゞとうも見えたり

さうりんたう　相輪樘と云ふ比叡の山頂にあり一書に弘仁中に最澄心柱を改めて名けしかど呼りと見えたり

さうろん　相論と書り或ハ爭論と書り

○さえ　才をかしこき音を轉して訓をするの例也家隆卿だにつからぬ所のさえを使ふあまたあればなりけり○萬葉集に求めえたりふ同じ俊名抄にもさいふり

さえだ　小枝也竹にもよめり藻鹽草に竹をさえだ草といふを見えたり○平敦盛の死期に至るまで持たりし笛をもかく名けり盛衰記にはえのふえるまへにさえだけれふ名くさもいふりされど南都正倉院の所藏の小枝笛ハ節に小枝三ッあり

さえのにほえ　源氏に見えたり才藝の義也正統記に和漢の才藝をふゆ

さえのもの　江次第にオ男を見ゆ御神樂の歌人也

さえん　菜園也今對馬にてさいえんさいふり○茶園もいふり

さえる　萬葉集に見ゆ風或ハ纏などにいふ集冷の字又泣、字なをもり著なをさえかくるといふ是也月にハ萬葉集に明、字亮、字を皆澄にいふも同し○漢分のさえさるといふも明亮の義也

○さにのれび　萬葉集に狹織之帶を見えたり俟文はた帶の書かくなれハ俟文の狹織なるし

○さか　坂ハ逆ふなり登降順路ならざる意也新撰字鏡に阪もさかり○神代紀に解たるさかさまよめるハさくさと同し○賢をさかしの略なり○日本紀に冠をよめり鶏にいふり是も坂の義成し今も鶏冠をさかさいふり○解をさかさと日本紀に見えたり萬葉集に百積と書てさかさよめり百石也と注せり解石通し用ふる石の音をそへてよめるにやと轉用ざるなるし積をさかさよむる音なり朝野群載に米百坂四十坂とあるも解の義

也○尺をかがよむも音をよむも訓をよむなり末遠をすゑとをとかこしこ
くと古事記に出づ十度の義にて會波反すかへ加利の略なるべし

まが　日本紀祥、字音、字性、字をうに訓もり直たまふなり清をまがよ
むも皆通はし祥音清直ハ本性の徳なる事知べし○源氏に世のまが伊勢
物語にまが見ん俗に身のまが又まがを證まがを顯まなどいふも本性を指
ていふなりされど孝徳紀に瑕、字をまがよめるハ雅也生れつきよりあるま
氣ましの方にもいへり眞名伊勢物語に能なよめるハ態に通じてよかた也○
嵯峨ハ山城葛野郡也嵯峨の隠君子ハ江談王海なとに見ゆ嵯峨帝の皇
子源、潜俗となり秋篠朝臣といふ是なるべし

さかあぶら　倭名鈔に酒落をよめり今酒王といふ是成べし○酒を直にあ
ぶらとよみたるハ古事記の歌に見ゆ後世大臣大饗に辨少納言の座に先ッ
少、酒を者是を待油といふ事有也

さかいき　逆息の義喘逆をいふ也

さかがり　倭名鈔に訓をよめり酔怒也と注せれハ酒怒の略なり新撰字鏡
にさかゝりとよめり

さかき　日本紀に賢木坂樹なと書り又眞賢樹なと見えたり萬葉集抄に
榊木の義といへり○萬葉集に神木とよめるハ神事にもちゐる此木を貴ぶ
ゆえ也とて後世榊、字をも造り出たり新撰字鏡に榊、字をよめるも二合の
倭字也說文に榊桑、神木日所出也と見ゆ榊桑ハ即我桑也とて我邦の
人扶桑を國號とせる成べし○倭名鈔に龍眼木を訓よ新撰字鏡同し
又杜仲も訓るハ心得がたし日本紀に外の木ハ皆漢名を擧られたれど此
木ハ然らず以ておもふに古事記の歌に據ば常盤木の總名にて後世に主りて
一種の木に名づけたるならんくまたそれハ古事記の歌に據ば龍眼も杜仲も訓よくまたやされ
がしが葉をうまそといへるも實物に用たし也○神名秘書に興玉、社
元藏殿以賢木、爲神殿也諸神本懐ハ神殿不、安御體唯用賢
木、と見えたり○外宮玉串行事所に一本の賢木あり此を一本榊といふ
此榊の本にして宮司ハ玉串を取て東を廻り禰宜ハ玉串を取て西を廻る
をもてゆゑありさまをもらんくり又解斎の時勅使宮司禰宜の冠につく木綿
鬘をも此榊の枝に懸る也ともらん○源氏にまが木のはゝかりといふ神
事をいへる也○伊勢一志郡に榊原村あり古昔榊を神宮に奉るといふ國
永家集にも見えたり此地温泉あり古にいふ〳〵しの湯是也榊原もと七
栗郡の内にも歌ハ後拾遺集より見えたり○和名鈔信濃埴科郡の郷名
に坂城あり今の姓に彭城をよめり字史、項羽紀に見ゆ彭をさかよむハ詩
傳に彭ハ衛之河上鄭之郊さかあれば境の意なるべしと劉氏也といへり一
說に彭ハ盛也と注せしをもて也

さかさま　卯月に多くよめるハ此月神祭多く有ハなりさかさまに見
えたりまハ添也さかハ採也○逢事をやしたひよしと思ひ通にて後頼
古くをゝしくやしあの内にさかさま間ハれましものを伊勢齋宮にいまた男を
ハ女ハ榊さゝをにさゝま男しゝ女ハさゝまといへり○熟田二月の祭に
榊鏁あり

さかこそ　萬葉集に遊言のさかこそと見えたり日本紀に倒語をさかしまこ
とゝよめり

さだ　田歌うたふなるべし　林葉

さなだのおび　狹織帶也、萬十一、にしのさなだのおびさむみ、日武烈、大王のさなだのそでハたゞれとよめるに同しきにや、さなだりハまきまはりの帶也、今をなだといふハ、狹のはたの約にて、このさなだりなるべし、

さか　積也尺也、萬十一、百積船、同十三、つゞみた
らぬ八尺のなげき、

釋迦　さが、拾遺雜三、いにしへの衆のたゞみに身
なげはさかと計はさんとぞ思、催馬、へまなき
御心のまが、夫木廿、をくら山まつきのまがに開
ゆなるなるべふ田子のうらこそ、赤染集二、
花の色は都の野べにあらねどもいつこも秋のさ
かにぞありける、

さが　祥日本紀、善同、性同、日本紀通證云、不
祥（サシ）無善也、紀中祥善性、皆訓、左我、與、直、須通、
音通、注、實錄章清字訓、須我、亦與、須通、
之言、亦轉語也、催馬樂、皆乃根乃須我奈幾
乃、梁塵抄曰、須介奈幾也、又源氏談河海
抄、引此紀不祥、證云、布佐波之加良須、古
事記、八千矛神歌云、許許婆不佐波受、今思
ふに佐加奈之乃之ハ、謎の餘りにた助語也、無
の意にハあらず、この類ひの詞いと多し、
はしたなし

さがし　日本紀に賢、字明達、字なるものもかしびとゝも見えたりよし師、字を訓もり榮之義通ふ成ノ又賢たるもの熟也と注せり靈異記に靡をかしこゝともあり

さがし　嶮をもらし坂よりいでたるにや靈異頌眼に精怒をみ新撰字鏡に皓嶢峭又嶢峴又削男又嶂峯又嵯峨をもめれり字音をもて訓をもしにや靈異記に峯ともあり

さかしら　穢をよめり流をさ言をもふ意也ノくと萬葉集に賢、良をも情出をも情進をも書たれど賢したる物する意今かしこだてゝふが如しかゝるものはたらかもり眞名仮勢物語に狡、字をよめるも義訓也今猿がこしこふ意に出う萬葉集に　おなじ見に賢良をもそなはれる人をさく見れば猿にかも似る○さかしめをかしたるさかしがりさかしぶりなど所にもよれど皆ノ穢れを意ノ同し

さかしま　神武紀に倒をよみ常に逆をよめりさかさまをもさかしまをもノくの古今集にもあり

さかしみ　竹取物語にさかしみをりてかなくりたるさかしりをかき出て耻を見せんなど今もいふ

さがみ　捜、字の意也楓、字をよめるも字書に見ず

さかだつき　延喜造酒司式祭神九座の内大邑刀自小邑刀自あり今酒を造る者をたうとみよぶ刀自成ノ杜氏の義に取からん當事ある心得がたし續古事談に造酒司の大をとゝらふ童二三十石入小をそ二十石入ノ二條院の御時大風にて彼司倒れ打破たるやうくの

さかしき　月代（サカイキ）を剃る事、京都將軍の比までもなし、皆總髪也、又ものゝりたるやうなる事もなし、おやぢ髪なり、をぼしからぬ髪なり、今の如くわけたしてハ、をぼしからぬにわろきなり、或記に砂石集に、月代と云事見えたれば、鎌倉時代よりの月代のありし事なりとゝいへれどもの古への常に月代剃たるにあらず、久しく打つゞきたる合戦の時、常にかぶとをかぶり、氣のはせて煩（ジョウ）ふ事あるによりて、頭の上を丸く中そりをそりける也、其形月の如く丸く白くなる故つきそりと云ひしなり、月白を皆くある、今ハ月代と書くなり、つきそりの事をかくやうにのぼせるをいふ、氣をかくやうにのぼせるをいふ、髪をそりたる故、さかやきにのぼせるといふ、さかやきにのぼせるといふ、髪をそりたるに、結城月代そりたる歟、額に毛を殘して頭ノ真中ヲ丸く古ノ月代ハ新ノ方ハ毛ヲ殘シ、頭ノ真中ヲ丸く剃たるなり、結城七郎氏朝が切腹の體、宛も結城合戦の後巻物にかゝれたるやうくに、結城月代そる事もあれ共、人に隠してそる事也、結城合戦の時、忠卿の月代そられし事ハ、寵あるほしなど著るに逆上の氣頭をに地かぬ、月代そられし成ノ、武士の胄下に月代そるに同し、古たるく〳〵見ニ、貞ニ、高七、あしびなす榮し君かほりしのい

さかたれぶくろ　延喜式に精韮袋を見えたり、

さかたれめ　三代實錄に伊勢太神宮及皇宮酒立女各二人を見えたり酒器に柳葉を結付たる是長官に奉る役也ノくり伊勢年中行事に三津の柏ヲ以テ酒ヲ請ヒ口ニ含ミ後柏ヲ翁ニ取副立ヲ御前ヲ一拜自左歸著本座訓之酒立ともみえたり

さかつき　倭名鈔に盃盞ともあり大さかつきを大臣羅と見ゆ眞名伊勢物語に酒杯と書り古くよりの稱にて必ず土器を用來れり倭名鈔に瓦器の類に入たりされど今いふがらけ也漆塗ハ中世以來にや鎌倉の敎恩寺に平重衡手洗、前を酒宴せし盃とて寺寶とするあり今の平皿の如く淺く薄し內外黑漆內に梅花の蒔繪ありそ後拾遺集に

ゆつらしき光さしそふ盃のなからこそ千代もめぐらん盃に月なももるに望月を

かざゝれたる定家卿　色に出て秋の相をうつり行むかひの冬にうかぶかつき

文集の彭蠡杯中ニ五老峰の意也また

ちりそそぐ春のさかつき文集に酔悲淚濕春杯中と見えたり○白もよめり引滿擧白など是也又野らよむ○十分杯といふ文字に三皇五帝有ル

勸戒之器名佑尼と見えたり家語の侑坐の器より出たり○紫檀なんどりて內を銀にて張たる物の手のつきたるを提さかつきのさらあり杯盞也よ眞名本に杯、小盤を書り○土器に三度入五度入なといふも酒の事也徒然草にまつ一さゝせよと書るも是也又禁

さかつぶり　上ノ字をよめり古文苑王延壽ノ文に王孫上を見えたりさ

しの水いのめとあかめかも、萬十八、其はもかれすときいなす、いやさかはえにおれこそ、神のみよ〳〵りよろしなへ、此たちはなをさきしくの、かくのこのみと名つけゝらしも、

さか〳〵み　逆髮、サカカミ、モサカシリモ、髮ヲ逆ニトリ、尻ヲ逆ニカミテノ意也、竹取、さか〳〵みなどりて、かなぐりたてさん、林葉

さかき　倭名抄、通雅青精、日本紀私記云、坂樹、刺立爲祭神之木、今按、本朝式用賢木二字、漢語抄榊字幷未詳、古事記、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而、景行紀、扳榊津山賢木、以上枝挂八握劒、中枝挂八咫鏡、下枝挂八尺瓊、台記別記、康治元十一月、大嘗會祭主大中臣朝臣清親著小忌縫腋、賢木幷壽詞文取刷笏、昇龍尾道東階、云云、差賢木於地、枕草紙、さかき臨時のまつり、御神樂のたりなどいとにかし、よに木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけんとぞりわきなかし、源さかき、大將の君いとあはれにほされて、榊にさして云云、さかきにゆふかけなど、かう〳〵しうしなして、狹衣、殿の御夢にも、加茂よりとて、ねぎごとぼしき人まいりて、さか木にさしたる文を、けんじの宮の御かたにまいらするを、歌林四季物語、からかみの御にへたてまつらるゝも、此頃の御事にて、神祇官のうら人ちはやかけて、榊にてこの

さかづら　鎧にいふ逆頬の義靈異記に有人髮生逆頬、下を見ゆ今の頬當也といへり○小葛の義ありえひらなどにいへり○鞦にいふ鎧の義に同しきにや鴻に似たり東國にありといへり、

さかて　新猿樂記に酒直と見えたりてあて也杜詩に已辦青錢防願直、集解に願以賀船直、以沽酒と見ゆ○強人のさかてを乞を買路錢といへり

さかとけ　梅宮に坐す三千代夫人を稱す神宴解齋をもて杯に浮ふ橘を賜ひしより酒解と申せし也その事續日本紀にみゆ葛城王に橘ノ宿禰を賜ひし時の事也○伊賀ノ國酒解ノ神ハ大山祇ノ神也と永閑伊賀名所記にみゆ○式に自玉手祭來酒解神社山城ノ國乙訓郡にみゆ、

さかとこ　儀式帳に酒作物忌清酒作物忌などいへりとこいつくと通す、

さかどの　酒殿と書り○酒殿うたふハ神樂也○內ノ酒殿朝野群載に見ゆ、

さかとばかり　拾遺集によめり然歟とはかりの義成へし、

さかとり　坂鳥の義萬葉集に朝こえましてなど見ゆ鳥網張坂手などよめる意也又秋の小鳥をよめりといへり、

さかな　肴をよめり下酒の物をいふ酒魚の義なるへし魚鳥に肴といひ菜蔬に萩といふ山肴野萩などいへり廣韻にハ凡非穀而食者曰肴或作餚通作殽と見えたれハ字義ハ必しも海味に限らさる也禁中の式に三ツ肴すいりてといふ事見えたり○さかなをはさおを唐山にて過菜といふ○魚舟にの倒懸をいふ也されハ逆頭の義成へし、

さかづら　鎧にいふ逆頬の義靈異記に有人髮生逆頬、下を見ゆ今の頬當也といへり○小葛の義ありえひらなどにいへり○鞦にいふ鎧の義に同しきにや鴻に似たり東國にありといへり、

さかて　新猿樂記に酒直と見えたりてあて也杜詩に已辦青錢防願直、集解に願以賀船直、以沽酒と見ゆ○強人のさかてを乞を買路錢といへり

さかとけ　梅宮に坐す三千代夫人を稱す神宴解齋をもて杯に浮ふ橘を賜ひしより酒解と申せし也その事續日本紀にみゆ葛城王に橘ノ宿禰を賜ひし時の事也○伊賀ノ國酒解ノ神ハ大山祇ノ神也と永閑伊賀名所記にみゆ○式に自玉手祭來酒解神社山城ノ國乙訓郡にみゆ、

さかとこ　儀式帳に酒作物忌清酒作物忌などいへりとこいつくと通す、

さかとの　酒殿と書り○酒殿うたふハ神樂也○內ノ酒殿朝野群載に見ゆ、

さかとばかり　拾遺集によめり然歟とはかりの義成へし、

さかとり　坂鳥の義萬葉集に朝こえましてなど見ゆ鳥網張坂手などよめる意也又秋の小鳥をよめりといへり、

さかな　肴をよめり下酒の物をいふ酒魚の義なるへし魚鳥に肴といひ菜蔬に萩といふ山肴野萩などいへり廣韻にハ凡非穀而食者曰肴或作餚通作殽と見えたれハ字義ハ必しも海味に限らさる也禁中の式に三ツ肴すいりてといふ事見えたり○さかなをはさおを唐山にて過菜といふ○魚舟に

神むかへ申事也、榊葉日記、次に百衣神人數百人榊の枝をもつ云云、申時ばかりより、そらも晴て榊にうつる夕日影、香木山の代の鏡もさながらあらはれ給、たうとさもいはむかたなし、神人北の廳舍の聲から〳〵と御輿などの、あさやかなるをこそ、祭などの時ハ物たてまつるに、これはそこゝなく青みわたれる榊の梢、はる〳〵とみさかさの杜の心ちして、けうて身のけもよだつやうにぞ見え侍し、徒然草、榊にゆふかけたるなどいみじからぬかは、○神木　東鑑建保二年八月十三日云々、南都衆徒禰宜有鬱訴奉昉神木於木津邊百練抄、久安六年八月五日、興福寺衆徒蜂起數千人奉日神民二百餘人、捧榊神木付鏡數枚、稱春日大明神御正體、是先例也、○榊　江談抄、問云杣字誠本朝作字歟云々、榊字又見日本紀云々、仙覺萬葉註云、萬木千草たほかりといへども、神祇ないはひかざりたてまつるに、榊をは、みさかきといひ、すゝきをみくさといふべし、同三さかきといへるハ、かの木さきはにして、枝葉しげけれハさかきと云、さかきとハさかえたり木と云也、○玉串　江家次第十二、齋王群行、次宮司禰宜等次第就膝突把榊一枝、是所謂玉串也、神中抄たまくしとハ、伊勢大神宮の風俗にハ榊を玉くしといへり、翠山按に、賢木考及ひ花鎭に青精（サカ）を到て魚を買者もしさかなといへハ拒んて與へす肴ハ些少のものなれハ向來を祝すといへり

さがなし　神代紀に惡〻字不祥〻字不良〻字なとよめり無善の義也萬葉集に思をもよめりたゝろしき意也小野〻篁か無惡善の三字をさがなくハよけんとよみしといへる小說あり心得かたくこそ

さかなみ　延喜大嘗式に酒造児酒波所見えたり御酒波多明酒波の別あり、

さがにくき　拾遺集に人の物いひさがにくき世にと見えたりさがなく惡ましき意也紫式部日記にハ物いひさがなくとも見えたり

さかのぼる　沂をよめりみをさかのぼるなどよめり逆上るの義也、

さかはえ　日本紀の歌にいさ〳〵かはえな萬葉集にいやさかはえにとみえたり盛映の義にして榮をさかえをも又はえをもよめる此謂なるへし

さかばかく　鳥のもおれたる羽をかくなりといへり法性寺入道の歌

鷹の身よりのさか羽かきくもりあられふる野に御狩すらしも、

さかはぎ　神代紀に剝字をよみ古事記に逆剝と見えたり馬に就ていふ中臣秡に生剝逆剝とならへいふ獸を生なからに剝と逆をまに剝とを分てるなるへし俗に逆ばりつけと云如しよて儀式帳にハ逆剝なし生剝に對しいふて殺して後剝をいふなり

さかばしら　俗に倒木〻柱ハ屋なるの怪有といへり造宅經に防有倒木作柱令人不吉とみゆ、

さかばやし　酒店に杉葉をあつめて標すゝめて酒林といへり西土に酒望

子などいふ是也酒旅などかなだ也又はもしは望子の音轉成くしてもろ〳〵の
さかひ　境界などいふ坂合の義なるべし日本紀に境部を坂合部とも書もの
さかしき　高葉集に三中を書てさかひにとあるに不識山ハ甲斐信濃飛河三國にかゝれバいふなりされバ山なかなどよめる其中の義也
さかしら　俗語に何なやかひなきふるまひ然〻が故にをつめたなる僻なるべし○近江と山城の境退分にあり是西三十三〻國東三十三〻國の堺なるべし
こかみ　道などのり坂經の義などいふ訓も同じ
さかぶき　新拾遺集にはなさかぶきうち水もて遣れる箱と見えたり躑躅花を逆萼にする也もと高葉集に出
さかみね　神代紀に槽をよめり古事記に酒舩と書もの後名抄に酒槽と見えたり又圓槽あり○大和の圓成寺のほとりに長者の酒ぶねといふ物ありしを石也こは飛鳥の里の酒殿なりといふ石面に槽七道を彫刻せり
さかほがひ　神功紀に壽をよめり酒泥の義がひ反き也古事記に酒漿をよめり
さかまき　新撰字鏡に波をよめり逆卷の義也澤もよめり洲港又湿濕も同じ
さかまくら　大嘗新嘗に八重疊の上にもなす坂枕を書り式に料へ編薦二枝生絲一兩を見ゆれバ薦枕也又式に帛坂枕見え貞觀儀式に白羅草木鳥獸繪縁御坂枕とも見えたり枕の方高くて床の上斜なれバ坂枕の名ありといへり延喜式に長三尺廣四尺と見ゆ年中行事歌合にもけぬさて今を儲る坂枕神もある夜の時やそらん

さがみ　相撲はさかさうの轉みなの轉也相樂をさがらさがみも同しもと坂見の義にて足柄箱根より見下す國なる故也といへり又年佐士のむれを降をだる也むさしにおかべといふもといへり相摸川は今の馬乳川也といへり○神代紀に酷然をよめり小嚼の義なるべし
さがみ　尾張中島郡酒見御厨神鳳抄に見ゆ今酒見村神明社といふ古圖誌ありといへり本神戸村にあり神名式に酒殿神社二座酒彌豆男神酒彌豆女神を見ゆ下さかみつくの條にいへり古事記に酒見郎女あり又大嘗會の造酒童女をさかみのめともよめり
さかみづく　古事記の歌に佐加美豆久良坂を見え萬葉集に酒見榮流今日を見ゆ酒宴をいふ訓もよめり延喜式造酒司坐酒殿神社二座酒彌豆男神酒美豆女神を見え姓氏錄酒部公の下に賜姓呂號酒看都子賜山鹿比咩號酒看都女を見えたり此造酒のオを褒てよめり
さかむかへ　坂迎の義京師の人參宮せし歸路に迎ふるをいふ其もを東下る人の歸りを逢坂まで出迎ふるよりの名成べし關迎をもいふ人を迎送するに四方の關に至るは異朝の例也詩にも西出陽關無故人といへり○佐渡にかれひの大なるを雜す
さかもけ　逆鱗也といへり
さかもゝ　鹿皮をいふ逆水を書たるもさかさまなるから也からかり反き也がりが庇

タやみの空をいけなと出る月かが
さかごとのまがごと　逆言之枉言也日神貴倒詰（コヒ）高ニ〻さかごとのまがごとから高山の
いはほの上に君かこやもる
さかし賢〻賢をさかしと訓りさかしだつるなどいふ賢人ぶりするをいふさかしらごし出ずるを云源氏繪詞むなし君御からを見るべく猶ねはする物を思ふがいとさかなければ灰に成給ふらん
を見兼りて今はなる人をひたふるに思ひなりなんどさかしらの給ひつれど事より落ぬるまどひ
給ばまづ思ひつゞく人々もそわつらひきこゆ
さがし　嶮也古下はしたのくらはし山をさかしなどいふもさかだけをさかしみさゝぐるかなどいふもさかしら賢也古上さかしめなどおりさかしく高ニあらまほしかしらをさかしらを酒のまて人をにくむ人の族にかもにる
さかまら　儳言さし出ていふをいふ我ひとり賢だつるの意也儳言の字をよめり俗に云猿知恵などいふに同し後漢書六十九孔僖傳僖曰諸君此多矣隣房生梁郁儳和之曰儳訓不〻則〻之重言而傍對也禮記曰毋言儳言十論反源櫻花などいふなん櫻花ならばさなさらぬもさまなり

りの人もなしまん、清原元輔集　うき世にハ行かくれなでさかもらにふるハ心のほかにもあるかな、類名

さかしり　逆尻、竹取、さかしりをかき出て、こゝらのれほやけ人にみせて、はおみせん、林葉

さがす　異本枕草紙、人のふみのありけるを、雨などのふる日さがしいでたる、

さかづきのへに　盞之上爾也、萬五、うめの花たれかうかへしさかつきのへに、

さかつぼ　酒壺也、萬三、さかつぼになりにてしかもさけにしみなむ、

さか鳥の 枕詞　あさこえまして、萬葉一、坂鳥の朝こえまして云云、こハ谷の木ぐれなどに宿れる鳥どもの朝にハ群て、山のたわめる所などを飛こえ行ものなるを、供奉のもろ人の山路れし越るに譬たり、鳥ハ専らその遵を飛こゆる物なれば、坂鳥といふ、冠

さかなか　坂中、隆信集賀、さかなかにきはしやすみしくらお山のほりたわむと聞そ嬉しき、

さがなき　まさなきといふに意かよへり、源氏物語に河内本にハ、さかなきとあるを、一本にハまさなきとかける所にてもあるべし、さがハ嵯峨の音語にて、さかしくけはしきをいふといへども、音語とも思はれず、さか〳〵しき、こさかしきなどいふも、坂道ハかど有ものなれはいふか、それも峨嵯と意ハ落の類也棘木を用う鹿角の形にあたる木を埋み馬脚を障ふといへり、

さかもり　宴をいふ酒を盛の義也萬葉集に肆宴をよめりむかしハ杯さす人自ら酌てまわる也花のえん月のえん内宴賀宴曲水宴重陽ノ宴なと是也、

さかやき　太平記に月額をよりさかやきの跡青いと見ゆ今の額に角入る事にて今いふさかやきにあらずともいへり今いふハ冠明の義也といへりもと月代といひしをもて今も月代をさかやきとよめり沙石集に月代ある入道撰集抄にあさましくやつれたる僧の近く家を出にけると見えて月あろなどあざやかに見ゆめりといへり冠の半額を半月形ともいへるは事の起りハ冠より出たる事なるへしもと五刑に及はゞほさの軽罪ハ髪刑とて頭髪をそる事ハあれども和漢ともに平人の髭髪をそる事ハなかりしに西土の辨髪此邦の月代なと皆僧尼より事起りたるともいへり又應仁の亂より常に甲冑を帯したりけれハ武士のさかやきの大きくなれるも此頃よりの事也ともいへり海防纂要に各倭頂髪開塘外髪稍長と見えたるハ専当時の風俗を書せるものなり中山傳信錄に剃頂髪留外髪一圍綰小髻於頂之正中といへれは琉球も亦風を同うす

さかやまひ　文選に醒をよめり酒疾の義也萬葉集に　いにしへの人のゝまぜる吉備の酒やもハゞすへな貫賞賜ハん漢書丙吉か傳に醉嘔と見えたり、

さかゆ　榮、字隆、字なとをよめり式に榮井を福井とも書りかゆ反く咲と同意なるにや又幸行の義なるへし古事記にさみさかえきて萬葉集にさかゆるなとをよめり榮花物語にさかえくまさん萬代までにとも見えたり○痘かはらねども、音と訓とのわかち有り、又悪字を訓なさいへども、それハ甚た遠し、源氏桐壺まうのほり給ふにも、あまりうちそきるをり〳〵ハ、うちハしわた殿こゝかしこの道に、あやしきわざをつゝ、御たくりむかへの人のきぬの裾、たへがたうさがなき事ども有り、母后のあなたそろしや、春宮の女御のいとさがなくして、桐壺の更衣のあらはに、はかなくもてなされしためしもゆゝしと思しつゝみて、すか〳〵しうも思し立さりけり、千加屋草六、荷子に性悪の篇有て、性善といふハ其教也といふも當れるか、我邦にても昔ハその説に從ひしにや、日本書紀神代巻に、神性の二字をカンサガとよませたり、サガハ悪字の訓也、不祥と書てサガナシと讀せたる所も有しハ、助語にてサカナシの義、勿體なし、如在なしのシの字と同し、源氏夕顔巻に、ひさうなき家どうじと見えたるもキに心なし、貧相なる家女といふ事なるへし、赤染衛門集、さかなく人思ひかけけりと聞にやがていへり、荒波のうちよらぬまに住の江の岸の松かけいかにして見ん、類名

さがにくき　さかしく憎き也、僧正遍照集　こゝにしもなに句ふらんをみなへし人のものいひさかにくき世に、

さかのぼる　逆登也、日神武、沂（サカノ）萬廿、ぼりえとりみをさかのぼるかちのとのまなくそ奈良いこ

家にいふハ酒湯の義也

さがらか　古事記に山代ゝ國之相樂とみゆもと　懸木といひしを今相樂といふぞ園野比賣の故事也萬葉集に山代の相樂山のと見えたり、

さがらめ　其初遠州相良の海より出たるをもて名を得たり○さがら歎あり、

さかり　盛をよめり榮え有の義なるへしさかんとよむハ音便也後撰集に花さかり行人をうらみんとよめるハ落に離の義を兼たる也　○靈異記に丁をよみ神代紀に勃然もよめり

さがり　倭名鈔に鎖をよめり懸釜とも見えたれハ下りの義今いふ鏁子也といへり、

さがりは　髪のさがり也さけ髪にいへりはハ際の略成へし、

さかる　萬葉集に離ゝ字放ゝ字日本紀に棄ゝ字なとをよめり裂の義かる反く也○俗に猫犬の遊牝をさかるといへり落んに成の義なるへし○靈異記に屠をさかあてとよめりかち反きなれハさきの義也、

さがる　下降をいふさけると目他の異あり萬葉集に懸有をさがれるとよめり○魚の自死するを水に浮む日を經れは沉むよてあされたるをさがるといふといへり、

さかろ　逆艫の義也舟の一にともへむけてろをたつと盛衰記に見えたり武備志の兩頭船これに近し西行法師　さかろ押立石崎のそら波ハ荒きをほにもかゝりけるかな、

○さき　先前なとをよめり神代紀に鋒をよむも意同し鋒端とも見ゆ又末を

ひしかりける、祝詞、朝日豐逆登之有、同しきにや、

さかふき　逆昔也、萬八、はたもとをはなさかふきふるき木をつくねるむろのようにまに、

さかほかひ　日刺切、讀、式大殿祭、のこ、たくひ也、日神代、中臣遠祖天兒屋命、以神の祝祝之、とくる餅を同し、

さかまき　逆巻也、萬十二、うず川のなかなかまきのくみつの、

さかみつき　酒宴貢也、古下、ふるかもかみつくらし、萬十八、たなばなのさだをなる庭にのたてゝさかみつきまわかおほきみかも、仙覺云、さかみつきハ大君にたてまつる御酒宴也、

さかむ　相撲也、古中、さはふしもかむのたにも、ゆるる火のはなかに立てさひし君かも、

さかむかへ　今昔、信濃守ニ成ニケリ、始テ其國ニ下リケルニ、坂向ヘテルシヲ爲リケレバ、守其ノ郎等ヲ多ク、本トシテ、守ノ下リ玉ヲ、坂向ヘニ、三年酒タル酒ニ胡桃ノ濃ヲ和入レテ、在廳官人瓶子ヲ取テ、守ノ御前ニ參テ、守其酒ヲ食テ定レル例也、信坂、三年の精酒ハ任間三年を全く經る酒也、仙野非載、サニ國務條々事、境迎事あり、境

さかやき　酒屋也、萬十六、はしたのくまさかやにに、

さかやき　三質十、或臨、戒日、義下、官符、新剃、頭髮、初着、髮髻、冠幘之痕、頭額猶存あり、信云、冠下を剃たるこそ、既くありし也、

さかゆく　榮行、さかえゆくのえを略り、王生忠見集、うちの仰ことにて、文忠卿が歌たてまつれ、さめしあるに、かきあつめたてまつるとて、君かよにさかゆくしをは思ひせんこはましものをたゝみねのみやま、

さか夢　榮花主のかゝりたゞをにまうけをせんゆめにみえ給ひければ、中略僧正なでかゝさ見ゆれば、このおなかしとこそ申せ、

さがりは　源氏空蟬巻、さがりは、河海抄、下據也、勘文、紫式部が假名記にも、此詞有り、隱蓑の

よめり○幸又福也、なども先、字に通へり○日本紀に碕、字岬、字を訓せり先の義なり今、人崎字を用るハ非ず伊藤氏も崎只有、崎嶇之義而不、見洲嶋之義といへり新撰字鏡に碕を石の出たるさまとよめり日本紀に迮迫也狹也と見ゆ

さきかけ　先驅の義殿最の最也神代紀にみさきらひとよめり或ハ魁也、

み果鑑に先登なとよめり物にさきうさもふよめり、

さきがね　人銀さもふ正字通に順ハ買物先入、直也と見えたり、

さきく　神代紀行矣又當平安又當無恙なとを訓せり皆恙行の轉なり幸來の義なるへし、

さきく　大殿祭祝詞に今世産屋以辭、木束稻置於戶邊乃以米散屋、中之類也と見えたり擘たる材をいふ成へし、

さきく、　宣命に先々の御代御代の例例敏と見えたり、

さきだゝぬくい　俗に後悔さきに不、立さいふ是也、

さきたま　倭名鈔に幸魂俗にさきたまといふと見えたり日本紀にさきみたまより今の俗他人有、心我忖度之、をさきたまさきわいへり操幸魂の義なるへし○萬葉集に　さきたまの津にある舶ク風ふたな綱ハ絕とも事なかせね　卜部兼邦　行舟のさきたま祭る藏なれハ美風ひかたも涼しきそ思ふこハ神功紀の荒魂、爲先鋒而導師、舶の意也

さきだゝう　徒然草に正月打たるなどうた眞言院より神泉苑へ出して、焼あぐる也法成就の池にこそはすらん神泉苑の池たゝふ也さいへりかれ三毬打の義なるへし季吟說に昔しハ毬打三たゝ作れり今の爆竹の竹三本をもて足に用るも其義也さそ一說にはやす言葉なり今門日に混して一に混したし松竹標繩等を燒なと神祭に用たるものを燒がつゝなくなりたる也西土の爆竹とも似て異也さいへりもし爆竹の說に據んに山鬼打の字なるへし歲時記に正月一日鷄鳴而起先於庭前爆竹以避山臊惡鬼と見えて朱子語類に爆杖とも見えたり俗にさん土の火さいふも也されど我邦ハ十五日の式也よ或ハ三元張の訛音にて西土に上元中元下元などに燈を張設る事あるに據ともいへり○十八日に清涼殿の南庭に於て燒上る其時吉書も添へり陰陽師大黒此を嚩ゝ舜曲もあるもさ山科家より獻せらる葉竹をもてこしらへ扇等の飾ありて十二本を十二所に立並へたるなり

さきに　向なおり鄉も通ふ鄉にも作る向者も同し往日を往さいひ日さもいひ又日也日者さもいひ遨又翌日也遨者さもいふ史記の注に乃者猶言遨者さみゆ阮籍が慨に乃昔さいへるも在昔に同し列子の疇昔もさき、にさもふるへし昨日往日前者皆同し訓もまた同し者ハさも詞也さいへり俗語のさつきさいふ意也、

さきづ　新撰字鏡に先也とおり突出の義にや、

さきて　先手の義日本紀に先鋒をさきさきとよめり唐書に朱全忠先手さあり通鑑正誤に如先驅之先手也さみの誤にてハんべさいへり、

さきはふくに　萬葉集に見えたり幸延國の義成へし、

さきはらひのかみ　神代紀に先驅者とおり、

さきもり　日本紀に防人とみ萬葉集にも多くおり崎守の義筑紫の

出向ふ由なるへし、源氏關屋に關迎さ云るもあり、

酒人　さかんど、攝津の鄉名なり、民部省圖帳、酒人保、公驗、九百六十八束三毛有餘假粟七百三十有餘丸、其貢者依國司之處分、松柏材欒栾蔀灯油之類、但閑院領近衛領清涼院領之類者、例外之貢代也、今按、應永二十四年、浪華圖に玉作村の西にありて、生玉庄とゝなは東術なり、攝陽群談に關古名、村さいふ中に棲たり、

さかや　酒屋也、萬十六、はしたのくまさかやに、

さかやき　三質十、或臨、戒日、義下、官符、新剃、頭髮、初着、髮髻、冠幘之痕、頭額猶存あり、信云、冠下を剃たるこそ、既くありし也、

さかゆく　榮行、さかえゆくのえを略り、王生忠見集、うちの仰ことにて、文忠卿が歌たてまつれ、さめしあるに、かきあつめたてまつるとて、君かよにさかゆくしをは思ひせんこはましものをたゝみねのみやま、

さか夢　榮花主のかゝりたゞをにまうけをせんゆめにみえ給ひければ、中略僧正なでかゝさ見ゆれば、このおなかしとこそ申せ、

さがりは　源氏空蟬巻、さがりは、河海抄、下據也、勘文、紫式部が假名記にも、此詞有り、隱蓑の

海の崎々を守るをもて名づく成べし○島守を諸本ともに島守と書たるにより軍防令に兵士守邊者名防人と見えたり遠江以東の兵士を遣するなり○又兵士上番者向京一年向防三年と見えて又向京者名衛士といへり○東鑑に京都大番役事司抽誠勤之由有其沙汰と見ゆ承久記に日本國の侍ども皆二三年の大番をつとめ一期の大事を出立館從幷國に至るまで是を嘆き上りしからん力業にて下りし時手づから自ら鍬鍤を首に掛なはだしにて下りし故殿のおんれまを給ひて三年を六月につとめ分々に隨て支配せられたりと見えたれば頗朝の時より改まりたる成べし

さきら　撰集抄に多くみゆ幸福の義ら語助也

さきり　神代紀に錐をよめり或ら狹隘なる見ゆたら後語成べし

さきたゝふ　磐群のごとき也前ら道の義を擧てたゝへ〳〵ゝ吹ら詞也

○さゝ　神代紀に擘又裂たる為異記に所又折などよめり小ヶ開の義なるべし新撰字鏡に弁たゞかなどよめる小開也と注せり○助語にらふさゝ反ま也欲さゝ目ゞさゝの類也○花に開、字咲、字をよめりさかゆ也かゆ反ま也新撰萬葉集に栄をよめりさゝえのまさかきなどよめりひさゝ千葉やら咲ら榎子也○神代紀に御をおほんと訓たるに同し○日本紀に狹をよめりさゝ反ま也○源氏に笏をさゝらともよめりさゝ反ま也○避をよめり離を意義通ま○御髻ら白き絹もて御冠の巾子をはたゞまら御神事の時の儀式也と三條西家抄に見えたり建武年中行事にかたかき也と見えしら片結の義江次第に童帝元服の儀と見ゆ

さゝ　下をよめりさげる也

さゝ　禰家にいのり坐員の字天賀詞事に見ゆ

さゝいかつち　神代紀に裂書と見ゆ霹靂し破裂るをいふ

さゝゝみ　萬葉集に浪のゝたゝみゆきゝゝみと見ゆ裂のごとき詞なるべし

さゝしろ　古事記に五十鈴の枕詞にいのり賀事記にさゝしろさゝも見えたり拆鈴の義なるべし五十串ともいふ事あれば五十鈴を厭けしにや又拆劍の義ともに見ゆ拆たる劍の鈴をつゞけし手鈴などいふなり日本紀にも拆鈴五十鈴の宮と見えたり儀式帳にもさゝしろさゝもあるなり鈸ら劍か

さゝまゆ　医房卿の說にもゝ姑なゝふしと定家卿の說にも早苗女にて早苗少女などの類也と見えたり後撰集に　今こんといひしばかりを命にて待にけぬしてゝものごし眞備が說に出雲の國造公事にて上京の時に語らひし稻田姫の歌と　目もくれぬさゝのごとはやさなお心のやみに我まどはまし

さゝなみ後撰の歌ら此を本歌とせるにや戸の義なるを刀自にいひかけたる也さゝなみの此神詠の事ら佐草、記に委く見えたり天淵、記にも素盞嗚尊八重榲於佐草、里隱女於其中と見ゆ出雲風土記に神須佐能袁命、御子青幡佐草壯命をあり文徳實錄に青幡佐草壯丁、命を書もり潮野拜載にも熊野佐久佐、神と見ゆ顯昭說に行成卿の書れたる後撰にもさゝなみ丁年とありそかたゝ〳〵據ある事にこそ又埃嚢抄に刀自をさゝなみの後撰集にもれり今佐草村あり其に八重垣あり

さゝし　物の脆き事にいふ貝原氏の說に髮、字書に髮鬆などいふ土地輕鬆食品、輕鬆木理、輕鬆などいふ輕軟にして分決し易きの意なれら

さゝ　前々也古上、うら見る島のさゝ〳〵ゝ高六、島のさゝ〳〵ゝより

かき見る磯のさゝだれ高六、

さゝなみ　萬葉略ニ、何にもかはらで有さゝなみて在れさゝふ也

さゝなみ　日本紀私記、福草、枝々相値、葉々相當也、翠山抄ニ、佐木久佐、淫祥產ナリ、此草ニ枝アリ、令義解第二云、三枝祭謂、葦川社祭也、以三枝、菲飾酒樽祭、放曰、三枝也、延喜式卷一云、三月祭、三枝祭三座、三月淫祥產ナリ、花ヨリテ云云、萬葉十、三枝祭れんまつさゝのさゝくらむ後にもむはむなこひそやもゝ

さゝ　竹の枕詞　そかひにねして、又山すげのそかひさゝ、萬葉七、わかせこをやまつゆかめさゝだけのそかひにねしくゝましやしもこひさゝそかひにねしくゝましやしもふる、語の通くゝ重ね寢らせたり、また十四に、やまかけのそかひにねしくゝましやしもふる、終に右さ同歌なるに、是もすげさゝそかひと通ふ故に、重ねたるをもて右の歌のつゞけまらさゝ也、群竹の叢なる竹也、背向ふうしろおもてさゝに同し、寢ねたつ　萬七、琴さゝなけさゝたつけたしく

も琴のそたびにつまやこもれる

さゝたてゝ浪のほ　日神代、秀起浪穗、萬六、さゝなみのしなゝゝる住の江の濱、

さゝわる　開落也、萬十、うの花のさゝわるなかに

田草ひくらも、

さきつとし　先年也、萬四、をゝしのさきつとし
よりこそしまてこふれなそも妹にあひかたき、

さきてう　左襟帳、四季物語、（正月六月）うれ
〳〵哉、雅内侍日記下、建長三年正月中略十
六日に、さきてうやかれしに、だれも〳〵まゐり
かとも、

さきでこぬ　開出不來也、日葡、もとこゝに
はなくさけどもなにかもうつくしからかたきそ
こぬ、萬廿、さき〳〵の花はさがどもなにすれそ
はゝそふる花のさきてこぬけど、

さきのすめらみこと　大行天皇也、日葬統、

さきはさ　信云、萬葉略ス、わかかがにさたしか
まなくそはさの花つまひにきなくそたしか、さき
はさ、初芽子也、物にこなれど、さゝはのさゝ
るも、此さきに同し、

さきもり　埼守也、防人也、日仁徳、防人（サキモリ）、
同天智、島防（サキモリ）、萬七、こしゆく新さきもりの
嶽衣かたのまひにたれかとり見む、

さきら　舌、河海、吻（クチサキ）、貨物、源鈔出、今
の世にさえもよくいへり、ゆたけきさきらを、
大弁舌也、源中納言物語、もとのつくり、筆
のさきらかしこくいへるしるし、今書サヽ、口開
キ吻有テ、物可咲ニ云ヲ若ヲ、枕草
咲也、萬十、こそさきし久木いまさく、

裂の義也、さくり品字篆に俗以爲貨之對竪之反也、
かゝす意にも用なり、

さくなゐ　三狐神、みつの神の借字なるを言にてよめる也、さくり農家祭
りの田、神さする是也、齋宮神の言也、かゝいふ抔家略記に延元四年前、
大和守藤原、成賢、男三郎仲季於伊勢齋宮、遂射殺白靈狐之罪、
過配流土佐國、と見えたりそゝを混まからん白靈狐ん則に放あり、

さくしゐのそう　紅毛語也、本草にいふ醴漿也、さくり平賀氏の說に
上總、國山部郡大戸谷村より出るもの同物也、と、

さくなり　源氏にさくなりたるよはひたると見えたり、細流に賢しくし過たる
意也、さくは小抉の義にや、

さくた　大和城、上、郡群田、さくたよりくしひらたるをいふ、誤なるく
し、

さくてん　釋奠也、建武年中行事にさくてんのそゝろをながいひてた
かさゝげをそと見ゆそ、昨也、大寶年中より始るし續紀に見ゆ、

さくなだり　祝詞に山々の口より狹くなだりに下し賜ふと見えたり、狹長
霊の義也、一說にさ反、逆霊也、さくり

さくに　延喜式に狹國と見ゆまき國をいふ、

さくの　菅家萬葉集に女しく折野とみゆ名所也、萬葉集にかつ〳〵まだ
咲の花さくのなどもあり、

さくべい　柔餅を書り謂閑抄に麵如柔糰也とみゆ、

さくまうう　作毛とかけり凡地之所生謂之毛と穀梁傳にみゆ、

さくまひ　謎廻の義成くし俗語也、

さくら　櫻花かりてよめり、沈休文詩に山櫻發、欲然誌に果木名朱色如
火然、也と見えし、荊公詩に山櫻抱石映枝、司馬溫公詩に紅櫻零落
杏花開と見えたるハ別品なるくし、神代紀に木、花開耶姫ありて伊勢朝
熊の神社に櫻樹を其靈とせし事古記に見えし、櫻、宮などの稱せり、西行の歌
あり、神名秘書の苔山、神も櫻大刀自の神體形石に坐り苔生たるをいふ
り思圓上人文永十年の記に小朝熊の宮の坤の方隅にさゝたる處あり
と、其上に櫻木あり、高さ三尺ばかり、此木往古已來かれず、是櫻大刀自、命
の神體也と見えし、宮記に駿河の淺間の木、花開耶姫をも富士も同し
伊勢朝明郡に布自、神社櫻、神社相並ひ甲斐、國の金、櫻、神社もま
た此神を祭れりされハさくらは開耶の轉せるなるへしいふ咸（サキ）陵（ムカ）の訓
義をもて反く也、花木の中にも開みそうるハしきハ櫻に及ものなしとそ
後世にいたりてハ花をのみいふハ櫻の事稀にならなれなる貫之歌に櫻な
りまさる花なき花なれハあたし草木の物ならなくに情少納言も繪にかそた
る物をいひ宗祇濫は烈是趙昌斷雖畫作れの西土萬國にも此種絕
てなしといふ拾遺集に　日本にさける櫻の花みれハその國にもあらしさ
そたもふ、○櫻花ハ香なしされとも清香遠に似たるあり、○左近の櫻ハ一
重なるよし徒然草に見えたり、○嬉遊記に昔櫻町の中納言成範卿此花
のさかり短をいふて櫻のために素山府君の祭を行ハれしよりの一種の品に
名けしと見えたり、尤遲し彼岸櫻ハ時節をもてよぶ絲櫻ハ形狀をもてよく
り、信州飯田の市田に園二丈ばかりの糸櫻あり、○櫻實神社宇陀郡佐倉

村にあり式の板本に實を實に作るあらし○さくら島櫻嚴にあり鹿兒島に向ふり近年山上に火もえ出たり大隅守櫻島、忠信拾遺集に見ゆさくら山ハ備後の人の姓也南朝の初勤王の人に玆俊あり北條高時の將に櫻田貞國あり

さくらいろ　古今集に櫻色に衣ハふかう染てきんと見ゆ顯註にさの色に櫻さいふは表白裏はなだなるをいふとありまた今櫻色さいふは表白裏濃蘇芳也胡曹抄に面白、裏、表淺蘇芳さいふり顯昭の說ハ花櫻色さいふなりとハいふり○さくらいろえさいふ表萌木裏赤花或ハ紫也さいふり○平語にさくら色さいふは粉紅色也挨殘抄にハ謂、白也と見えたり

さくらがいけ　遠州榛原郡笠原にあり此池のぬしハ皐圓也さいふ史すありて扶桑略記を撰びたる人にて菅丞相を殺し此、水主となれり長谷寺を建ある龍華會を待に依れり源公利落の師にして事源空廣德に見えたり今に年こさに祭ありて願ある人鋌餅を作ふに沈むて上らざる時ハ願の成さず

さくらがしハ　山槐記に三月成經用櫻膳故實也櫻膳者三方莖打敷落花其上、實に食器と見えたり

さくらがハ　櫻川ハ常陸、國又甲斐又日向に在さいふり其之　常よも素くになればさくら川波の花こそ間なくよるめ武州櫻田にも同名あり○一種の草花にも呼り敗醬に似て紫花あり

さくらがひ　櫻色にて大き櫻の花の如し定家卿　いその濱の玉さる浪のさくらがひかゐる浦の春の色哉○海盤車の一種の品にもよべり

さくらがり　櫻符の義尋ねいふ也菌符なさいふに同しさいふり

さくらこ　櫻兒の義女の名故事高葉集に見えたり

さくらだに　近江國にある御祓の名所也七瀨の御祓の其一なり拾玉集にほとゝぎすなくさくら谷より落つる浪も花さううの網代木螢蛤日記にハさくらだと見えたり神名式に栗太、郡佐久奈度、神社と見え文德實錄にも以近江、國散久難度、神、列、明神、と見えたり度ハ月の義なるしもと中臣祓にさくらだに落つるつあるより此處の名さなり祓戸の神も祭れる也さるを宣命ハいふなの明說によりて歌に禁忌の辭さなれり

さくらつき　櫻月の義三月をいふり

さくらの　櫻野と書り姓にいふ王仁の後也

さくらびさ　櫻人と書りうたひ物の名也地名也久樂也さいふり○さくら地名なハ人なさいふ如し倭名抄に尾張、國愛智郡作良と見えたるも是也萬葉集に櫻田へたつ鳴渡るあゆがたさよめるも同し

さくらもと　神樂岡の東にあり後拾遺集にいふ菩提樹院の地にて後一條院の御影を納めし所也

さくらゐ　櫻井順宮ハ續日本紀にみゆ攝津、國島、上郡也○櫻井の里ハ水無瀨に近し猶、正成朝臣が妻、子十一歳の正行に教訓して此里より故郷に歸されいふ條ふ野邊の口碑に西行が歌さか集には見えず○待宵の小侍從かゑれハ浮ねハ底にかけうつる春だもしるき櫻井の里○櫻井又、名ハ榎、葉井高市郡豐浦寺の西にあり續紀童謠に見えし所也又十市郡櫻井谷村にあり

日云云、萬葉十八、わがせこがふるかきつの佐具波奈云々、古今集序註にこの花ハ梅の花ハ櫻の花ハ櫻ハ飛來浮手御讖云云天皇歡之、賜余懽歟酒、櫻花氏錄、若櫻部連云云應、臣余懽歟酒、櫻花雜集、櫻部臣也、文德實錄仁壽元年三月壬申云云雅美感許大臣、以、明年之春、有、病、其花破而去、不、遂遊賞、感奉來花發、大臣恨仙覺化去、不、歸、花是人非不、可、堪悲、道俗會者、莫、不、爲、之流涕、その後天皇良房の第に櫻花を賞する事史筆をたゝず、榮花物語さまざまの櫻花

さくり　俟名抄に曠噎をよめり小緑の義成し喟吐をいふにかく看くし俗にさくりといふなり反也○新撰字鏡に歔欷をよめり泣餘の聲也を注せり源氏狹衣嬾嶺日記などにさくりもよゝなどいくり増集物に用る詞にさくりといふ犬の足などの事也といへり

さくりばみ　木をくりぬきて他の木を入ばなちたるやうふ小剜喰の義也

さぐる　探字捜字などをよめり狹緑の義なるへし長崎にて遊女の出入の時ある者をさぐりといふ○痞うなき腹をさぐられなどいふ彦八文選に瓜田不納履李下不正冠の意也といへり○下たよりさぐるも意同しけり反也

さくろいし　本草實石の條に石榴子と見ゆ是也

さくろばな　酒盞皿をいふ石榴皿の義形色をもよべり

さくわん　佐官也史錄屬目なとをよめり和名抄に大史をなにはにいふ官とよみ小史をなにはつ官とよめり○摠匠をいふ番匠と同しく受領せしよりかくいひ習はなりといへり

さくる　祝詞に簗井と見ゆ紀にも式にも福井、神とありて簗福幸なと同しく越前の福井同義成へし簗井宿禰の纘紀に見えたり○さけ　酒をいふ〝榮〟の義かえ反け也呑ん笑をかえ榮ゆの義也といへり

見原氏曰昔年於長崎聞被土人之言曰予嘗慶賀海賈遊于西蕃諸國凡中華及諸夷之米穀其味皆淡薄不及于日本所產之甘美故其所釀之酒亦氣味不及于日本然則以日本之秔米醸良醞可爲

天下第一云今按するに天工開物に南方酒皆糯米所爲と見え續記に稻謂之大師古麵謂之小師古秔謂之紅緑米醸酒宜用大師古造粉宜用小師古と見えたり稻もち麵もち秔大たり也陶淵明も酒のために稻を多く種たまふ西土の秔米酒を醸するに拙きなもて漿を用る也我邦粳の勝れたるに非ず稻の宜き事も後漢書に見えたり蝦夷の家を用ふ蝦夷國の產物也○吉備の酒ハ萬葉集に見ゆ庭訓にも備後の酒といへり○酒が酒を呑といふ諺ハ法華經の抄に初則人呑酒次則酒呑酒後則酒呑人と見えたり世に酒呑童子といふも此義也呑をんの音にもす事日本紀に見えたり和名抄に造酒司をかのつかさとよめり○辨色立成に魚をいふ訓せりかの誤なるへし○鮭字をよむ俟名抄に食經を引て又俗用鮭字非也といへり或ハ年魚とも書せり遡腦魚也といへり○朝鮮ハ鮭魚といふ東醫寶鑑に委し裂の義その肉片々裂やすしといへり○からさけハ徒然草に見えたり東大寺の聖靈の會茂の祭日に乾鮭を太刀にはき北上にのぞむ一條の大路を渡るといふ事あれハ是もいとふるし蝦夷國の產物なり○東坡志林に俗謂酒爲般若湯魚爲水梭花鷄爲鐵雞菜有爲不義而文之以美名凡此何異と見ゆ此方にても魚を亡者とし鯖を剏刀とし鯛を吉慶とし堅魚節を獨鈷とし數珠木をも文狸汁鳴燒等の名あり

さけあま　源氏にみゆ邪氣なりといへり

さけあま　新六帖にみゆ栗の色にかゝらぬをいふと見えたり髮をさけたる尼也

ぎやう　悦見はてぬ夢鳥澁野あをやぎ根令煙の後等の條々源氏うす雲こてふ若菜かしは木竹川そゝらびうる舟等みな櫻を賞す平家物語そも〳〵このそのゝのきやうたくらまちの中納言を申ける事かすゑこゝろさす給くる人にてつねは吉野の山をこひつゝまたにさくらをうゑならべその内に屋をたてゝすみ給ひしかゝ來る年の春ごとに見る人さくらおほえそ申ける云々さて七か日にあたる名こりをたゝしみ天照大神にいのり申されけれはにや二三七日まて名こりありけり伊勢物語年毎の櫻の盛にハ北宮くらんとはしましけるに云云その院のさくらこにもうつし其木の本にありなん枝を折てかざしにさしてかゝなかしも堪歌讀けり吉野拾遺そくらよりのほかに御なごそのなかりけるにも太神宮參詣記櫻の宮と申ハ大宮のまわらの處にましますか御殿もなし唯一本の櫻たゝ神慮そとうけたまはりたよふはかりにて宮中くらまうら東鑑文治五年九月廿七日二品歷覽安倍賴時衣河遺跡給云々二十條里之際並植櫻樹また花の形狀を云くるハ源若菜ゆふあるたそかれ時の空に花ハこのそのゝ雪思ひやられてうたゝねハかすみたれこめ風ハえならすにほひたちなのうちのかほりもまかひてさくらかにほふ同幻其花をさくら花枕詞さかりなるをいふ萬葉長歌つゝし花にほふ櫻花さかりなるをいふ是ハかほよき人の色さかりなるにたとへたり○にほふハ色也さかりなる也綱記

さくらさ　櫻戸也さくら木を戸になせしなるへし檜の戸板戸柴の戸松の戸杉の戸のたくひ也高十一おしひきの山さくら戸を開き置て定家卿おしひきの山さくら戸をさゝれに明て花こそおそしたれを待らむ

さくみ　高二岩ねさくみなつみし同十山河たなはさくみしふみさほり流詞荷緒結壁氏磐根木根服佐久彌氏

さくり　狹衣三下さくりもよしそはこれたいふに

さけだひ　内々行事に四月朔日より九月八日まで下帯をゆ

さけかみ　墮落也といへり

さけしむ　人を賺んする事をいへり下墨の轉成へし

さけすみ　乖違なより下墨の義工人の直な視に墨斗の糸をさけて見るよりいふ也

さけのかしは　延喜式に神服女五十人分左右青摺衣日陰蔓男女各銚酒柏を見ゆるより柏葉を用ひて酒をうけたるより此名起りて後ハ土器なも同しく呼たるなるへし○三寮祭に柏酒の神事あり酒立といふ

さけのつかさ　造酒司なより續古事談に造酒司の大さしさいふ蓋ハ三十石入也土に深くなりすゑそわりからに二尺ばかり出たるが一條院の御時夜なく地よりぬけ出て傍に伏したりけり人驚き怪みけるほどに御門うせ給ひけり三條院の御時大風吹て彼司にふかれけるに大そも小そも皆打破て散失給ひけり文徳實錄に造酒司酒甕神從五位下大邑刀自小邑刀自等並賜ふ秋祭と見えたるハ此職の事なるへし

さけはり　針を釣下る也人的なその内にあり

さけぶ　號叫なよりさかえぶの義なるへしかへ反け也靈異記に呴なよ新撰字鏡に喊なよあり

さけぶみ　東鑑に去文なより所領を他に遣す券書也二條爲氏より冷泉爲相の許く播磨の國越部の庄をわたされたるゝ時の證文にハ去狀とあり今ハ夫婦の間の離書を去狀といふなり

さけな　刀にいへり平緒より出たる物成へし大雅紙にハさけを布衣記に鎌倉下緒見えたり今の世用ゐる物を制少くかゝれりといへり

○さこ　佐古の歟東鑑に見ゆ○大和吉野郡にさこ村あり追字なより又大追あり

さこ　雜魚を皆ひろくいふ歟にハあらねとも安藏にハ小魚なといふ雜魚の義なるへし鮭茱蝦茱なといふ是也といへり朱氏談綺に官艙箇といへり或說に鰯の義にや○ゆゑこハ丁班魚也といへり○さこれといふ事ハ大原に有ぞ吉野十津川も同し雜居雜の義にて甚しき淫風也（雜ヒ歌ニハ哭れり）

さこそ　真名伊勢物語に然正と書り其義知ぬへし

さころも　狹衣と書ハ又さハ發語の詞たゝ衣をいへり○昔に狹衣の毛をいふハ尾張圖門にかゝりたる毛なりといへり定家卿　等感の狹衣の毛なる重ねても猶風さむかるへき降也○狹衣といふ物語ハ前、源院の宣旨作りたるを雜葉抄に見えたり

○さゝ　神代紀に狹々を見えたり○古事記に訶、小竹、云佐々萬葉集に小竹細竹をよめりさゝかなる竹也篠ハ後名抄にみの雅ハ後の俗字也○神功紀の歌にさゝらふた舞に謂樂也を見えたり神樂さゝのうたに　瑞雞の神の御代より篠の葉を手草にとりて遊びまらしも此意成へし萬葉集にハ神樂をもよめり○江次第石清水臨時祭試樂に舞人兒竹をもて抃ヒ頭ヒし竹、文青摺、袍をきるといへりされハ神樂に篠を用ゐる事放ある也天照大神磐窟にかくれ給ひし時に天、鈿女、命の俳優ひたまひし是を神樂の始めなりけるその時以竹葉爲手草といふ舊事紀古事記に見えたり○

ゑとみゆるに

さぐる　捜也、三代實錄、田に那捜向佐理、尚十二、うつくしきたもふわざもを夢に見て起てさぐるになをかゝるふしも

さくろ　本草石榴、十訓抄、今かたつかた、御皿にさくろをもられたる、虞恭遠錄抄、桃柳同、石榴ノ樹下ニシテ神供幷施餓鬼ヲ修ス何ノ故ソト誠柳云上件ノ樹ノ下ニ於テ、鬼神不氷由、施餓鬼ノ法ヲ行ハヽ必ス果願ヲ遂ント云共、其因縁不見云々、石榴ハ鬼子母神ノ所愛ノ樹也、一葉ヲ中ニ實多收ニ、鬼子母神ニ此樹ヲ愛シ給也、錄外書、今月二十二日信濃ヨリ贈レル候シ物ノ目記云々、串柿五把、柘榴十、

さけ　鮭、和名鮭、折背反和名佐介、今按俗用鮭字非也云々、字鏡鮭佐介、本草和名鮭佐介保惠女集詞、さけといふいたの冬出くれは、今昔廿八、枯鮭ヲ太刀ニ帶テ、

さけ　源相本、さけなどの人の心にふかしてかゝる方にすゝむるやうも侍るなどさゝやきて、古事談ニ、御堂令煩邪氣給時、小野宮右府爲奉訪、令惣給、邪氣聞前驅託人云、賀人ノ前驅ニ託ト云ヒ、此人ニハ居アンシト思フ物ヲ下也、源氏ニ、例の御さけの人しくたにらも給はさりつるを、

○さけ　神代紀に狹々を見えたり○古事記に訶、小竹、云佐々萬葉集に小竹細竹をよめりさゝかなる竹也篠ハ後名抄にみの雅ハ後の俗字也○神功紀の歌にさゝらふた舞に謂樂也を見えたり神樂さゝのうたに　瑞雞の神の御代より篠の葉を手草にとりて遊びまらしも此意成へし萬葉集にハ神樂をもよめり○江次第石清水臨時祭試樂に舞人兒竹をもて抃ヒ頭ヒし竹、文青摺、袍をきるといへりされハ神樂に篠を用ゐる事放ある也天照大神磐窟にかくれ給ひし時に天、鈿女、命の俳優ひたまひし是を神樂の始めなりけるその時以竹葉爲手草といふ舊事紀古事記に見えたり○

さけたて　宇治ハ、たそくまのをゝいふましくは、それを聞てさけたゝうてまいりぬ、

さけて　制也、萬十三、なつきのつゝみなくさけてそひにも、

さけにうかべ　萬五、うめの花いまにかたらみやひたる花をあれもふさけにうかべこそ、

さけにしむね　倒胸也、萬十二、ぬはたまのいねてしよひのものひにはにしむねやもときもなし、

さけのいづみ　本草醴泉、特統紀、七年十一月己亥、遣沙門法員善往貞義等、試飲近江國益須郡醴泉、〔サケノイヅミ〕續紀元正紀、養老元年九月丙辰、幸美濃國、車駕行郡多度山美泉、云云、行幸詔曰、醴泉者美泉、可以養老云云、改元爲養老元年、著聞ハ、美濃國にまうしたまへるに有けり、老たる父をもたりけるが、此男山の水草をとりて、其あたひをえて、父をやしなひけり、云云、ある時山に入て薪をとらんとするに、岩かき石にてりて、うつくしきにまりたりけるに、酒の香のしければ、思はまにあやしくて、其あたりを見るに、石の中よりかれ出る所有り、その色酒に似たりければ、くみとなるに、目出き酒也、うれしく覺て、其後日々に是を汲て、おやまで父をやしなふ云々、ありて、年號を養老と改め給ひし由をかけり、

酒のけ　空俄ニ見給ひしやうに皆人酒のけあ

りて、さかしき人もなかりしかハ、君のさま給ひけんもしらず、

さけのすハやり　鮭楚割と書てさけのすハやりとよむ也、文治六年十月十三日、遠江國菊川宿にて佐々木三郎盛綱鮭楚割を食して味アシ(サシ)とよろしかりければ、それに小刀をそへて子息小童を以て、頼朝卿の御宿に送り進らす、其折敷に御筆にて、待えたる人の心のすわやりのわりなくみゆるこゝろさしかなと書て、折敷を返し給ひし由、東鑑にみえたり、鮭のすハやりを一説に鮭の鹽引の事也と云ハ如何なり、鹽引きハ鹽引と舊記にあり、すハやりハ楚割と割の字付たれば、鮭をわりたるなるべし、小刀をそへて進たる由あれば、削て食ふ物なるべし、近日奥州の南部より鮭のひらきと云物出る也、鮭をわりひらきて乾したる物也、鹽引よりは大にかたき物也、小刀にて削りても食るゝ物なり、すわやりハ此鮭のひらきの類なるべし、貞六

さけのな　萬三、さけの名をひしりとはせしいにしへの大聖のことのよろしさ、魏略に云、太祖禁酒而人竊飲、故難言酒、以白酒爲賢者、清酒爲聖人、

さけぶ　猿ニオホクヨメリ、後拾遺秋上、長能、宮城野につまどふ鹿そさけぶなるもとあらの萩に露や寒けき、林葉

さゝ

婦女の詞に酒をさゝといふハ竹葉の名によれる成へし俗諺に竹の葉の酒ともいへり文選に豫北之竹葉注に酒之名也と見ゆ色をもていへり又小兒詞にてさけを重ねたるにや糠をさらしたるを酒に和するをさゝおんどといふも酒(サヽ)塵(ドン)の義なるへし○篠の葉のみ山とうけたるハ篠の實の義也○篠島ハ石見那賀、郡にあり俗に矢の島といふ、

さゝいべ　雀部をよめりとさゝ通せり倭名抄鄉名にさゝべ(ヤマサヽ)をよめり○應の書に隼相傳の家也といへり、

さゝえ　東鑑に小筒をよめり小竹枝の義なるへし酒器也庭訓往來に小竹筒に作る、

さゝがに　小蟹の義俗にいふ蜘蛛蟹也北戸錄に蛸、小蟹と見えたり又俗に性躁がしき人を喩へいへり○さゝがにの蜘蛛といふハ小蟹によく似たるくもありよて古今集にハ直に蜘蛛をさゝがにとばかりもよめり私記にさゝがにハ蜘蛛の別名也といへりさゝハらに住ゆゑに名くといへるハ心得がたし○さゝがに姫ハ七夕の異名也といへり○日本紀の歌に見ゆ

さゝがき　篠垣なるへし玉露に　草枕さゝかきうすき蘆の屋ハ所せきまて袖そ露けき○料理にいふハ篠葉の如く薄くかくなといへり、

さゝぐ　日本紀に戴、字をよめり指上るの義をあ反さ也捧字をよむも同し靈異記に擎もよめり

さゝぐろめ　篠垣なとゆひまハして家のかこひとするをいふ成へしといへり、

さゝげ　繼體紀に角豆をよめり倭名抄にハ大角豆とみゆ九州及上州信州にふろうといふさしあげの義成へし實のなるさま竹垣なとにさしあげたり○

酒のみし　伊物、夜一夜酒のみしあそひて、夜あけもてゆくほどに、同、夜一夜酒のみしけれはもはらあひこともえせて、窓たつの村鳥、あんつくり酒のみしてあか月にかへる、

さこそいへ　源あかし、ひねもすにいかもみつる風のさわぎに、さこそいへいたらこう給ひにけれは、

さこそは　枕詞、うらやましき物、琴笛ならふにさこそハまたしきほとハ、かれかやうにいつしかと覺ゆめれ、

さころも　狹衣也、萬十二、人つまにいふハたかこともさころものこの紐とけさけふハたかこと、

さころもの　枕詞　をつくば嶺、萬葉十四、常陸歌、さころものをつくばねろの云云、衣のをつくといひかけたり、冠

さゝ　唱進之辭、今俗にもさゝふといふて、誘すゝむるハ古の遺言歟、神功紀に、あさすをせさゝ、又うたためしさゝ、又さゝ波を神樂聲波と書も、さゝハ神樂うたを助る聲也といふも、神を誘引するゆゑなるへし、さにハの神事、いよのいさにはの岡も心ハ同しきか、楢

さゝ　颯々、榮花月宴、さゝとみさわけハ、同同、女房たち何となくさゝわらふ、同、さゝめきしのひもあへす、うつ保祭使、えねんせすひとたひにさとわらふ聲のす、後撰戀四、夜あけてかへりけるを、人見てさゝやきけれは、榮花玉臺、さゝいまなん出待り

地さゝげあり饅に及はす○十八さゝげハ關東に十六さゝきといふ十八豆繩さゝげハ裾滯豆也といへり○信濃さゝげハ莢大きし信濃にて唐さゝげといふ○倭名抄に雲實をはまさゝげとよめり○いたちさゝげハ馬蹄決明也○さゝげるハ古事記萬葉集に指擧と書りあ反さ也○隱元さゝげハ黎豆也近江には八升まめ西國に朝鮮さゝげ伊勢駿河にはとなりといふ、

さゝげもの　伊勢物語に見ゆ捧物の義源氏に音にてほうもちを書り稱名院の說に金銀の打枝に種々のさゝけ物をつくる也といへり、

さゝづくり　篠作の太刀義貞勳功記に見ゆ鹿苑院義滿公もまた佩せられしこと明德記に見えたり愛宕山の寶庫に篠作の太刀ありて足利家の重寶也といへり其制ふちかしらこしり等皆紫銅にて篠をほれり長二尺七寸則宗か作なりとそ鏤鮫(ヂリヅカ)にして革にて卷又黑糸もて纏たり柔ハ練物にて革もて包み黑漆にぬたり、

さゝなみ　淡海の枕辭にいふハ後の事也さゝらなみとも見えたりもと志賀郡の一地名にて日本紀古事記ともに大津のあたりを直に狹々浪とはかりもいへりよてさゝ波の國とも栗林(クルス)とも山とも見え篠波とも書り萬葉集には樂浪とも神樂浪神樂聲浪とも書り神樂に小竹ノ葉を用ゐし事古事記に出たるに据也倭名抄鄉名に樂前をさゝのくまとよめるも同し○高丘ノ河内本姓ハ樂浪也文詠天智帝の時に百濟より投化す○滿又漣滿をよむも義同し詩ノ毛傳に風行ニ水上ニ成ル文ヲ曰漣ト見ゆ○食物にさゝなみをいふハ白皤なるへし類書纂要に見ゆ

さゝのくま　古今集にさゝのくまひのくま川と見ゆ倭名鈔に但馬ノ國氣

つる、きはしれはせよイサ〳〵ノ約、林葉
さゝかせる　所撃也、古下、ありきぬのみへのこかさゝかせるみつ玉うきに云々、萬十九、わかせこかさゝけてもたるほゝかしはあたかも似るか青きゝぬかさゝ、
さゝがね　日允恭、さゝかねのくものわたこなひこよひあるしも、私記云、山之名也、又說蜘蛛之別名也、言其體如蟹住佐々原遊仙、小許(サヽカ)小竹(サヽ)、小浪(サヽナミ)、小石(サヽレ)、小狹(サヽラヲキ)、小栗(サヽクリ)、なさみなさゝやかなるものなさしていふ、故に蟹の謂歟、爾雅陸機疏云、一名長脚、此虫來著人衣、古今、今しいとわひにしものなさゝかにの衣にかゝりわれをたのむる、楢
さゝがは　小竹之葉也、さゝかはのさや〳〵霜よになゝへかるころもにまさりてらかはたはも、古下、
さゝかにうつやあられのたし〳〵にねねてむ後は人いかゆさも、
さゝき　雀也、鷦鷯也、古下、大雀天皇、日、大鷦鷯天皇、同、天皇生日木菟(ツク)入于產殿、明且譽田天皇喚大臣武內宿禰語之曰、大臣對言吉祥也、復當昨日臣妻產時、鷦鷯入于產、是亦異焉申譽以爲取其鳥名、以各相易名子、爲後葉之契也、和名鷦鷯佐々木、日仁德、はやふさわかのほりとひかけりいつさかうへのさゝきさゝさねふ今俗みそさゝひとふ鳥也、楢

多郡に樂前をさゝのくまと見えたれど萬葉集にさひのくまひのくま川のせをはやみとよめる同所にて倭名鈔大和國高市郡に檜ノ前なひのくまをよめる是なりさひのさハよろつにそへていふ詞にて唯ひのくま川をかさねていへりみよし野のよしのといふ如しさゝのくまハいつとなく認れる成へし
さゝハり　小障の義成へしよて障をさゝふるもよめりはる反ふ也〇鮫の類にいふは小針(サヽハリ)の義成へし脊鬚ありて刺の如しといへり、
さゝび　小々火の義成へし燔稻火をよめり以火乾肉也と注せり、
さゝぶ　篠生の義也さゝらをいへり〇式伊勢多氣郡に竹ノ佐々夫江ノ神社あり今篠笛の橋の名遺れり〇佐々布山ハ出雲にあり異本太平記にみゆ、
さゝぶき　銅の至て小粒なるものをいふ、
さゝへいゝ　うどんの粉をこねをらいとの如くねぢたるをいふ
さゝへる　童蒙頌韻に支ノ字をよめりさゝふるもよめりへる反ふ也刺障の義なるへし〇柱(シユ)をもよめり柱杖の類これなり〇さゝへことは讒言をいへり
さゝみづ　少しある水也といへり又さゝら水ともいへり又さゝにごりをもいへり
漬潦也、
さゝめ　細小なる草なれハ名とす藻鹽草に賤民さゝのみといふ茅の類にて編て簑(ミノ)とし又ハ席ともするもの也といへり田にもつくれり古歌に　さゝめかるあら田のもにたつ民も身のためにそ補ハぬれしを今すかみのともいふ一名ひろり綠沙也といへり六帖に　山かつの結てかづくさゝめこそ衣の關と雨もこぼるれ〇さゝめか谷ハ鎌倉にあり氏にもいへり、

さゞきし　萬十六、いにしへのさゝきしわれや、これ今の俗にいふ、すゝろきすゝむことなるへし、古上、美人驚而立走伊須々岐伎、祝詞大殿祭、御床都比能佐夜伎夜女乃伊須々伎、萬、須々志號而ご有もサトスト同韻にて、さゝきすゝき同し事なるへし、楢
さゝなみの枕詞　萬一、左散難彌乃志我能大和太とあり、これを小浪の義とし、又地名也とも思ふはゝともに悉しからす、滋賀郡のわたりにて八、湖もせはまりたれハ、伊香郡、高島郡なとわたりにハかわりて、小き波のたてハ、その地理につきて、滋賀郡の一名のやうにさへなれる也、さて八滋賀ならずとも、そのむかひをもさゝ波と忠ふへけれと、景行帝、五十八年、志賀乃穴穗宮へうつらせ給ひ、成務帝、猶その宮にれいしまして、いと名たかけれハ、滋賀にもさゝ波といふなるへし、こゝに一名のやうにいひはしめけむも、これらの御世にこれる事にやとれほしき也、さて萬に、大津宮、故京國都美神、大山守、平山風なとつゝけたるも、皆その地理よりさゝ波とハかうふらせたる也、歌
さゝのうへ　小竹之上也、萬十二、さゝのうへにきねてなく鳥めをやすみ、
さゝのくま　枕詞　ひのくま川、　大歌所、さゝのくまひのくま川にとあり、これハ、萬七、さひのくまひのくま川とよみ、又同三にハ、さひのくまわ共あり

さゞめく　榮枯物語に見ゆさゝんさなといへり俗語也、
さゝめごと　私語をよめり長恨歌に臨別慇懃重寄詞ノ詞ノ中有誓兩心知七月七日長生殿夜半無人私語ノ時と見えたり
さゝめゆき　藏玉集に薄き雪なりといへり、
さゝやか　遊仙窟に細々許をよめり竹取物語に金の光さゝやきたりと見えたり、
さゝやかし　職人歌合紙すきの所に見えたり細かにゆるをいふ成へし、
さゝやく　耳語をいふ靈異記に囁をよめり或囁をよむ萬葉集に耳言をさゝめくとよめるも同し天曹の歌にさゝめかしめといふ詞見えたり叫をよめれと叫ハ口吻也と見えたり〇さゝやきの橋ハ奥州白川の邊瀨の上(ホトリ)にあり故事ありといふ
さゝら　竹籔をいふさら〳〵とする音をもて名とする也能ノ字をよめれと字書に考得すもと木虎の皮なかに組語をきざみて是をする也敔といふ是なり又笵帚をもいへり〇僧のさゝらなすりて心をすませし事撰集抄に見えたり自然東岸ハ居士と稱し見のすかた也繩皷を打竹籔をすり舞をして唱演す是今のさゝらすりの祖とかや又空也の流をくむ者にはちといひさゝらといふありはち鉢さゝらハ竹籔にて古へハ此を持たる成へし今は瓢たんをすりて歌をとなふ茶筅をうるも竹籔より起りたるにや平ノ定盛か空也の愛せし鹿を射て其罪を悔ひ蘆葉染衣の身となりし後也とてはなたの狩衣に似たる物を被けり〇神樂良能小野ハ萬葉集に見ゆ遠里小野の邊也といへり吉野郡にさゝら村あり

高葉集の注に月の別名也といひ又天なるやをとめの
可愛少男をいふ神代紀に可愛をエカワシと訓せり
小野をよめるは
高葉集に小石を誓ひたるのみなるを見たり細石の
よめり高葉集に小石を誓ひたるのみなるを見たり細石の
義なれど助語也といひ筑紫人にまれといふは是也さて水にまれたる石を
もいへり俗に水にまれたる石を
日本紀後名砂に砂礫を訓せり新撰字鏡に礪をいふ石さ
し

動なる國にの
みして苔のむせるを見つゝかなしみて
にに入時に自然と水をふき
永祿の頃道場法親王
唯冬歳夏の土用
の回なる石ありてよめれ石をいふ
の石也もし不浄を犯せば石より水出てまた靈石也といへり伊勢次濱、
郡にまれ石といふ里あり神鳳抄にも見ゆ攝津、國兎原住吉の神前に貢
供にいふ成都ト卑支機石の如し其邊淺瀨に紺色なるを交りて美麗
て遠き福島右衛門大夫正則の扇をもて此石を扣きて低に雷雨せり性石
て鳴動ある福王寺に納む慶大閤の時大江親元る城中に入て雷鳴せしをも
賜ふ公忠卿藏州に配流せし時守護伊豆守武田氏信深望に城中に入
雀、西を見ゆ禁裡に納まる其後醍醐天皇の時に中納言藤原、公忠卿に
の皇子人康親王の出家入道ありし所也百花亭は拾芥抄に三條北朱
行公此を山科の宮に奉れり其事伊勢物語に見ゆ山科、宮は仁明天皇
し時にまれたれば或人の御曹司の前の溝に居ゑたりしを良相公の男の常
觀五年紀州千里、濱に出て八年右大臣良相公の百花亭に大御幸あり
龜山福王寺の寶物にいふまれ石は伊勢物語のあからさまの歌の石也貞

見えたり神中抄に月面の小車といふ風俗の歌ありしといひ大槻磐の注に
車、簀目のやうにはさらがたを淺かよなるべし
日本紀の歌にさらがた錦を風ばり神中抄に此歌を引て小
車のこと也といへれど車形、錦なるべし車形、錦は日本紀に見えて後世小
車、錦とはいはざらなどの如く小車をもていふなるべし小花錦亦伯仙
錦も皆文形をもていふ也伊勢儀式帳に莉車、錦と見ゆ刺竹をさゝ竹と
もいふ如く刺も小の義なるべしといへり
さゝらなみ 後名砂に泊瀬をよめり唐韻に淺水、貌と見ゆ萬葉集にさゝ
浪の志賀をさゝ浪とよめりうれる助語小浪も同じ
さゝれゆく 小石の上を流る水をいふ泊の瀬意也さゝれみづともい
ふ潺湲をよめり
さゝわけ 嘗嘗に少別と書り夫木集に秋の野のをなゝしとさゝわけに
と見ゆれば小竹別の義也嘗嘗もをなゝしの物名にみし詠也
○さし 度をいふ指渡すの義物さしともいへり吳服尺は裁縫尺也知長
短の器也曲尺をかねさしといふ○筷子にいふ探筒也○乳母の介をいふは
指ぶりの義也○雄略紀に城をよめるは韓語也○錢の紫子をいふは刺の
義なる繩をよめり安南にては蚕藤を用う○魚に虫のわくをいふは小蟲の
義なるべし侯名砂に鮓子を訓せり酒醋上の小飛虫也と注せり
さゝ 笹能の音也轉じて葉能をいふ西土の湯能に考工記の勺の
遺制也さゝやの遠の祖の形ある物也○象牙の笹能を玉揚といふ○左
寺右寺あるに古瓦遺れり山城、國也

澤にふるさゝめからこの袖はぬれけり 大和本
草云小々菜山野に生ず 腹氏ボータニスト云
菜ニ云草也 菜、類也 交コラテテ 雜ニシ
タガヘシロト云 太田大洲氏云 即神慶本
經ナ菜根ナリ 雜說カトスルハ誤也 カヤニ似テシカ
ヌカ也 今云バナ也 春アルヲ苗リ菜ヲ生ず 叢生
ス 三月頃其花出 即ツボナ也 野人菜ヲトリテ
水ニ浸シ 中ノ不味ヲ取捨テ 非跡ニテ煮ニシタ
ルヲサヽノトト云 林蘇

さゝめごと 小語をさゝめごとゝ訓りその略語也
又後の俗語にさゝめくといふはさゝめごとの
くるはゝ〳〵めにて人をよばふの意也蜻
蛉日記下さはる事ありなどにと思ひ出たれば或
人の女神には友ひびて奉るこそかなれさし給
くよより來てさゝめけばうち試かしてかたら
のひなきぬ三ぬひたり大鏡ニ右大臣道綱
このたゝいこれ大入道殿の御三郎采田殿
さこそ聞えまゐりしか云々人々にかゝりて御
冠などはなくなり御紐しのけなどいふみし
う苦しう氣にて給りて見奉り給ふる御
心ざしにて給ひつるたのにたゞくなしとさゝ
やきてさゝめきにこそさゝめけれ
ねたかりし心
おもひねるさゝめ
名

さゝめごとの 山家集 おやみなるさゝめの
こみのきぬに涙の雨をたのみがたらに

さゝやか　細々許、河海抄、ちひさやかなるをいふ、さゝとはすべて狹小なるにいふ詞也、小竹をお笹といひ、小草をもさゝめといひ、微雨をこさめといひ、またいさゝかなどいふみな些少にいふ詞也、樵談をもさゝきと訓り、小鳥なれば也、少時をいはさゝめといへり、徒然草上、あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の月影にいろあひさたかなられば、つやゝかなる狩衣にこきさしぬきいと故つきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、類名さゝら　榮花御賀巻、ふえふきさゝらといふものつきさま〴〵のまひ、今昔廿八、サヽラヲッキ、杖（エラリヲ差テ、様々ノ田樂ヲ、職人歌合、サヽラリ、さゝらえをとこ　小丁愛男也、月之異名也、袖中に小車錦と月面小車と二首、同物のやうに釋せり、萬六、山のはのさゝらえをとこ天のはらとわたるひかりみらくしよしも、

さゝらがた　小形也、日次紀、さゝらかたにしきのひもをさゝきさけて、同機體、さゝらのみたひのむすひたれ、豊受太神宮御裝束式、剌車錦御被二條、

さゝらのをの　天上之野の名也、萬三、あめなるさゝらの小ののしゝ七ふすけ手に取持て、さし　剌也、萬十六、その皮を盤にさし、今も盤をさすさそいふなる、

さしあふ　指合、明月記、文暦二年二月十八日、今明自身毎日有指合事、廿一日來進由、亦之仍山了、續後撰集戀、たのめける男さしあふと有て、命あらばあすの夜かならずと申たりける返事に、をしからぬ命ゆへ我もゆづりてんたのむるこゝろを誰に見せまし、○新古維二、さしあふ事ありて、とゞまりて、榮花さりべの、よろづさしあひもの、さわがしく、玉葉教下、紅葉御らんぜらるべしとて侍ける日、さしあふ事ありて、のびにけれは、さしかへ　指交也、萬八、白たへの袖さしかへてさねしよや、古上、またまての玉手さしまきこもゝなかにいはなさんを、萬五、いたりよりてまたまてのまてさしかへさねしよの、

さしぎ　宇治十二、一條富小路にさしきうて、源奏、所〳〵の御さしきころ〳〵にしつくしたるまつらひ、落久ホ、一條の大路にひいたのさしきいといかめしうて、建武年中行事、鬼の間より入て、次第にさしぎはづして、格子をはづして、格子をあく、下學集、鎖子（サシ）閉戸物也、信案、格子をさし上る木欤、

さしき　座敷、信云、今の世にい、屋中一間をさしていへど、古い座列ののさまの事を云へり、太平記廿七、雲景未來記の條に、並居玉ふ座敷の体、あまりにたそろしく云々、いかなる御座敷候そと問へばさある類也、

さしくむ　差曇、涙さしくむい、差い詞にて、くもり、雲圖抄に指合と見えたり○月のさいりをさしあひといへり、

さしあふら　燈油をいふなり或は脂燭を訓せり源氏に紙燭さしてといへるもこゝろなし

さしいる　萬葉集に月照臨をつきさしいりてとよめり

さしたく　措字閣字などをよめり、

さしかたむ　日本紀に鎖閉外門（サシカタムトンカトヲ）と見えたり、

さしがね　矩なりもと四方の板に刻をつけたる物にて略して今の曲尺となるよしまがりがねと訓すうらのめい　算法の勾股弦をうつしたる也是をうらがねといふ○大がねと稱する者い木なもて造れり勾股弦の矩也

さしかへ　萬葉集に真玉手の玉手指更（カヘ）されし夜と見ゆ指かいし也かいすい合す也、

さしかへし　源氏に見ゆ花鳥餘情に天盃をたまふ時土器を召て天盃の酒をうつし入てのむなりその土器をさしかへしといふと見えたり○源氏にさしかへりなんとあるい今更立歸るといふ意也といへり

さしおがみ　二州吉良の一邑に一尺餘ある魚を得たり其色黄金にて甚光あり面龍の如く全身堅し筑紫人見て此名を呼り祭事神と書さそ、

さしおき　日中行事に見ゆ格子ともさし木さしてとあり今日さしあさしなどの名目是也、

さしき　坐敷と書り古へい客來れは坐を設る成へし西土にいふ客房也又堂を譚せり、

さしぐし　倭名抄に百刺櫛をよめり萬葉集に刺櫛とみゆ抄に枇杷と見ゆ挿櫛の義也○さしぐしのあかつきといふは垢つくを曉にかけていふといへり○枕草紙にさしくしむすはせてといへるい髪にさし結ふ也○延喜式に宮女も官位なければ角のさし櫛を用ゐると見えたり今い貴賤共ら瑇瑁を用ゐて其美を闘いしむるに至れり奢侈の甚きいかんともすべからず、

さしくいふ　古事記に支加をよめり、

さしくむ　水また涙なとにいへり指汲の義也○源氏にさゝみいなはいとをしきと見ゆうちつけの意也といへり、

さしこ　今東鄙の俗に用る服をいふ布木綿を合せて刺つゝりたるものにて袖なく膝あたりまて着す是筑後の國人形か原にある石人の服製に同しされい神代よりの衣體なるへし、

さしこもる　古事記に刺こもり坐とみゆ、

さしさを　指竿の義漢に黏竿といへり、

さしすぎ　萬葉集に指進をよめり栗栖（クル）の枕辭にいへり栗刺（イガ）よりいへるなるへし源氏にさしすき人又心ちなう指過して侍りなと見えたり○新撰字鏡に聳をさしすゝむとよめり榮花物語にさしすゝみてつかうまつる事多かりと見ゆ

さしづ　皇朝類苑に中國差圖ノ者或ハ不能也と見えたり雲圖抄に指圖に作る、

さしつな　指綱の義馬にいへり指繩に同し小口繩ともいへり約字をよむへきにや飾抄に公卿い差繩四位已下片繩といふ事も見えたりとそ宇治物語にも差繩と見えり餝抄に片差諸差あり、

日、今明自身毎日有指合事、廿一日來進由、亦之仍山了、續後撰集戀、たのめける男さしあふと有て、命あらばあすの夜かならずと申たりける返事に、をしからぬ命ゆへ我もゆづりてんたのむるこゝろを誰に見せまし、○新古維二、さしあふ事ありて、とゞまりて、榮花さりべの、よろづさしあひもの、さわがしく、玉葉教下、紅葉御らんぜらるべしとて侍ける日、さしあふ事ありて、のびにけれは、さしかへ　指交也、萬八、白たへの袖さしかへてさねしよや、古上、またまての玉手さしまきこもゝなかにいはなさんを、萬五、いたりよりてまたまてのまてさしかへさねしよの、

さしぎ　宇治十二、一條富小路にさしきうて、源奏、所〳〵の御さしきころ〳〵にしつくしたるまつらひ、落久ホ、一條の大路にひいたのさしきいといかめしうて、建武年中行事、鬼の間より入て、次第にさしぎはづして、格子をはづして、格子をあく、下學集、鎖子（サシ）閉戸物也、信案、格子をさし上る木欤、

さしき　座敷、信云、今の世にい、屋中一間をさしていへど、古い座列ののさまの事を云へり、太平記廿七、雲景未來記の條に、並居玉ふ座敷の体、あまりにたそろしく云々、いかなる御座敷候そと問へばさある類也、

さしくむ　差曇、涙さしくむい、差い詞にて、くもり、雲圖抄に指合と見えたり○月のさいりをさしあひといへり、

さしあふら　燈油をいふなり或は脂燭を訓せり源氏に紙燭さしてといへるもこゝろなし

さしいる　萬葉集に月照臨をつきさしいりてとよめり

さしたく　措字閣字などをよめり、

さしかたむ　日本紀に鎖閉外門（サシカタムトンカトヲ）と見えたり、

さしがね　矩なりもと四方の板に刻をつけたる物にて略して今の曲尺となるよしまがりがねと訓すうらのめい　算法の勾股弦をうつしたる也是をうらがねといふ○大がねと稱する者い木なもて造れり勾股弦の矩也

さしかへ　萬葉集に真玉手の玉手指更（カヘ）されし夜と見ゆ指かいし也かいすい合す也、

さしかへし　源氏に見ゆ花鳥餘情に天盃をたまふ時土器を召て天盃の酒をうつし入てのむなりその土器をさしかへしといふと見えたり○源氏にさしかへりなんとあるい今更立歸るといふ意也といへり

さしおがみ　二州吉良の一邑に一尺餘ある魚を得たり其色黄金にて甚光あり面龍の如く全身堅し筑紫人見て此名を呼り祭事神と書さそ、

さしおき　日中行事に見ゆ格子ともさし木さしてとあり今日さしあさしなどの名目是也、

さしき　坐敷と書り古へい客來れは坐を設る成へし西土にいふ客房也又堂を譚せり、

さしぐし　倭名抄に百刺櫛をよめり萬葉集に刺櫛とみゆ抄に枇杷と見ゆ挿櫛の義也○さしぐしのあかつきといふは垢つくを曉にかけていふといへり○枕草紙にさしくしむすはせてといへるい髪にさし結ふ也○延喜式に宮女も官位なければ角のさし櫛を用ゐると見えたり今い貴賤共ら瑇瑁を用ゐて其美を闘いしむるに至れり奢侈の甚きいかんともすべからず、

さしくいふ　古事記に支加をよめり、

さしくむ　水また涙なとにいへり指汲の義也○源氏にさゝみいなはいとをしきと見ゆうちつけの意也といへり、

さしこ　今東鄙の俗に用る服をいふ布木綿を合せて刺つゝりたるものにて袖なく膝あたりまて着す是筑後の國人形か原にある石人の服製に同しされい神代よりの衣體なるへし、

さしこもる　古事記に刺こもり坐とみゆ、

さしさを　指竿の義漢に黏竿といへり、

さしすぎ　萬葉集に指進をよめり栗栖（クル）の枕辭にいへり栗刺（イガ）よりいへるなるへし源氏にさしすき人又心ちなう指過して侍りなと見えたり○新撰字鏡に聳をさしすゝむとよめり榮花物語にさしすゝみてつかうまつる事多かりと見ゆ

さしづ　皇朝類苑に中國差圖ノ者或ハ不能也と見えたり雲圖抄に指圖に作る、

さしつな　指綱の義馬にいへり指繩に同し小口繩ともいへり約字をよむへきにや飾抄に公卿い差繩四位已下片繩といふ事も見えたりとそ宇治物語にも差繩と見えり餝抄に片差諸差あり、

もしなから　もしながらの詞也　もしながらの詞にいへる心なるべし

もしなから　指貫を常に着ずして指つらぬる義なるべし　指貫の條に詳なり　○主上の御名鈔に奴袴をもしなからの袴とも見えたり　訓もり又絹狩袴とも見えたり

の國くまがはの人に火うたせたるなどいふ事有けるを見ゆ○折〳〵に打ち遊ぶを見ゆ○月のさすまで指の義なるべし凡て光の映するにもいふ○酒なさまが敬ふを見ゆ○扇をさに刀指胡籙指笏指のわが親長記に見ゆ○萬葉集にかゝりてしとなり○落に一さしなどいふ指の義なるべし彼をさす日をさすなどいふ點をより差の義なり○膳の給にもさゝひなどいふ指也○樹木をさし木にするなり○朱をさす詐をさすも點なるべし○北をさすも指也○樹木をさし木にするつゝ打木をり木にするなど膳木と見えたり○刀にいふ挑也古今六帖に日本紀に見えたり○使をさしつかはす人足をさすなどいふ差字也匡謬正俗に科發士馬謂之爲差と見ゆ官府語也日本紀に差良家子爲仕者軍防令に凡差兵士と見えたる是なり○人家にいふ倭名抄に被首と見えたり新撰字鏡に拙よめり○さまの條に委曲也とあり○神樂歌にあるさまそろふるも同語通也

さまえ　倭名鈔に裲襠をよめり插柄の義器似ヨシ注せり又屈木爲之とあり今ふまけ物なり盃類さへ見えたり今も東國の民間には此物を酒器さへいふ

さまが　讀誦の解まだ務て本を忘れざるの意あり大さ物一つにかけていふ解なるし字書に併せ相並也と注せし義に似たり萬葉集にさがさがよめる是なり然まがらにたゞいふ語意也よて真名抄勢物語に然字をよめり○世に流石と字をさがさがしく解に用たり流石は實に然さが石に漱き流に枕すなどいふ故事によれりさがなく率令もいふ○後撰集にみなの國くまがはの人に火うたせたるなどいふ事有けるを見ゆ○折〳〵に打ち遊ぶを見ゆ○月のさすまで指の義なるべし凡て光の映するにもいふ○酒なさまが敬ふを見ゆ○扇をさに刀指胡籙指笏指のわが親長記に見ゆ○萬葉集にかゝりてしとなり○落に一さしなどいふ指の義なるべし彼をさす日をさすなどいふ點をより差の義なり○膳の給にもさゝひなどいふ

久方の天ゆく月を網にさし云々、信按、さすとハ糸などを引る意也、網ハ小網なさにさす、犬馬などのさし綱さしずみ、これも墨縄を引はる也、○さす　造也、いはりさす、分類花條委任、うつ保さしかけ、物の葉なくほけにさして、

さすか　おかすかのつゞめ也、志加の反ハ佐也、さすがを又約めて、佐加の反佐なれば、左加ともなり、さか〳〵しといふ事、神代紀にも有り、さしすくいたる意あり、さがなしといふも、さがにくきといふも、みな心のすさむかたにていふ、流石の字を訓ハ、一轉てわろきことを、よきにいひまけたるかたにていふも、さかしらの意有り、左須賀をまたつゞめてハ、左の一語ともなる、須賀の反ハ左なれば、左ゝとなるを、下の左をはぶきていふ也、たとへばさあらん、さなくはの類ひハ、左の音語にあらで、志賀須か左須賀のつゞめ語也、伊勢物語　むさしあぶみさすかにかけてたのむにハとはめもつらし問もうるさし、あま雲のよそにも人のなり行かさすかにめにハ見ゆるものから、類名

さすかね　孟、かきかね也、源夕霧、こなたよりこそ、さすかねなどもあれ、

さすき　假板也、今俗に棧敷といへるハこの訛也、日神代、釀八醞酒幷作假板八間同神功、出兢俄野而祈狩之曰、若有成事、必誑良獣、二王各居假板、

さすき　榮花もとのしづく、二條のさしきのにわたり給ひぬ、同玉鬘、たほるのみかど、やけにし後ハ、此さしきどのに、中納言どのすみ給ふに、今昔十九、大路ノ左右ニ狹敷无隙ニ云云、信按、此字の義なるべし、上方の人などハ、敷をすくともいへり、をくすく通はして云へハ、さすきとも云なるへし、

さすひ立　誘立也、萬十六さすひ立てきなましを、古今、花の香を風のたよりにたくへて云云、そふをるへにハやる、すさそさ通へり、樢、

さすやなき　剌柳也、柳ハさしめしてよく叢茂すれハいへり、萬十三さすやなき根はるあつさ、家隆卿、小山田の池のつゝみの古柳たかさしめしてみどりなるらむ、家尊親王、柳原さすかに春ハとよみたまへるも此心也、樢、

さすらふ　源氏、はかなき世にさすらふらん云云、信云、たちふるゝ意也、

さすらへ　謫、流落、うつ保さしかけ、さらたほかみくま、けだものにましりさすらへて、通證十、大和物語、さそかう女さすらへて、林葉

させ　虫名歟、古説つゝりさせてふきり〳〵すといふより蓑の一名とす、後拾遺序、あきのむしのさせるふしなく、林葉

させ　俗語のさそに近し、萬代冬、　網代もりさそさむからし衣手の田上の河も氷る霜夜ハ林葉

ほうせともいふ也、

させも　さしも草也通音にてよへり枕草紙にいさせも草とよめり○堪後のさせもか露を命にてよめるハ猶たのめもめしか原のさしも草の歌によれり

○さそ　領承する辭にいふ然その義也嘸ノ字をよむハ字書の本義にあらす別にいふへき事なきの意にて此字をよめるなるへしよて後を推量していふ詞にも後に思ひ合せたるにもさそなどよめり字彙に嘸ハ陽應也といへり

さそう　伽羅にいふ蠻國の名也といへり、

さそふ　率なふ意にいへり率副の義にや誘ノ字をよむも同し今誘引を音にいへり新撰字鏡に佉をよめり勸於人也を注せりさそはるゝともいへり新撰萬葉にハ倡をよめり

○さた　杜詩集注に以節貯沙去其細而存其大曰沙汰と見えたり理非を分つ事にいふハよし流言をもてさたといふハあしゝ一説に選叙令集解に處分與校定同文也と見ゆさたといふ詞ハ定めてふ意也沙汰と書ハ推量の字也といへり○沙汰之限といふハ成敗式目に見えて理非を沙汰すへき分限をいふなり今ハ不義無道の事をいへり庭訓往來に沙汰人も見えたり○俗に怠慢の意に無沙汰といへり○沙汰ノ浦ハ出雲也後醍醐帝の隱岐より着せたまひし所也○式の秋鹿郡佐陀ノ神社ハ諸ノ尊册ノ尊を祭る社司の説也と九州道記に見ゆ○唐書沙陀傳に沙陀ハ西突厥ノ別ノ部處月種也と見え倭名抄に沙陀調ノ曲あり

さた　枕草紙にいとさたすきふる〳〵しき人と見ゆ源氏物語に多き詞也河海に央ノ字を出されたるハ何によれるにやかなひたりとも見えす或説に婿

さそふ　さゝゆる、つらつゑのことをあざさそふとよめり、俗にいつきかふと書也、されば、こそ、白氏文集に柱をよめり、白氏文集十一、勘酒、塩金柱北斗不ㇾ如ㇾ生前一樽酒、前漢書九十六、西域傳、車師後國、車師後王姑句以道當爲柱、置心不便也、注、師古曰、柱者支柱也、言有所置、立而支柱於己、故心不便也、徒然草上、名利につかはれて靜なるいとまなく、一生を苦しむるこそわろかなれ、財ほしければ、身を守にまどし、害をかひ、わつらひなまねくなかだち也、身の後にい金をして北斗をさそふとも、人のためにそわつらいるべき、類名

さそふみづ　誘水、源重之集、　白川にさそふ水たになかりせい心もゆきてたもはましやい、

さそや　拾玉集　秋いたゝさそや悲しきむへしこそ鹿も聲をいをしまさらなん、

さそり　本草蠍蝎、今おがばちと云、奥義抄云、さそりといふむしをすかると云、萬葉九、腰細のすかる娘子が云云、塵添壒嚢鈔、サソリトハ、サソリ蜂ト云モノナリ、子ヲヤシナフコトニ云ヘル也、サソリトハ、アヤマリナリ、本體ハサソリト云ベキナリ、常陸國ニハ、カソリト云トカヤ、カノ國ニ加蘇理崗ト云ヲ岡アリ、昔シ此ノ岡ニサソリ蜂多アリケリ、是ニ依テ、サソリヲカト云ベキヲ、土俗カソリヲカト云ヘリ、袖中抄曰、今按蠍蝎さそり、さゝり、すがる、或人の關東へくだりて侍しい、あづまにい蜂をすかると申さそ、さゝり蜂と申せば、はちさゝりい同物也、○また人名なり、雄略紀、螟蛾、〔スガル〕

さた　定也、萬十一、此さた過てのちこひむかも、源、中比といふへきを中さたといへり、中年になれい人の心も定也、檜

沙汰　續一切經希麟音義卷十、沙汰、上音所加反、切韻沙亦汰也、下音太、考聲云、濤汰洗也、案沙汰即如ㇾ沙中濤ㇾ洗其金取ㇾ精妙者也、

さだ〳〵　源葵、何にさることをさだ〳〵とけさやかに見きゝけんと、トリカヘヤ四、思ひよらさりつるを、さだ〳〵と聞つるもあさましう夢の心地して、源浦雲、いとかくさだ〳〵ときこしめしたらんとはほさゝりけり、

さだすぎ　なかさだ、河海抄、さだい央也、半過たる年也、百年の半の義歟、五十餘りの義歟、箋、なかさだなといへり、央、說文云、界中也、師古曰、半也、又盡也、詩夜來央、漢武帝賦、惜繁華之未央、一說云、さだい比也、中さだも中比也、さた過い比過したる也、たとへはさかりの比過て也、萬葉十八、　ねきの波へなみのきよるさだの浦このさだ過てのちこひんかも、是もこの心也、類名

さだむ　定をよめり然認の義にやさだまるともいふまる反む也又神代紀に坐定をゐつまるとよめりされはさだむもつむ同語なるにや

さだめ　續日本紀に賜祿之額と見えて額をさだめとよめり定額の義なれい今いふたさてさだめなと此字なるへし

さだめふみ　定文也祈年穀廿二社奉幣の時にあり江次第に伊勢依可ㇾ定不ㇾ書ㇾ入定文とみゆ石清水臨時祭にもあり、

○さち　神代紀に幸をよめりさきと通す又利をよみ又幸利の二字をもよめり○本文雖幸有と萬葉集に見ゆさきくあれとよめりさゝ波やあかのから崎さちいあれと大宮人の舟待かねつ

人の嫁い三十歳を限とすれい三十を過たるをいふ定めの意也萬葉集にも左太の浦のこのさたすきて後こひんかもと見ゆ比といふに同意なるへしともいへり○名に信をよむい決定の意也といへり○仁明天皇の皇子に貞ゝ登ありさたな姓さす

さだう　茶湯也中山傳信錄にも王宮就茶役者曰宗叟又名御茶湯と見えたり日本の風を摸せしと見えたり宗を稱するも千ゝ利休の名をさる成へし○茶博士字い水滸傳に見えたり、

さだか　日本紀に定をよめり不貞をさだかならすとよみ不欺をさだかなるとよみ菅家萬葉に眞をよみ白氏文集にい安定二字をもよめり共に意通へり一說に梵語の闍陀伽ともいへり○諱の字に貞をさだとよむ是なり

さたけ　佐竹の姓い太平記にみゆ、

さだつ　俗語也小立の義成へし、

さだむ　定をよめり然認の義にやさだまるともいふまる反む也又神代紀に坐定をゐつまるとよめりされはさだむもつむ同語なるにや

さだめ　續日本紀に賜祿之額と見えて額をさだめとよめり定額の義なれい今いふたさてさだめなと此字なるへし

さだめふみ　定文也祈年穀廿二社奉幣の時にあり江次第に伊勢依可ㇾ定不ㇾ書ㇾ入定文とみゆ石清水臨時祭にもあり、

○さち　神代紀に幸をよめりさきと通す又利をよみ又幸利の二字をもよめり○本文雖幸有と萬葉集に見ゆさきくあれとよめりさゝ波やあかのから崎さちいあれと大宮人の舟待かねつ

さちゆみさち〳〵　神代紀に幸弓幸鉤とかけり、

○さつう　茶桶の音也茶の湯につうだてあり、

さつき　五月をいふ早苗月也といへれと幸月なるへし狩い五月を主とす神代紀に五月蠅をさへとよめれい古き詞也源氏にさつきのせちといふい五日をさせり○杜鵑花をいふいさつきつゝじの略也此月に咲たつ故に名くるなり品類に松島といふい奥州より出る也○頓阿の歌に鳴鳥の涙の色の紅にふかくもそむる岩つゝしかな是も杜鵑花の名によれり羅隱か詩に蜀魂千年尚怨誰聲々啼血滿花ゝ枝と見えたり杜鵑一名蜀魂ほとゝきす也○山城乙訓ゝ郡寶積寺にい四季の杜鵑花あり近年水車紅車源氏車薩摩紅博多白神樂ゝ岡峰の雪人丸等の品あり

さつき　近年水車紅車源氏車の品ありさつま車はかた白神樂ゝ岡峰の雪人丸等もみゆ、

さつき　三代實錄に雜伎と見えたり、

さつきげ　鹿にいふ五月毛の義鳥屋へ入れいやかて落す毛也、

さつきのたま　五月の玉也藥玉をいへり、

さつきやみ　五月闇也五月雨のふりまさる比をいふといへり、

さつきやま　五月山也津の國にありといへと鹿の照射（トモシ）などによめるい唯夏山の義成へし、

さづく　萬葉集にみゆ授ゝ字をよめり眞（サ）附の義成へし靈異記に嚼もよめり

さつまやう　朝野群載に山城ゝ國雜掌秦ゝ成安と見えたり、

さつはく　俗語也雜駁の音成へし、

手の義なるべし手に持て魚を捕るの也梁塵鈔に小網也といへるよし高葉集に見ゆ和名鈔に網を三手圖會に投網と見えたり小

集に小網をよめり後撰集にこれらの言瀬のようにそのそなや戀路にそほれはつくさまよりいふは高葉集よりよめり○同類にてあり手を四ツにそだるなり○そでもりいふ酢の然れどもの意なり

○まさご　鄙里をいふ狹處の義なるべし眞名伊勢物語に京をよめる日本紀に本けり○孝徳紀に凡五十戸を〻爲里と見ゆと高葉集に五十戸をまさごよりの宿を守部の五十戸の類也聞ハ二十五家集るをいひ邑ハ二里四方なるをいふ○宮つかへに對して武家をもまさごいふ物語に多し里第里亭の稱是也○俗に婦家を稱してまさごいふ源氏に見えたり字典に妻ヨ郷里南史我不忍令郷里落他處と見えたり○里子の稱も是よより出たり

○ささ　佐渡の國ハ狹門の義也さゝらハ

○ささら　座頭を書ハ盲人の座頭さゝらふ義にて公法にも座頭を盲目をわかてり訓蒙字會に盲或曾之曰先王が如し○平家物語をかたるハ建文中の生佛坊より始れりその事徒然草に見ゆ其次を如一建業とす其次を覺一建業城一建業をさゝらに於て一方城方を分て二流とす○周防の國にハ土座頭さゝらふ者多し琵琶法師也○錦に座頭さゝらあり座頭の琵琶を負たる形に似たるよて名とすさゝらハ

○ささがへり　婚姻の三日に至りて新婦父母の家に歸るをいふ五雜組に回戀さゝらふと見えたり今五日がへりさゝらへり

○ささし　聰をよむハ賢敏の義成べし一說に梵語の薩埵也さゝらへり俗に目がしこいなさゝらへり○高葉集に佐なよみ左傳に讃をよめり注に讃吉凶之先

ざたむ　源氏竹川〻よにたゝむ水なりやうたむらんに〻ほへる梅の初花〻

ざため　定也高ざうゝレ神代のさためからしも〻

ざゝ　幸〻さゝはひ有ことをいふ〻古事記に〻海佐智比古〻山佐智比古とゝるハ〻かりそめの稱號也〻古事記上〻故火照命者爲〻海佐知毘古〻而〻取〻鰭〻廣物〻鰭〻狹物〻火遠理命者爲〻山佐知毘古〻而〻取〻毛麁物毛柔物〻爾〻火遠理命乞〻其兄火照命〻各相〻易幸〻欲用〻三度雖謂〻其兄火照命乞〻其鉤〻曰〻山佐知毘已之佐知〻不許〻然遂纔得〻相易〻爾〻火遠理命以〻海佐知〻鉤〻釣魚〻都不得一魚〻亦其鉤失〻海〻於是其兄火照命乞〻其鉤〻曰〻山佐知毘已之佐知〻海佐知毘已之佐知〻佐知今各謂返〻佐知之時云々〻續紀

○ざうけて　授而也〻高四〻王ものにたまはさうけて〻かつ〳〵も枕をわれゝらふたりぬむ〻

雜掌　薩記に醯部食物などのことを書たるヶ條に〻雜掌方又は雜掌を雜美するなどいふ事あり雜掌ハ薩所にて色々樣々食物の調味あんばい等のことを世話をやく事也〻蜘走ハ云に同レ〻雜掌を雜美するハ云ハ〻食物の珍物醴盛梅なとをはぶのるさいふ也〻是は食物の雜掌也〻食物の雜掌ハ色々樣々のことを世話をやく役人を雜掌といふ〻雜掌ハ樣々打まじるを云〻掌はつかさどるなどよみ〻限らずして雜掌といふ〻

ざつゝき　源氏のうきはし〻御でしになりてかことなどつけ給ひてけりなど〳〵侍るハまことか〻續紀一〻授賜此負賜布〻神代紀下〻相授〻

ざつと　宇治九〻一度にさつとうせぬ〻

ざつ人の枕詞　ゆつまがたけ〻高葉十〻さつ人のゆ月がたけに云々〻こは神代紀に兄以〻弟幸弓〻入山覓獸〻弟幸兄之幸鉤〻入海釣魚云々〻さつ人ハ此幸弓の事より始りて弓矢をもて山の鳥獸をかる人ハ〻山のさつ人〻山のさつをなどいふなれば〻さつ人の弓にさゝらがけたる也〻冠

○さつを　高十〻山にかもつをのなゝらかしこしをしかなく也つまのをぢの〻神樂歌昔古ホ〻さつを〻らからもたをのまろ弓たゞ山にかゝりてもしも弓の營みゆ〻

○さで　山網也高一〻下瀨にさでさしわたし山河もよりてつかふる神のみかも〻和名纈佐天〻網如〻其形狹後廣前也〻

○さて〳〵　今俗ニシテドウタトイフ意ナリ〻榮花落葵〻さて〳〵〻さびさこそ給ひて〻林葉

さと　里也、萬十八、さとごとにてらさひあるけど人もとかめず、

さとき　萬葉略十二、さときハ今すゞどきをいふ也、其すゞどきハ、進疾の略なり、

さときこゝろ　聰心也、萬十二、ものゝふのさときこゝろもわれハなし、

さとしそも　萬四、つるきたち身にとりそふと夢に見つなにのさとしそも君にあはむため、源明石、さとしのやうに有ごとを、こしかたゆくすゑをほしあはせて、

さとはす　さハ例の添字にて問す也、萬十八、さふるこにさとハす君かみやてありふり、古下、我をとハすな我にといふべきをさといふハ古歌の格也、をとこといふべきをにといふも又同し、楢

さとびた　源東屋、さとびたる云云、信云、みやびハ宮ぶりにて、それに對して云、町屋まく共云ふ意也、宮仕へに對して我家を里と云をも思ふべし、椎本に山ざとびたるあしろ屏風とある山里びにて、其義よく聞ゆ、

さとへかよへる山道　萬七、山守のさとへかよへる山道そとけく也けりわれけらしも、

さとほみ　遠也、さハ發語也、萬十四、あひつねの國をさとほみ、

さとれ　萬四、さとれさかはり、續後紀、悟開「サトリヒラケ」介天行布人遠、

見者と見えたり物のさとしのやうなりといふ是也惟異をもて人を諭すの義にや源氏にも見ゆ

さとす　諭をよめり介悟の意也日本紀に丁もよめり

さとだいり　建武年中行事に里内裏と書り里第をもて御在所ぞするの名也應仁後に此事ありし、

さとのあま　里にすむ蜑也又讃岐の名所にもいへり永久年中に人丸の影供始行ありて此所を影供領として顯季に給はるとそよて其影を里蜑の尊影と稱す

さとのかど　和名鈔に閭閻をよめり、

さとのし　琉球王近侍小童を稱す里之子と書り正從八品の官也袋中か錄には里主と見ゆ、

さとび　里ぶり也ぶり反び也源氏にさびたる犬といひ枕草紙に見をらぬさびし心と見えたり○犬といふハ詩に守家一犬迎人吠といふ意也、

さとびとむら　里一むれの義也、

さとぶね　藏玉に車の實名也といへり荀子に是之非之謂之智と見えたり悟をさとるとよむも同し新撰字鏡に憭もよめり

さとわ　萬葉集に里回と見えたり郷曲といふか如し、

○さな　神名式伊勢國多氣郡佐那神社二座と見ゆ古事記に手力雄命、佐奈縣に在と今手力雄命若佐那女の命也といへり古事開化

さなかつら　本草南五味子、今びなんかづらと云、萬葉二、ゆふだゝみ田上山のさなかづら、藻鹽草、さな蔓さねかづら同事也、ねざなど同音也、古事記、香佐那葛之根、取其汁滑而塗其船中之簀垉、設蹈應仆、仙覺萬葉註、かつらハはびこるさま、あひわかるれども、えだ〳〵みなあちこちなかくはひゆくほどに、のちにゆきあへば、さねかつらのちもあはんと云云、

さながら　みながら、又ハそれながらといふに同し、左有乍也、伊勢御集、つねになやましくせさせ給ひけるを、つひに六月にかくれさせ給ひける、あさましくいみしく悲しくてつかまつりし人々あつまりて夜晝なきこひ奉る、大鏡第四、賀茂の祭の日、一條の大路にそこらあつまりたる人、さながらさともに佛とならんとちかハせ給ひけんこそ、猶あさましく侍れ、さりとて又現世の御榮花をとゝのへさせ給ハぬかハ、拾玉集　野へことにこほるゝ秋の夕露をさながら袖のものとなしつる、

さな〳〵　然莫、さなせその意、續世繼うたゝれ、さな〳〵まかりのきねといひけれは、榮花浦々別、されどさなさなせし給ふへきにもあらす、林葉

さなすいたど　閉板戸也、萬五、をとめらかさなすいた戸をたてしひらき、古上、をとめらかなすやいた戸をたそふらひ、

さなみ　小浪、萬代秋上、をみなへし池のさなみに

記に曙立王者伊勢佐那ノ造之祖と見え儀式帳にも佐奈ノ縣造御代宿禰と見ゆ佐那谷の内仁田村に社あり○文武紀に遷多氣大神宮于度會郡といふ此神社を指なるへし

さながら　萬葉集に皆悉の字をよめり然ながらの義なるへしそのまゝともしかふ言道ともに通せり又乍もよむへし淵藪類函に形貌乍同鷄鴟類精神別「寮鳳皇ノ心酉陽雜俎に蓮子溯多蓮花紅繖間明乍疑渾錦の類也といへり

さなき　舊事紀に鐸をよめり小鳴るの義鐸をもよめり神祇令に鈴二十口佐奈伎二十口と見えたり式河内大縣郡に鐸比古神社鐸比賣ノ神社あり一說に鐸ぬてと訓す○さなきだになどいふ詞ハ然あらぬをいへり○讃岐國にも所の名に呼り了後　名にしたハゝさてしもあらて浦風のさなきハなどかはけしかるらん

さなぎ　參河ノ國狹投山ハ大碓ノ命を祭るといふ加茂郡也宮ハ東西に分れ美濃尾張三河の三國に跨るをもて三國より祭る○古へのふたむら山ハ此山をいふ也今いふものゝ額田郡に在て非也、

さなご　瓜瓣をいへり實子の義にや、

さなす　古事記の歌に見えたり小鳴の義也といへどさまの發語なすハ鳴也

さなだ　姓に眞田と書りさなさね也所ハ信州上田の奥也佐那田與一義忠ハ三浦ノ義明か姪也義實か子也○綏の類にさなだあり狹の織の義のほ反なる也萬葉集に狹織之帶と見えたりといへり又眞田打の略也天正の比眞田氏大小のつかを木綿の打糸にて經れたるよりいふ名なりともいへ

なり　秋をうら早苗と書るも小苗なるにやつ苗わか苗玉苗なるよめり

一説にさなへのわを略したるならんといへれど五月苗なるしるもいへり

さなみ　小波也といへり

さなへとも　然ならでもの義也

○さにつらふ　萬葉集に見ゆる被語につらふ丹着の義につかふも見ゆるにつらふ君妹をもなどいへるに紅顔をいへり又紅葉紅なるにつけたるか紅の能くそまるよりいふなり

さにぬりのふね　萬葉集に見ゆる狹丹塗の赤也彩赤をいふ又さかえはの約轉にてそほ赤に同じともいへり

さにふ　神功紀に鎭神者を訓せり古事記に沙庭と書り或ハ庭をよめり延喜式にヲド庭神ニ座御ト祈給ヲ、日祭ノ忌ト見えたり四土神祭のごとくなるべし

○さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

し事古語拾遺に見えたりの反切を略する也といへり○萬葉集に玉藻吉讃岐國云々神の御面跡次來云々古事記に四國の事を此島者身一面而有四面毎面有名と見えたる是也○讃岐國多紙又有能書者といふ事保則傳に見ゆ○佐賀氏は實朝の隨兵に見ゆ

さぬらへ　ら反るのるに同し小寢の義也

○さね　核をもいふ小種の義成べし瓜にも瓜を見えたり詩に瓠犀をよめり

○さにつらふ　倉敷出雲國造神賀詞に赤玉の御幌川且坐生ず賀奏せるは天皇の御幌なるべし赤玉は大御顏の紫を産す色なるべし賀奏をするにて赤色を延べ赤らびを申せるなり紫を名知此申せるにて人の顏の赤らびたるをこそ愛つらめ彼に神代紀に豐玉姬の御歌に生置し玉ひつる御兒のことを赤かたまのひかりのありさまくさぐさを詠玉ひ萬葉三丹生女の石田王のことをよめるにつらふ若大王云々なども赤玉のことをよめるにつらふ君妹をもなどいへるに紅顏朱顏なるにつくるべし（中略）殊なる意の字に制れるもの同意なるにこそ

さにつらふ　後撰集十三そこかとはしけれどもまだおはさりける男を二月かれおはにけりさくらのさかりをいかがおもはなりそこらみつかつしけれどはなのうつろふなどにこそ物あらかひつくさいふなり

さにつらふ　後撰集十三そこかとはしけれどもまだおはさりける男を二月かれおはにけりさくらのさかりをいかがおもはなりそこらみつかつしけれどはなのうつろふなどにこそ物あらかひつくさいふなり

さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

し事古語拾遺に見えたりの反切を略する也といへり○萬葉集に玉藻吉讃岐國云々神の御面跡次來云々古事記に四國の事を此島者身一面而有四面毎面有名と見えたる是也○讃岐國多紙又有能書者といふ事保則傳に見ゆ○佐賀氏は實朝の隨兵に見ゆ

さぬらへ　ら反るのるに同し小寢の義也

○さね　核をもいふ小種の義成べし瓜にも瓜を見えたり詩に瓠犀をよめり

さにぬりのふね　萬葉集に見ゆる狹丹塗の赤也彩赤をいふ又さかえはの約轉にてそほ赤に同じともいへり

さにふ　神功紀に鎭神者を訓せり古事記に沙庭と書り或ハ庭をよめり延喜式にヲド庭神ニ座御ト祈給ヲ、日祭ノ忌ト見えたり四土神祭のごとくなるべし

○さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

○さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

し事古語拾遺に見えたりの反切を略する也といへり○萬葉集に玉藻吉讃岐國云々神の御面跡次來云々古事記に四國の事を此島者身一面而有四面毎面有名と見えたる是也○讃岐國多紙又有能書者といふ事保則傳に見ゆ○佐賀氏は實朝の隨兵に見ゆ

さぬらへ　ら反るのるに同し小寢の義也

○さね　核をもいふ小種の義成べし瓜にも瓜を見えたり詩に瓠犀をよめり

さにぬりのふね　萬葉集に見ゆる狹丹塗の赤也彩赤をいふ又さかえはの約轉にてそほ赤に同じともいへり

さにふ　神功紀に鎭神者を訓せり古事記に沙庭と書り或ハ庭をよめり延喜式にヲド庭神ニ座御ト祈給ヲ、日祭ノ忌ト見えたり四土神祭のごとくなるべし

○さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

○さにつらふ　倉敷出雲國造神賀詞に赤玉の御幌川且坐生ず賀奏せるは天皇の御幌なるべし赤玉は大御顏の紫を産す色なるべし賀奏をするにて赤色を延べ赤らびを申せるなり紫を名知此申せるにて人の顏の赤らびたるをこそ愛つらめ彼に神代紀に豐玉姬の御歌に生置し玉ひつる御兒のことを赤かたまのひかりのありさまくさぐさを詠玉ひ萬葉三丹生女の石田王のことをよめるにつらふ若大王云々なども赤玉のことをよめるにつらふ君妹をもなどいへるに紅顏朱顏なるにつくるべし（中略）殊なる意の字に制れるもの同意なるにこそ

さにつらふ　後撰集十三そこかとはしけれどもまだおはさりける男を二月かれおはにけりさくらのさかりをいかがおもはなりそこらみつかつしけれどはなのうつろふなどにこそ物あらかひつくさいふなり

○さぬき　讃岐をよむ音也大和の地名上總の地名因幡の地名にもあり國名も共に狹貫の義地形をいふなるべし一説に牟の調の義未詳

し事古語拾遺に見えたりの反切を略する也といへり○萬葉集に玉藻吉讃岐國云々神の御面跡次來云々古事記に四國の事を此島者身一面而有四面毎面有名と見えたる是也○讃岐國多紙又有能書者といふ事保則傳に見ゆ○佐賀氏は實朝の隨兵に見ゆ

さぬらへ　ら反るのるに同し小寢の義也

○さね　核をもいふ小種の義成べし瓜にも瓜を見えたり詩に瓠犀をよめり

さにぬりのふね　萬葉集に見ゆる狹丹塗の赤也彩赤をいふ又さかえはの約轉にてそほ赤に同じともいへり

さにふ　神功紀に鎭神者を訓せり古事記に沙庭と書り或ハ庭をよめり延喜式にヲド庭神ニ座御ト祈給ヲ、日祭ノ忌ト見えたり四土神祭のごとくなるべし

の田舍びたるさまを、ゝにと云もの、いと赤らかにかいつけて、髮けづりつくろひ給へる云々、ゝにもて顏の色をよそほふなるを、こゝに赤く濃く付たるを、そしりていへる也、享保の比までハ、女のかほに頬紅とて、櫻色によそほふことにてありしを、其後止たり、そハ遊女哥舞妓ハ、白粉のみにて、顏をぬるならひの、うつりて今のごとくなりたる也、因みに云、京商家小森氏所藏、元龜元年の古帳に、婦人伊勢參る拜禮の日、紅白粉を不用、髮束して不結かつらにて束ね置計なりし、近年此事混雜して不調候、かつらハ草の蔓也とあり、古風思ふべし、

さにハ　萬三、ゆくさにいふたりわかみし此崎を獨過れハ情かなしも、さまといふに同し、枕

さぬる　宿也、萬二、さぬる夜ハつくたもあらす、

さね　眞也、萬十八、ゆかむともへてよしもさねなし、同九、さねわすらえす面かけにして、

さね　實、果物の核をさねといふ、中心なる所也、后實ともいふが如き、猩がね、坊がねも實（さねかね）相通ひて同し意也、古事記上、於是天照大御神告速須佐之男命、是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故自吾子也、先所生三柱女子者、物實因汝物所成、故乃汝子也云々、類名

さね　信云、俗に云かべしたおを、さねと云、續詞花聯歌、大内の大垣の破れたるをみて、琳賢法師、たほがきハさねばかりこそのこりけれかたなしとてもいみハあらしな、

さねとこ　寢床也、日神代、さねとこもあたはぬかもよ、

さのかた　仙覺萬葉註釋十、さのかたハみにならすとも云云さのかたハ藤の一名也、花ハたほくさけども、みになることのかたけれハ、さのかたといふ、ねどのと同內相通なり、たほかた藤計にハあらず、花ハたほくさけども、みなることのすくなきものをば、さのかたと云べし、萩にもよめるなり、

さは　多也、日神武、人さはにハいりなりとも、同崇神、つゝらさはまきさみなしにあはれ、同武烈、ものさはにたほやけすき、萬十、栴の花ちらす春雨さはにふる、

さば　建武年中行事、朝餉の下、めしはて〳〵御箸を、御飯に立て入らせ給ふ、うるはしうめさずハ、御さばなどりて、あまがつに入てたてさせ給ふ、塊饌抄、鬼神に先づ供する飯を云ふよしあり、信按、色葉字類、正字を、サハラカナリ、サハラカとよめり、もしくハ甚さハの音歟、

さばいづみ　萬葉十一、こもりつの澤泉なる石根をも、同九、こもり沼ゟの下はへたきて、仙覺註釋十一、水にたて水ふし水といふ事あり、ふし水ハ形容したる意味は辨へがたくこそ○鯖江ハ越前國也源義助か足利高經と戰ひし所也

さはい　俗にさハいのよしあしといふハ埃嚢抄に名札を座牌といふと見えたり座牌ハ版位也是より出たる詞なるへし或ハ座配と書り

さばかり　然許の義さほどといふに同し、

さハきやう　救荒本草に山桔梗と見えたる者也○なきをもいへり、

さばく　處分をいふ朝野群載申『策試』に仍勤『事狀謹請』處分なと見ゆ貞觀政要の注に區處『曰』處分別『曰』分とあり梵語の娑婆何を善說をいふと見えたる是也といへり又區處と見ゆ清律集解に分『別事情曰』區決『斷其罪曰』處と見ゆ又裁斷曰分とあり又扱の字をよめり周禮疏に頒扱と見え字書に扱取也といへりさばくなといふにかなへり中山傳信錄に國中ノ人入『テ仕官ス』ル者其略識『國字』者『爲』首長『曰』掟士名山巴歸と見えたり○さばき髮なといふハ披髮なり○鷹狩の犬にさばきをといふはやり繩の事也藤をたちて綱につくるなりといへり新六帖にも鵜なハのさばきと見えたり

さハこのみゆ　拾遺集に見ゆ奥州にあり湯本とも三箱の湯をもいへり、

さハ〳〵　今昔物語に目もさハ〳〵と明にけり徒然草にさハ〳〵とはりかへんとにもへともと見えたり日本紀の釋にさハやかなりといへり○埃嚢抄に約をよめり今せハ〳〵しといへり、

さばしる　小走の義歌に鮎子さばしるなと見えたり、

さハす　酬ノ字をよめり物の澁味を云てさハやかにするをいへりさハし柿木

さつしなどいふ是也○歸田錄に凡百十物以二一根莖一置二其中一則紅熟爛如二泥而可一レ食土人謂二之紫柿一と見えたり○さつしのさを謎竟を書るも右の義におれり

さつた　澤田也陸機詩疏にも見え歌にもよめり澤の端などに稻をうゑしなも澤の如く水の深き田をもいへり

さばたがく　和名抄曲調類に狹錯川徘に澤田川の出といふ是なりと見えたり

さはあら　磁盈たといふ沙鉢の義なるべし凡て淺らなるものを沙といふ沙羅沙鍋沙船の類是也といへり

さへひこす　さへ發語言越の義にや　さはひこす與山里のさやの内にかへらふるうつたかりけり

さへふ　類聚雜要に移徙作法を見え口語にいふ是也延喜式に凡國司處分公廨差法を見えたるに差等あるをいふ也

さばくなす　神代紀に蠅聲なす如五月蠅なす書紀古事記に狹蠅那須を見えたり○萬葉集に五月蠅成あらぶる令人さも五月蠅莱周さわぐ見等さもよめるに枕詞なり

さつめく　日本紀に訓啖をよめり五月蠅めくの義なるべし

さつやか　清瀏の意にいふさつはりといふ俗語是也或ス疾字をよめり知顯抄にさらかにさやぐと見えたり遊仙窟に汗瞼をよめり

さつやけ　倭名抄に黃菜を訓せり拾遺集にも見えたりさやかなる意成べし

さはやか　今俗にいふきよし也和名抄菜羹類黃菜崔禹錫食經云溫菘羹是人作黃菜常所啖者也（黃菜俗云佐以二云佐波夜介一）延喜式內膳漬菜菜料鹽三斗粟三斗うつぼ筵二枚ゆのしをそへたりしるしてそれにはけのしるしをそへたりしるしてそれにはけのしるしをそへたりしるしてそれにはけのしる

さび　中務内侍日記、月いあけゆくきりに光もさびにけり、同いつしか人なくさびて、山家下、いせしまや月の光のさびるうらいあかしにいにぬかけそすみける、古撰可考近來波憂身衰氣里奈良山之青木之下葉色哉替禮留

さび　不樂、不怡、萬葉別記一、是い六くさばかりに轉しいふなり、一つい進む事を、須佐備また佐備といへり、(須を略古事記に、速須佐之男命云々、我勝云而、於勝佐備離天照大御神之營田之阿埋其溝云々、かの命かけ物に勝まして、御心勢ひの進みに、物を荒し給ふを、勝佐備といひて、こい荒進むかたにいへり、二つい萬十に、朝露に咲酢左乾(スサヒ)たるつき草のてふい、たゞ花の咲進むなり、卷十八に翁佐備勢牟といへるい、老心の進みせんといふにて、常に或い愁へ、或いいかる時、心の和さむべき進み事するに同じ心すさみ手ずさみなどいふなり、神佐備といふも同じ、此卷に(幸吉野宮時ゝて)神隨カムナガラ神佐備世須登芳野川瀧門河内に、高殿を高知まして上り立、國見をすればとよめる、即神天皇の御心すさみせさせ給ふをいへり、○意に是を轉じて、只神ぶりしたる事をも、神さびといふ、此卷に耳爲(ミミナシ)之青嚢山者云々、神佐備立、卷十四に神さぶる伊駒高ねなど是なり、猶いと多し、四つい再して、たゞ古ひたる事をもいふ、卷三にいつの間毛神左備祁留鹿香山のほこすぎの末原薜生までに、卷八に神左夫等いなにいあらず、卷十に、石上ふるの神杉神佐備而、吾い更に戀にあひにけりなどさへもよめり、五つい、上の神ぶりてふに同しくて、卷二に宇眞(ウマ)人佐備而、卷五に遠等咩良何遠等咩佐備周等など、皆その體をいふ、さて又此佐を略きて、神備宮備曳備などもいへり、夫利の約備なれいなり、是も亦多し、六つい浦佐備といひて、初めの進に似て、心の冷しくなく、和さめがたきをいふ、また卷一に、國津神の浦佐備而、また浦佐夫流、情佐鹿稱之、卷二に挽歌)蜚羽叡浦不樂(サビクラン)、晩夜者霧氣衝明立、(一に浦不怡)卷三に、世中の遊道爾冷(サビシク)者、卷中に眞十鏡見不飽君にわかれてや旦夕爾佐備乍將居(サビツヽヲラン)とのみもいひ、同卷に今よりい城山の道い不樂牟(サビシケン)吾通んとおもひし物をてふも同じ、冠注、後世に雨すさむい、雨のすゝみ降なり、雨ふりすさむといふ、降ことゝいへるを、卷十に、朝露に咲酢左(スサ)乾たるべき草の日たくるなへにけめやし、わもゆてふを、かの降すさむてふい、同じいひなしなれば、右の説いれぼつかなし、奈良人となりて神備とのみもよみたるい、神さびの略なるを或人是に依て、佐い發語ぞといひしい、未を取て本を强るなり、類名

さびづる　倭名鈔に鎛をよめり鋤ノ屬也、といへり鋤杖の義なるへし、

さびてがね　新撰字鏡に鋼をよめり字考得ず、

さひめ　俗に堺目をいへり出雲風土記に石見國與出雲ノ國之堺有佐比賣山と見えたり、

さびらき　小苗開也うゑ初る日をいへり、

○さふ　萬葉集に障をよめりい反ふなり

さふかい　挿鞋の字也延喜內藏寮式にみゆ名目抄に天子着之臣下不用之、

さぶ〳〵　水を渉る音にいふ今昔物語に見えたり、

さふし　雜仕と書り下仕の類也　○小網の類にさふしあり南伊勢にてくゝりといふ、

さふしき　藏人所雜色なと見ゆ職原大全に雜色い良家子補之良家子諸大夫之子也と見えたり大草帋にい武家にいさつしきい中間よりいさがるがまやの者よりいあがり也公家にい中間をさつしきといふと見えたり今の雜色い義滿將軍の時より始りて京師の四境を警固せしむといへり室町殿五節句次第に箙の雜色等とあれい箙ノ者と同しともいふめり　○通典に今州縣官有雜職ノ者掌行鞭棰、とも見えたり、

さふたん　氷正記に雜談と見えたり、

さふに　餅に種々の菜肴を加へ煮てあつ物とし年始に祝ふを雜煮といふ畿內に又かんともいふ糞也浪合ノ記に尹良親王の御子良三王賊のために危ぶめられ津島に移りたまひし時永享八年正月元日の雜煮を奉るに

さび　萬葉略四、さびつゝをらん、心さびしくならん也、信按、さび、曾丹集、ゐりの壺さひちひさきハ(さゝらなさきハとある本ハ誤)蓮葉にたまれる露にさゝ似たるかなとある、さびハ瑠璃の壺に、星の小さく堆くあるが、青く光れるを、蓮葉の露の如くなりと云へる也、然ハさびハ光ることを云詞なるへし、後撰、忠岑朝臣云々、かの國の名ある所々繪にかゝせて、さび江といふ所にかけりける、年を經て澁だにせぬさび江にハ玉もかへりて今ぞすむへきよめる下句ハ、漢國の合浦の玉の還りたりと云、古事をよめる也、さそこれによりて思へば、さび江のさびも、水の澄光る山也、推古紀歌、たちならばくれの摩于佐比、古事記、佐比持神なと云佐比ハ、太刀の光る上より稱へたる名なるへし、記傳十七、佐比持の考に、大和の佐比川も佐比江なと云の佐比歟、篠原資重云、澁のだにせぬさび江にハ云々とよめる、江の名のさびによせて、澁だにせぬとも、玉ともすむ共云へる也と、

さひしき　寂寞を訓ハつねの事也、狹なも文選に、さびしくと訓るハ、せまる意より訓る歟、宣德皇后令、侘彦升、地狹乎四履、勢畢乎九伯とある狹をさびしくと訓り、つねに狹をせの一言にも用るも、せまさ、せまる意有也、

さびろ　俗語也、今俗にだゞつびろくといふ、坐給を吸物にして酒を進めまるらせ糲飯に大根の輪切の汁物たつくり鮪を調しける此年よりめでたかりしかハ津島の四家七黨より始て此ならハし尾州濃州勢州の俗となれりとそ、

さふら　倭名抄に鈔鑼二音與沙羅同俗云沙布羅と見えたり今の世にさハりといふ器ハさふらの轉訛なるへしといへり○白銅をさハりといふも鈔鑼ハ白銅をもて造れハ成へし音のよきものなれは鍮銅ともいへる也、

さふらひな　禁裡女房に候名あり國名あり候名ハ下臈に稱するよし見えたり、

さふらひ　侍ふを名目にいふ辭也職原抄に親王大臣以下諸家恪勤之名也と見え五位六位の侍なといへり禁中の瀧口院の下北面東宮の帶刀なと皆侍の官也といへり源氏にさふらひわらハあり童子をいふなり○戸令に侍幾人を給ふとある八年八十以上及篤疾の者に介抱人を給ふなり中世家の子といふ是也といへり○殿上をさしてさふらひといへる事源氏に見えたり侍所の義也禁秘抄にも殿上の次に下侍と出したまへり○侍所ハ東鑑に侍所、別當庭訓に侍所奉書なと見えたり○士をよむハ學人の通稱とも推一合十を士といふとも見えたり太平記に四品以下の平侍武士と見ゆ今平士なといふめり

さふらふ　侍又伺候、字をよめり萬葉集に佐守布と書てさもらふとよめれハ狹守の義なるへし神代紀狹漏を口訣に候と義をされるもこれなりされハさむらふを書て誤にハあらさるへし○日本紀に候風をかせさもらふとよめハうかゝふと同意成と知へし○今の簡牘の結語に候と書てさふらふをよめる、長明無名上、あまりさびろ也となまず、林葉さふ　禁也、萬四、ちはやふる神やかれなむうつせみのひとりさふらむ、

さふし　同上也、寂寥也、萬四、山の羽にあむらさわきゆくなれとわれハさふしゑ君にしあらねハ、續紀光仁、寶龜二年左大臣永手薨、詔曰歲時積往歷佐夫之岐事乃来之狹可益、

侍所　小侍所と云も、何れも役所の名也、此所を支配する人を侍所別當小侍所別當と云、貞十四

さぶる　齊東俗談、宿をさびとよめり、宿色宿鵲〔ツキ〕毛等也、翁さひも老宿歟、思ふに宿麥宿雪宿老の類ひも同し、更級日記、我ねんじ申あまてる御神ハ、うちにそれいしまつるなるかし云々、四月ばかりの月のあかきにいとしのびてまいりたれハ、はかせの命婦ハゑか便あれは燈籠の火のいとほのかなるに、あさましく老神さびて、さすがにいとよう物なといひ給たるか、人ともれもほえず神のあらハれ給へるさたほゆ、拾玉集　宿さびて夏も人めハかれにけりなにをけるらん庭の村草、同四、手にむすふ音羽の瀧に夏さひて涼しく成ぬ松の下風、類名

さへ　副也、萬六、橘ハ實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふけといやとこはのき、ものにこれとそれと副ていふとき、用る辭也、古今、わひはつるとき

ハ古へ侍るといへる意也されハさふらふもはべるも同語なる事知へし

さふる　萬葉集にさふる子なと見え遊行婦女をよめり然ふる義ふる反びさびに同し萬葉集に神さびを神さふるともよめり

○さへ　助辭に何さへにといふハ萬葉集に副一字添一字を塡りそへの義也よて並兼共なとの字も同しくよめりそのうへてふ言の約りにて副兼る意にもせりといへり又結句の末にさへと留るハいひ殘す意なるへしといへり○後撰集にけふそへにくれさらめやハとたもへともとよめり歌唯一首あり西偏の俗ハ今も何そへにといふといへり○文選に陂をさへと訓すさへぎる也漢書の注に遮禽獸圍陣也と見えたり○萬葉集に禁一字をよめるハ障と同し仝障の義ハらせを約むれハへとなるなり六帖に　手をさへてよし野の瀧ハせきつるも人の心をいかゝたのまん庾信か賦にいふ長河一決不可障之以手の意也○類聚雜要に唐匣を圖して面に有佐倍と見えしハふちの事なるへしされハ障の義也

さへき　佐伯と書り音也伯をへきとよむハ黃蘗をわうはくといふか如しもを蝦夷人のさハめきしより名けし事日本紀に見えたり曆錄にハさけびの義といへり○さへき山ハ安藝佐伯郡にあり

さへぎる　遮又遨をよめり支へ斷るの義也、

さへづる　新撰字鏡に囀又囮をよみ萬葉集にさひづると見え和名抄に囀をよめり障出るの義鳥にいふ辭也公冶長ハいさゝらす鳥語ハさハりて通しかたけれハいへり○敏達紀に韓語をからさへづりとよみ源氏に海人の物いふを聞をらめ事さへづりてと書り今も聞分かたき人の言ハをさへづるといふ

さへなの〻悲しきいつことをおのふ涙なるらん、

さへつ　差別、十力經卷一、刹別、希麟音義三、上案「玉篇」音初八反、案經合作「差」字、故經云、種々欲樂勝解差別、今云刹別、恐因「聲誤寫、請諸高識再詳「經意」、今案に刹ハサツと音との兩音に世にいふ也、十羅刹、又ハ夜叉羅刹の類ハ、誰もせつとのみ唱ふ、されども初八反なれハ、せつの音に遠く、サツの音に近し、サツのツを略て、サとハへ、差と同音、疑ひなし、刹別ハみち差別にして、云々、類名

さへつる　囀、賤き者のものいふハ、かしましくて、その詞もまさしからねば、鳥の聲などのかしかましきにたとへて人にもいふ也、からさへづりなどもいへり、うたゝね阿佛尼の記、松風のあら〳〵しきを頼もし人にて、是も都の方よりとにぼえて、簑笠などきて、さへづり來る女あり、小童の同し聲なるど、物語する也けり、是や柱の里人ならんと見ゆるに、只あよみに歩行寄て、是ハ何人ぞ、あな心う、御前ハ人の手をにげいで給ふか、又くち論などをし給ひたりけるにか、何故かゝる大雨にふられて、この山中へハ出給ひめるぞ、いづくよりいづくをさしてたはするぞ、あやし〳〵、さへづる、なにといふ心にか、舌を度〳〵ならして、あないとほし〳〵と、くりかへしいふぞ嬉しかりける、

さへづる　異本枕、ほと〻きすのあまたさへづるに

やとさこゆる、信云、子規にさへづるを云へるも、めづらし、

さほう　作法、後漢書七十五、東夷傳論曰、老子曰法令滋章、盜賊多有、若箕子之省簡交條而用「信義」其得「聖賢作法之原」矣、

さほす　さハ發語にてほす也、小の意にハあらず、さ就也、夫木抄五、さゝきつきすかきさほせり春ごとにあり〻すゝ殿かあわさ成らし

さほ田　早穗田蚊、壬二、よ、かた山のほきのさほたを打返し云々、

さほひめ　大同類聚方、本草地黃、今通名となる、地黃煎のこと延喜式等に見ゆ、延喜典藥式、地黃煎料、生地黃廿石、十石和泉國十石藥園、絹一疋二尺漉煎、純六人壺、杷純六條（別長一尺廣九寸）、椀一合、杷純一條長一尺廣九寸）、釜口杷純一屯半、綾地黃調布二端四丈、綿三屯、商布一段、由加杷調布三條（別長四尺二幅）、轆轤綱熟麻廿斤（墮損請受）調布潔禊五條（別六尺）、禪（チヤ）五條（別六尺）手巾一條（長五尺、燈油六升、酢煎鹽三柄、沫雜二口納、汁山加六合、搗煎陶壺十六合（受大五升已上受、絞汁即盛六口、盛樣煎陶椀一合（加盤）、麻笥三口、杓三柄、紙十六張、覆壺口料、結固壺口、木綿大一斤、薪二千四百斤、炭廿石、官人三人、侍醫四人（已上官人

めり侏儒鴆舌の意なり萬葉集に言さへぐとも、韓ごさへぐとも見えたるこれなり

○さほ　佐保ハ大和の地名日本紀に狹穗と書る正義なるにや、○さほ風ハはつせ風の類なり、○さほぢハ泊瀨路の類なり、○さほ殿ハ淡海公の家なり、○佐保左大臣ハ長屋王也といへり、○佐保姫を春のことくし龍田姫を秋とするハ奈良の京の時の事也、佐保ハ奈良の東にて陽氣を受る始なり、龍田ハ楓の紅葉より秋景他の及ばざる所なり、姫ハ功化を比していへり

さほす　ぬれてさほすとよめり、小乾の義なるへし

○さま　様の字をよめり、今ハ様子といへり、何さまいかさまなとつけてもいへり、○有様を略してさまといふハ、様體の義也、○神代紀に方の字をよむも同し方便の意、○人を尊稱するに母ら様といふハ、康富記に禁裏様と見え、園大暦に公方様と見えたり、義政將軍の時制を改め判を押す事にさきに武家様を用ゐしに是より公方様を用ふとあるに據たる詞なるへし、されど清慈のさかえし時に六波羅様といひ、事平家物語に見えたり、○物のすき間をいふハ狹間也、新猿樂記に、大庭に對していふ是なり、○城にいふハ矢間と書り矢をさゝよふ事前に見えたり、射孔笮眼なと見えたりやさまともいへり、○軍陣にさまくゞりといふ詞ハ落武者の體をいふなるへし、○長崎にて小兒を稱す

さまく　俗語也猥褻の意にいへり、

さましたけ　龜卜にいへり、延喜式に兆竹を訓たり、

さまた　小股の義にやさまたぐるなといへり、相撲の手にいふハ、西土より來

る大さまたといふ者に始る、

さまたぐ　妨の字をよめり、小跨來の意成へしげる、反ぐ也、拾遺集に道さまたげとよめり、

さまだる　様亂るゝ義なるへし、あひさまだる泣さまだるなど物に見えたり

さまで　源氏にみゆ、今の口語に同しさハあか反成へし、

さまよふ　日本紀に吟の字進退の字なゝをよめり、狹迷の義にや、又様によふにや吟をにようふをもよめり、萬葉集にうぐひすのこゑのさまよひとも見えたり、新撰字鏡に啀をよめり

さまをかふ　稱名院吉野詣記に見ゆ、入道せられたる事にいへれハ今も同し、

○さみ　土佛伊勢參詣記に二見の浦に佐美明神として古き神ましまします、大神宮御垂跡已前の神なりと申傳へ侍るよ、書るハ今の御鹽殿といふ別也、倭姫世記に所謂佐美都比女也

さみし　さびしに同し、又萬葉集にさみしきをさまみしといへるハ、語をのへたる也といへり、

さみす　人をさみするといふ、狹の義也、文選に見えたり、又褊をよめるも狹也と注せるによれり、

さみせん　三絃をいふ、三線の義也、三味線にハあらす、舊唐書に三絃琴の名あり、楊升菴集に、今之三絃始于元、時に、も見ゆ、箏のことの斗爲巾の三絃より出たる物ならし、○三絃の胴を胃ふに猫の皮を用ゐるハ猫よく人の膝（ヒザ）に據る故なりといへりもと永祿の比琉球國よりわたりしを慶長の比よ

臨時增減）史生二人、潔衣各絁一疋綿二屯、藥生十人、掃與丁二人、各調布二丈七尺（衣二丈袴七尺）右件雜物九月一日申省請受、但地黃有多少所須料隨亦增減、其造煎之間限十六日、給酒食云云、凡山城國地二町在葛野郡十三條水谷下里四至（東限岑山南限堀越山谷口西限岑北限幸河合）永爲殖供御地黃地、諸國進年料雜藥、尾張國千地黃六斗四升云云、按るに古へ諸國藥園ありて、地黃及び藥草を作れるを證すべし、

さま　來さま行さまなどいへるハ、俗に行がけ來がけといふに同しく、その便りのついでといふが如し、樣と同しからず、がてといふ詞に似たる意有り、花見がてらハ、花見さまといふに同し、拾玉集

神な月木の下がくもなき空なれ有明さまになが

め入ぬる、類名

さま　樣、上のさまといふ意異にして、これその形狀を、ありさまと訓の意也、樣式などいふも、この事也、さまかくさまなどの類をいふ、唐の文にもこの意有り、白氏文集卅一、楊柳枝詞、雀蘇家小女舊知名、楊柳風前別有情、剝條口作銀環樣、卷葉吹爲玉笛聲、類名、○さま　樣源氏論義歟、黑ひもかけす御所樣にとゞまりて、源具顯作弦字弘安三年也、太平記主上笠置御沒落、其方樣カトオホエタル男女、オマタニ立ナラビテ、同

七先帝船上臨幸、上樣ニハ、イマダシロシメサレ候ハヌヲ、同十八、金崎城落、上樣ノ事ハ、（義顯ノ言ニ、宮ヲサシテイフ同卅五、北野通夜物語、ナド關東樣ヘハ、御ナゲキサフラハスラン、著聞十五、つふやけるが、御所樣にもれきこえにけり、同十七、御所樣にも、其程いあやしき事なかりけり、中務內侍日記、後宇多弘安三年）中將ひさしくたいりさまへも參らず、同、御所樣の御ふきも、ゆかしくかなしきに、今昔十六、女倉代ヲ開テ、父サマニ語テ云、同、曳張テ上樣ヘ將行テハ、省ニ將入ス、（ウヘ樣トヨミテ公儀ト云、心カ增鏡新島もり、ひかしさまにも、その心つかひすべかめり、同山のしみづ、西園寺さまにぞ、一かたならず、たばしむすばれ、さまざましう聞給ひける、玉縫一、つさのさしの秋さまより、林葉さまこそなる罪　小柳七、俗にかくべつなる罪といふこゝにて、たゞ重き罪なるよし也、

さまたげ　妨、紀貫之集、思ふこゝありてこそゆけ春かすみ道さまたけにたちわたるかな

さまねみ　無間也、さハ發語ねとなど通、萬十七、見ぬひさまねみ、同一、佐麻彌（禰歟）之、今本彌を稱に誤、楢

さまよひ　吟也、日神代、愁吟（サマヨヒテ）在海濱、萬二、春とりのさまよひぬれハ、同五、かくみゐてうれひさまよひ、漁父辭、行吟于澤畔、○徒然草上、稽康も山澤にあそびて、魚鳥を見れば、心

さんかう　遊生八牋に生香と見えたり、○本草に棧香入レ水半沉沉香入レ水沈、とみゆ、

さんき　俗に衣服を短くする事にいへり、三條家の裝束鈔に束帶の下に用る繞着と見えたり、長をひとしき事也といへるは此繞着の音を謬りたるなるへし

ざんぎり　今東都の花子（コッジキ）ハ皆此風俗也、殘截の義成へし、列子に南國之人祝髮而裸注に孔安國注、尙書云、祝者斷截其髮也、とみゆされは祝髮ハ髮をきる事也、今剃髮の事ともするハ非也といへり、

さんぐう　參宮也、押出し神宮と申ハ伊勢兩宮なるかゆゑに、此稱あり他國よりまゐるを伊勢まゐりと唱ふるも意同し、海東諸國記に東海道の事を記し有、天照大神ノ祠、國無貴賤遠近皆來謁と見えたりひとの國まで聞えていと尊し又たうしやめけまゐりの下にみゆ、

さんげ　懺悔の字梵書に見ゆ、懺ハ陳露先惡、辭悔ハ改往修來、語と注せり、一說にハ懺ニ具云懺摩此云悔過、若云懺悔者梵漢並稱也ともいへり、○最勝王經講にいふ、散華也、散花ノ机侍中群要に見ゆ、

さんこう　參候の字唐書に見えたり、

さんこもづまる　俗語也、事物紀原に後人以呼萬歲爲山呼者其事蓋起於漢武ノ時、と見えたり、朗詠集に　萬代と三笠の山そよハふなる　天の下こそたのしかるらし

さんざ〳〵　庭訓往來に散々にと書り、

さむし　寒涼をいふ、覺る意也、

たのしふさいへり、人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心なくさむこゝろいはあらし、

さみ　色葉字類、褊サミス謗也、信按、褊ハ玉篇に狹也、衣の小なる也、字彙に褊小隘陋、また褊急也、詩魏風に維是褊心などある義にて、人を賤しめ、狹く小き意に謗る意なるべし、されば狹みすにて、重みす好みすなどの語格也、

さみしき　文選に遑隙をちかくさひしきこと訓り、寂寞の意にいあらず、せまきをいふ、さ衣、狹筵のさと同し、文選、封禪文、司馬長卿、協氣橫流、武節奈逝、遑隙、五臣本作狹、遊原、遑闊詠沐、注、遑狹近也、遑闊遠也、

さみする　さみするはさげすむといふに同し、我ハ是で、人の非をないがちに思ひて、さういうちつけにいいはで、心にあらずと思ふを云也、文選の訓に褊狹をさあてしも、我ハ廣くして人を狹とするより意を得て訓たるもの也、文選第二、西京賦張平子、慘則渉於獄、勞則褊於惠、能違之者寡矣、注李善曰、廣雅曰褊狹也、李周輸曰褊小也、同上、爾乃覽秦制跨周法、狹百堵之側陋、增九筵之迫脅、類名

さみだれ　本草梅雨水、棠花月の宴、五月さみだれにも哀にて、をほさけくらしたごのもとにたゝらめ有さまにて云々、平家六、ころは五月廿日あまり、またよの事なるに、五月雨さへかきくれ

さんしゆ　三代實錄に散手さみゆ倭名鈔道調曲に散手破陣樂俗云散手と見えたり、

さむしろ　延喜式に狹席と書り廣席長席にむかへていへり歌におほく發語の辭にさといへるなり

さんすゐ　俗に寒酸なる摸樣をいふ山水の音成へし、

ざんそう　樵談治要に讒奏と見ゆ、

さんたいえん　三臺鹽と書り疏勒鹽曲之一隋唐以備燕樂者といへり、

さんぢやう　散杖と書り花盤散杖など御齋會にあり、

さんちれんまたかすか　聖老楞佐島と書り利未亞の內陸國の名也、

さんづ　馬にいふ三途の義骨相の三行なるをもて也相馬經に三封と見えたり盛衰記にもさうづとも見ゆ、

さんとめ　聖多默を譯す利未亞の內陸國の名也さんとめ島などいふハ此國より出る也又此島に在る蒐ハ核なしとそ此國の鮫珠を上好とす暹羅東埔寨（カンボヂヤ）より來る是也、

さんない　俗ノ語也無慚の意今むさんといふに同しきにや又无愧の意にや、

さんぬる　去をよめりさりぬる也書證に去ル幾日去ル幾月と書ハ通鑑北史などに見えたり、

さんばう　三方と稱する器ハ古へにいふ公卿也山槐記に見ゆ四方なといへる名目も三方より出たる成へし四方の盤ハ天子親王大臣に用うる也

てよろづ物いぶせかりける　折ふし、歌林四季物語、五月雨のふりくらしたるハやうかはりて、花史左編、江南梅熟之時、輒有細雨、連日不絕、衣物皆衰、謂之梅雨、

侍法師　門跡に奉公する者也、これハ髮をそらず常の侍なり、僧にハあらず、古ハ僧也、法橋法眼になる也、貞四

さめ〳〵　今昔廿九、サメ〳〵ト哭ク、隆信集、沓冠歌、さめ〳〵とよるひるもなけくふる涙けふのくれはためれやまさらん、山家上、鶯の春さめ〳〵となきゐたる竹の雫やなからむ、續世繼花のあるし、さめ〳〵となき給ひて、サメ〳〵はシメ〳〵ノ轉カ、某サマヲ某シマトイフ例也、林葉

さもらひ　伺候也、萬二、東のたきのみかどにさもらへと、同七、大御舟はてゝさもらふ、

散米　產の時散米の事、將軍家にハ沙汰あり、堂上にも有之し事也、散米する時雨說有り、產婦臨產の時と、小兒產湯の時する事有り、元永二年五月廿八日、皇子誕生（崇德院）同廿九日御浴殿云云、典侍藤能子散米、又治承二年十二月十二日中宮御產氣、此間內外周章（アハテ）散米當（ニ）障子聲頻（ニ）云々、（是ハ御臨產の時也）未二點皇子降誕、散米する事ハ產所にて產婦をはしめ云云、散米して氣を發する爲也、貞一下

又神前に用うるハ人器に分てり◎東鑑に時賴改定五方ノ引付ノ衆爲六方、後又縮之爲三方、といふ事見ゆ山田三方といふ事あり伊勢山田を三分したる事昔ありしにや須原方ノ神人坂方ノ神人岩淵方ノ神人と記せし事明德の申文に見えたりとそ山家三方衆ハ三州也作手駄峰長篠をいふ◎三寶ハ佛法僧也三寶乃奴止仕奉流天皇ハ聖武紀に見ゆ吳唐拾遺錄に梁ノ武帝事ヲ佛捨身爲佛ノ奴といへり智度論に佛ヲ如醫王法ノ如良藥僧ヲ如瞻病ノ人と見えたり、

さんばそう　三番叟と書り神功皇后の故事に本つきそハ翁の傳といふ事あり一說に採桑老の假面也ともいへり、

さんばね　三拜ハ天竺の法也よて御燈にハ三度御拜有り佛事に屬するをもて也叙位にも於寺拜僧家者撤笏擧手三拜と西宮記に見えたり俗に敬拜の意にいふも佛者に出たる詞也、

さんふらんしすこ　切支丹ノ類族の名也、

さんぼう　三議一統に三峰膳ハ中に蓬萊右に方丈左に瀛洲三の島を羹（カン）にて作り饒子に盛也さみゆ◎春盤を蓬萊飾と稱するも此より出たるにや其かざれるもの山家質素の風俗よりや始りけん元日にいもしあらめを用うる事ハ延喜式に見え土佐日記にもありて久しき風俗なりけらしされど堂上にハのし鰒昆布二種を硯蓋に盛て三方に載す年始客對には主人の前に備へ主人より客に進むる也、

さんまい　散米と書りその事うちまきの下に見ゆ○俗に墓所をいふ佛家の三昧より出たり口語に何さんまいといふも亦同し出羽の方言に其儘たけ

參賀　參上と云に同し、祝儀に限らず。昔の詞也、貞十五

さむき　寒也、萬八、秋風のさむきこの比、同十六、ぬるくハ出すさむ水の、同九、かりかねもさむくきなきめ、

ざんぎ　慙愧、觀無量壽經三、如此愚人偸僧祇物、盜現前僧物、不淨說法無有慙愧、科注記云、涅槃十九云、慚者自不作罪、愧者不教他作、慚者內自羞恥、愧者發露向人、慚者羞天、愧者羞人、是名慙愧、俱舍論(四根品頌疏)於諸功德及有德者無敬無崇、無所忌難、無所隨屬、說名無慚、即是恭敬、所敵對法爲諸善士所訶厭法、說名爲罪、於此罪中不見怖畏、說名無愧、乃至有餘師說於所造罪自覩無恥、名曰無慚覩他無恥說名無愧、已上光記引正理云、有說獨處造罪無恥、名曰無慚、若處衆中造罪無愧、說爲無愧、○慙愧選擇、直談抄九、無慙者無恥、自作惡業心也、無愧者無恥他、又恥天爲慙、恥人云愧、

さんざふらふ　此詞ハ左候也、さやうにて候と云詞也、貞十五

さんぼうせん　三峰尖とも三峰嶂とも云ハんの名なり、葛の粉にて作り五色に色をそめて、三つの山の形を作りてより、たれみその汁をかけ

ぬきくるみを前の方に入て出す也、山の色ハ三色つゝ一ツかわらけにもる也、此色に兩說あり、一說にハ須彌山の色にかたどり、黃(北冬)青(南夏)白(東春)赤(西秋)とする也、歌に北ハ黃に南ハ青く東白西くれなゐにそめいろの山、蘇命路ウメイロノ山とハ須彌山の事也、又一說にハ五行の色を用る也、青(木色東春)赤(火色南夏)黃(土色中央土用)白(金色西秋)黑(水色北冬)四季によりてもりやう喰樣替る也、宗五大雙紙に委く見えたり、三議一統にもみえたり、盛やう喰やう等、宗五とハ違たり、貞六

さんまい　三昧、楊升菴外集十三、三昧出釋氏書、乃梵語也、此云調正直、又云、正定、亦云正受、圭峰疏云、不受諸受名爲正受、又遠法師云、夫稱三昧者何、專思寂想之謂也、思專則志一不分、想寂則氣虛、神明氣虛、則智悟、其照神朗、則無幽不徹、

さめく　枕、鳥のあつまりて、さめきたるにくし、

さめる　雨ふれハ色さりやすき本さうらうすき心も我れもハなくに、

さも　さもをるき、さも似たりの類ひ、さながらもといふに同じ、六帖、わかためにつらき心ハ大隅の氣色の森のさもをるきかな、

さも　萬葉七、常者曾ザモにはめもの花此月の

あゆざめ　胡沙魚也とハへり　○倭名鈔に散豆帶あり壺井氏さめのたぐひとよめり飯珠をいふにや　○戀さめ青さめなどいふハ色のあせるをさめるといふに同し醒る意成へし事さめるなども見えたり興さめるも同し　○柚人の材を伐て方木にするをさめするといへり　○音便にて雨をよめり春さめ氷さめ村さめの類なり又萬葉集に春之雨村之雨をよめりあ反さ也

さめうし　枕草紙に牛ハさめと見えたり、

さめうま　環眼馬と倭名抄に見ゆ小眼の義にや　○ひばりさめみづさめかハらけさめきらわしげさめつきげさめかたさめ等あり　臨時祭式に白眼鴝毛馬と見えたるもさめつきげとよむへし　詩朱注に二月白曰魚似、魚目也爾雅注に魚今謂之環眼馬と見ゆ、

さめがゐ　近江坂田郡にあり古事記に醒居、清水と見え日本紀に居醒泉と見えて日本武尊の故事也水中に石あり日本武尊の腰かけ石といふさるを撰集抄に仲算大德淨藏貴所の故事といへるハ謬傳なり

さめ〳〵　然めくの義也　○新撰字鏡に湯又濕をよめり、

さめ〳〵　更級日記に見ゆ神代直指抄にさめ〳〵と泣といふハ啼澤女、命より出たりといへりされど俗に雨やさめと泣ともいへばさめハ小雨の義なるにや砂石集にさめほろとなき〳〵するとも見えたり

さめはだ　鮫皮の義人の肌膚の麁々しきを沙といふも同し、倭名抄にさめのかハとよみて刀劒を飾るをいへり、

さめのり　閩中海錯に龍皮苔紫黑色形似鮫皮ぶみゆ、

さも　然もの義也源氏にさもやとも見えたりさもこそハも意同し　○大雙

紙にもらひある人を見ゆ今もあらんとするを是也

○そもあらはあれ　遮莫又縦他任他などの意なりかゝる本意なきさまなるともなんかたなけれはよしや此うくつゝ一任する意也倭林玉露に詩家用遮莫字蓋今俗語所謂儘教者是也と見えたりまゝといふ意なりまかす及まゝの下を倩考ふべし伊勢物語に　にもふにこのふる事をまけにかるあをにしかくいつもあらんあれ

そもさうず　然もあらん也今もさもさうずるぞといふ反也

そもしん　俗に食物をと言ふなどの沙門らしきの義也さうくり

そもにたり　彷彿たよりの義也髣髴も同し彷彿とも見えたり

そもはた　菅家高業にもはたにたる哉と予が然も非の義成へし

○そもや　源氏にもありつらんなどいふ事か反也金葉集に　なきかけに　かけなきたなもある物をそやつかの間にもれ来る哭、季礼か故事をよめり

そものつゝ　になるへくるゝ左様の略也そもうくり韓也筆のそや　嘸也又かそもうくり笠の義也草木の質にいふ狭也狭屋の義也○万のそやか　神武の御歌にやそ感てあるは皆蠶を繭多に感也そはそもを通す○高業集には酒をよめりそのの義也古今集のそもにも見しかとそもうるはそや　かの義也そもうくりは紗綾の義紗は言也綾はあやの略也そもうくり　綺紬をもそもうくりは紗綾の義也○そもうくり　物にいふ利名抄に剣鞘をよめり又主をもうくりと新六帖にそもの家をつけ也よそもうくりは紗綾の音質は綾機也　飛するも紗綾の音也此類にもあるへし

そもこそ　そこそそこそいふ詞に　もをそへ入たる也伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

過かゝれまでもしきひかも

そもあらはあれ　儘也、遮莫、西土の詩に儘他を訓り、人にこゝまかする意よりしてかゝるめる也、明詩にも儘他已誰山陰興、半夜還須載酒来などを見えしかとその訓がなく、藤原高光集　そもあらはあれ人のきゝうんこともらす口のかるものなるもの思ふ身は、小大君集　ひたふるにまなにかなく〳〵そもあらはあれいきてかひなきものの思ふなかに、類名

そもこそ　そこそそこそいふ詞に、もをそへ入たる也、伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

○そもや　源氏にもありつらんなどいふ事か反也金葉集に　なきかけに　かけなきたなもある物をそやつかの間にもれ来る哭、季礼か故事をよめり

そものつゝ　になるへくるゝ左様の略也そもうくり韓也筆のそや　嘸也又かそもうくり笠の義也草木の質にいふ狭也狭屋の義也○万のそやか　神武の御歌にやそ感てあるは皆蠶を繭多に感也そはそもを通す○高業集には酒をよめりそのの義也古今集のそもにも見しかとそもうるはそや　かの義也そもうくりは紗綾の義紗は言也綾はあやの略也そもうくり　綺紬をもそもうくりは紗綾の義也○そもうくり　物にいふ利名抄に剣鞘をよめり又主をもうくりと新六帖にそもの家をつけ也よそもうくりは紗綾の音質は綾機也　飛するも紗綾の音也此類にもあるへし

そもこそ　そこそそこそいふ詞に、もをそへ入たる也、伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

過かゝれまでもしきひかも

そもあらはあれ　儘也、遮莫、西土の詩に儘他を訓り、人にこゝまかする意よりしてかゝるめる也、明詩にも儘他已誰山陰興、半夜還須載酒来などを見えしかとその訓がなく、藤原高光集　そもあらはあれ人のきゝうんこともらす口のかるものなるもの思ふ身は、小大君集　ひたふるにまなにかなく〳〵そもあらはあれいきてかひなきものの思ふなかに、類名

そもこそ　そこそそこそいふ詞に、もをそへ入たる也、伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

そもさうず　然もあらん也今もさもさうずるぞといふ反也、

そもしん　俗に食物をと言ふなどの沙門らしきの義也さうくり、

そもにたり　彷彿たよりの義也髣髴も同し彷彿とも見えたり

そもはた　菅家高業にもはたにたる哉と予が然も非の義成へし

○そもや　源氏にもありつらんなどいふ事か反也金葉集に　なきかけに　かけなきたなもある物をそやつかの間にもれ来る哭、季礼か故事をよめり

そものつゝ　になるへくるゝ左様の略也そもうくり韓也筆のそや　嘸也又かそもうくり笠の義也草木の質にいふ狭也狭屋の義也○万のそやか　神武の御歌にやそ感てあるは皆蠶を繭多に感也そはそもを通す○高業集には酒をよめりそのの義也古今集のそもにも見しかとそもうるはそや　かの義也そもうくりは紗綾の義紗は言也綾はあやの略也そもうくり　綺紬をもそもうくりは紗綾の義也○そもうくり　物にいふ利名抄に剣鞘をよめり又主をもうくりと新六帖にそもの家をつけ也よそもうくりは紗綾の音質は綾機也　飛するも紗綾の音也此類にもあるへし

そもこそ　そこそそこそいふ詞に、もをそへ入たる也、伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

過かゝれまでもしきひかも

そもあらはあれ　儘也、遮莫、西土の詩に儘他を訓り、人にこゝまかする意よりしてかゝるめる也、明詩にも儘他已誰山陰興、半夜還須載酒来などを見えしかとその訓がなく、藤原高光集　そもあらはあれ人のきゝうんこともらす口のかるものなるもの思ふ身は、小大君集　ひたふるにまなにかなく〳〵そもあらはあれいきてかひなきものの思ふなかに、類名

そもこそ　そこそそこそいふ詞に、もをそへ入たる也、伊勢集　そもこそあひ見そこのかたからめやもれすとたにいふ人のなき源重之集　そもこそ人にたにそれる我ならめのかゝ子にさくたれそるかな

そもし　信状、俗に名也、又物を欲しがるやうのことをもいふ也そもしいふなと云、此言の本は、然も惜しけに又然も欲しけにこそ云、惜を省きそも欲を省きそも共にヂモシケと云へる也、故同言のこと聞ゆれ共、元は別也、景清の謡に、そもふしやつ、そもしやたて意は吾一人を大勢にて取囲むやつ、そもも欲しけ也也、おけるの詞なるへし

そもらひ　高業に、はひもりの雑侍候キラく佐毋良比不得者、同じく風をけは浪かたへんも何候キラニこそ云、

そもや　宝也、古下、たきにかゝるねつしてあるものまでつこともそもやく高叫、人こと

高集集に小夜と書れたるを通ふ眞名の義成ンとなりたる
本の類是なり或ハ俗語なるべし○佐用ハ播磨の地名雄にもあり太
平記に見ゆ

さよふけぬ　神樂をうたふ人の夜ふけるまでをうたひ
くりかへすを聞ていふ人に對せるなり　さよふけぬ
ならやまの天の岩戸も明ぬべしさよふけぬ人のうたふ神樂に

さよのなかやま　狹夜の中山と書つゞけたるのみにて聞き過なれはなり
れハ長山の說ハいかゝ一說に遠江、國佐野郡なれハそれの中山ともいふなり
たるいふ成ンとやうなるさよ意同じさよなかといふより中山をもいふなり
さよのつま　和名鈔に貫布たゝり狹韻の義也とみハ升、字にて八十
縷なるべしといふり糸の數に今もいふなるは是也今此布をさらさらと
は音の轉なる也江家次第類聚雜要に細美と書せり○因服に此布を用
る事ハ類聚國史に見えたり○抄に貫布宜作晒布、手を見ゆ

さらし　日本紀和名鈔に縠をよめり式に高縠放縠片縠銚形、片縠手洗
縠大高縠小高縠粥縠壯縠等あり常に皿をよめり皿ハ縠手の通稱也今
いふものハ碟也あらかの略語成ンし淺碟なと見えたり其にしき手を稱す
るハ錦波碟なと見えたりされハ碟、字集韻に沿皮也と見え正字通に俗
字舊音舌沿皮說とのみ見えたり○倭名鈔に蠶子をうしぬのまゆとよ
めり今、俗はまゆと並稱する沙羅の形碟の如し今、俗はまゆと並稱する
に共に紙器なるを磁器に借て名ける成ンし出ハ陶器の鉢沙羅よりいふ成ンし
磁器にて平皿を鉢のことくにいふ成ンし更なり○皿ハ俗語にて平皿を鳥雀
の俗ハ皿を鉢雀といふ成ンし

さらけ　淺鉢也、日置宗、さらけにかめるにはなをそ、

式、厘〔サラケ〕、

さらく〳〵　更々也、萬十二、さゝらく〳〵そこりこゝろも、詞花和泉式部、竹の葉にあられふる
也さら〳〵にひとりのみくきこゝろそね、萬十四、玉川にさらす手つくりさら〳〵に、古今、ふみ
分てさらにとゞめよ、

さらす　不去也、毎也、萬十、ゆふさらすかはつ鳴
也みわ川のさゝ瀨の音もかはらしもの、

さらす　肆、字彙、既刑陳其尸、曰肆、竹取、
まつこゝしく外にさらすへき思ひはへるをいふ、

さらてつくり　晒調布也、萬十四、玉川にさ
らてつくりさら〳〵になにそこの子のこゝだかなしき、

さらせゝの　晒、萬十、春過て夏きにけらし白
たへのそてほしたりあめの香山、同七、大伴のみつの
濱邊を打さらしよせくるなみのしくしくそおもふ、

さらでだに　拾玉集、さらでだにおもひなしき
花の色にそめし心をたれかしつ、

さらぬわ　さらず、えさらぬわかこゝろなれば不能遊
の意也、古今集、世の中にさらぬ別れのなくもが
なと千代もといのる人の子のため、續後撰集雜、
なき人のつひにいたらぬ別路をたれためなれば世さ
誰かいひけん、源氏物語、なに事にも故有こゝのふ
し〳〵にはおまへのほらも給ふ、或時にはなほ
ゑのこゝろすこし、やがてさらぬ時も給ひなど、あ
ら通ふ新の義成ンし今もあらにする事をさらぬ別
去離あらたまる時は平聲なれとも時
あるに通ふ新の義成ンし今もあらにする事をさらぬ別
去離あらたまる時は平聲なれとも訓ハ一邊に餘せり又念の意也改も
更なりと注す○佐良の嶽ハ加賀にあり

さらかに　靈異記に生なよめり、

さらがくり　源氏にみゆ更返る也、

さらけ　本朝式に厘、字をよめり貞觀儀式に飾厘若干口とも見ゆ日本
紀に淺鉢と書る是その義なり厘、字ハ字書に見えず新撰字鏡に恢をな
けとよめるも同しきにや恢の字も詞書に見えず○式に陶、厘酢〔サラケス〕と見えたり
規模の如く土もて造るをいふり○式に大厘小厘山厘大山厘あり又祭壺
厘白盤厘あり厘ハ鉢の義にや通ふ心得ず共に俟学なるべし○俗にさらけ
たるをいふハさらく出るの轉語也○大和葛上郡の村名に蛇穴をさらけと
よび放あるにや

さらさ　常に紗羅紗と書り繼國の名正にさらさといふ阿蘭陀の商人
行て交易ずる國より出る花布をいふ遥羅染ともいふり又金さらさあり
○櫻桃などに名くる花の紅白相雜れるが花布に似たる也、

さら〳〵　源氏にさら〳〵となると見えたり絲縠の意也をふるも
同し○さら〳〵にとよめるハ更に更に重ねいふ也、

さらしな　信濃に更級郡あり更ハ眞ノ義級ハしなの木をいふ成ンし此國
の紙の貢進式に見えず諸郡に出す中に更級郡ハ他の島の產深白及ふ
ものなしといふり○楠正儀が足利義詮を戰ひしさらしな山ハ男山にあり、

さらす　曝、字鏡、さらすなとよめり布なとにいふされ今ハ布なとにいふ

さらひ　和名抄に樫をよめりさらくとたゝきにいふなり品字箋に犯をさらひと見えたり新撰字鏡に嘔をさらくとよめるも同し○刑人をさらすといふ暴露する義也史記に肆ヲ尸ト見えたり○さらしやう漂工を見ゆ口語にさらしかす漂布也

さらば　不然者の義にいくらでも然也

さらためる　俗語也更に改めるの義也

さらつく　西土の諺に沙ところの砒砂なとみゆ又糂漉をよめり

さらてだに　さあらぬだに也さらぬり

さらなん　ならばさらなん做ふさあらなんの義にもさらなん負せさあらなんの義願ふ詞にいくりさあ反也

さらなり　枕草紙に何にさら也と多く書るは再び改めていふにからさるの義なれは更也の訓也

さらぬ　さあらぬの略不然在の義也さらぬかにさらぬだになどいふ是なり○さらぬ別れは不、逝の意也さいくり竹取物語にさらぬかくれんと見えたり

さらば　然らんの義にてさあらばいくりと人に別れんとするときにいふ古の義也後撰集に　さらばよ別れし時にいはまやいふ我も泪にだにとゞまらぬなまし

さらはふ　源氏に見ゆ荘子の蹶然をよめり蹶行扁旬ノ義なるへし後新の歌に山がにもさらぼくる犬穢をよめり徒然草に犬の事にさらはふとあり

さらひ　和名砂に樫をよめりさらくとたゝきにいふなり品字箋に犯をさらひと見えたり新撰字鏡に嘔をさらくとよめるも同し○刑人をさらすといふ暴露する義也史記に肆ヲ尸ト見えたり○さらしやう漂工を見ゆ口語にさらしかす漂布也

さらば　不然者の義にいくらでも然也

さらためる　俗語也更に改めるの義也

さらつく　西土の諺に沙ところの砒砂なとみゆ又糂漉をよめり

さらてだに　さあらぬだに也さらぬり

さらなん　ならばさらなん做ふさあらなんの義にもさらなん負せさあらなんの義願ふ詞にいくりさあ反也

さらなり　枕草紙に何にさら也と多く書るは再び改めていふにからさるの義なれは更也の訓也

さらぬ　さあらぬの略不然在の義也さらぬかにさらぬだになどいふ是なり○さらぬ別れは不、逝の意也さいくり竹取物語にさらぬかくれんと見えたり

さらば　然らんの義にてさあらばいくりと人に別れんとするときにいふ古の義也後撰集に　さらばよ別れし時にいはまやいふ我も泪にだにとゞまらぬなまし

さらはふ　源氏に見ゆ荘子の蹶然をよめり蹶行扁旬ノ義なるへし後新の歌に山がにもさらぼくる犬穢をよめり徒然草に犬の事にさらはふとあり

俊細のさらひする室の八島をよめるも是也と顕昭もさらひ掃除也といくり木把をよめり新撰字鏡に校をよめり

さらまし　さらんと相同しまあ反也覚さらまし慶あらましも約めたる也

さらん　萬葉集に物不ン令有と書たるのもあらんとよめりまあ反也又不顕、顕也不多、多也の類なるべしや上に不、字を蒙らせたるは甚き餅になる也粢に餈、餅になる故也さいくり

○さり　然り也まか反也さりけれはなさいくり○うつほ物語にはなりさいくるは骨令利也○備中山野の人元、目かたをさりと称す此條に四細をかけて魚臨菜蔬を売て荷ひ市に鬻く者をさるふりと呼り

さりげなく　然り氣なくの義也

さりけん　さらさりけんは不、知有けん也あるさりけんは不、他有けん也まあ反也是をのこいくりなさりけんやありけんとれやありけんともよめり疑のやり

さりける　常にいふ上の義に同し花にさりける花にさありける也まあ反也と貫之集にもおほさりけるとも見え古今集に馬にも有ける人帖に馬にさりけると見えたり

さりし　過去し也し助語也

さりおきて　離書を世に去状をいふ又さきの状をいふ○藤為家越部庄を嫡子為氏に許與し又少子為相を愛し為氏をして為相に譲與しむる其證文を去状といくり其親筆今冷泉家に落在す

猿樂の義なり又江水第に散更ハ猿樂也と皆り

さるがき　駿州の名也勢州に猿のほうつき江戸さるのきといふ花なく

宮のもの也

さるかく　東艦に猿樂を見ゆ猿女の故事より起れりといへり猿女ハ神代紀にいへし見えたり本朝文粹已上帝辨散樂御製に宜學ハ猿之寺進とのたまくるハ猿樂の名によりて戲をうけさせたまくる也樂記にも俳優侏儒狄鞮子女不知父子と見え鄭注に狄鞮謂倒語也言雜若如獼猴也戲亂男女夢弄也といへり一說に散樂の訛音也ともいへり散樂ハ周禮より見えて鄭注に野人爲樂之善者若今戲門倡といへり散樂なるがくさなハ駿河をするがよむに同じく秦廣が詠雜同異抄にも見えたりさそ○今四座の猿樂といふ內今春ハ秦河勝の子氏安其子にて春日宮に仕ふ弟滿太郎ハ江州山王の申樂日吉太夫の一流也觀世貰生ハ兄弟にて伊賀服部氏也觀世に結ぶ崎といふも伊賀の在名也坂戶も大和の地名也金剛も金剛房といひし上野國小畑の一族也今類節用にハ坂戶なくんせよ外結崎をこんがう外山をこんばうとよめり○本樂ハ衣冠束帶也猿樂ハ烏帽子直垂也禁裡にハ本樂を用ゐ武家にハ猿樂を祝例とす細川人道常久ハ定められし也といへり○體源抄に猿ハ冠を恒例とす

さるがく　猿樂是也と見えたり○三代實錄に散樂陵轢と見えたり○最吉慶號猿樂と見えたり○明寺殿百首にもさるがく大雙紙にあふなるがくといふ詞見えたり○

猿若といふも同意なるべし諱身なる譯すべし

さるかた　然ある方といふ義にや

さるき　厩に馬をつなぐ木をよく猿木の義也猿を馬の所爲にするハ郭璞が說によるそ又猿の異名を馬留といへりされば馬に猿が乘ハ馬多く繫るといふ心ならん河海ニ雪ハよく馬をなやますものにて生猿を畏るゝとし物語多き事なれハ此故なるにや馬經にも厩に毋猴をかくハ馬の疫癘を除くとし見えたり又宋朝に馬麾帥あり其形猴面足に鶴爪猿を蹈み両手に劒を執そを是ハ陰陽家厩鎭の神也

さるこつわ　猿骾の義也人を略賤する者のさるこつわなどいふ事あり物いはんとて舌ある〻といへり唐書にハ木丸なりともいへり水滸傳に口裏都是些〻麻核桃と見えたり

さるこ　今昔物語に猿籠を書り身心養生記にハ持籠なるべしといへりされど宇治物語にハ旅〻籠と見えたり

さるさハ　猿澤ハ菖蒲池ハ大和奈良にあり然ども呼り永久記に見ゆ

さかさま　伊勢物語にみやこが反なればかさまにて然樣なればかさまといふに同じ

さるだ　神鳳抄慶會郡に猿田といふ所見えたり今濟田といふ里是也猿田彦神の由緒ある地成べし

さるのこしかけ　猿腰掛といふ酉陽雜俎に胡孫眼と見えたり胡孫ハ猿也

さるのみそびき　猿の三叫也詩に三聲猿といへるハ猿の物かなしきものゝたとへ歟猿飼行ゝ戻なるものゝたとへる也躬恒集猿の歌に心あらハみたびさけぶも鳴聲を物思ふ人にかきらなん

に、內藏、常磐長尾　米糠袋皆散樂今人大咲ことなれり、古の猿樂ハ人に笑ハるゝ事を其藝とする也、今の狂言ハ古の猿樂の本體なり、今の能といふ物ハ、既に鎌倉の末の代比より始る歟、東山殿の比より頻盛になりて、古の猿樂の風變じたり、猿か鼈始しさいひ、又正樂にあらざる故、猿の字を付るといふ說、前に記したれども用ゐからず、

さるさり　本草拾遺、今さるさりといふ云、延喜典藥式、諸國進年雜藥、大和國拔擬四十斤、本草辨疑云、拔擬和名山歸來ト云者也、蒸ニ煮ヲリ、圓子ヲリ、

さるにかもにる　猿猴似也、萬葉、人をこそ　さるにかもにる、

さるにては　源かくしなくてならぬまでもにひかくしき親も給ひなき心をつかふにやありけん、さるにてハかしこき筋にもなきでき人の、宣云、シテハトハ意也、○さるにても源少女の聞覺ゆかりもつひねけがましきさるにてだにも侍りなん、さるにてもかゝる事なんとうせ給ひて、〻さるに、伊物、さるにまゐすかりにさみのこさゝて御文あり、○さるほどに、源九、さて都に歸り給ふ、○さるくも源相逢かてゝもれのつかからもありなん若宮なとにひ出給ハゝ、さるくさきつかでもありなん可然歟、されハ左禮也、正體ゆかみなとしたるさま左禮也、兵云、兩義有り、ふりたる心也、

さるひ　申日、子日の例に同し、即初申也、林葉二、おそらのいたきまつる春日山けふハさるひ日を神もさるらん、シカアル日トイフ意ヲカケテヨメリ、林葉

さるまひき　宮後ハけ左衛門かの御屏風の事せらるゝとて、さるまひきたよりをはからひて、通じ也、源氏さるまひき御ふるまひも打まじりけり然ルニカラズ也、

さるまなこ　長門本家ハ、四郎やまさとそたけ七尺斗なる男、大刀のものゝ十よ人かゝらもたりと聞えし、さるまなこの赤ひげなるか、

さるれ　吸江入變宿日本紀、宿老宿雪皆同心也、案之左禮ハ、左道の義也、人のされたるさま、實しからぬ也、後撰口傳に、俳諧歌をされ歌といへり、うれしたはふれたる體也、夕顏注、一說云、兩義有り、ふりたる心可然歟、されハ左禮也、正體ゆかみなとしたるさま

ま也、淩明思ふに、左禮の音語にいあらず、また左禮といふ文字も見あたらず、俳諧なされ歌といへるハ、よくかなへり、今もたはふるゝた、さるゝといふ、もしこの比ハ音語も多かれば、洒落などの音語にやあらん、大かたハ例の方言なるべし、夕顔卷、されたる呉竹、箋云、かしげたる竹也、秘抄ゆがみすぐならぬ竹也、河簽同、詩にも屈竹などあり、藤原仲文集、國茂かしき、此使にありきける時に、されたる所のわかき人々こゑしければ、それうけさせ給へといひ入たりければ、大鏡第六、御心ばえも、こゝ御はらからにも似給ハす、いとよくまたされ、たかしくもおはせし類名

さるめ　源夕顔、されたるくれ竹、信按、年經て夏冬になれ、日に晒れ霜にたされて、老たる由也、又霖水などに、さればみたるゝ云ふ言のあるも、物なれたるさま也、俗にされもの、又ふやれものなどゝ云もこれより出たり、又源氏にされたるやりどゝ云もあり、

され　枕、ねたき物、旅立たる所にて、げすどもの、たのがどち、されたりむるゝを見るこゝち、又にくき物、さればみたる家のかどにむかひたる、たてあみひきやりて、

され　洒落、さらくの音轉して、されとなるにや、左禮の音語なりと、物に見えたるも、その故あれども、又この音語なるも知べからす、文選の李善注に見えたり、晋起居注、安帝詔曰、洒落成勅、固秉謙挹、山谷、春陵周茂叔、人品甚高、胸中洒落、如光風霽月、類名

されうた　信云、河海に、後頼口傳に誹諧歌なゝされうたゝ云へり、鴨長明抄に、長歌かたりて云、述懐の歌ともあまたよみ侍りし中に、されこと歌に、火たこさめ夏のすびつのこゝちして人もすさめぬすさましの身や、

されごと　たはぶれ事也、いやしき詞にもやれ事を云に同し、さればみたるなどゝ云詞、源氏物語其外古書にあり、貞十五

されば　去者、秋されハ、夕されハ、今思ふに二ツの意有、まつ一ハ秋にあれば也、有秋者、この衛安を約れいなどなるを、なきハ横の音かよへば、左禮者といふ也、又の一つハ、去字ハ此を去て行ことゝ、するハ常の事也、其意より轉して、おきに往事にもたるもまた多し、さらハ秋になり行ば、夕に成難いとふ意も有り、去を往の事とせしハ、下に云へるが如し、又思ふに秋にあれはなき在者といふ夏なれば、宿にふすふるかやり火のとも、古今集にも見えたり、これ同し例也、紫芝園漫筆五、俗語謂往曰去、唐人詩中時用之、如李白云、一爲遊客去、長沙又云、一去姑蘇不復返、是已、按呉越春秋、越王夫人哀吟云、離我國兮去呉、去字亦往義、言去越往呉

○されハ　俳諧歌をさしていふ成へし、

されば　然あればの義也萬葉集に然爾有許曾（アレコソ）と見えたるハさあればこその義なり○されどを眞名伊勢物語に雖然と書り○萬葉集に夕去者春去者とよへるハタにしあれハ春にしあれはの義也あ反さ也よて一所に春之在者と書てはるされはとよめり神樂歌にいなのほのもろほにされハといへるも同し何調によりて春去來者夕去來者とも後世夕されば春されなどさを濁るハ非すといへり

○されく　坐榮成へし曲条より出たる名にや歟床也といへり曲条ハ禪錄にみゆ条ハ葉に作るへし麓に同し、

されゐん　鴛鴦梅を花產論といひ品字梅を實座論といふ一朶數花一花數實の物なる故也單重紅白の數種あり桃にも此種ありてめをともゝといふ鴛鴦桃なり○八房といふ梅も花一輪に實八を結ふ亦奇品なり越中八梅にありとそ

○されう　藏王菩薩とも金剛藏王ともいふ吉野の像ハ金剛童子也密家の曼荼羅にて考れハ千手の形して青色也といへり元亨釋書に牟尼應化藏王菩薩也と見ゆ、

さわぐ　日本紀に風塵又散新撰字鏡に噪又譟又嘈囋をよみ萬葉集に騒騒をよめり又散和久御氏又佐和久兒等と見えたり源氏にさわがひといへるも同しがひ反ぎ也新撰字鏡に猥をさわがしをよめりハ反ひ也今はさわがしといへり又鬧をさわさみだるさよめり

さわ〳〵　日本紀古事記に見えたり騒々の意にや今もいふ詞なり

さるさわたる　狭渡の義成ん○狸のまねたり庭訓往來に見えて熊の跡さなぞらへり

○さるすべり　古事記に山ゆりの草の本名を佐波といふと見えたり大和の狭井川は此よしにて名をおりえそるべきゆりの義ゆり反いなれば同韻通にてさるといふなるべし○式に大和國城、上郡狭井坐大神荒魂、神社五座と見えたるは大巳貴神の五名を然る也といへり古事記に見ゆ今花鎮狭井社といふ○萬葉集に狭謎もよめり又玉まきのまき〳〵沈みよめるはさわさわ〳〵の義わき反なり

さるまた　靡を古語にまといふ是に靡左而左、靡右而右といへるより左右の音を取なるべし膝をつかふ時のさまも同義成べし神別記に探青竹葉括合猿之指擲衆是今之市軍、靡之緩也と見えたり武備要略に日本の兵制を記して中國以北蹲踞、以標といへるもさの事也といへり○二條良基公の文にさるなくと書給へるも左右の義なるべし

さるまわし　朝野非職に猿愛子島井邨等を見えたり

さるうさ　左右左なり拜舞奉幣にいへり後撰　柏木を椎の枝に折かけて左右左まで伏まろぶらん兵衛の官人の四位にあるこひ申歌也○大神宮年中行事に大和舞を述て宮司幷中臣、左右左、舞也神主、右左右、舞也を見えたり○右左右左を舞といふ事も物に見えたり

さるごう　白氏文集に最期を見えたり今のさまといふ意に死をいふ俗語成べし

さるけしき　禁秘抄に歳下食と見えたり江次第抄に下食者鬼神之名此、日沐浴則鬼神頭而髪落故憚之と和名抄に鬼魅頭を誠て飾説に以天狗下食所噉是をみの風盤には滅食日と見え東鑑には天狗下食とも見えたり天狗星の精下る日といふ○時下食あり其時を避て其日を忌といへり

さるそ　物語にみゆ最初の音也○俗の口語にさるなといふ突然の意なれば元其初といふにや

さるそく　催促の音也

さるたつま　書撰和歌式に見ゆ草の異名也といへり顕昭説に放鷹川左府は淺青利葉色をもてさるたつま色といへり又いたりをいふともいへり

さるはて　枕草紙にさるはての事を見えたり抄にうおといふ意也といへり最極の義也

さるまつ　歳末を祭る事を歳政、公の時より見えたりさるまつりといへり

○さるま〳〵　萬葉集にありさのさま〳〵まつみを見ゆ又さる〳〵とも書せりさわぐ意なり

○さるた　竿棚棹、字なりたなより釣竿舟棹の類也小尾の義成べし和名抄に梶をよめる拿蒙頌聞に梶をさるともよめりの○ものほしさるはた筵也といへり○からうのさるたは罷略也○萬葉集に人魂の佐青なるといへりを引ありの音ともいへり○小の義今がさるといふ是なり源氏にある色にもさるべく

字之誤、不深考耳、類ゞ

也、是則古人亦用之、解唐詩者、以爲用

タされハ　春されば、秋されば、此詞ハされハのさを清て下のはを濁る事本なれども今の世に上のさを濁て下のはを濁るなるべし○式に大和國城上郡狭井坐大神荒魂、神社五座と見えたるハ大巳貴神の五名を然る也といへり古事記に見ゆ今花鎮狭井社といふ○萬葉集に狭謎もよめり又玉まきのまき〳〵沈みよめるはさわさわ〳〵の義わき反なり

さるまた　靡を古語にまといふ是に靡左而左、靡右而右といへるより左右の音を取なるべし膝をつかふ時のさまも同義成べし神別記に探青竹葉括合猿之指擲衆是今之市軍、靡之緩也と見えたり武備要略に日本の兵制を記して中國以北蹲踞、以標といへるもさの事也といへり○二條良基公の文にさるなくと書給へるも左右の義なるべし

さるまわし　朝野非職に猿愛子島井邨等を見えたり

さるうさ　左右左なり拜舞奉幣にいへり後撰　柏木を椎の枝に折かけて左右左まで伏まろぶらん兵衛の官人の四位にあるこひ申歌也○大神宮年中行事に大和舞を述て宮司幷中臣、左右左、舞也神主、右左右、舞也を見えたり○右左右左を舞といふ事も物に見えたり

さるごう　白氏文集に最期を見えたり今のさまといふ意に死をいふ俗語成べし

さるけしき　禁秘抄に歳下食と見えたり江次第抄に下食者鬼神之名此、日沐浴則鬼神頭而髪落故憚之と和名抄に鬼魅頭を誠て飾説に以天狗下食所噉是をみの風盤には滅食日と見え東鑑には天狗下食とも見えたり天狗星の精下る日といふ○時下食あり其時を避て其日を忌といへり

さるそ　物語にみゆ最初の音也○俗の口語にさるなといふ突然の意なれば元其初といふにや

さるそく　催促の音也

さるたつま　書撰和歌式に見ゆ草の異名也といへり顕昭説に放鷹川左府は淺青利葉色をもてさるたつま色といへり又いたりをいふともいへり

さるはて　枕草紙にさるはての事を見えたり抄にうおといふ意也といへり最極の義也

さるまつ　歳末を祭る事を歳政、公の時より見えたりさるまつりといへり

○さるま〳〵　萬葉集にありさのさま〳〵まつみを見ゆ又さる〳〵とも書せりさわぐ意なり

○さるた　竿棚棹、字なりたなより釣竿舟棹の類也小尾の義成べし和名抄に梶をよめる拿蒙頌聞に梶をさるともよめりの○ものほしさるはた筵也といへり○からうのさるたは罷略也○萬葉集に人魂の佐青なるといへりを引ありの音ともいへり○小の義今がさるといふ是なり源氏にある色にもさるべく

さを　萬葉、さをなる君かたゞひとり、あひしあまよ
はひさしとぞ思ふ、源若菜下、色はさをしろくうつ
くしけに、すきたるやうにみゆる、同末摘、御色はさ
をにて、今昔廿七、眞サヲニ光ル物有リ、同同、眞サ
ヲニ光タリ、（野槌ノ怪ナリ）、林葉
小青　源末ツム、色は雪はつかしう白うてさをに、
さをしか　牡鹿也、萬十、さをしかのつまどふ
となくこゑのいたらむかぎりなひけはきはら、和名、
牡鹿佐乎之加、
さをとり　棹取也、日仁鑑、たはやひとうちのわた
りにさをさゝりにはやけむひとにいわかもとにこむ、
さをどる　踊也、萬十九、すきの野にさをさるきゝ
すいわしろくねにしも泣むこもりつまはも、
さをどる　六百番歌合春、みかりする人やきつ
らん杉の野にさをさる雉子聲をきる也、判云々、
左さをさるなど不可應幾といへども、病無につ
きて勝ぬ、
さをなぐるま　擲梭間、これに二の意有り、まづ
いひ傳へしは、織機の具に有、梭を投る間をいふ
いにはやきこゑにたゝへり、また賀茂眞淵の説に
は、さをは矢の古語にて、射矢間也といへり、軍
も射くはする矢の意なれば、おかいふといへり、是ら
またそのことわり有り、また萬葉にかなるましつみ
といふ詞の有によりて、これはや射るを、俗にかな
なぐり發しなどいふに同しといへり、韵譜、梭擲流

志　八十八

さをなぐるま　擲梭之間也といへども箭を投るの義萬葉集に投箭をなぐるさもよめりともいへり光陰のうつりやすきに喩ふるなり
さをのま　棹ノ間ト禁秘抄に見ゆ倚子の設をかくる竿也といへり、

志の部

志　爲也、萬十七、みちのなか國津みかみたひゆき
もし、源若菜、しをこらかしてへ、
志　已也萬十三、しかはゝなさらなゝさらにしか
ちゝなさらくなゝらに、同九、しかかたらへへ、同十
八、しかかねひこゝろたらひに、
志　助辭也、萬二、いはねしまきて、同十六、髮し子
等もたひなへ、
志　水也、萬九、水長シナカ鳥、同十、水良シラ）
玉、
志　本草羊蹄、今さしく〳〵と云、萬葉十六、無耳
の池羊蹄（シラヌヒ）もこの、延喜式踐祚大
嘗祭、阿波國所獻乾羊蹄十五籠、同内膳式、
新嘗祭供御料干羊蹄一籠、本草辨疑、羊蹄
ハ河原田野所々ニ多シ、和俗名ツケテ、シノネ又
ギシ〳〵トモ、ウシノシタトモ野大黄トモ云、
志　詩なり、うたものにていふ文をも詩といへり、詞
の音ならんともいはるれど、さにはあらざるべし、
枕册十二、韓めい王のねふりをたゞちかすといふ詩
を、たかう打出し給へる云々、是ハ朗詠、禁中鷄
人曉唱、聲驚明王之眠、（漏剋策ノ文ニテ、都
良香ノ作也）、林葉
志　死しといふ死也、身まかる事をしとのみいふは、
死の字の音ぢれほえたるハ誤也、過といへるに同

一擲梭、類名
○

志　爲也、萬十七、みちのなか國津みかみたひゆき
もし、源若菜、しをこらかしてへ、
志　已也萬十三、しかはゝなさらなゝさらにしか
ちゝなさらくなゝらに、同九、しかかたらへへ、同十
八、しかかねひこゝろたらひに、
志　助辭也、萬二、いはねしまきて、同十六、髮し子
等もたひなへ、
志　水也、萬九、水長シナカ鳥、同十、水良シラ）
玉、
志　本草羊蹄、今さしく〳〵と云、萬葉十六、無耳
の池羊蹄（シラヌヒ）もこの、延喜式踐祚大
嘗祭、阿波國所獻乾羊蹄十五籠、同内膳式、
新嘗祭供御料干羊蹄一籠、本草辨疑、羊蹄
ハ河原田野所々ニ多シ、和俗名ツケテ、シノネ又
ギシ〳〵トモ、ウシノシタトモ野大黄トモ云、
志　詩なり、うたものにていふ文をも詩といへり、詞
の音ならんともいはるれど、さにはあらざるべし、
枕册十二、韓めい王のねふりをたゞちかすといふ詩
を、たかう打出し給へる云々、是ハ朗詠、禁中鷄
人曉唱、聲驚明王之眠、（漏剋策ノ文ニテ、都
良香ノ作也）、林葉
志　死しといふ死也、身まかる事をしとのみいふは、
死の字の音ぢれほえたるハ誤也、過といへるに同

事情に就て未然をいふあり不ハ未也と注せしか如し又自ら豫て禁する意あり勿ハ禁止の辭と注せしか如しといへり○助語に多くいへりそれに過去未來現在のしあり獨ねれいといへいやしく聞ゆるを獨しぬれいと休めやさしく聞ゆるの類也たらちねはかゝれとてしものしも同しこハ過去也又舟をしそたもふ絶てしなくハ待としきかハの類ハ現在也君か代の久しかるへきのしハ未來のし也といへり是皆助け辭也又しきを略したるはむなし煙なかし〳〵し夜の類也○日本紀に羊蹄をしとよめり又中帶姫あり帶も蹄に同し倭名抄にも羊蹄菜和名しと見え新撰字鏡にいちのねと見えたり今俗ぎし〳〵ともいふともいへりすへて大黄たほし知母やましの類しとよぶ草ハ皆蹄の類也○土師藥師繪師途師なとのしハもと爲の義作業をいふ師ハ借たる也○已をしとよめる歌日本紀古事記に見えたり○死をまといふも音にあらすなにぬねのゝ行にて用うけりすぎ反ある也○磯をよむハいしの略石も同し磯城磯長の類也

さを　氏姓に鹽飽と書り東鑑に見ゆ讃岐に鹽飽島あり、
さをあん　思按と書り倭語也、
さをあん　惟獸いたちの如きもの夜よく人家に入て多く牛馬をそこなふ筑紫及周防に在とそ貝原氏黒雀を訓しさいふ雀の轉音かといへり、
さをいか　詩歌をかくいひならへりいのへ辭なり○思の儘の日記に御遊はしめ詩歌の御會あり詩ハ絶句歌も一首のはれの御會たり作文ハ三月たるへし○御製に作り合せたる詩には別錄など侍り、

ゑいし　四時をみ來れるは足利學校のなまりと云傳ふれども死を忌たる語なるべし　一日に十二時五日に六十時是甲子の一周にて一候さす一年三百六十日に七十二候也三候を一氣とす是十五日二時五刻餘也六氣を時さす九十一日餘也時四を一年とす春夏秋冬とする也

ゑいさ　敖、字たかくみ來れるが音を引たる也四時の如し

○ゑうさく　源氏に見ゆ浴德也といふ

ゑうさゑうさめ　和名抄に舅姑をよめり傍人傍人女の義なるにやさび反也日本紀に婚姻をむことさびとよめり新撰字鏡に婚をさびとよみ婦人之父と注せり媛嬬婦などにさびとめるによれり○鈔に外舅和名與「舅」稱夫之父同一云姑翁也外姑和名與「姑」稱夫之母同一云姑「母」也○姑「ヲバ」か姑「シウトメ」になるといふ證無古詩に人命百年能幾何後來新婦今爲婆と見えたり俗に遠花の芋路の芋「ヲバ」なるべきゆゑといふ發語なるべきゆゑ陷かといふ俗語も此をいへる也めは芽の義なり

ゑうめん　謎面にてぞあるかはといふ音によるにやさはあらめんなるべし或は鍼面さも書り天名精の一名鍼面草といふ文字書に依ば醜面也と見えたり

ゑうろ　袖爐の音袖香爐さもいへり西京雜記に銭中香爐爲機環運轉四周而爐「體常」不欹といふ美人「賦に金鋪鏤香と見ゆ都ぶ香爐也

○ゑにき　俗語也爲處の義成しまなしの略ならめ處置さいふ也

○ゑのか　鹿をいふ肉香の義にや角の岐の數によりて歳を數ふるさ四聲を誤れる也と山家の說也角に十二の岐あるもの南都正倉院の寶物たり又

楓の形したるもあり軍用にもし事多く見えたり眼科には角を炙石さいふ甲斐國大井光遠が妹婿力なりしが鹿の角を膝におして折たり○さもしの鹿の鹿兒にて鳴ものなりさいへり○萍鹿集に　開まゝにさびさし鹿の澁ならで友こそなけれ秋の山さも事文類聚に野、鹿伴茅屋と見えたり○新新撰字鏡に啟を鹿のさりあかくさよめり○小野宮右府記に前、大貳所獻白鹿云々白鹿の景行紀より見えたり○史に多人、鹿爲證「前言」さいふ事見えて叛意なきの旨を明せりさしかの八、耳より出たるにや○春日に鹿を神、使さいへるは第一殿は鹿島、神にて神幸の時鹿に乘だまふよし古記に見えたり○春日殿、島ともに鹿氏家に多くて犬の如し○かがおむかがしこにますさ我居なふ儛也○かがさいふ儛も然之義儛かの意也定、字は和俗の作り字也萬葉集に諸、字をよめるも義通せり新勅撰集に　我庵は小倉の山の近ければ浮世をしかさ鳴ぬ日をなき○鹿を追者入山を見ずさ入淮南子に逐鹿者、目不「見」人山さ見ゆ

ゑがか　左傳に不「汝」疵瑕也さ見えたり人に難をいひて疵つくる事を京童の詞にがさいひ近江の志賀辛崎にをして人のがかるさ見えなさいふ是也さいへり一說にがさ過ぎ同義也さいへり○ゑがの郡は天智天皇の大津、宮をいふ故郷さも荒にしなどもよめり萬葉集に過「近江」荒都さ見えたり○志賀寺は崇福寺也三井寺の北にあり○志賀の山こえさいふ北白河の邊のかたよりも登りて如意が嶽こえに志賀に出る道也さいへり○新新勅撰集に　志賀の浦につゝの宮の沿たゝ天降りけるにしくのあさ是は延暦七年僧教大師叡山建立の時三輪明神五色の光の波

親に孝行にて行儀正しき人なりしが、齋侈者にて衣服諸道具飲食皆花麗を盡せり、蒸餅を食するに蒸餅の上に折て十字を作されば食さりしと也、此故事を以て餅を十字と云也、折て十字を作るこの餅の上に小刀もて十文字に入て、くひよき樣にあたゝめたるをいふ也、右何會かこの晉書第十三卷めにみえたり、蒙求にもみえたり、貞六

あうとこ　宿德、すくとこ、すくとこあゆくとくなど言便にてあうとこよめり、源氏物語も此詞あり、宿業成德の人をいふ、宿儒宿老などの宿に同し、古韻宿すくと云を轉音にて、あうといふ、宿善なも、釋家にてあふぜんといふ、一向宗の眞如上人の文にもさいへり、

十二單　と云名目も古より有し事也、源平盛衰記（卷四十三）女院ハ後れ奉らじと、御燒石と御硯の箱とを左右の御袂に宿し入、御身を重くしてつゞきて海に入させ給ふ、中昔騈生の末の事なれハ、藤重の十二單の衣をめされたり云々、貞五

十二郎　將軍家へ御禮に參る事、舊記に見たり、十二郎又十二五郎ともあり、又十二太夫ともあり、十二郎の事也、十二郎ハ猿樂也と年中恒例記に見えたり、貞二

あうもち　什物、後漢書二十、祭彤傳、顯宗既嘉其功、又美彤清約、拜日賜錢百萬馬三

の上に御舟を浮へて志賀の浦に漕寄給ふといふ故事によれり

あかい　五節などにあり絲鞋の音也亭子院哥合日記にも見えたり、

あかい　自害をよめり自刃をいふの和語なるへし自盡とも見ゆ、

あかうして　而字因辭也因是之謂也と注す然、字又然而 なもよめり

あかくして也くさうと同韻也然を如是若此之辭と注すあかくハ如是の意也然後ハそこでの意也

あかく　若をよめり又かくとはかりもよめり若是の義あり○續日本紀に信覺と見えたるを琉球の八重山島の古名今石垣の遺名存せり星槎勝覽に重曼山とかへるも亦是也といへり、

あがく　源氏に見ゆ試樂と書り音樂をまつ心もるをいふ也調樂とハ別也笛の音とり箏の爪調琵琶撥合等をいへり石清水の臨時祭の試樂ハ祭の前一兩日に行之賀茂同之と雲圖抄に見えたり○俗語あがくのよきあしきといふも試樂より出たる詞なるへし

あかさま　姓にいふ鹿草と書り異本太平記に鹿草公相あり、

あかくび　琵琶の名所也鹿首と書り、

あかけ　弦にいへり、

あかさま　今昔物語に見えたり然樣の義なるへし今さまうといふ詞ハ此あかさまの轉訛せるにやあか反さ也やうハ音をもてよへる成へし

あかし〳〵　神代紀に云云をよめり然り〳〵の意也文選の注に云云謂〻

あかしながら　然りしながら也さりながらに同し日本紀に一切をよめり今俗略してあかしとばかりもいふなり

あかず　不如不若不似をよめり二義あり如くならずといふ意と及ばずといふ意とあり、

あかすがに　萬葉集に多し後世さすがにといふに同しあか反さ也然爲蟹爾〻如此如此也と見ゆ物にあか〳〵の事などいふも是なり○常にあかなど書り然するからにといふ意也○參河國にあかすかのわたりあり金葉集更級日記に見えたり大門村八劔社の邊なり

あかぞすむ　然そ住の義なるよし顯昭説なりあかぜハさそといふ詞にて心はかくそといふに通ずと契沖の説也

あかた　俗語也爲方の義なるへし修方を譯す、

あかな　源氏に見ゆあかなりの略語なり○筑紫にてあかなといふハあさうと也といへり、

あかながら　然ながら也さながらに同し、

あがね　松前の方言昆布をいへりあかふ根といふにや赤あがねをよぶもの上品也、

あかのうハげのほし　秋になりて鹿の上毛に星の斑文のあらハるゝをいふ夏の初めつかたハ色さだかならねば鹿のうハ毛のくもりぼしともよめりといへり、

四、衣被刀劔下至居室什物、大小無不悉備云々、同廿七、宣永傳、帝嘗幸其府舍見而嘆曰、楚國二龔不如雲陽宣巨公、即賜布帛帳帷什物、注、軍法五人爲伍、二五爲什、則共其器物、故通謂生生之具爲什物、習禮、と云ハあつけ方を習ふ事也、古今著聞集卷三公事の部に云、後鳥羽院ひそかに大內御幸なりて、白馬節會（アヲムマノセチエ）の習禮有けり云々、將軍御元服記に云、御習禮以下每事攝政家二條殿被指南申云々、貞一

せうれう　涉獵書、書見る事を涉獵といへる事ハ、かりすなどりするにたとふる也、後漢書卅七、班超傳、有口辨而涉獵書傳、注、涉如涉水、獵如獵獸、言不能周悉、粗窺覽之也、東觀漢記曰、超持公羊春秋多所窺覽、今思ふに此注誤歟、東觀漢記に多所窺覽といへるによて注者の不能周悉、粗窺覽之也とハ思ひたがへし也、この人ハいかゞ有けんあらすすへて書を見るを漁獵する人の、水をわたり草をわけて涉して、魚鳥獸を得るが如く、書の古今ひろふ多き間を見わたし行をいふ也、跋涉漁獵と云べきを、ひとつを略て、いまひとつをいひけるも也、これ文を讀の法なるをや、類名

あか　あかすが、またハさすがの略也、大和物語、我もあかなきてそ人に戀られし今こそ餘所に

辭なのみきけ、古今集　我庵ハ都のたつみあかそすむ世を宇治山と人ハいふなり、

あか〳〵　前漢書金日磾傳、敎當云々、注師古曰云々、多言也、前漢書五十汲黯傳、上方招文學儒者、上曰吾欲云云、注師古曰、云云猶言毋此如此也、史略其辭耳、後漢書卅九、仲長統傳、爲之以無爲事之以無常、何子之言云々也、文選注張銑云、謂辭多略而不能識也、

あかし　然爲也、萬五、此くしみたまかしけらしも同十五、しかしあそハね、

あかず　不及也、萬五、さけのみてあひなきするになほおかすけり、同、よるひかる玉といふともさけのみて心をやるにあにまかめやも、○日仁德、山しろにいしけどりやまいしけ及(シケ)あかもふつまにいしきあかむかも、たほろ月夜にあくものそなきといへるも及ものなき意也、檜

あかすか　あかすかを約めて、佐す賀といひ、又縮めてあかといふ也、その故ハあかを約むれハ、佐となれば、佐す賀といふ、その佐すの約ハすなはちすなるを、さに通ハして、あかといふ也、またハあかすかの下を略て、よをのみ用ゐて、あかともいはれ、又ハ中略にして上下を用ゐて、あかともいはるゝ也、延へ縮め丘にいふこと、つねの習ひ也、あかを又約むれハ、さの一言に納る也、紀貫之集　あたらしき年といへどもあかすかにからくふりぬるけふにそ有ける、後撰集春、かきくらし雪ハふりつゝあかすかに我家のそのに鶯そなく、類名○あかすか歌ハ常ニイヘリ、詞ニハマレ也、あのひね上、あかすかなるさまにて、たはせしを、林葉

あかとあらめ　然不有也、萬五、あかとあらめひけつきなてゝ、酒德頌云衎爾、坦塊、注銑曰衎動皃貌也、坦塊展足倚據而座也、

あかにハあらじか　然にハ不有歟也、萬十八、青にしならなるいもかたか〳〵にまつらむところあかにハあらしか、同五、かにかくにほしきまに〳〵

あかにハあれど　雖有然、拾玉集　いつくより月ハやとりぬあかハ有どかけをみかくハ玉の井の水、

あかばかり　然計也、かくばかりといふに同し、萬四、しかばかりさほきいへわをかへるを思へハ、檜

あかひ　繪詞花雜上、　山かつの野がひの駒もかへるめりはつせに草をあかひかけつゝ、山家集上、みまくさに原の小薄あかふとてふしとあせぬさあかれもふらん、夫木二、あかふへくなりもゆく哉きゝすなくかたのゝみのゝをきのやけ原、堀川百、朝毎になてつゝれほすかるかやなあかへて君かみまあかみ　兜鍪火舍などにいへり獅噛の後也とそされど醜女の義轉訛せる也といへり火舍にいふハ禪書の捧爐神也○俗語のあかみつくといふも是より出たるなるへし

あかみがらき　近江甲賀郡の鄕名也今もハら陶器茶茗に名あり○聖武紀に造紫香樂宮といふものハ牧村也今內裡野といふ

あかみがらず　否をよめり不然の義也、

あかみがらみ　萬葉集にみゆ柴がらみの義成へし柵をよめり筒も同し川水のつよき所を防がんとてゐ杭など打つゝけて橫さまに竹木などからみつくるをいへり水のあがらみ波のあがらみ井手のあがらみなどよめり釉のあがらみ風のあがらみ苔のあがらみ花のあがらみなどいへるハ借ていふ也○古今集に　秋萩をあからみふせて鳴鹿の目にハ見えすて音のさやけき　顯昭の說に鹿の萩か枝を折伏てふみしたきみだしたるかかのあからみに似たれハいふなりといへり

あかり　然をよみ神代紀に唯然もよめりあかハ如をおくとよむの義りハ有の義也をくありのくあを反せハか也萬葉集に然しもあらんさ云を一に如是もあらなんと見えたり字書に然ハ如是也と見ゆ然をあかくとよむも是也○あかもハあか反さまもさいふに同し萬葉集古今集ともに三輪山をあかもかくすかとよめりあなかちの意ありて今の口語にも此語意あり○あかれはは然あ

おかまのかわ　或說に古搗龐圖紡麻ヲカマの里にて謎アキをこく染てかわ色にしたる染物を出ゝ云り古歌に　我戀はおかまのかわにあらねど其おひもなくこそきたるられよるたる本をして婚禮には必かん色を用ることゝ云り雜記に用る事ハ見えだれ共婚禮に用る事ハ見えず　こき色なる故婚禮に用る相應なる事なれば用くき事也　されども此色"限て必用ることゝ云法にはなし　眞三

おからみ　おから紀貫之集　きたしかの尾上にさける秋はきをおからみくぬるしをそられぬ凡河内躬恒集　おまの河水をしおたまたしかのおからみふる秋はきの花

おかる　叱　おのれおのれ　このゝおから給はんそとなしくのたまへば　今物語　おからはらだゝ　成裏記　キヨシクリ音ニテ　讀岐日記　よそにてハ　おからも給くさいくば

おき　重也繁也　候補世紀かむかもの國ハ常世のそき波よする國　萬四　森の雨ハいやしきおきなるに　同十九　森のすゝれにほとゝきすいやしきなきぬ

おきがみ　歌書に見ゆるの神ともいふ新撰樂記醫陽道の候に仕式神と書り式伏ともいふ事もあり實ハ人形の識神にて巫蠱の妖術なりといふ

おきな　時宜の字波書に見ゆ俗に時宜作法ともいふ語の轉して餘興の義ともなれる也

おきがみ　江次第に鹿革を見ゆ敷皮ハ鹿の夏毛を用うとし小笠原家の記に見ゆ神代紀に海鼈皮八重を敷と見えたるを起りなるべしいくりてびかみ白毛なとの名所あり西土に羆席豹席熊席なとも見ゆ

おきまろ　昔物語に見ゆ

おきもの　敷物也　和名抄之木　一云　田鳥　日本紀古事記ともにあり　萬葉九　見飛翔鳴作歌　赤まけて物かなしきよふけてはふりなくまきだが田にかすむ　赤染衛門集　念佛寺にて　にはかおかつこにきのなくをきゝて　夜もすがら我とおかすおかつこのみだるゝをきの朝かきやつくさん　西行物語　相撲國大庭といふ所　砥上が原をすぐるに云々　その夕くれにきはの嶋さびたつ澤の秋の夕くれ　清輔奥儀抄　きはねかこゝのそけき也　されはゝかきといふ也　袖中抄　きぎしと云鳥ハ曉にたゝく別音のこと鳥よりもきけきこのれハ　はかきといふ也　薩州府志　鵜多品　其狀圓而肥者味勝調和可足謂　保土志畿自夏末至新秋特貴之　食鑑　常居田澤館鳴館飛夜深鳴翔爲閑寂之趣　夏秋最多至冬而不見

おきし　枕草子　こまかなる色紙のおきしの　ありこえたるを空にくらし明紙もかなとの給へハ　きはみたるおきし　まき　視はこのふたにいれて出されたり　繪世繼花のあるし　おきしかた　寺々の經なとかき給ふ　うつ保藥　うつほ　同はらくの御手　なとうのおきしがめ給ふ　同　ほとゝきすうつしめんとおきしにかき給ふ　枕　中將姫事也　なとて善り　ほとゝきすおきしにかき給ふ　枕

れはの略也　○爾たよむ詞之必然也と注せり如是切音轉なれハ音訓をもに一合の意也　爾たよむ義共にや古注に然也とあり又句末に然と見えたるに焉と同しきあり　論語に不得其死然孟子に木若以美然の類也又晉宋の文に遽遽如蓆地爾なとゝいふも如此の義等一字當一字ハきかりそむく

おかれども　而然字をよめりおかれとも歌によめる義也され此詞ハ今にても好まるゝ詞也とハいへ雖然ともあり東漢以後の文に多く然のかハりに爾を用ゐ萬葉の歌にも見ゆ

○おき　日本紀に置、字古事記に興、字ともあり敷の義なり○聽しき化しきなとの助辭にハいふきあるの約言に似たり○城ヶおきとよめる欽明紀に見えたり韓語にや○磯城ハ堅固を稱する辭磯城神籬なと見え百濟城の祝稱も併り後にハ大和の地名ともなれり○枕草紙に頭、辨のおきにまありとハいくるハ職の言也徒然草小島のまひに世のおき身のしるなと見えたる式字なるべし

おき　時宜の字波書に見ゆ俗に時宜作法ともいふ語の轉して餘興の義ともなれる也

おきがは　江次第に鹿革を見ゆ敷皮ハ鹿の夏毛を用うとし小笠原家の記に見ゆ神代紀に海鼈皮八重を敷と見えたるを起りなるべしいくりてびかみ白毛なとの名所あり西土に羆席豹席熊席なとも見ゆ

おきがみ　歌書に見ゆるの神ともいふ新撰樂記醫陽道の候に仕式神と書り式伏ともいふ事もあり實ハ人形の識神にて巫蠱の妖術なりといふ

おきな　本草鶴　和名抄之木　一云　田鳥　日本紀古事記ともにあり　萬葉九　見飛翔鳴作歌　赤まけて物かなしきよふけてはふりなくまきだが田にかすむ　赤染衛門集　念佛寺にて　にはかおかつこにきのなくをきゝて　夜もすがら我とおかすおかつこのみだるゝをきの朝かきやつくさん　西行物語　相撲國大庭といふ所　砥上が原をすぐるに云々　その夕くれにきはの嶋さびたつ澤の秋の夕くれ　清輔奥儀抄　きはねかこゝのそけき也　されはゝかきといふ也　袖中抄　きぎしと云鳥ハ曉にたゝく別音のこと鳥よりもきけきこのれハ　はかきといふ也　薩州府志　鵜多品　其狀圓而肥者味勝調和可足謂　保土志畿自夏末至新秋特貴之　食鑑　常居田澤館鳴館飛夜深鳴翔爲閑寂之趣　夏秋最多至冬而不見

おきし　枕草子　こまかなる色紙のおきしの　ありこえたるを空にくらし明紙もかなとの給へハ　きはみたるおきし　まき　視はこのふたにいれて出されたり　繪世繼花のあるし　おきしかた　寺々の經なとかき給ふ　うつ保藥　うつほ　同はらくの御手　なとうのおきしがめ給ふ　同　ほとゝきすうつしめんとおきしにかき給ふ　枕　中將姫事也　なとて善り　ほとゝきすおきしにかき給ふ　枕

職事ニハ藏人頭ハ勿論五位藏人六位藏人マデヲサシテ職事ト云也舉竟藏人ノ別號ナリ、眞四

おきおぬふ　繁思也、萬四、庭ニタチ(枕詞)手カリホシおきまのふあつまなみなわすれたまふな、

おきしまの(枕詞)　やまとの國、萬葉十三、ニ志貴島の倭國ハ、こハ崇神紀ニ、都於倭國磯城郡磯城島ニとありて、二代なから殊にあまた年ましまして、名高ければ、さる比よりねのつから大和の國の今一つの名の如く成けん後にこゝ所の都となりても、猶やまとゝいふにハ、冠らせてよめるならん、奈良朝となりてハ、既やまとの事として、おき島の人ハわれじくゝしもよみたり、冠

おきしん　式神、玉勝間ニ云、宇治拾遺に式神をつかふといふことあり、今のいづなのことなるわざと聞えたり、此わざをもて、たちまち人を殺すよしなどあり、新猿樂記、仕式神造符法、大鏡一、かつ〳〵しき神一人、内裏にまねれと申ければ、宇治拾遺ニ、おきにうたたるにか、此からすハおき神にこそあれ、又云、陰陽師をかたらひて、おきをふせたりける也、又云、たのれたゝ今、おきにうてゝ死侍りぬ、又云、おきふなさせける、むこをハ、盛衰記十、晴明カ天文ノ淵源ヲ極テ、十二神將ヲ仕ニケルカ、其妻、職神ノ貌ニ畏ケレハ、彼十二神ヲ形といひ文草子形といへり紐つきたる物也○古笥に色紙形といふあり

おきじ　唐ノ六典に職事官を散官におかへていへりされは昔ハ諸官の當官の事をいひしを中古以來ハ藏人の事をいふ義になれる也藏人ハ辨官にて職事ト兼たるなり○琅邪代酔に唐ノ制有行守試之別職事高者爲守職事卑者爲行未正名命者爲試といへり○續故事談に嵯峨天皇遊幸を好み給ひちはゞ〳〵嵯峨の離宮にましめ或ハ政事あれは空位を朝堂に設け五位藏人を其側に居らしめ群議を聽て奏聞す是職事の由て置所也ともいへり、

おきおのぶ　頻に忍ふ也といへり萬葉集に布慕なと書れハおたふ意成へし

おきしま　おきしまの大和萬葉集に見ゆ日本の總名のことゝいふは磯城島の都ハ欽明天皇の久しく治めたまひし所なれハめでたき御代を擧ていふなりされと神名式に對馬ノ國敷島ノ神社あり式の祝詞に皇神の敷島ト汝え萬葉集に日本ノ國者皇祖の神之御代自敷座流國爾も天皇之敷座國ともいへり書に禹敷土といへる敷の如しおきしまの大和萬葉集に見ゆ日本の總名のことゝいふは磯城島の都ハ欽明天皇の久しく治めたまひし所なれハめでたき御代を擧ていふなりされと神名式に對馬ノ國敷島ノ神社あり式の祝詞に皇神の敷島ト汝え萬葉集に日本ノ國者皇祖の神之御代自敷座流國爾も天皇之敷座國ともいへり書に禹敷土といへる敷の如し一所の名を擧ていふへきにあらす○歌道をわけておき島の道といひならへるも右の祝詞の義に近しやまとうたなといへる語意成へし爲相卿　是のみそ人の國よりつたへりつたへて神代をうけし敷をまの道

おきたい　式社の音也延喜神名式に載しを式内とし載さるを式外とするも也されと安藝ノ國に二座大薩摩國に二座小信濃筑摩郡に三座といふ如き他の國他の郡に准へかたし古語拾遺に至天平年中勘造神帳中臣卜權任意取捨有由者小祀皆例无緣者大社猶

橘ノ下ニ呪シ置、林葉

式正　(シキシャウ)古ハ式正の行列にハ鎗長刀の類持する事なし、旅行なとの時ハ持せし也、信長秀吉の時代より常に持する事に成たりそ、寛文年中の比迄ハ鎗持馬の口取なとの類、途中にて禮をするにハ、皆つゝはひて禮をおけるよし、古老の物語也近年ハ立はだかり兩手をひろげて立つを禮とする也、下部の者共のおき出したる事也、眞一

おきせう　式正、修正、色裝、東常緣聞書、御會之御人數式正也、武家ハ一色畠山修理太夫實德元年十一月廿八日公方樣御會等也、思ふに儀式といふことを、この比の方言に、式正といひし也、又台記の比ハ、修正といへり、潛夫論實貢篇、今以大漢之廣土、十民之繁熾、朝廷之清明、上下之脩正而官無善吏、位無良臣、應仁記上、今年も程なく末の松山と成て、新玉の年立かへりぬれハ、文正の年號をハ被棄、應仁に改め、内裏にハ元日政と朝拜の饗會を行ハせ給へハ、武家御所にも三管四職を先として、近習外樣の人々、色裝の粧ひ嚴ひ、出仕を遂られけれハ、上下萬民たしなへて、かゝる愛度事あらしと喜悦の眉をそ開ける、類名色退(シキタイ)人に對して、たかひに禮をするを舊記に色體とあり、又式體とあり、蜷川記にハ

廢と見えしもかゝる故をいふなるへし、

おきおやう　東鑑大神宮年中行事及長明か東紀行に職掌と書り或ハ式正とも書り、

おきす　儀式帳に敷簀と見えたり、

おきせ　四季施と物に書り時服の意なるへし延喜式に季祿なと見えたるハ意也一に作令(シセキ)着の義といへり、

おきだい　人家に客を迎送し禮を致す處を色代といふはもと人に揖禮するをさいへるよりの事なり盛衰記に色代して矯飾を申すと見え東鏡に前武州不可然之旨有御色代之故也と見ゆ色ハもへりとよみて顏氣をいふ又式代とも書り著聞集に見ゆ式ハ禮式也代ハ古へ何にもつけていへり或ハ式臺と書るハ本義にあらし○式代ハ柱はかりにて向左右に壁なし壁あるハ非也そ○庭訓に現物色代之償と見えたるハ品色の物を其代

おきだつ　(フトシキ)敷立てといひ大殿祭ノ祝詞に此

おきたつさい　(ツクヒ)敷地と書り宮柱太敷立てといふ意也榮花物語の歌にもよめり、

後人の所爲也といへり家隆卿ハ澤立鳴ともよめり雅章卿　秋ならぬあはれけり鳴立澤の昔尋てとよみ給ひし鳴の羽打ならし秋の夕暮にたたらんハいつれの所にてかあはれならさらん此地のみに限りてあはれなるにやと勅ありしとかやその後爲久卿關東下向の時よみ給ふとか　こゝ澤と詠出ハ世に心なき人といはれん、

ざざんくわ　敷栲敷妙敷細布布栲なと萬葉集にかけり或ハ色妙なと書るをもて六帖にうたのことに誤る歌あり又敷白なと書りたくの絹布の名也ざざだくのなどいふの衣をいふなり袖なども床なども宅なども黒髪なども枕などもうけ今にいふ敷和布なども是成べし

ざざつゞ　直綴と書り古僧服の褊衫裙子なり後世上下を連ねて直綴と呼り

ざざなし　頻繁の義より轉して事を爲被などにも聞ゆ

ざざなみ　新撰字鏡に滋濱なみ記仁紀に重浪萬葉集に敷浪疊浪なと云又跡位浪跡座浪と見え皆高に頻波などの義なり頻の義より萬葉に　さく浪のさわ〳〵しさよ古今にもさく浪のさわ〳〵しとよめり定家卿歌　わたつみに寄てかくるさ浪のはしめもはても知人ぞなき

ざざのぼりば　立のぼる時の初つかたをいふ源仲正歌に　明ぼの〻鳴のぼりにかきつけん雲井はるけき戀もするかな

ざざのはこ　建武年中行事に式宮より江次第に入内裝式也と見ゆ正月の事也

ざざのはねがき　鵲の己が背に羽をたゝく音の高く聞ゆるをいふなり其數もそだけれハ百羽がきとも數掻とも外題天に必かくものなれハ直に題の事にもいふなりといへり○總角看經などいへる俗諺ハその田澤に居時の閑散なるをもて也羽掻の反也

ざざふすま　延喜式に數被を見えたり

ざざまき　神代紀に重播種子をよみ式に頻蒔と書り重てたねを蒔たるをいふ

ざざめく　人のうるさくいふまして今さらに國わかれしあれハにや又宮根よりの小田原の聞ハ正月の門松にもらざるを用ゐ來れり愛宕山のをのみ歳ごもりの花つむ人の跡だになき事にそ方輿集に　あたご山をのが原に雪つもり花つむ人の跡だにもなし○大雙紙にをのの木をかりてすれハ朽たる墨の水をよしとせり○深山をみ吉野詣の記に見ゆ赤き實房をなせり椙手也といへり○萬葉集に數渡相ノ朝手作ともよめり

ざざめく　數栲敷妙敷細布布栲なと萬葉集にかけり或ハ色妙なと書るをもて六帖にうたのことに誤る歌あり又敷白なと書りたくの絹布の名也ざざだくのなどいふの衣をいふなり袖なども床なども宅なども黒髪なども枕などもうけ今にいふ敷和布なども是成べし

ざざつゞ　直綴と書り古僧服の褊衫裙子なり後世上下を連ねて直綴と呼り

ざざなし　頻繁の義より轉して事を爲被などにも聞ゆ

ざざなみ　新撰字鏡に滋濱なみ記仁紀に重浪萬葉集に敷浪疊浪なと云又跡位浪跡座浪と見え皆高に頻波などの義なり頻の義より萬葉に　さく浪のさわ〳〵しさよ古今にもさく浪のさわ〳〵しとよめり定家卿歌　わたつみに寄てかくるさ浪のはしめもはても知人ぞなき

ざざのぼりば　立のぼる時の初つかたをいふ源仲正歌に　明ぼの〻鳴のぼりにかきつけん雲井はるけき戀もするかな

ざざのはこ　建武年中行事に式宮より江次第に入内裝式也と見ゆ正月の事也

ざざのはねがき　鵲の己が背に羽をたゝく音の高く聞ゆるをいふなり其數もそだけれハ百羽がきとも數掻とも外題天に必かくものなれハ直に題の事にもいふなりといへり○總角看經などいへる俗諺ハその田澤に居時の閑散なるをもて也羽掻の反也

ざざふすま　延喜式に數被を見えたり

ざざまき　神代紀に重播種子をよみ式に頻蒔と書り重てたねを蒔たるをいふ

ざざめく　人のうるさくいふまして今さらに國わかれしあれハにや又宮根よりの小田原の聞ハ正月の門松にもらざるを用ゐ來れり愛宕山のをのみ歳ごもりの花つむ人の跡だになき事にそ方輿集に　あたご山をのが原に雪つもり花つむ人の跡だにもなし○大雙紙にをのの木をかりてすれハ朽たる墨の水をよしとせり○深山をみ吉野詣の記に見ゆ赤き實房をなせり椙手也といへり○萬葉集に數渡相ノ朝手作ともよめり

ざざら・萬葉集に數渡相ノ朝手作ともよめり

ざざれ　細花ひめのかつら　藥の破のうた　ざざれたはみのをとこといふかゑるやのくみかきつくりかたねん

ざざなみ　平治ノ上　内裏より頻並にめしければ夫木ニ　濱なみのあらそのをのしきなみにたびとめかたき春のわかれぢ　素性集　松山のみづはかすそのにもはますこひき君にしなみをたつ　新猿樂記　施背來如舖波

四季に花さく櫻　盛衰記ニハ　四季ニ花サク櫻ヲ植テ　駒ヲ遊バシメ給ヒリ　是ヲ志賀ノ花園トハ申也　紹巴富士見道記　白子觀音寺に不斷櫻さて名木あり　櫻品　藪花園云　若木不斷櫻さらぬもの有り　春より秋まで花開　冬は花なし　夏五六月頃に若葉出て　柑に花咲也　葉茂し　寒山櫻櫻よりは早く花咲也

ざざまき　重播種子也　日神代　ものゝたねをざざまきつゝに又ざざまきなどいふ成べし

ざざまくに　知座國也　ざざたのと同言　高　ふたかざざまくにとよめるふたかざざまくにとよめる有り　やまとを山振と書も同例也　日神代　ざざまくにとよめる有り　手にふるをいふ　高ニ　天皇之

猶床などいふなり轉したるなるべし　その枝つねに床をそへき處なれハ也　二　夏歌たゞのうはらふまにまにとよめるハやかて床のことからひゞきたる也　節

ざざれ　簗花ひめのかつら　藥の破のうた　ざざれたはみのをとこといふかゑるやのくみかきつくりかたねん

ざざなみ　平治ノ上　内裏より頻並にめしければ夫木ニ　濱なみのあらそのをのしきなみにたびとめかたき春のわかれぢ　素性集　松山のみづはかすそのにもはますこひき君にしなみをたつ　新猿樂記　施背來如舖波

四季に花さく櫻　盛衰記ニハ　四季ニ花サク櫻ヲ植テ　駒ヲ遊バシメ給ヒリ　是ヲ志賀ノ花園トハ申也　紹巴富士見道記　白子觀音寺に不斷櫻さて名木あり　櫻品　藪花園云　若木不斷櫻さらぬもの有り　春より秋まで花開　冬は花なし　夏五六月頃に若葉出て　柑に花咲也　葉茂し　寒山櫻櫻よりは早く花咲也

ざざまき　重播種子也　日神代　ものゝたねをざざまきつゝに又ざざまきなどいふ成べし

ざざまくに　知座國也　ざざたのと同言　高　ふたかざざまくにとよめるふたかざざまくにとよめる有り　やまとを山振と書も同例也　日神代　ざざまくにとよめる有り　手にふるをいふ　高ニ　天皇之

2666712

えたち歌ふ歌居の義にてふまの類なるべし

ゑきもし　神代紀に扶疏を訓せりそがりもきの義也けり、反切文選の註にも扶疏は枝葉四布の貌と見えたり、

ゑきもの　鋪設をいふ歌物の義也○席筵も同し義をそへよからもと草を下に布事也されば下きの事也とぞ、

ゑきや　萬葉集にそたかん小屋のそきやと見ゆ候名鈔に助鋪たこやそもひたきやそも訓せり鋪屋の義にや、

ゑきり　仍旋頻屢遝比等なとよめり重繁の意也仍は頻也注す旋は後漢書に見ゆ屢は頻數也注す遝は俚語のつゞけて也比も遝也と見ゆ叨たなども論叨の意俗にそきつてとふなとに聞ゆ○物のくだたふなとふる義也○金斯兵衛に女註をそきりそこんとも譯せり底用放包、席とふくだたあるたふ也宇治拾遺にそきれと見え下學集に尻切と見ゆ今いそきれとふくりこんこは金剛也安然和尚貢かしし時草履を織て管みそ人問くは金剛の性體を答くられしに據とふ今伊勢にて菅の草履を呼て金剛そよて金剛坂の地名もありとふくり男娼の名つけられしものを金剛と呼もまたこれなり

ゑきろう　常に食籠をかけ武備志日本考に食籠あり、

ゑきる　日本紀に席をよめり歌居の義也禮に古へ地に席をそ坐すとふ是也今のござも也○考經に曾子〻席曰なとあるは尊者の問あれは席を離れて答ふるを禮とよし後坐語、文なとも見えたり

ゑきるん　公事根源にそきるんは歌居也常上に歌たる座に居とふ意

なり又江次第抄に請可、昇着堂上、所歌座也引、聲召之時曰歌尹と見ゆ貞觀儀式には必侍座と記し江次第には侍座とそ又井關とも歌居にも歌尹とも記せりされはそきるんと唱ふるよそきるにも音便にはねるも也こゝにしなんそきりとよむへきをそきりんと類也聲を引そきるんとふにはあらす又侍座とあるによれはそきるに侍ると訓しを後略してそきるにはかりんと見ゆるよりの座禪侍止宣ふ事儀式に見えたりとふくりの○そく　多くの辭につけていくりの重〻字の義也○敷布をよめり重仍と意通ふり洗ひた布たとよめる同し神代紀に鋪設たよめり精たむに同し○神代紀萬葉集に及〻字たよめり古事記に追そきし後の歌にはつり月夜にそきものそたなきとふ是也たよふとふ語も重なる意也○書に如〻字たよめり及の義也不、如、不及の意あり○出羽にて鍬をそくなそといふ

そくそく　萬葉集に底たよめり又歌にそ見ゆそく〳〵に同し○新古今集に茅雨のそく〳〵ふれゝと見えた百京大夫家集にたえたくかなしくそく〳〵と泣より外の事なきと見えたりおなじことふなり今そくそくもいくりそくる　俗語也〻扶〻の義くそくるくなとふか如し、

そくたか　大河に産ます又江海に出土左にてすなたひ京にて伊勢ごひとふ鯉に似又川鯽に似たりやふもふ唐山の俗鯉魚といふ又朱口紅〓とふか如し、

そくつく　詩經の沮洳此意也とふくり、

そくゆる　古今集に見ゆ風の吹そこにいくりも反けなれはそけなるかそ

の人いわれしく、同、れもへりしくし、楢
あく　頻、及、きくい頻也、きるい延たる詞也、幾留ゝ反い久、し及　遅等也、楢本人丸集、この比の戀のあげゝん夏草のかりはいれどもれひしくがごと、古事記上、故號二其伊邪那美命一謂、黄泉津大神亦云以二其追斯伎斯一〔オヒシキシ〕而號二道敷大神一類名
あく〳〵　雨のきく〳〵ふるとは、小雨のなやまぬを云、泣にもいふは、聲もたてゝなくをいふ也、萬葉集八、春雨のきく〳〵ふるに高まとの山の櫻はいかゞあるらん、類名
あくま　本草雚、齊明紀、四年是歲越國守阿部引田ゝ臣比羅夫、討二熟愼一獻二生雚二、雚皮七十枚、天武紀に、雚皮をもて　皇太子以下諸王卿に賜ふことあり、續紀天平年中、渤海國同し皮を貢せしことあり、延喜式、赤熊は神獻也とあり、黄熊は祥瑞也とあり、
あくものなし　金葉雜上、石たゝみありけるものをきみにまたきくものなしとたもひけるかな、源源雲、もろこしには　春のはなのにしきにきくものなしといひはへめり、
あくれ　時雨、釋名に、時雨いきはしくられ也、らとれと通音なり、時雨ふる程いおほらくくらくなる故にかく名付たる也、此説そのことわりあれど、萬にも爲葺〔シクレ〕なとかき、源にい空のきくらくるい頻る意也一説に唯きくといふ意のみ成れいめるい句調のために加へし辭也ともいへり
あくま　日本紀新撰字鏡和名抄に熊を訓せり　白熊の義爾雅に熊に似て黄白文といへり　一説に冈に从ひ熊に作るをもてよくる也　といふ北國に出し事貝原氏の書に見えたり　大熊ともいふ○たぬきの類にきぐまあり毛色黒く爪熊の如し熊野にてつちかひといふものにや人家に住といへり、
あぐむ　物の咋合たる如く爲出たる事にいふ萬葉集に角のふくれにきぐひあひけんと見えたり　同義なるへし又きぐいすといふ俗語もひあ反いなれい同なりけんかし東國にをこむ又はゝむ江戸にいにまかむ又びゞる越後にけすよりい常に時雨をよめれど霙雨い小雨也といひ時雨い漢晋春秋に喜如雨と見え好雨如二時節一の意なれいあたらすといへり或い液雨を訓せり
あぐれ　天陰りて小雨するをいふ頻音の義歌にきぐれのあめといふい本義なるへし○新撰字鏡に霖又雹をよみ童蒙頌韻に霰をよみ倭名鈔に霰雨を
あぐれ　雨のふるとは、小雨のふるをいふ、萬葉集八、春雨のきく〳〵ふるに高まとの山の櫻はいかゞあるらん、類名
あぐま　本草雚、齊明紀、四年是歲越國守阿部引田ゝ臣比羅夫、討二熟愼一獻二生雚二、雚皮七十枚、天武紀に、雚皮をもて　皇太子以下諸王卿に賜ふことあり、續紀天平年中、渤海國同し皮を貢せしことあり、延喜式、赤熊は神獻也とあり、黄熊は祥瑞也とあり、
あぐものなし　金葉雜上、石たゝみありけるものをきみにまたきくものなしとたもひけるかな、源源雲、もろこしには　春のはなのにしきにきくものなしといひはへめり、
あぐれ　時雨、釋名に、時雨いきはしくられ也、らとれと通音なり、時雨ふる程いおほらくくらくなる故にかく名付たる也、此説そのことわりあれど、萬にも爲葺〔シクレ〕なとかき、源にい空のきくらくるい頻る意也一説に唯きくといふ意のみ成れいめるい句調のために加へし辭也ともいへり
あぐま　日本紀新撰字鏡和名抄に熊を訓せり　白熊の義爾雅に熊に似て黄白文といへり　一説に冈に从ひ熊に作るをもてよくる也　といふ北國に出し事貝原氏の書に見えたり　大熊ともいふ○たぬきの類にきぐまあり毛色黒く爪熊の如し熊野にてつちかひといふものにや人家に住といへり、
あぐむ　物の咋合たる如く爲出たる事にいふ萬葉集に角のふくれにきぐひあひけんと見えたり　同義なるへし又きぐいすといふ俗語もひあ反いなれい同なりけんかし東國にをこむ又はゝむ江戸にいにまかむ又びゞる越後にけすよりい常に時雨をよめれど霙雨い小雨也といひ時雨い漢晋春秋に喜如雨と見え好雨如二時節一の意なれいあたらすといへり或い液雨を訓せり
あぐれ　天陰りて小雨するをいふ頻音の義歌にきぐれのあめといふい本義なるへし○新撰字鏡に霖又雹をよみ童蒙頌韻に霰をよみ倭名鈔に霰雨を

成てふあるをあいせてれもふに、あいたゝ添なるにて、空のくらくなる心の名也、○初時雨、二冬、初しくれふれい山へそれもほゆるいつれの山かまつもみつらん、はしめてふる時雨也、○村時雨、十四（後嵯峨院）吹過るひはらの山の木枯に間もわかれぬ村時雨哉、なやみかちにふる也○よこ時雨、信實集、風わたるみねの木間の横をくれもる由よりも下葉そおらん、俗に云吹ぎぶりなり、○一きくれ源仲正集、梢より一きくれして過ぬ也ふつえのもみちぬれもはてぬに、一さほりふるを云、○朝時雨、壬生二品集、爪木こる賤の衣のあさ時雨ほすもやよもむき空の山かせ、○夕時雨、廿一（宗久法師）、立かへるたのへの空にさそはれて又山めくる夕時雨哉、又待賢門院堀河い、たそかれ時のきくれとよめり、○小夜時雨、濟繼、さよきくれふる郷人も此ころや同し宇に袖ぬらすらむ、○うちきくるゝふは、里にチヨトきくるゝと云也、廿、わきて又くもるといなき村雲のゆきゝにつけて打きくれつゝ、○山めくりするとい、時雨の雲の山をつたひて過行を云、○きくれなやみ、萬六、秋いあま霧合きくれを疾み、○きくれこゝ地、帖、貫之、大空いくもらさりけり神無月きくれこゝちい我のみそする、なみたも落めへきを云、○時雨のつれ、萬十九、つれといならいし心也、○くれなゐの時雨、帖、紅のきくれふれはや石上ふ
あけ　日本紀に天陰をひしけとよめり日のをける也きくれと通すくれ反けて今も東國の俗いきけといひ西國の俗いきぐれといふさいへり○日本紀の歌にいきけをけくと見えたるい及の義也
あけ　寺家日本紀に見ゆ三代實錄に寺家、女赤須と見えて　寺の家人也武紀に寺家田地ともいへり西土にいふ寺戸也、
あけいさ　淑景舍也桐壺さいへり、
あけいさ　和名鈔に絁をよめり　惡糸と註せりふときぬにきけさいふも是也
あけき　繁木の義なり中臣祓に彼方の繁木か本と見えたり　後拾遺集に
みよし野い春のあけきにかすめともとよめり繁木い山にありこい都より必遠なれい也萬葉集に山遠き京にし有いきよみ彼方の赤土の小屋とよみしも山里の意也
あけこき　古事記に見ゆあげき也こき、反き也、
あけどう　号にいふ重藤と書りあげく卷意成へし、
あけのゐ　滋野井と書り勘解由小路と中御門との間の井なへり○地下に滋野氏あり盛衰記に見ゆ、
あけめゆひ　源平盛衰記に滋目結の直垂と見えたり　滋き目結なるへし、

をけやま　木の繁き山也神代紀に鬱山と書る同義也

をけらる　天降より轉して濕地なとにふる也をけ〳〵らも同じ

をけるる　繁きをいふ反て布を義通くり繰、宇波、宇も同じ意能をけるも青蔵貌を注せり○成をけるを名によめるは山の重るを一成二成をいふより出たる成くしくり楠正成あり諸にふ同繰、宮、神主友成も神主家にふるをけるを呼來れり鎖をよめるは重鎖の義成くし大友、義鎖あり○をこ　神代紀に龍男龍女、凶目なと見えたり見にくきものの名稱分區てをこといふ成くし萬葉集にも鬼なとより後撰書に凶龍之人と見えたり○常にいふ失誤の音成くし水滸傳に箇箇の字あり或は厄龍と書り足利殿の頃獵場の供奉にさゝやなくひの厄龍といふ時三議一統に見えたりさら也をこ

をこ　俗にふる自己の音也○をのれ自身也

をこそ　疏候の音なるくし延喜式に見ゆ

をことら　俗語也をこにこそらふる義にや○東國にをこと云物を義内にかゝへなるしを云記後にをこそを云

をこつ　新撰字鏡に諂なり人を誑惑するの義又強言の義を反つ也をこりくり止觀にも出たりをこりくり

をこつる　侯國軍記に白骨を見えたり

をこな　龍名の義也目、字をなけてよめる意也をこりくり

をこのえつて　萬葉集に鬼の四立手を見えたり

をこのくい　黄蘗の實也東國の方言よく胃蒸勞熱を治すをこりくり

をこのまうら　萬葉集に見えたり醜の丈夫也醜男なとふる成くし文をこほとゝぎすともよめり○又大君のをこの御楯と出立吾とも見えたりをこつ篇も同意也

をこふる　俗語に自業自得なとふくり

をこぶつ　醜木なるくし墻溝抄に物のけしき樣なるなとふくり日本紀に齋部、色非知といふ人あり龍神祠は愛宕郡八坂庄にあり

をこめ　日本紀に醜女と書り又應神紀より和名鈔に黄泉之鬼也と見えたり

をこめき　神代紀に凶目又凶目杵なとより醜女と同しからす汚穢を見て目をしかめる意也をくりの愛目幸〻目なとふる目へ是より出てかゝる目にあふなをくり

をこりこめ　萬葉集にをこりこめ也をゝゆ重將來哉の意也

をこる　源氏にをこりたるくし略語なるくし押疑の義也

をころ　兜鍪たくり鎧をよめり日本紀に頸鎧と見えたるを釋にたゞかぶとをくりと訓文にふれとこゝろなるくし正字通に訓文〝鎧鎖〟頸鎧也或曰荅之後罷者以〝首鎧之〟次〝放从〟理を見えたり鎖また鎖をおゝ字書の本義にあらす或ハ鋼鞣なとの字もまた考得す

をころな　堂舍の令に四方をころなをくり

をさゝい　子細を書り社詩北史なとに見えて俗語なるし楊升菴に見えたり○俗にをさらしらふは子細にするふりなるをふる也〻自在を書り王蕃傳に見ゆ鍼子を釣て低昂を自在にする意也西

那美命言〝今見し原吾〟即逃還〝穢母都志許賣〟志許賣、是伊邪那岐命見畏而逃還之時〝其妹伊邪那岐命言〝見辱吾〟即遣〝黄泉醜女〟追來〝故〝伊邪那岐命見畏而逃退〝乃其黒御縵投棄〝乃生蒲子〟即摭取而喫〝逃行猶追〝亦其右御美豆羅投棄〝乃生笋〝即拔食而逃行〝後亦追〝亦其左御手俱玉投棄〝乃生葡萄〝即摭食而逃行〝後亦追〝最後伊邪那岐命自往〝乃投大石塞其黄泉比良坂之口〝於是隔坐其石之両處而〝各戸度事戸之時〝伊邪那岐命詔〝愛我那邇妹命〝汝作如此者〝汝國之人草日〝一千縊殺〝爾伊邪那美命詔〝愛我那勢命〝汝爲如此者〝吾者〝一日〝必立千五百産屋〝爾自其日〝一日必死千人〝一日必生千五百人〝又一旋頭歌にもあまくもに雨のおり立ち時雨ふる吾妹の袖のそほつ也けり○時雨ふりたけるくれのあめのそほつ也けり○をこれの秋、萬十三長歌、九月四日具禮之手カキコシラヒ秋萩者云々、時雨のおり、萬十八長歌、又一旋頭歌にもあまくもに雨のおり立ち時雨ふる吾妹の袖のそほつ也けり○時雨ふりたけるくれのあめのそほつ也けり○をこれの秋、萬十三長歌、九月四日具禮之手カキコシラヒ秋萩者云々、

をけ　敷也、萬十、あを雪かたくにふりしけ、

をけ　繁茂也、萬三、櫻はなのこのくれをけに、同十八、たこのもこのくれをけにほとゝきすなきとよめるはたこのもこのくれをけにしけしけしき等の誤なるへし同冒歟、

重藤の弓　軍陣に用る弓也、將軍家並大將の持弓也、先重藤の弓下地のこしらへ樣に秘傳あり、其秘傳を云に、其人々の手にあひたる能を弓を引ひらきて、小刀にて弓の竹の上皮をこそけ去り、なしの所なる少けつりて平にすべし、なしたるつよけつのひらめたるよりなたるを聞、少しけつるくし、上皮をこそけさればうるし付ても後にうるしはなるゝ也、扨刀のきものの下地をまくさび皮をこそけさる皮にかゝるうるしをけつて、上より下地まで皮をまたくるゝ〳〵と巻くいおさへうるしにて巻也、小竹の粉を能ねりまぜつかふ也、右の如くして皮を巻てよくうるしたからして後に糸にてさび皮の上をまき、是もさび皮の上にさび皮の上をまき間なく巻くい、是もさび皮の上に

をけのゆひ　山家集、君をかにこまかにゆくるをけのゆひ立もはなれならひつゝ見む、

をけり　萬代集、かはらなる松のをけりの夏衣かさぬはかりに風そふきける、曾丹集、夏はきのたふしのをけりなるをそ秋來にけりとはさもあらなくに、

をこ　醜、をこにこそか詞にこそ、のるゝふにつゐにいくり、志許賣、をこふつ、をこほさゝ、をこのまうらの類ひ也、今俗に用る火体にをかをこといふ有り、これハ足に鬼の顔のおれハいふはゝ許賣のをこ訛詐也、我身を謙りてもいふ詞也、古事記上、於那美命言〝今見辱吾〟即遣〝穢母都志許賣、

をけ　敷也、萬十、あを雪かたくにふりしけ、

をけ　繁茂也、萬三、櫻はなのこのくれをけに、同十八、たこのもこのくれをけにほとゝきすなきとよめるはたこのもこのくれをけにしけしけしき等の誤なるへし同冒歟、

重藤の弓　軍陣に用る弓也、將軍家並大將の持弓也、先重藤の弓下地のこしらへ樣に秘傳あり、其秘傳を云に、其人々の手にあひたる能を弓を引ひらきて、小刀にて弓の竹の上皮をこそけ去り、なしの所なる少けつりて平にすべし、なしたるつよけつのひらめたるよりなたるを聞、少しけつるくし、上皮をこそけさればうるし付ても後にうるしはなるゝ也、扨刀のきものの下地をまくさび皮をこそけさる皮にかゝるうるしをけつて、上より下地まで皮をまたくるゝ〳〵と巻くいおさへうるしにて巻也、小竹の粉を能ねりまぜつかふ也、右の如くして皮を巻てよくうるしたからして後に糸にてさび皮の上をまき、是もさび皮の上に

をけのゆひ　山家集、君をかにこまかにゆくるをけのゆひ立もはなれならひつゝ見む、

をけり　萬代集、かはらなる松のをけりの夏衣かさぬはかりに風そふきける、曾丹集、夏はきのたふしのをけりなるをそ秋來にけりとはさもあらなくに、

をこ　醜、をこにこそか詞にこそ、のるゝふにつゐにいくり、志許賣、をこふつ、をこほさゝ、をこのまうらの類ひ也、今俗に用る火体にをかをこといふ有り、これハ足に鬼の顔のおれハいふはゝ許賣のをこ訛詐也、我身を謙りてもいふ詞也、古事記上、於

〔ヲヤシコメ〕令追云々、是以伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米志許米岐穢國〔イナシコメシコメキキタナキ〕而在祁理云々、後漢書七十上黄香傳、上疏讓曰云々、臣聞量能授官、則職無廢、事因勢施爵、則賢愚得宜、臣香小醜、少爲諸生、典郡從政、固非所堪、頻名おこう　伺候、今俗に伺公と書ハ僻事也、祇候ハ同しく返用う、後漢書六十八、候覽傳、督郵張儉因舉奏、覽貪侈奢縱云々、諸罪口請誅之、而覽伺候遮截、章竟不上、五色石第七、一面即治酒、在彼伺候、呂覽六季夏紀、制樂臣請伏於陛下、以伺候之、莫惑不徙、臣請死、

おこぶち　うつ保祭使、おこぶちにふるめきたるはこ、ふたつに、同同、塵添埃嚢抄一色非〔シコラチ〕、

おこる　萬略わがせこが來なんといひし夜ハ過ぬおもやさら〳〵をこりけるかも、をこりハおかありのかあの約かなるを許〔コ〕と轉してをこりといふかと翁いはれきされど穩ならず、信按に卷七かへりしきめのあきをこりとよめるをこりハおみごろの意にて今も俗言に頻といふ心の事ををこるといへり、こゝもおか有べし、

子細　宇治五、何事によりてさふらふそ、子細を申せと仰られければ、同五、事の子細いはせてきかんとて、源祭木、をのこしもなんしきいなきものハ侍

めると申せば、北史、源思禮爲政當舉大綱何必太子細也、朝野群載廿、大宋國商客事云々任先例子細言上如件、

おさく　浮祭使、おはやけのしさくさこしめさすとてすゝかせ、文十八十餘人仁壽殿に參るへきを云々、同同、例よりも興あるへきしさくなるへきたゝにすくさし、同、れいより興あるしさくなるをえ見過すましくたもほしつるを、

おさす　源うき舟、いとねふたし云々、つとめてのほとにもこれはぬひてん云々、をさしたるものゝともとりて具して、水丁にうかけなどして、うたゝねのさまによりふしぬ、

おさま　源祭木、きるへきものつねよりもこゝろとゝめたる、いろあひしさまいとあらまほしくて、同玉葛、いろあひしさまなどことなるをとゝらせ給へれは、源やどりき、ものゝしさまなどをそきようをつくし給へりける、

おさる〳〵　傘すけ集、〔未申ヲ〕みちのくの白河こえてあひ〳〵つしさる〳〵もゆけとはるけき、

おさわき　源まき柱、修法などしさわけと御ものゝけこゝたくたこりてのゝしるをきゝ給へは、同松風、にはかなる御あるしさわきて、

おゝ　密也、無間也、もと繁と同言、萬四、打なひきおゝに生なるなのりその、同九おゝに貫れ、

獅子　三代實錄(貞觀六年正月條)圓仁卒云てハ熊をおゝといふとそ　○獅子ハ音を用う又からおゝともいへり利未亞の地獅子多し雄鷄車輪の聲を長れ遠く遁るといへり　○香爐にいふ狻猊なり獅子にあらす　○出雲風土記に猪ノ像追猪犬ノ像其形爲石死ノ巽猪犬と見え伊賀阿拜ノ郡上柘植に社ありて石獅子をもて神體とす其形三尺許全く自然石也とそ大原來迎院の庭に獅子岩あり元亨釋書に庭上ノ大石變爲獅子と見ゆ　○南史に師子國、天竺ノ旁國也と見ゆ　○おゝくふむくひといふ諺も神宮にもいら猪鹿を忌よりいへるなるへし梵書の獅子身中の虫と飛しゝへるハ謬なるへし師子身中ノ虫の事ハ蓮華面經に見ゆ　○小兒の尿をいふもおとを重ねたるなり又小便を私といふ事左傳に見えたれハ此義也ともいへり雨森氏の説に二便をおゝばゝといふハ唐話也といへり　○師資の字ハ後漢書に見えてもと老子より出たり　○四至ハ四方の畔目をいへりとそ朝野群載に定四至と見ゆ四履も同し

おゝ　小兒の陰をいふ鉸也指似の音といへり腋も同し腋ハ縮也とも注すれハおゝむ義なるへし

おゝう　試周と書り元亨釋書に試周之日本註に宋俗迎兒産暮日行試業猶如本朝三歳試問と見えたり又國俗兒生三暮試問先身多有言也と見えたり今此事を聞す、

おゝう　時衆と書り一遍上人の宗派也嘗て隆圓溪に法を聞り遊行派ともいふ第十二世ハ後村上院の皇子尊觀法親王也よて清淨光寺の現住を南門と稱す南方の門跡といふにや　一遍上人ハ伊豫國河野七郎越智道廣か男也後宇多帝の時相州藤澤に清淨光寺を創むとそ。

云、開成五年入二五臺山一云云、亜レ至二北臺一雲霧滿レ山、路難レ尋、霧氣開霽、乃看二路前一見二一師子一、形甚可レ怖畏、圓仁却走二二三里許一、經二於小時一、更復進レ路、見二彼師子一、猶在二前路一、蹲居不レ動、更復却走二二三里許一、彌增驚恐、數刻之後、亦漸進行、師子猶不レ去、遙見二八來一、即便起立入二重霧中一、無レ復所レ見、西域記、温都斯坦、其西隅有二巨澤一、圍數千里、澤中有レ山、圍遶二千里一、山中産二獅子一、於二秋月皎潔一輒負レ雛於山中一往來、頭大而毛虬尾形如レ帚、黄質黒章如二虎皮一、長六七丈(丈誤)尺、鰊原書未詳)〇百錬抄八、師子頭七頭、自二院被一レ調進之一同十、建久六年五月廿日甲辰、貴布禰社立、國司堀出金獅子一頭云云

あゞ　進士、姿さが院、文はかせまるはしめてあゞより出たる人、廿人ぎそうもめしたり、

あし　自恣、維摩經四、菩薩品、我意謂是帝釋而語之言善來惱尸迦雖二福應一有不レ當レ自恣一當レ觀五欲無常、以求二善本一、注、生曰以供養而來、故善之也、從女踏レ歌是自恣法也、福有而自恣者、復爲二罪之根也一、法華經四五百弟子受記品、我昔欲レ令二汝得一安樂五欲自恣於二某年日月一以二無價寶珠一繫二汝衣裏一今故現在、

四十から　沙石集五、四十カラコヲ鳥ノカズヲレ、澡

あゞうでん　仁壽殿也といへり仁壽宮ハ隋書に見ゆ、

あゞかみ　枕草紙にあゞかみたるかみと見ゆ縮める髪をいふ也源氏にもわりなうあゞかみと見えたり、

あゝぐしろ　日本紀の歌に見ゆ萬葉集に宍串呂と書り繁釧の義よて美(ウツ)とも好(ヨシ)ともつゞけりといへり仙覺説にハ串に刺て炙る肉ハ其味うまき也と見えたり新撰字鏡に櫛を宍のくしと訓せり字ハ心得かたし

あゞくへ　新撰字鏡に攝ノ字をよめり字も訓も心得かたし、

あゝさけ　神武紀に牛酒と見えしハ漢文のまゝに書されたるものにて酒肉の謂也牛ハ神代より食ハさる事古語拾遺にも見ゆ〇四國にて山中に鹿の肉を腐したるをいふさを濁りこゝハ猪鹿をたとすの用とす、

あゝおもの　萬葉集に多くよめり鹿といふものゝ義也よて膝折伏ともいはひ拜みともつゞけり、

あゝた　萬葉集に猪鹿田をよめり山田の體をいへり荒木田の宍田とよめるも同し、

あゝお　宍道ハ郷ハ天平記に見ゆ出雲國也、

あゝとび　近江栗太郡大石村の川の岩かどするどなるをもて鹿飛處とす古へにいふ大石ハ關さくら谷なども此處を指り享保中湖水干たるに湖邊九十九浦より勢田川なさらへめ〇あゝとび草ハ蔥茹也といへり前漢地理志に茹水在二上谷郡茹縣一地多産二蔥茹一故名と見えたり、

あゞね　繁根の義貫之歌に葦のあゞねのあゝねやいすると見えたり

あゝびしほ　和名抄に醢をよめり肉醬の義也三代實錄に蟹ノ醢(シヽヒシホ)と見えた

醯草、あさまたき四十からめそたゝくなゝ冬こもりまるむしの栖を、

あゝかしらのかふさ　獅子頭(シヽカシラ)の冑(カブト)といふハ、冑のまびさしを獅子の面にこしらへたるを云也獅子の面を横平くまびさし一面に作りたる也、義家朝臣の像大將宮の像の古畫に見たり、眞十一

あゞぐしろ　枕詞　うまいねしとに、よみにまたんと、織體紀に、あゞぐしろうまいねしとに萬葉九に、宍串呂黄泉ヨミにまたむと、この宍串呂ハ借字にて、繁釧(シゲクシロ)の串成べし、さて紀にハ繁釧美しとほむる語を熟寢し時てふにいひかけ、萬葉にハ、同し釧を好とほむるを、よみにいひつゞけつゝ見ゆ、其あゞぐしろハ、錦を緻に著たる釧ありて、そういうま人の優ことなれば、さるほめことばも有ならん、冠

あゝしこうかす　源氏紫巻、秘抄あそひらかす也、痕ハあそひらかしてハ、落かゝる也、眠江入楚、世俗にあそひらかすといふ樣の心也、

あゝじもの　枕詞　いはひふしつゝ、ひざをりふせて、ゆみやかくみて、いはひをがまひ、みつくへごもり、萬葉二に鹿自物(シヽジモノ)いはひ伏つゝ、また卷三、神祭のうた、あゝじもの膝折伏せて、こは鹿の膝を折て伏るを、人の伏拜むさまに譬たり、卷六にあゝじ物弓ゆかゝみて云云、こハ獵場に鹿

り、

あゝひと　神代紀に宍人と見えたり皇代紀に宍人部あり魚肉を割烹する者の稱也されど死者の事に就ていへれい靈神を祭るに用うる成へし魏志倭人傳に始死停喪十餘日當時不レ食レ肉といへるハ喪主を指ていふ成へし

あゝぶえ　鹿笛也徒然草に女のはけるあしだにて作れる笛にハ秋の鹿必ずよると書り今ハ鹿の耳皮或ハ腹ごもりの皮を用う又蝦蟇皮を勝れりとするといへり太平廣記に以二鹿心上一脂膜作レ簧と見え遊志に七月上旬射レ鹿夜半令二獵人吹一角做二鹿鳴一既集而射之と見えたり

あゝまひ　日本紀に棲遑進退なさよめり繁舞の義なるへし俗語にあんまひならめといふ詩の進退維谷と同し源氏物語に　いとたひ君かあゝまひにまけめらん物ないひそといはめ頼みに一説にあゝまい死言の義なりあゝまひとかいれりともいへり〇獅子舞ハ陳氏樂書に唐太平樂亦謂二之五方獅子舞一と見えたり元史に伶人蒙采毳作獅子舞以迎駕と見えたり西涼伎も同し伊勢の國にハ諸社に師子頭ありて外宮の邊ハ毎年舞し他ハ數年を經て一度まいす事ありもと神前の師子狛犬より事起り隼人の歌舞を摸したるへけれといつの頃よりといふ事を詳にせず

あゝよゝ　時處位の三字也軍家にいふ是也、

あゝむら　縮をよめり繁緊の義なるへし新撰字鏡に蟠をあゝまるとよめりまるの反むなり、

を見つけて、のかさじとする體に譬て、流人をまもり卒て行たいへり、武烈紀にあをによしならのはさまにおゝしものみつくへこもり云云、はさまハ伊勢物語古本に後凉殿の間ハザマと書たるなどによるに、こゝハ奈良山の谷をいふならん、みつくへこもるハ、水濱隱の意なるを、氣を延てくへどハいふ、冠

あゝだ　猪鹿田也、萬十二、玉あへハあひぬるものを小山田のあゝたもるごとはゝしもらすも、

おじつ　事實、後漢書廿四、馬廖傳、斯言如戲、有切事實、前漢景十三王傳、(河間獻王)修學好古、實事求是、注、師古曰、務得事實、每求眞是也、

あゝなす　猪鹿之如也、萬十四、妹をこそあひ見にこしをまよひきの横山へろのゝらなすたもへる

あしふしん　師子奮迅、法華經五、從地涌出品十五、如來今欲顯發宣示諸佛智慧諸佛自在神通之力諸佛師子奮迅之力諸佛威猛大勢之力、

あゝふみたこし　猪鹿蹈起也、萬六、朝かりにあゝふみたこし、萬八、このをかにをしかふみたこしうかねらふ、

あゝまふ　日神武、捿遑(シヽマフ)すゝみかゐるをいふ、同垂仁、進退(シヽマフ)、源、末摘花、いく度か君かあゝまにまけぬらんものないひそといはぬたのみに、

あゝや　日本紀に獵箭をよめり後世いふ野矢也といへり○盛衰記に鷲尾か事を記して猿の皮のうつほ鹿矢あまたさしてと見えたり

おしやく　慈石の音なり續日本紀に近江ノ國獻慈石と見ゆ今諸州より出て信州の物上品あり方角を質す器を稱するも慈石を針につけたるなもてなり子午盤針是也磁針ともいふ羅經盤も同し蠻人呼てらうきんとす羅經の音なるへし石の頭ハ北を指し尾ハ南をさすをもて針の本に頭をすり末に尾をすれハ針の先北をさす也といへり、

おしゆかう　十種香ハ栴檀沉水蘇合薰陸鬱金白膠青木零陵甘松鷄舌の十香なるよし印海に見えたり今世にいふも是に本づけり、

あゞらき　倭名鈔に緘をよめり縮むるの意也桃花蘚葉にあゞらの綾見えたり今もあゞら島なといへり○海中にあゞらあり沙箸なりといへり、

あゝわき　和名抄に腋をよめり肉腕の義にや

○おすゐ　承久記に自水と見えたり自ら水に投するをいふ今入水といふハあらし○薪水を親くするを自炊といへり

おすゑ　尾居をよめり鞽子ハ青瑣之尻居也と見ゆ○俗におすゑなといふも是より起るか、

○おせ　日本紀に殺をおせまつるとよみ歌にも己か夫を殺すといふををゝおせんとゝよめり古事記の歌にいのちなをせたまひそ又めすみおせんとゝよめりおせを約めたる辭なり

おせつ　使節と書り節ハ節刀の節の如し符節の義也庭訓に入部ノ使節と見ゆ、

榮花音樂、樂所亂聲えもいはずれもしろきに、おゝの子ども引つれて、まひいてゝまちむかへたてまつるほど、增鏡けふの日かけ、法會のあしさまも、本社にかはらず、(鎌倉若宮祭ヲ云)、舞樂田樂獅子かしらやぶさめなど、所につけたることゞもしろし、

獅子舞　からおゝの頭を作りて、それをかぶりて舞ふ者也、今も越後國蒲原(カンバラ)村より獅子舞出る也、又大かぐらといふ者、獅子舞の類なり、(太平記卷三十、持明院殿吉野へ遷幸ノ條ニ、獅子田樂ヲ召レ、日夜ニ舞ヒ歌ハセトアリ)眞二

おゝみ　和名亦作蝘之々美、似蛤而小黑者也、萬六、住吉のこはまのおゝみあけも見すこもりてのみや戀わたりなん、○本草蠏、新撰字鏡蜆、小蛤、貝品に泥中の者ハ黑く、清水中の者ハ黃色とあり、

おおん　自身、後漢書廿三、竇憲傳、憲以單于不自到、奏還其侍弟、

おおやく　本草慈石、續紀元明紀、和銅六年五月癸酉令獻近江慈石、本草類篇、磁石、日本近江國淺井郡鹽津崎无時採之、沙石集九、磁石鐵ヲ吸ヘドモ、曲レル針ヲスハズ、

おゝらのねりぬき　昔ハ男も女も着る物也、のしめのねりぬきハ男の着る物にあらす、御成次第

おぜんえん　神泉苑の池ハ徒然草に見ゆ北史魏孝文帝紀に起二永樂遊觀殿于北苑一穿二神泉池一と見えたり、

おそ　榮花物語に大二のおそといふ物と見えたり江次第に大臣家ノ大纈蘇甘栗ノ使盛二折櫃一合一合、蘇大二小二一合、甘栗大八小八と見えたり西宮記に勘盃三四獻間差二飯汁物一裏燒藥甘栗さありて藥ハ蘇をさせり和名抄に蘇鹽煎さあるも是なるへしもと蘇酪なりしを後に紫蘇を用ゐしにや同書に蘇四壺とも見えたれハ或ハ四蘇の意成へし蘇ハ酥に同し○類聚國史帝王ノ部貞觀七年仁和三年の下に貢二蘇一と見えたり延喜民部式に凡諸國貢二蘇各依二番次一其取二得乳者肥牛一日一大八合瘦牛一減半作一蘇之法乳大一斗煎得二蘇大一升一と見えたり梵書に生蘇味を方等の時に喩へ熟蘇味を般若の時に喩へ醍醐味を法華涅槃の時に喩へたりかゝれハ蘇酪をいふ也合の典藥寮の下に藥ノ戶乳ノ戶西宮記に乳牛院ノ典藥ノ別所と見えたるも是也類聚三代格に和樂ノ使主福常習二取乳術一とも見えたり古へ畳に大小の異あり故に大といへりさて其用ハ內藏寮ノ式に正月最勝王經齋會ノ講讀師及僧綱各施二蘇一壺干姜三兩と見えたり請雨ノ法式に以二牛糞一塗二場地一以二牛乳酪及粢米一食請雨ノ法師といふ事大雲輪請雨經に見えたり又南尼華羅國崇二牛糞一といふ事三才圖會に見え咒師一日不レ食若不レ忍飢唯得食二蘇と馬頭ノ儀軌に見えたり○紫蘇の上品を花紫蘇といふちりめんと呼ふ是也○細素ハ俗俗をいへり

おそく　退く義也土佐日記に見えたり○後撰集伊勢物語に見えたるハ

故實に云、のしめの事、男衆の年よりたる人の自然めし候いんづる歟、御女房衆さへ年廿八に御なり候五月五日の午ノ時までめし候、其以後めし候まじく候云々、貞丈云、今ハ將軍家よりの御定にて、侍從以上ハあざらなを用ゐ、それより以下ハのしめを用る也、かやうの事ハ其時代〳〵の御定による事なれハ、是非ハ申がたし、貞三

あざらき　和名抄、釋名云、穀其形縠々視之如縠也、唐韻云、縠縮文ノ貌也、此間云之々良岐トアリ、字書ニ縠ハ縮也トミユ、シラギハ縮タル布、チリメンナドノ如クナル物ナルヘキニヤ、

あしよく　四職と云ハ山名一色細川讃州畠山修理太夫を云、又四殿衆とも云、書札禮節に見えたり、貞衡云、山名一色京極赤松を四職と云ならいへり、時代によりて違ある歟、侍所の別當を勤る也、貞四

あせたまひそ　日垂仁殺(シヲシ)ノ、古上、いのちハ莫死(ナシ)せたまひそ、

あそ　繒素(シソ)ト云事ハ僧俗ト云事也、繒(シハ)名シトヨム、黒衣ニテ僧衣也、素(ソ)ハシロシトヨム、俗人ノ衣ヲ云、黒カラヌ心ナリ、○會下(エカ)ト云ハ、一寺ヲ持タズシテ學寮ニ居ル出家也、貞二

あそ　築北本の雫、かゝるほどに大貳のしそたひたひ奉り給へは、のそむ人數しらず多かるに、侍從氏族の義なり

あそく　紙燭の音也、倭名鈔に見ゆ、類聚雜要に布紙燭見ゆ、唐書に以蜜淚漬紙繼之と見えたり、又脂燭と書り、出御の時殿上人の役ー御藏の調進するハ杉のほそ木を青紙にてまきたる也、○藻鹽草にあそく色ハめき紅たて紫なりといへり、

○あた　舌をいふあなふ義にやなどと同韻通せり、三才ノ舌といふハ漢書に見えたり、○筆華藥のあたハ贅をよめり、禮の集說に贅ノ筆之舌と見えたり、○下をよむハあたるの略なるへし、○歌にあたのたもひあたのなげきなどいふは心をさしていへり、○小舌ハ重舌の病也、又子舌ともいへり

あたい　自體の義辭退の義あり、

あだう　四道の儒ハ紀典明經明法算道也、職原鈔大學寮の下に見ゆ、紀傳ハ歷代の事實を考へ明經ハ經義を穿議し明法ハ法度を敎へ算道ハ算術の道をつかさどる、各其家あり、庭訓に紀典仙經儒者といへるハ仙經恐らくハ明經の謬なるへし、明法明行道さあるも明行道ハ算博士の事になるにやいふかし、

あたうち　跳舌の義也、あたつゞみともいへり、

あたうつ　新撰字鏡に咤をよめり、禮記の咤ノ食もあかよみならへり

あたがき　草藁をいへり、草案も同し、○受領の下書を小書出といふ、案也、○書の下書を粉本といへり、

あたがさね　襯をよめり、物に下襲とみえたり、袍の下にかさねるをもて名とす、後世いふ下着也、裾ハ此裾也

あたかた　下形の義をたおさいふか、如し源氏に世のたもしとなりたまふべきをあたかたと見えたり、

あたかため　童蒙頌韻に鞴をよめり、

あたがへ　衣にいふ下交の義なるへし、袋草紙に見ゆ、人魂ノ歌　たまハ見つめしハ誰ともあらねとも結ひとゝめつあたかへのつま此諺の歌古き口つきの歌にあらすといへり、○狹衣に　あくかるゝ我魂もかへりなん思ふあたりに結ひたましひの通ふあたりにあらねとも結ひやせまし下かへのつまとゝめよ返し　君こふとうきたる玉のさよふけていかなるつまに結はれわらん此等侍從歌　諺の意なり、

あたがふ　從順をよめり、下に仕ふる意成へし、遵も同し

あたく　支度の字、魏志に出たり、文集に支をたくはへとよめりたきての條にくわし、○私宅の字ハ宋文帝紀三代實錄に見えたり、

あたぐつ　新撰字鏡倭名鈔に襪を訓せり、下履の義也、今あたうづといへり、又韈に作る、袜も同し、束帶色目に小袖の時ハ練貫を染て用ゐ、宿老ハ白平絹の練ばりなりと見えたり、

あたくび　倭名鈔に胡をよめり、咽下の垂るなり

あたぐら　新撰字鏡倭名鈔に鞍をよめり、延喜式に毛韉(ビセン)皺文韉(シヤウモンノ)なと見えたり、今の切付也といへり、又和名鈔に韉を俗にいふ駒鞍と見えたり、○延曆十三年應禁斷韉皮鞦牛之用在國功要負重致遠其功實多今聞无類之流爭事驕修殺剝班韉競用鞍鞦及胡錄等之具爲弊尤甚事須禁絕、

中納言三位の中將の御あつかひのこゝろもとなさにのそみ給へは、ふたゝひとなり給ひぬ、同玉の村きく、　かゝるほどに、大貳のしそといふものたほやけに奉りたりけれは、われも〳〵とのそみのゝしりけるに、此中納言さはれやまてなりなましとたほしたちて、あそい大貳のつかさをやめんことをこふ文を奉る也、

祇承の官人　いせ物語、此男宇佐のつかひにていきけるに、あるくにのしそうの官人のめにてなんあるときゝて、大禹、謨祇承于帝ー

あそく　堀川後百ー元服、かそいろのともにいのればふたりさすまそくのかげに千世そこもれる、信云、此あそくハ紙燭なり、

あだ　今俗に、いきしな、來しな、山をこえしなと、いふしなに同し、今にても四國邊にていしなてふことをしだといふそ、萬十四、あふしたもあいのへたしも汝にこそよされ、是逢しな不逢しな也、楢

あだ　今うらおろと云、出雲國風土記、意宇郡、祇神島有ー椎松都波志木等草木ー也、歌林四季物語、ゆづり葉あだもみやまにありて、世の雪霜にもいたまず、おかも葉青めきたるものにて、春の色を、かれいこれになずらへて、たのゝ〳〵が身をいはひ侍る事なるへし、塵添壒嚢鈔、齒朶事、正月三用ルシダユヅリ葉ナント云文字如何、是毛惜ナル本說ハ不ー見侍ー其、齒朶ト書、ヨハイエダト書事須禁絕、

あたかた　下形の義をたおさいふか　如し源氏に世のたもしとなりたまふべきをあたかたと見えたり、

あたかため　童蒙頌韻に鞴をよめり、

あたがへ　衣にいふ下交の義なるへし袋草紙に見ゆ人魂ノ歌　たまハ見つめしハ誰ともあらねとも結ひとゝめつあたかへのつま此諺の歌古き口つきの歌にあらすといへり○狹衣に　あくかるゝ我魂もかへりなん思ふあたりに結ひたましひの通ふあたりにあらねとも結ひやせまし下かへのつまとゝめよ返し　たましひの通ふあたりにあらねさも結ひやせまし下かへのつま侍從歌　君こふとうきたる玉のさよふけていかなるつまに結はれわらん此等諺の意なり、

あたがふ　從順をよめり下に仕ふる意成へし遵も同し

あたく　支度の字魏志に出たり文集に支をたくはへとよめりたきての條にくわし○私宅の字ハ宋文帝紀三代實錄に見えたり、

あたぐつ　新撰字鏡倭名鈔に襪を訓せり下履の義也今あたうづといへり又韈に作る袜も同し束帶色目に小袖の時ハ練貫を染て用ゐ宿老ハ白平絹の練ばりなりと見えたり、

あたくび　倭名鈔に胡をよめり咽下の垂るなり

あたぐら　新撰字鏡倭名鈔に鞍をよめり延喜式に毛韉(ビセン)皺文韉(シヤウモンノ)なと見えたり今の切付也といへり又和名鈔に韉を俗にいふ駒鞍と見えたり○延曆十三年應禁斷韉皮鞦牛之用在國功要負重致遠其功實多今聞无類之流爭事驕修殺剝班韉競用鞍鞦及胡錄等之具爲弊尤甚事須禁絕、

ル祝心歟、○源平盛衰記十三、紫革威ニシナカハオトシ上ハ、藍皮ニ文ニシダヲ付タリケル、○慶長元秘傳抄、兼延、中心帶表、齒朶鎧ヲスリ裏ハ逆齒朶也、又曰、包永大鎗ハ齒朶鎧アラシ、

あたいてゝ　舌出而也、萬四、もゝせにいあたいてゝよゝむとも、老人の齒たち舌出て涎のなかるゝ姿樣

舌うち　宇治十五、芋かゆすゝりて舌うちをして、

あた風　拾遺愚草下、あしのかれはの雪の下風、

あたかた　あのひね上、大將こそ、あか〳〵のたまへれ、いとよきことにて、今世のかためになるべきあたかたなれは、何につけても、たのもしき人なるを、源若菜下、大將もまる世のたもしとなり給ふべきあたかたなれは、同藤裏葉、いとよくたほやけの御うしろみと、なるべかめるあたかたなるを、孟下地ヒ同し、源梅枝、御みつからも、物のあたかたをやうなどをも御らんじいれつゝ、（此モウハ繪樣歟、又榮耀にて、うはへのかさりなと云歟）源鈴虫、物の心もり給ふべきあたかたを、きこえおらせ給ふ、林葉

あたく　夫木抄八、をくろさきぬのねぬないふみあたきひゆふまゝに蛙鳴也、紀貫之集　鷲の花ふみあたく木の下いたく雪ふる春へ也けり、

あたくみ　仕計、竹取、たゝかふへきあたくみをしたりとも、

あたごゝろ　下情也、萬二、わかやとのけもゝのあた

あた〳〵　字治拾遺に今いねりまめのやうにあた〳〵となりたりと見ゆ、

あたしむ　親をよめり下染の義下ハ心をいふなるへし神代紀に篤愛もよめり

あたしもの　西土にいふ茹也といへり、

あたす　浸をよめり沉下の意成へし

あたすだれ　車にいふ眞名伊勢物語に帷簾をよめり簾のあたに白き絹二はゞ或ハすそ濃にしてかくるなりとそ和名抄に幌　蜻俗車簾車帷也といふ物なりといへり、

あたゝか　下懣の義にや或ハ健をよめり源氏に御詞いとあたゝかなる平家物語に弓の強きもあたゝかなるものと見えたり　○軍書に勇猛の徒をあたか者といへりといへり

あたゝむる　太平記に認をよめり字書に知也と見ゆ又揉をよむ字彙に調也治也と見ゆ下認の義なるへしいさよひの　日記に歌の雙紙ともをえりあたためと見えたり

あたゞる　日本紀に垂又垂落又滴瀝をよみ常に溜をよめり下垂の義なるへし零も同し新撰字鏡に淋をよみ雷をあめあたゝるとよめり、

あたお　和名鈔に墻壁頰に助枝を訓せり下筋の義なるべし功程式にも志達と見ゆ　○坏樸子をいふ下地の義也　○中山宮古島の間切にも呼り、

あたつき　延喜式雜菜の中に舌附と見えたり　○倭名抄に韓槖を訓せり舌不正也と注せり源氏にもさすかにあたつきにてと見えたり

に月夜さし下こゝろよしうたてこのころ、

あたゞみ　小螺也、日神武、神風のいせの海の大石にやいはひもとほるあたゝみの云々、萬十六、つゝあのしまのあたゝみをいひひもときて、和名小螺子、楊氏漢語抄、細螺之太々美、貌似甲螺而細小口、有白玉之蓋者也、○或說、伊勢よりぜゝ貝といふ貝いづこれならん歟、口訥るをせゝるともいふ、拾遺物名、あつまにてやしなはれたる人の子ハ、舌たみてこそものいひけれ、楢

あたゝむ　宇治拾遺三條中納言と云ありけり云々、醫師の申けるハ云々、朝夕の御飯を少しつゝあたゝめられ候て云云、今昔、眞盛射盜人條、其身ハ放出ハナチテノ方ニ居リ食シタメテ云云、○認、源松風、そのことも、今くはしくあたゝめんなどいふにも、こゝハ吟味して、あらへみる意にいへり、あのひね下、御身のあたゝめよくして、

あたで　滴、あたるをいふ、滴字を訓り、たるの縮ハつなるをもてにかよハしてもいひ、またあたれるの意なれハ、れるの反てともなる也、太平記四、百官罪なうして、愁の涙を配所の月に滴シタでと云云、太平記六、民部卿三位局御夢想の事、いはんや千行萬行の紅涙をあたて盡して、七日七夜の丹誠をいたさせ給へは云々、

あたてゝ　此辭古書の雅言にハ見えず、中世以後の俗言なり、さて又二意あるべし、まづ一ハ

あたつくに　祝詞に下津國と見ゆ上津國に對しいへりものつくにをいふなるへし、

あたづくゑ　天德歌合の序に下机と見ゆ、

あたつみち　日本紀に地道をよめり、

あたで　漉をよめり垂出の義なるへし、

あたど　源氏に見ゆ舌疾の義今くちはやといへり、

あたどぎ　鵜口瘡をいふ舌に粟の如き物のいつるなり小兒の疾也、

あたとも　自他俱の義也楞嚴經に分別自他と見えたり、

あだな　顯昭の說に舟のともの方につけたる板をいふ尻棚の義也といへり、

あたなが　詩に婦有長舌維厲之階と見え朱傳に長舌能多言　者也と見えたり

あたなき　古事記の歌に見ゆ下泣の義忍ひ歎くをいへり、

あたにをたもふ　下に物をたもふ也といへり、

あたね　下根の義蔬などによめり氷の下に在也、

あたのたび　束帶の下の帶なりといへり古今集にあたのたびの道と見えたり道の枕辭にいへるハ神代紀にいさなきの尊帶を投給ひしか長道磐神となるよし見えたり道路の神なれいなり、

あたのはかま　新撰字鏡に褌褶幅をよめり口大ノ袴と注せり裝束略抄に下袴と見え本儀綾也といへり

あたひ　萬葉集に下衣と見えたり私記に土ノ下ニ度ル衣也といへり暗澹の類也　○第にいふも下衣の義也第の服の中の衣に似たるなりといへり　○萬

吉野拾遺物語の松翁の奥書に、草庵の夜雨に、吉野の花の露をあたゝ、よしなしごとをかきつらね侍るゝ見えしい、花露をあたみてといふに似たり、硯水につかひしといふ意を、ふくめしにや、さらい滴字を用ゐて、水滴天滴の意なるべし、又西山上人傳に、老病をたすけ、翳膜をあたゝ、草記する事畢と見えしい、眼病をあひてつゞめし意なれい、推起の上略にや、今の俗にい、新たに物を作り出すを仕立といふも此意なれども、所出して叶はず、二意有と思ふべし、ものきてといふにかよへる所も有歟、義釋にせば、猶凌ともいふへし、依て思ふにあたくと云辭も、仕度またい支度の音語なりといふい、勿論たれも知所なれども、是も音語にいあらで、あたての轉訛にして、くさてゞ相通いして、仕度い仕立の意にやあらん、吾輩の習ひい、訓を專として、音語を好まねい、かくもいふのみ、あながちに強て說な作るにいあらず、吉野拾遺物語四、松翁與費、正平つちのとの戌の年の、其草の庵の夜の雨に、吉野の花の露をあたゝ、よしなしごとをかきつらね侍るこそ、ものくるほしけれ、案に此あたてゝい初に云如く、あたみての〔滴〕意に似たり、あひて推起てつゞれる意にい遠し、その比の方言にや、西山上人傳六、西山往生院上衍房の閑窓にして、老病をたすけ翳膜をあたてゝ、草記する事畢め、案に此あたてゝい、なし難

葉集に金山のあたひか下に鳴鳥といひ古事記に秋山の下氷壯士（ヲトコ）といふあり伊豆志嬢登賣を戀たる神也式に丹波、國船井郡志多比、神社出石鹿岨部、神社あり平氏太子傳に下氷、君新物ありされと下干の義後世あたもみおするといへる意成へしよそ又萬葉集に秋山のあたへる妹とも見えたり紅顏を譬へし語也といへり○下紐小川い伊勢飯高郡にあり下見橋も同所にて松坂の巽、方櫛田の西、方岸、江村の東南の小川是也齋宮群行に此に至りて驛鈴を止めらるゝよし江次第延喜式等に見えたり是參宮の古道にして今、道の東北也○萬葉集にいふ下檜山い津の國能勢郡にあり

あたひも　眞名伊勢物語に下紐と書り下ゆふひもともいへり下裳のこしをいふさそ祟神紀に衣紐をよみて帶なひもとよめれと下、帶の義なるへからず○人に戀らるゝ時下紐のとくるといひならいせり萬葉集より見えたり古今集に　めつらしき人なと見んともおもはせめ我下紐のとけわたるらん○相模集に　もろともにいつか解へき逢事の片結ひなる夜半の下ひもこい萬葉集に　ふたりして結ひし紐をひとりして吾い解見すたゝに逢までい伊勢物語に　二人してむすひし紐を一人して相見るまてい誰かしそれもふの意にて古事記に汝ヵ所堅（カタメ）之美豆能小佩（ヲビ）者誰解と見えしに本けり小佩も下紐也○花にいふい伊勢物語に見ゆ六帖に　伏てもひ起てなかむる春雨に花の下紐いかにとくらむ○下紐の關い奥州に在といへり

あたふ　古事記に見ゆ慕をよめり戀も同し從ふ意成へし

あたへる　萬葉集に秋山の下へる妹と見ゆ萎（シナ）へるに同し、

きをあひつゞめて、推起の意にや、眼のくらきをあのきてといふに似たり、是また時世の方言にや、類名

あたてる　萬十八、たちはなのあたてる庭に殿たてゝ、同十九、もゝの花あたてる道にいてたてるいも、

あたなきに　下泣也、忍なくをいふ、日九條、あたなきにわかなくつま、同、いたなかいひとりぬへしはさの山のはさのあたなきになく、楢

あたなやます　下惱也、萬十八、あたなやますに

舌なめつり　宇治十二、めをいからしあたなめつりをして、

あたなやます　下惱也、萬十八、あたなやますに鳥かなくあつまのくにのみちのくの、

あたにごる　下濁也、萬十四、あすか川下にこれるなあらすしてせゝとふたりさねてくやしも、六帖、刀根川い底いにごりて上すみて有けるものなさねてくやしき、

あたばへ　萬略十四、足柄のみさかかしこみくもりよのあがあたばへをこちでつるかも、くもりよの枕詞ならんと翁いはれき、されとこい心得がたし、信按こもりのめの有しを訛傳へたるか、卷九、こもりぬのあたばへたきてゝ有、こゝもわがい吾にて、あたばへい卷九に同しく、あたい忍び隱して物するをいひ、はへい女を思ひかけて妻問する事といへり、

あたひも　下ひもとも云い、小袖の上に結ふ常の帶の事也、裝束を着されい裝束の下

あたみ　延喜式倭名鈔に鏡をよみ新撰字鏡に笓鏤なとをよめりまたむ器也今安藝にさいへり丹波丹後にいとこ遠江にゆかけ越後信濃上野にほてといふ、

あたむ　童蒙頌韻に醯をよめり汁醬（ヒシホ）の義なるへし日本紀に遯もよめり、

あだん　元亨釋書に師檀と見え盛衰記に師旦の契といへるも僧俗の事也御師檀那の義なるをもて伊勢兩宮の祠官家にもはらいふ言いとなれり、

あため　祝詞に天下を知しめさん事のしためと見えたり、

あたも　顯昭の說に女の紅紫のはかまなといふはきぬの下にきれいあたき裳といふなりと見えたり遊仙窟に紅の褌と見えて褌をあたもとよめり新撰字鏡に褌をあたのはかまとよめり後宮名目に御ゆぐの事にて末〳〵にていたゆもおなと申侍るい無下の事也爲家よみ侍る歌にも對の宮をいはひたてまつりて御產湯ひかせたいしまし侍るとき　波よする松の下葉に萬代となれてきならせ友鶴の聲、

あたもえ　下萠の義拾葉の下にめさしたるをいふなり○下萌の少將と呼い一條院の時の官女也夫東に下りし比　下もゆるなけきをたにもきらせはやたく火の神のもるしはかりにとよみしより名を得たりといへりたく火の神い隱岐にませり、

あたもみぢ　山の下紅葉松の下もおなとよめり、

あたらか　文選に緊滑をよめり垂らかの義成へし

あたらでん　梅村載筆に震動雷電といへり今もあたらいてんともいへり

になる故、下ひもとも下の帯とも云也、下ひも下の帯ハ、古歌にもよみたり、今俗にふんどしの事なり、下ひも下の帯と云ハあやまり也、（はたの帯と云へし、下ニ見ゆ、貞三

あたひもの　枕詞　ときの郡、仲文集に、旅の道ゆく人、美濃の國土岐の郡といふ所にやどりて、むすびたきし人やとらん下紐のときのこほりにたびねしつるハ、是ハ裝束の下かさねの紐を、あひ寢の別れのあした、女の手してむすびて、あふ迄とくなとゆひかたむる事、いにしへのならひと云り、よてやどれる所の名につきて、彼むすびし人ハ、あだし人にあふさかに、ときの郡の、ときの郷に、やどれるかといへり、いとねもしろく旅の情をよめり、續冠

あたべのつかひ　下邊の使也、黄泉の使をいふ、萬五、わかけれハみちゆきさらすまひせん下へのつかひ負ひてとほらせ、

あたまつ　裏待、下心に待也、うらまつハ裏心に待也、裏をうちともあたともいふも、みな同し意也、ぬえ鳥のうらなきをると萬葉によめるも、下聲に鳴事也、あつ心なく花のちるらんも、下つ心なくの意也、蜻蛉日記中、是見給ハざらんほどに、さしたきて、やがて物しねとをしへたれハ、さまつとて歸りたり、をしみたる氣をもやとあたまたれけんかし、夫木抄二、きのふまてさえし山水ぬるけれハ鶯の音そ下またれぬる、類名

あたむ　山家集、みるもうきハ鵜縄ににごるいろくづをのからかさでもあたむもおもあみ、信云、あたむハ漉すやうの意の詞ときこゆ、

あたん　紫檀、源氏やどりき、ちんあたん白かねこかねなど道〳〵のさいくとも、

あたゆこふれハ　萬十二、こもりめのあたゆこふれハすへをなみ、

あたよのこひ　萬十、藤浪のさける　春野にはふ蔦の下夜のこひハひさしくもあるか、古下、こもりつの下よはへて、○或説、下夜ハ下延の誤にて、あたはふこひなるへしといへり、あたはふ戀ハ人あれすれともひあたふこひなるへし、檜

あたらうつ　太神宮雜例集に見ゆ、信按、拍子うつことなるへし、俗言にあたらなしと云ハ、ほど拍子のあはぬを云ふ也、古本神樂歌の文に、設樂堪能人云々、神宮記二宮大鏡の條に、設樂人半ニ張於南庭ニ云々これらハ設樂、シタラの由と聞ゆ、猶考へし、

あたり　乖　あたるといふを延ていふ也、黒皮をくりかはといふが如し、あたり尾あたり　柳の類ひ也、金槐集、三熊野のなきの葉あたりふる雪ハ神のかけたるあてにぞ有ける、

あたりやなき　本草柳、萬葉十、百磯城の大宮人のかつらけるあたり柳ハ見れとあかぬかも、延喜彈正式、凡神泉苑廻地十町内令ニ京職一栽ニ柳

あたを　倭名鈔に前夫をよめりもとのをとこともいへり　今もまたおのをとこなどいふめり

あたむ　山家集、みるもうきハ鵜縄ににごるいろくづをのからかさでもあたむもおもあみ、信云、あたむハ漉すやうの意の詞ときこゆ、

あたん　紫檀、源氏やどりき、ちんあたん白かねこかねなど道〳〵のさいくとも、

あたゆこふれハ　萬十二、こもりめのあたゆこふれハすへをなみ、

あたよのこひ　萬十、藤浪のさける　春野にはふ蔦の下夜のこひハひさしくもあるか、古下、こもりつの下よはへて、○或説、下夜ハ下延の誤にて、あたはふこひなるへしといへり、あたはふ戀ハ人あれすれともひあたふこひなるへし、檜

あたらうつ　太神宮雜例集に見ゆ、信按、拍子うつことなるへし、俗言にあたらなしと云ハ、ほど拍子のあはぬを云ふ也、古本神樂歌の文に、設樂堪能人云々、神宮記二宮大鏡の條に、設樂人半ニ張於南庭ニ云々これらハ設樂、シタラの由と聞ゆ、猶考へし、

あたり　乖　あたるといふを延ていふ也、黒皮をくりかはといふが如し、あたり尾あたり　柳の類ひ也、金槐集、三熊野のなきの葉あたりふる雪ハ神のかけたるあてにぞ有ける、

あたりやなき　本草柳、萬葉十、百磯城の大宮人のかつらけるあたり柳ハ見れとあかぬかも、延喜彈正式、凡神泉苑廻地十町内令ニ京職一栽ニ柳

あたをふるふ　事を肯ハぬにいへり唐書に掉舌以爲ニ不可一と見えたり又怖るゝ意にもいふ舌ぶりとも見えたり、

あたをまく　漢書に禮宜博士卷ニ其舌一而不レ談と見えたり、

○あち　桓武紀に見ゆ質の音也十訓抄にあちにたくものたかりつゝと見えたりもとハちの音也又贄と同しにへ也　あつの時ハ氣質也　○質物といふ字書言故事に見えたり○あちやハ典舖也、

あぢ　新撰字鏡和名抄に、楊をよめり車の床くびきをもたる具なりされど楊字ハ車にのみ限るへきにあらす唐韻に床也と注せり

あちく　紫竹也續拾遺記に見えたり、

あちたう　七島と書り薩摩國に隷す岡書にもあか出たり七島關七島たりてなといへり、

あちたんくさ　七段花也甲州に重てまりといふ邊筆柴也といへり花の色みどりにして四出一房に數百花つく葉莖ねばりて衣につけばはなれがたしといへり、

あちぢうさう　七重草也花に五色藤に咲分ありて七重までに咲り伊豫にて九輪草といふ、

あぢのはしがき　昔し男の女をたもひかけて九十九夜まてかよひて車の楊に數を書たりしか百夜に滿る夜さいる事ありて逢すなりにし故事なり俊成卿臨期變約戀の題に　たもひきやあぢのはしがき書つめて百夜も同しまろねせんとは

おちめ　俗語也質面也といへり、

町別七株、眞俗交談記、神泉苑云云必栽ル柳事、其由如何、爲長云、栽ル柳事本文非一、先柳者陽樹也、典春方池畔要ル栽ル柳云云、錦繡記云、青龍降ル種化爲ル柳云云、然間被ル栽ル柳也、著聞集、嘉保三年正月晦日、殿上人船饗ニて花を見けるに、齋院選子より、柳の枝を給はせけり、人々これを見けれハ、いとのもとに、はこかゝれたりけり、枕草紙、なまめかしきもの、柳のもえたるに、青きうすやうにかきたるに、文つけたる、明月記、嘉祿三年三月六日、終日無事、對ニ垂柳ヲ永日空暮、閏三月十六日、前修理權大夫請取ル柳枝ヲ、及暑氣定枯歟由、雖ル答猶送ル使、伊取ル冷泉柳枝ヲ送之丁、自往年依ル愛ニ垂柳ヲ多爲ル人被ル請取己所々老樹云云、東鑑、建仁二年壬戌二月廿日乙未、相模國積良邊有ル古柳ヲ名木之由就ル令聞給ヒ、爲ル移ニ植于鞠御壺ニ渡ル御彼所ニ、廿一日丙申、左金吾還ル御鎌倉ニ、件柳被ル引之ニ、即被ル植ニ石御壺ニ内ニ、行景奉ル行之ニ、但非ル良木之由云云、東關紀行、古武藏の前司（泰時）道のたよりの露に仰て植たかれたる柳もいまだ道のほとりなれるもあはれなり、吉野詣記、西大寺にまいりて、かの僧正遍昭のいとよりかけてとよめる柳むら〳〵みえたり、源塵愚按抄、あんきやうハ新京也、すさかハ朱雀門なり、

○あちや　生誕七夜の賀ハ令に見えたり又三夜五夜七夜或ハ二夜三夜四夜五夜七夜の賀儀など東鑑に見ゆ又生産後三日湯始と稱して賀するあり、

あちやう　使廳と書り撿非違使の廳也又園基にいふは四張の義にや征ノ字を譯せり○紙帳の字事文續集に見えたり、

おちやう　仕丁也日本紀につかへのよぼろとよめり使令の夫役御臺所にて諸事に仕ふる下部也○海人藻芥に裝束ハ親王大臣家ハ退紅公達等ハ白丁也と見ゆ、

あちよう　伊勢物語にいとまめにおちようにてと見えたり眞名本に實用と撰られたり、

あちりん　嬬の類ないふ七厘也藥を煮酒を煖むるに便利なるをもて炭の價銀七厘にして足るをもて名くといへり、

○あづ　賤民をいふハ沉淪の意にや又下男下女を略していふあづ枝あづ鞍の如しといへり萬葉集に倭文手纏いやしき吾ゆゑとやあづたまき數にもあらぬをよめるハ倭文に賤をかねてよめるなり○倭文をよめるハ沈の義萬葉集已下いにしへのあづハたの帶いにしへのあづのをだまきなど古へとよみ來れり今いなき物ゆゑなるへし釋日本紀にも正中御飾記にもそのものされがたき旨見えたり○物の鎭めをもいふ機の錘（おもり）をいふ類是なり所謂鎭子也源氏の抄に鎭帷扉など見えたり○東國の俗ことをあづといへり

あづうた　古事記に志都歌之返ノ歌也と見ゆあづハ靜なる義にや反復してうたふをもて返ノ歌といふ成へし後に至てふりを定めて其部類を名けて

あたゞ　下繪、思ハのまゝの日記、御屏風の下繪色紙歌のごとくは、

あたゞましけむ　人されすゝみをふくむをいふ、萬六、あたゞましけむ家ちかつけハ、

紫竹　本草啓蒙、和名カンチク、人家ニ栽ル籬ト、小竹すり、高サ五六尺甚繁茂ス、冬月筍ヲ生ス、家中竹馬記、鞭ハ常にハ、竹の根の鞭よし、又紫竹の鞭ハ公方樣の御持ある間、たゞの人ハ不可ル持、貞丈雜記、竹の根鞭、紫竹の鞭差別事、元來紫竹ハ和物也、色もむらさきいろ也、此根をむちに作るを紫竹のむちと云也、淡竹ハむちになる物にあらず、竹の根むちハ古竹の根也、本草綱目、其根鞭喜行ル東南、此竹俗に云古竹也、此古竹の根をむちにするゆゑ竹の根むちと云ふ也、今用る竹根むちハ近江國栗本郡草津より出る、本ハ美濃國より出るを草津にて、むちにこしらゆる也、

おちだん　實談、おつだん、鄧析子、夫言ハ棄不ル若ル辭、非ル誠辭也、得不ル若ル失、非ル實談也、

あちまいきしやう　七枚起請と云事、牛王ゴウのうらに起請を書く事其始詳ならず、義經記卷の四、土佐房義經の討手に上る條に、土佐房申けるハ、かやうに人のむちつを申候にたいてハ、私にハ申ひらきかたく候、御めんかうふり候て、起請文をかき候ハんと申けれハ、判官神ハ非禮を何歌とはいふにや又あづ歌とはかりも見えたり

あづえ　古事記にみゆ下枝也をたゝともよめり、

あづか　神代紀に寂然又閑靜をよめりあづまるもあづまるなれハ鎭と同し新撰字鏡に愔をあづけしとよみ又瀟をも點々をもよめりあづけしハ萬葉に見ゆ源氏にあづやかとも見えたり○義經のたもひ人靜ハ勢州濱村の白拍子也舞の唱歌ハ後惠法師の作なりといへり吉野山藤尾坂ハ靜を擒にせし處なり

あつかい　悉皆の音也西土の書に多く皆悉と用う、

あつかり　おかるの俗語也物の慥に堅固なる意にいへり、

あづく　雨露の滴をいふ萬葉集にあづく白玉あづく石などいへるハ用にいへる詞なりそれに沈字を書たるは點滴をいふも此義也雫字ハ字彙補に見えて義をかけり雨雪の意なくても雫とよめりよて六帖に雫を一の題にたてたり○古今集にあづく花の色とよめるハ顯昭説にうつる意也といへり定家卿ハひたるやうにて水波にゆられてかくれあらはるゝをいふといへりされハあづみうくといへる訓義にや○滴の田居ハ筑波山の麓に在て雫にて田を作るといふ萬葉長歌に出たり

あつくい　石灰の唐音也といへり石敢當をあつかんたんとよむか如し石敢當ハ當門神也今あつくいと稱するハ本草に以ニ麻筋和ニ油石灰ニ爲之と云是也、

あづくら　倭名抄に移畝をよめり下つくらの義也萬葉集にもあがこまにあづくら打置とよめり

うけ給はすといへば、とく〳〵起請文をかけゆるすへしとの御諚にて、熊野の牛王七枚にかゝせ、三枚は八幡宮にたきめ、一枚は熊野に納め、今三枚は土佐房が五體にたきめよとて、燒て灰になしてのみにけりとあり、この義經記は義經の時に書たる物にあらず、後に書たる物なれども、古書なれば證據とすべし、七枚起請牛王を用ゐる事ふそき事なるを知べし、（義經記は作者知れず、其文體いかにもふるし、鎌倉將軍の末の代ごろなどに記たる物なるべし、）頁九

あつ　倭文（シツ）てふ布の事は、神代紀に倭文神建葉槌命云云、古語拾遺に天ノ羽槌雄ノ命（倭文ノ遠祖也）織二文布一（アヤヌノ）といへり、萬葉十一に、いにしへの倭文はたびをむすびたり云云、古の狹織（サオリサナタ）の帶を結びたり云云、（此狹織は即倭文の狹く織たるにて、帶に用ゐん爲とみゆ、今さなだといひて、細き紐あるも狹み織の意也、）延喜式神賀詞に、倭文能大御心モ云云、臨時祭式に倭文二端（長各一丈四尺廣二尺二寸）とあり、これらは衣とすれば、はゞも廣し、且上つ世のまに〳〵後に神にも獻るなりけり、さていとも上つ世のはた物なる故に、萬葉にすら、古へのあつはたとよめり、且皇朝の古へ文ある布は、たゞ是なる故に、げに文の布ともいひつらん、其文の根は釋日本紀、かの古語拾遺の文布の

あつくり　おぐもの俗語也おくび合たる意にいへり、

あつけ　禮容を敬るをいへり摸をよめり躾ノ字は倭の俗字也ぶしつけたる事あつけぬ事などいへる同意なれば作者の義なるべし將軍義滿公の時の禮書十二卷これをあつけがたの書といへり　○衣服にいふも同義なり　○尻付の字名目抄に見ゆ　○北山抄院ノ宮御給の下に其助若允（スケ）謂之尻付（ヤウ）といへり、

あつけ　習氣の音といへり習氣は梵書に見ゆ四教儀集解に習ハ即慣習氣謂ニ氣分一とあり　○口語にいふ濕氣の音もあり、

あづこゝろ　後撰集にあづ心かなとよめり鎭心の義出雲ノ國造神賀ノ詞に倭文の大御心といへる是也あづ心なくとよめるはうかれさわぐの意也靜心の義也

あつこし　俗語也あつけ濃き意にやあつしともいへり下總にてあくけないといふ、

あつお　執事也北條の時問注所執事政所ノ執事見えたり管氏の時も執事の職あり、

あつし　十死日也凶日也す　○十死一生の語は賈子新書に見えたり、

あつさく　服にいふ直綴の訛音なるべし褊綴とも稱せり褊衫より出たる名なるべし又十德と書るより八德の制も出たるなるへし亨祿の比より侍の服にも八德を用ゐし也出羽にて羽織を十程と云も十德の訛音にや　○大雙紙に十さく古へは葛をおろくとも又黑くとも用ひ上に帶をす　又奉公人なと大追物の見物なとの時素襖袴の上に十さくをきえほしをもたすもし呼入

事を稟て、次にはく、建久ノ諸祭與行之時、大藏省年預申狀、有青筋文之布一也と、これぞ實に古への物と覺ゆ、其筋とは後世に島織てふ物のさまなるべし、或人此倭文を着る故に、賤きものを、あつさいふといへるはわろし、武烈紀に大君の御帶の倭文はた結ひたれど有からい、やんごとなき御帶云云、倭文は古へいやしき物とせざりし事知べし、賤の男賤の女は下づ男下づ女の意にて、語の意ことなり、冠

あつこう　膝行と云はひざにてあるきはひ出て又はひ退く事也、貴人の御前へ進み出るにも退にも、御前近くにては立て進み退くは無禮なる故、貴人よりこなた退立て行て、扨座しつくばひ手をつきて、ひざにてはひ寄りはひ退く也、三手三足（サンケ）ばかりはひ進む也、退く時も同し、（吉部秘訓抄云、膝行三度注先進左膝（跪也）次進右膝次左膝調ノ窠同所、次進左膝次窠調右也、達幸故實抄ニ曰、壽永二年四月八日灌佛膝行三度、注先右次左次右相均落居也、新注弁官抄云、膝行者一說ニ付ニ膝於板敷一、天引進是常事也、）頁一

あつく　今昔廿七、僧これを聞て、けにも故ある事也、かばかりいふ人を、あつくあはんといふも心なし、俗にいふあつこくなどいふ意なり、又水に浸す心なる有り、夫木抄六、藤なみのかけなる海の底

らるれい十德をぬきてえほしをきて出る十さくは禁制の內なりと見えたり中山傳信錄に醫官王宮執茶役者司濯園者皆全剃ノ髮戴ニ黑色片帽一外多着ニ短掛一領ニ比大衣一略短二三尺許黑色といふものも褊綴を指ていふなるへし　○蝦夷人の松前領主へ見參の時十德を着すと大雙紙にいふか如きにや、

あつさり　おさやかの俗語也深沈の意にいへり

あつぬき　萬葉集に倭文帛と見えたり倭文を帛とする也又神の社にてる鏡あづにとりそへこひのみてとも見ゆ

あづのいはや　靜ノ窟也萬葉集に生石村主眞人詞（オホナセノスクナヒコナ）大汝小彦のいましけんあづの石室といく世へにけん、元亨釋書に生石大神に作る今石ノ寶殿といふ播磨にあり今もまた二神を祀れり又攝州武庫山の頂上にも石ノ寶殿ありといへり、

あづのをだまき　古今集にみゆ倭文の苧環の義倭文布を織ん料の卷子（ヘ）也是を萬葉集には倭文手纏とよみたりよて數にもあらぬさつゝけ賤にかりていやしきをもよめりさて倭文ハ古へ御物にも用ゐたれハ必しもいやむ物にはあらすといへり○式子內親王の歌に　それならば昔にもあらぬ秋風にいとゝなかめをあつのをだまきとよめるハ昔を今になすよしもかなの古歌の末をいひのこしたる也といへり

あづはた　倭文機の義日本紀の歌に大君の御たびのあづみたゝよめれハ專ら貴人も着たまへりよて神に奉れる也貫之集に　あづはたにみだれてもふ戀しさにたてぬきにして織る我身かな○あづはた山ハ淺間のよし那波氏東

清みあつく石をも玉と我見る、

あづく　信按、萬十九、底きよみ之都久いしをも、催馬樂、榎の葉井、之良太萬之川久、古今、水の面にあつく花の色さやかにも、遠鏡云、あづくは物の水中に見ゆる也、萬葉に多し、其歌どもを考て知へし、然るを或ハ沈浮也と云ひ、或ハ沈也と云ハ、皆ひがこと也、萬にまれに沈とかける處のあるハ、借て書ける字也、たゞ沈むことをあづくと云へることなし、萬十一、淡海の海沉(シヅク)白玉、又廿、豆久志奈流美豆久白玉とりてくまでに、とある、美豆久ハ、みづく戸なぞのみづくにて水濱なるべし、水を志ゝも云へば也、都久も水濱の義にて、それより轉て物の水中に見ゆることをも云へるにや、

あづくがつゆ　雫之露、露あづくといふに同し、あづくの露かされていふ也、大伴家持卿集、妹かためいつれの梅を手折とて雫か露にぬれにけるかな、類名

あづくら　下鞍也、萬五、あかこまにあつくらうちおきはひのりて、和名鞜之太久良、○字鏡鞜鞍也之太久良、○拾遺實方朝臣、みあのくくたり侍りけるにあたくらつかはすとて　東路のこの下くらくなりゆかハ都の月をこひさらめやハ、下枝をあつえといふかごとし、

あつけ　あづ心なきといふに同し、下つ氣也、源海道紀行に見えたり風土記にハ駿河安辨郡に入て或ハ青葉ノ岡といふよし見えたり

あづはたたひ　倭文機帶の義也萬葉集によめり日本紀の歌にみたひのあづハたと見えたり一說に賤か機たるとて腰にまく帶なりといふハ非也、

あつばり　あば〳〵の意より轉せる成へし切字の意也、

あつへい　漆篦也といへり庭訓に竹篦あり字書に篦ハ去ニ髮垢ニ者也と見ゆ禪家に人を打物にいへり、

あつへし　文に可ニ賦ヲ得ニあつへし可ニ善ヲ得ニよくあつへしとよむハあつ反すなれハ語を延したる也、

あつぼうながし　七寶流の義大食密也典籍便覽に以ニ銅作ニ身用ニ藥燒成五色ノ花者與ニ佛郎嵌ニ相似と見えたり、

あつぼく　蠻語なるへし或ハ卓袱の唐音也といへり又卓子をよめり文膳(ブンゼンチヨ)をよめるハ孟子の食前方丈によれるにや又八仙卓(パンズエチヨ)を訓す八仙人に据る也高三尺餘幅四尺餘四方朱漆にて塗て綠に斑竹を打四隅に獅子の形の脚あり廻りに紅白の紗綾を垂る卓下に餕餘の物又皮骨などを入る器を置く是を倭斗(ワアタロ)といふ○精進の料理を普茶といふ○巴旦國に漂流せし者かへる時に舶を造る其材其土にてあつぼといふ木なりとそ、

あつぼり　あぼるの俗語也人の氣象にも物語のしなにも雨氣のふしにもいへり、

あづまつき　賤間月にや五月をいふ也、

あづまります　古事記に見ゆ鎭坐をよめり今音にても唱ふこゝに留り坐

公忠集　春の日の長閑き浦にてく舟いみなそこさへそあつけかりける、

あつけん　實撿、明月記文曆二年六月九日、金吾來、武士猶不ニ歸、兩社所論之堺、雖ニ遣ニ實撿使、南京使不ニ來、不ニ遂ニ實撿ニ歸云々、

あつすけ　下當也、萬、はし立のくらはし川のかハのあつすけ○下當にてひくき官成へし、

あつせつ　實說、あつせち、明月記天福二年八月五日、一昨日火事實說、烏丸西油小路東七條防門南八條防門北拂ニ地燒亡、土倉不知ニ員數ニ云々、

あつこゝろなき　無下心、あたつ心なき也、靜也といへるハかへりて遠し、平家盛集　櫻花にほふを見つゝかへるにハあつ心なきものにさりける、源敦忠集　いつとなくあつ心なき　我戀のさみたれにしも亂れそむらん、類名

あづたまき　枕詞　數にもあらぬ、いやしきわがゆゑ、萬葉四に、倭文手纏(シツタマキ)かずにもあらぬ身を持て、この倭文てふ布を織ん料の苧たまきハ、數多き物故に、數とつゞけて、わが身の人數ならぬをいへり、同九に、倭文手纏賤きわがゆゑ云々、この數ともいはで、直に倭文の語を賤に借て、即いやしき吾身と詠たり、あか解こゝハ、古今集に、古への倭文の苧環いやしきも、と有ても思ひむかへて也、歌

て他處へ遷往給ひそといふ事なり出雲風土記に大穴持ノ命詔ク八雲立出雲ノ國者我靜ノ坐(イマセ)と見ゆ遷却崇神祝詞にも見えたり○崇神紀に鎭坐をすうとよめるハ忌冝に就ていへり、

あづみや　神賀祝詞に見ゆ忌清まいりて皇神を鎭め奉るといへりよて忌(イハヒ)靜め仕奉と受たり、

あづむ　沈をよめり下に積の義にや　○鎭をよめるも義同し神代紀に平定もよめり

あづり　神代紀倭文をいふあづたりの略なりおりの下にくはし

あづりのゆき　軒端などより積れる雪の落るをいふといへり靜下の義なるへし

あづわ　鞍にいふ後津輪の義前津輪に對へていふなり

○あて　而ノ字爲ノ字將ノ字なとをよめりあて反せ也如是せよといふ辭をかくしてともいへり文にて而ノ字之ノ字ともに斷て連る字にて之ノ字ハ語直につゞき而ノ字ハ語折てつゝくといへり眞名伊勢物語に左ノ字を而の義とするハ甘心せられず○物の上手なをあてといふハ師手也能なとに師手脇なといへり盛衰記に知康(トモヤス)いくさやうのあてゝいの上手にてつゝみ判官と異名にとひけりと見えたるも師手弟の義なるにや

あて　日本紀古事記に垂をよめりたれ反で也木綿しでなどいふ是なり又榊葉に木綿取あでゝとも見ゆ萬葉集に鎭ノ字もよめり西行法師が　かしこまるあでになみだのかゝるかな又いつかもとれもふ身なれいとよめるも木綿あでをいふなるへしいつかもハ加茂ノ社をかねたり薙髮ノ人の拜所ハ棚尾ノ社也

あつと　嫉妬、法華經八、惣發品、是人不爲三毒所惱、亦不爲嫉妬我慢邪慢増上慢所惱、文選雕蟲經、恕己以量人分、各興心而嫉妬、注、王逸曰、害賢爲嫉、害色爲妬、

あつはた帶　萬十二、いにしへのあつはた帶なむすひたれたれちふ人も君にはまさし、同三、あつはたの帶ときかへてふせやたて、○あつはた衣、夫木十四、みやまふく秋風さむみあつまやのあつはた衣いまそうつなり、

あつめ　鎭也、萬三、ひのもとのやまとの國のあつめともいます神かも、萬二、このわかこころあつめかねつも、日前宗重卿曰、築立柱者此家長御心之鎭也、

あづる　俗言ニツレオチルト云ハ、此シヅレノ上略カ、爲忠朝臣百首、あさまたき松のうはゝの雪ゐみん日影さしこはあつれもそする、同後百首、うれはもろあつかやあけき　呉竹のふるねもゆきなひたゝきてけり、散木、雪をたれみあたれるみさの枝なれいさはるあかさにあつれたつ也、抄云、あつれい木より落る雪也、あつりともいへり、林葉

あつろふ　宇都保さしかり、御てづからあつらひたき給ひ、所に、あて入て、源梅枝、ちかき御あつらひ、爲忠後百首、はしちかくあさまにねやをあつらひて空ゆく月をはれぬそなき、大和物語、うちのあつらひ見入れは、源松風、へたて〳〵あつらはて

日吉も大宮へハ僧形の人憚るよし、台家の書に見えたり、○あその崎萬葉集に伊勢ゝす朝明郡羽津の西にあそ崎あて野の名あり是なるへし延喜式に此郡に志氐ゝ神社あり今あその〳〵社といへり、○大和吉野にあそかけの明神ましませり

あそのたなさ　神中抄に賤の田長也、郭公ハ勤農の鳥にて過時不熟と鳴也といへりたなさハ田事なるへしわとをと通ふ例あり古今集に　いくはくの田をつくれハかほとゝきすあそのたなさを朝な〳〵よふ枕草紙に田歌をのせてほとゝきすよれよかやつよれなきてそわれは田にたつといへり挌物論に杜鵑三四月間夜鳴達旦田家候其鳴興農事と見えたり、○伊勢家集にあその山越てきつらんほとゝきすとよめり死天の山よりくるよしふるくいへり古へより悲哀の鳥さし慶賀の事に用るす詩に作るにも哭すといへり死天の山より來るハ蜀の望帝の故事也、一名蜀魂とも見え、蜜都賦に鳥生杜宇之魂とも見えたりよて冥途より來るといふ也

あそのやま　十王經に死天ノ山門集鬼神ゝといふによれり逝て歸らぬ道也

あてんわう　四天王也法華文句に四大天王者帝釋ノ外臣如武將といへるより古今著聞集源頼光平家物語に木曾義仲盛衰記に源ノ義經太平記に新田義貞なとの臣に皆稱せり微書記物語に和謌の四天王と呼しハ頓阿慶運淨辨兼好にて皆僧なりしもあやし、○平貞盛系圖に見えたるは平維衡平致頼源頼信藤原保昌也義經の四天王ハ佐藤次信忠信鎌田政盛光政也義貞の四天王ハ粟生顯友篠塚某畑時能由良

せ給へるしも、

あて　源葵、わか君の御めのと宰相の君して歌云々、同玉かつら、法師いせめてこゝにやとさまほしくしてかしらかきありく、

あて　亜、たるゝ事をあでといふハ古語也、古事記に訓亜云志殿(シデ)と見えたり、あたれの多禮を反せば、豆となる也、又あの語に、きめたの音のあでうつなどいふハ、是と異にして、それハ頻手(シキリデ)なるへし、槌を四二人あて持て打ば、四手打といふといふ事あれど、それハ音訓相交へていふことにて、俗の說也、とり用ゐからず、古事記吐、天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而、於上枝取著云々、於下枝取垂白丹寸手(ニキテ)青丹寸手而、(訓垂云志殿)云々、類名　○後拾遺秋下、さよふけて衣あでうつ聲きけばいそかぬ人もわれさりけり、月詣集　から衣あでうつちのおく〳〵と山彦さへもいそくなるかな、壬二集中、山風に和箔かけてあて妙のころもあでうつあつの神人、拾玉集六、あつのめか秋風あのふ松かねにころもしてうつタくれの空、あてう　仕丁ゝハ總て人のめしつかふ人夫の事也、下部の者也、仕はつかふ也、丁いさかんとよみて、年齡、壯に強き者を云、(老蓑ノ者ハツカレヌ也、)貞四

あてのたをさ　催馬樂、あてたをさあまやとり、愚

具滋也弓馬の四天王東鑑に見ゆ武田信光小笠原長清海野幸氏望月重隆也木曾四天王ハ樋口兼光今井兼平根ノ非行親楯ノ親忠也、

○あと　紫式部日紀清少納言に小兒の小便をいへり今あとゝいふ是也あとる義なるへし細流にあと筒見えたり

あと　志渡ハ讃岐寒川郡也、○志渡の浦淡海公の事をいひ海人水底に入て珠を取し故事も正史になし、

あとさき　童蒙頌韻に粢をよめり倭名鈔にハ粢餅と見えたり新撰字鏡にハ精をよめり白麿の義なるへし今も精米をそらげといひ米をあらふをとぐといふ也筑後の俗祭祀必ず粳米粉の餅あり是をあときといふ伊勢の俗白餅(シラ)といへり○蝦夷の女ハ頸に銀鏡をかけて飾りとす是をあときと名くといへり

あとけなし　無靜氣ノ義なるへし東鑑に無支度解と書又無四度計と書せるハいかゞ職原抄に勘解由諸國參期ヶ曰四度解と見ゆ小町家集に　あとけなきねくたれ髪を見せしともはたかくれたるひさの朝顏源氏に帶あとけなくと見えたり今もいふ詞なり朝野群載に四度公文帳見えたりあとたち　倭名鈔に章斷を譯せり顏氏家訓に注連章斷と見えたりをハ小便をいふにや

あとゝ　伊勢物語抄にひたゝ〳〵とゐるゝなりといへり萬葉集にあのゝにぬれてといふに同しあの〳〵はゝ〳〵あと〳〵と重ねいふ語を略してあのゝあほゝあとゝいふ也今昔物語に肩をあとゝくひけれハと見ゆ萬葉集に秋霧にあとゝにぬれて呼子鳥みふねの山を鳴渡る見ゆ○あとゝか岩屋ハ伊

豆、國にあり

ゑゑゝぬ　腰刀の具にいふ蝦眼の義なりといへり和琴及箏の具にもいふ同し證源抄に見えたり

ゑゑなし　ゑゑけなしの略成し無仕遂の義をいふにか

ゑゑね　倭名鈔に茵をよみ常に褥なりと下疑の義成し蜀茵錦、茵唐褥、茵繧繝、茵草蘇、茵なと江次第に見えたり錦、茵ハ唐詩にも見ゆ○新撰字鏡に錠をゑゑね金をよめり字詳ならず

ゑゑみ　倭名鈔に部をよめり又郡に作れり皇極紀に陳子をよめり下北の義なりといへり又釣部あり樵に釣ありて光仁紀にはよめり也○式伊勢度會郡に志等美、神社あり儀式帳に靭野井庭、神社を見ゆ

ゑゑむ　倭名鈔越前、國の郷名に従省とあり通鑑胡注に公服、従省、服也を見えた左傳に従非省を見えたり

ゑゑやか　そうやかの轉舒徐の意にいへり閑雅も釋やう

ゑゑり　舊事記に倭文文布をよめり天武紀にえつりを見ゆ沈織の義成しえつれ反也賤織の義をいへり賤者をえつりといふ後の事也新井氏の東國の俗筋をしつりといふ釋日本紀に有、青筋、文、之布也と見ゆ筋ハ今いふ島筋のまだらにけれハ織志にいふ斑布是なるしとしかり文布ハ唐書日本傳に以、文布、爲、衣と見えたり又神代紀に倭文神ハ常陸、國風土記に多し見えた新撰姓氏録に常陸、綾甲斐、斑布を見え常陸風土記に詳織里上古之時織綾之機人未、知、之此村初織因名と見えたり

ゑゑりゝ　皇極紀に倭従をよめり古事記に従者をえゝりと見ゆ後

執部なるべし

ゑゑる　濕をよめるはえたるかいへりえたるハ罪の義をえる官通せり倭

寂記に水にえゝるを見えたり

ゑゑろゑゑろ　源氏にえろえろに愛敬つきえゝゐ浅茅の歌に我心えろえろに成にけり袖より外に涙もるまて下學集に取次筋ヨを訓せり杜詩に經過自愛惜取次覚論、兵をみゆ郡注に取次、挨次而去也といへり次のまゝに推て行ふ事也といへりもれはえろの意成べし後鳥羽院隠岐、國にて　あやめふくかやか軒端に風過てえろに落る村雨の露日本紀に帯山をえろうだれとよめり百濟の山の名なれはえろうハ韓語成べし埃嚢抄にハ取次をなだりかしとよめり教坊記に一小兒筋斗絶倫と見ゆをんなかくりのことなりといへりされはえろうハ日本紀に文身をえろうけとよめる意筋斗に非るべし

○ゑな　階級品科等の字をよめり日本紀に色、字文選に器新撰字鏡に層又隊をよめり俗にゑがたといふ事をゑなともいへり○支那にも天竺よりの渡士の指の語なり名義集に此云、文物國と見ゆ○氏にもいへり志那純重ハ近江佐佐木の族也後に山崎宗鑑といふ○雄略紀の歌にいのちをしまし見ゆ死の義なり

ゑなえ　萬葉集に君にひえなえらふれ又夏草の思ひ萎而と見えたり志ハ疲語萎の義也源氏歌にわれのみやなえなえらふれ蜉蝣の子の脚立ちわれハ經にけり○管絃の類にいふ罪枝の義成べし

ゑなかたゝ　或説に中城天皇の比武州の小幡の庄より稗皮威を

たりけれハあつかりのやうなものゝ名をゑなかたゝといふ千早振たゝの神のなをくにてえなかたゝといふのかくれなき試、菜花はつ花、御ふさなとにゐれともうれしけにたはれける靈異記下、矢ぶすうの保證明、御ふさこそはなる奉りたまはゝ御ふさにえなかたはしまゝ、同間、ゐゝ君にえふさにしかけつゝ同、犬のえにぬれ給ひぬ、犬宮也萬葉

ゑゑゝ　菜シトギの字也、本草綱目三啚珍カ曰、單糯粉者ヲ曰ニ粢單糯粢者トハ粳米ヲ炙テ粉ヒテ米ノ粉ガカリニテ作ルヲ云ヒテあり、是ハ唐の粢と云物の事にて、日本のゑゑゝの事にハあはず、日本のゑゑゝと唐の粢とハ別なり、粢ノ字ヲシトギノ字ニ古ヨリ用来リタレド、和語ニ漢字ヲアテ過ヒナリ、然レ用ユル日本のゑゑゝハ神道類聚名目抄ニ云、餅米ヲ蒸熟シテツヽカ諮、鶏子ノ形ノ長キガ如ク造ルヿ具ニ

ゑゑけなき　俗説辨ニ云俗書ニハ無四度解の音語といへるハあたらず、源公忠集、ほこうひしてあねく袮を見えしかゝるけなきてわれをなよひし、小野小町集　ゑゑけなきおくれ髪をみなへしゑゑなにかくれたるけさの朝顔、

ゑゑゝゝゑゑゝゝの下のゑゑを略也、今俗に物のえりたるをゑゑゝゝまるなどいへり、凡河内躬恒集、秋の野に花見にゑれゝなる露にさそはれにけるかな、夫木抄ハ、五月雨

出をりくり源平盛衰記に品革威の鎧皮に紋をしたる也と見えたるも皆是也

なゝしたり　日本紀に差降の字をよめり新撰字鏡に降をなゝにとよめり雜記の降等なゝとよむ非也

なゝかる　萬葉集に越の國の枕詞にいくり級蹉の義日本紀に堵の丸重をこゝのこゝよめる此義也一說に級坂（シナサカ）在と書るを正義とす舊說に角鹿の坂を越るをもて越の名ありといふか如し

なゝだめ　日本紀に考選ふよめり品定の義なるべし源氏物語雨夜の品定めなどいふ是なり

なゝ〳〵　鞠字の意なめり義也○なゝ〳〵なつなどいふも同し

なゝま　塩竈抄に人をねまるを下醋へなゝまなどいふ俗語よめり古歌にまろ寢ばなゝまも寢なもう〳〵我おもなもやこしなゝまなゆめこそあれなどのごとくの意成べし後人君をねまるしてよめるは非るべし

なゝま　新猿樂記に品王を書り魏都賦にいふ弄丸是也續日本紀に弄王三代實錄に元嬉弄王を見えたり

なゝたゆふ　古事記の歌に見えたるかの義なるべし

なゝつけ　小竹なり

なゝてる　萬葉集に級蹉を書り山などのかたよりなるをいふ又級立の義なるべし日本紀に上岡山につゝけり萬葉集に片足羽川につゝけり古事記にはの水海を見えたり是古事記にはゆゝしき氏にはあらず

白鳳九年播磨國貢白巫鳥詮に狹鳥此言也天武紀芝苔々シトヽ古事記斯登々を見えて古語拾遺片巫（カタカヽチ）社に忘止止鳥をあり翠山椒廣韻集韻ともに鶺音無鳥名雀屬をあり然れどもこゝに鳥を指て云る名に非ず落ては物語に又ちゝにかゝかゝまりてゐたりなど見えたり大和本草シトヽ淡赤色又淡黒色アリ腹背黄ナリ鵐ホヽジロアリミヽヽ古

なゝにぬる　俗にこぼるゝといふに同し萬葉集朝露にぬれつゝ喚子鳥が船の山になどいへる見ゆ

なゝみや　月詣雜上春日の社に行幸侍りけるにゝゝなゝのまくにて中務日記にゝゝまゝゝなゝみやにまるる

なゝみ山　枕冊子だゝしの風古今六帖ゝゝなゝみ山だゝしの風のまがれる風にゝ常になゝゝそゝなゝみ山上部のおはだゝしたもて完りしたり風の和名抄に云ゝ音に泣るゝにかけて云風のなゝは濁りて泣ゝやうなるをいふ古歌ゝの詞のかゝりにて清濁のさだまらざるなどいへるは物の手間どりたるたぐひなるべし

なゝり　こゝろをなゝりにとりなしてなどいへるは事をはぶきてなゝりとのみいふなるべし

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

信濃國古事記に科野と書なり木此國よりいづる物尤色白しなど郡名鄉名にもなゝなど呼もの多し諏訪の神前に圓き掛くゝかちの木二株を植たり古木也又かちの葉を神紋とせり何の意味あるにや一說に山國にて階坂（シナサカ）在の地なるをもて名づくといひけり地形は日本中の高き所にて四方の隣國より來るにはのぼれり○なゝの草ありなゝの菊あり○信州に樹茶竹二種生ず今伊那郡に大竹を生ず○萬葉集に越の海信濃の濃をよみ信濃に流なけれども信濃に隣たるをいふなるべし○信濃の宮と申は上野の宮とも井伊谷宮とも申せり後醍醐天皇第二の皇子にて元弘二年に征東將軍に補し東國にまします後年河内國山田庄に閑居まし新葉集を撰て奏らる又終に井伊谷に隱れ給ひ七十二歳にて薨し給ひぬ

なゝき　科の木也古くにいふ所の榛是也其皮のじなゝゝゝたるをもて

にゝるの岡の雌鳥をゝにゝるといへる也天武紀白鳳九年播磨國貢白巫鳥詮に狹鳥此言也芝苔々シトヽ古事記斯登々を見えて古語拾遺片巫（カタカヽチ）社に忘止止鳥をあり翠山椒廣韻集韻ともに鶺音無鳥名雀屬をあり然れどもこゝに鳥を指て云る名に非ず落ては物語に又ちゝにかゝかゝまりてゐたりなど見えたり大和本草シトヽ淡赤色又淡黒色アリ腹背黄ナリ鵐ホヽジロアリミヽヽ古

なゝにぬる　俗にこぼるゝといふに同し萬葉集朝露にぬれつゝ喚子鳥が船の山になどいへる見ゆ

なゝみや　月詣雜上春日の社に行幸侍りけるにゝゝなゝのまくにて中務日記にゝゝまゝゝなゝみやにまるる

なゝみ山　枕冊子だゝしの風古今六帖ゝゝなゝみ山だゝしの風のまがれる風にゝ常になゝゝそゝなゝみ山上部のおはだゝしたもて完りしたり風の和名抄に云ゝ音に泣るゝにかけて云風のなゝは濁りて泣ゝやうなるをいふ古歌ゝの詞のかゝりにて清濁のさだまらざるなどいへるは物の手間どりたるたぐひなるべし

なゝり　こゝろをなゝりにとりなしてなどいへるは事をはぶきてなゝりとのみいふなるべし

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

信濃國古事記に科野と書なり木此國よりいづる物尤色白しなど郡名鄉名にもなゝなど呼もの多し諏訪の神前に圓き掛くゝかちの木二株を植たり古木也又かちの葉を神紋とせり何の意味あるにや一說に山國にて階坂（シナサカ）在の地なるをもて名づくといひけり地形は日本中の高き所にて四方の隣國より來るにはのぼれり○なゝの草ありなゝの菊あり○信州に樹茶竹二種生ず今伊那郡に大竹を生ず○萬葉集に越の海信濃の濃をよみ信濃に流なけれども信濃に隣たるをいふなるべし○信濃の宮と申は上野の宮とも井伊谷宮とも申せり後醍醐天皇第二の皇子にて元弘二年に征東將軍に補し東國にまします後年河内國山田庄に閑居まし新葉集を撰て奏らる又終に井伊谷に隱れ給ひぬ七十二歳にて薨し給ひぬ

なゝき　科の木也古くにいふ所の榛是也其皮のじなゝゝゝたるをもて

にゝるの岡の雌鳥をゝにゝるといへる也天武紀白鳳九年播磨國貢白巫鳥詮に狹鳥此言也芝苔々シトヽ古事記斯登々を見えて古語拾遺片巫（カタカヽチ）社に忘止止鳥をあり翠山椒廣韻集韻ともに鶺音無鳥名雀屬をあり然れどもこゝに鳥を指て云る名に非ず落ては物語に又ちゝにかゝかゝまりてゐたりなど見えたり大和本草シトヽ淡赤色又淡黒色アリ腹背黄ナリ鵐ホヽジロアリミヽヽ古

なゝにぬる　俗にこぼるゝといふに同し萬葉集朝露にぬれつゝ喚子鳥が船の山になどいへる見ゆ

なゝみや　月詣雜上春日の社に行幸侍りけるにゝゝなゝのまくにて中務日記にゝゝまゝゝなゝみやにまるる

なゝみ山　枕冊子だゝしの風古今六帖ゝゝなゝみ山だゝしの風のまがれる風にゝ常になゝゝそゝなゝみ山上部のおはだゝしたもて完りしたり風の和名抄に云ゝ音に泣るゝにかけて云風のなゝは濁りて泣ゝやうなるをいふ古歌ゝの詞のかゝりにて清濁のさだまらざるなどいへるは物の手間どりたるたぐひなるべし

なゝり　こゝろをなゝりにとりなしてなどいへるは事をはぶきてなゝりとのみいふなるべし

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

信濃國古事記に科野と書なり木此國よりいづる物尤色白しなど郡名鄉名にもなゝなど呼もの多し諏訪の神前に圓き掛くゝかちの木二株を植たり古木也又かちの葉を神紋とせり何の意味あるにや一說に山國にて階坂（シナサカ）在の地なるをもて名づくといひけり地形は日本中の高き所にて四方の隣國より來るにはのぼれり○なゝの草ありなゝの菊あり○信州に樹茶竹二種生ず今伊那郡に大竹を生ず○萬葉集に越の海信濃の濃をよみ信濃に流なけれども信濃に隣たるをいふなるべし○信濃の宮と申は上野の宮とも井伊谷宮とも申せり後醍醐天皇第二の皇子にて元弘二年に征東將軍に補し東國にまします後年河内國山田庄に閑居まし新葉集を撰て奏らる又終に井伊谷に隱れ給ひぬ七十二歳にて薨し給ひぬ

なゝき　科の木也古くにいふ所の榛是也其皮のじなゝゝゝたるをもて

にゝるの岡の雌鳥をゝにゝるといへる也天武紀白鳳九年播磨國貢白巫鳥詮に狹鳥此言也芝苔々シトヽ古事記斯登々を見えて古語拾遺片巫（カタカヽチ）社に忘止止鳥をあり翠山椒廣韻集韻ともに鶺音無鳥名雀屬をあり然れどもこゝに鳥を指て云る名に非ず落ては物語に又ちゝにかゝかゝまりてゐたりなど見えたり大和本草シトヽ淡赤色又淡黒色アリ腹背黄ナリ鵐ホヽジロアリミヽヽ古

なゝにぬる　俗にこぼるゝといふに同し萬葉集朝露にぬれつゝ喚子鳥が船の山になどいへる見ゆ

なゝみや　月詣雜上春日の社に行幸侍りけるにゝゝなゝのまくにて中務日記にゝゝまゝゝなゝみやにまるる

なゝみ山　枕冊子だゝしの風古今六帖ゝゝなゝみ山だゝしの風のまがれる風にゝ常になゝゝそゝなゝみ山上部のおはだゝしたもて完りしたり風の和名抄に云ゝ音に泣るゝにかけて云風のなゝは濁りて泣ゝやうなるをいふ古歌ゝの詞のかゝりにて清濁のさだまらざるなどいへるは物の手間どりたるたぐひなるべし

なゝり　こゝろをなゝりにとりなしてなどいへるは事をはぶきてなゝりとのみいふなるべし

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

なゝし　萬葉集に越の海の白波のよするなゝしの浦ともよめり

信濃國古事記に科野と書なり木此國よりいづる物尤色白しなど郡名鄉名にもなゝなど呼もの多し諏訪の神前に圓き掛くゝかちの木二株を植たり古木也又かちの葉を神紋とせり何の意味あるにや一說に山國にて階坂（シナサカ）在の地なるをもて名づくといひけり地形は日本中の高き所にて四方の隣國より來るにはのぼれり○なゝの草ありなゝの菊あり○信州に樹茶竹二種生ず今伊那郡に大竹を生ず○萬葉集に越の海信濃の濃をよみ信濃に流なけれども信濃に隣たるをいふなるべし○信濃の宮と申は上野の宮とも井伊谷宮とも申せり後醍醐天皇第二の皇子にて元弘二年に征東將軍に補し東國にまします後年河内國山田庄に閑居まし新葉集を撰て奏らる又終に井伊谷に隱れ給ひぬ七十二歳にて薨し給ひぬ

なゝき　科の木也古くにいふ所の榛是也其皮のじなゝゝゝたるをもて

あなき　信云、死君歟、神代、紀天稚彦の死たる後、高ひこね神を天稚彦とあやまりたる言に、吾君猶在を、アガシナキ、なほまし〳〵けりとよめり、死の君なるべし、

あなくだる　差降、品降の意にて、その色品の下り落て、上品ならぬを云、たとへば九品といふうちにても、上の品にあらで、中下の品なるをいふ也、日本書紀の廿五巻、大夫以上各有差降といふに、古點に差降をあなくたりと訓せたり、級降、科降等の意なり、徒然草上、かたちこゝろさまよき人も、さらなくなりぬれハ、あなくだり、顔にくさげなる人にも立ましりて、かけずけたさるゝこそ、本意なきわざなれ、類名

あなたま　品玉、新猿樂記、今昔廿七、懐ヨリ白ニ玉ノ小柑子ナドノ裡ナルヲ取出テ、打上テ玉ニ取ルヲ見ル人、可咲氣ナル玉カナ、

あなてる　源氏早蕨、あなてるやにほの潮こく舟のまほならねどもあひみしものを、同抄引歌、あなてるやにほの潮こく舟のまほにも妹にあひ見てしかな、

あなてるや　枕詞　かた圖、つくま、上つ世ハ、やもしなくて、四こゝにとゞめれど、中昔の例にもたかひて、かくのせたり、推古紀、あなてるかたをかやまあり、萬に、あなさかる左越とあるをみれハ、これ階坂（シナサカ）の義なり、されハこゝも、あなハ階也、

名くる成へし葉ハ菩提樹に似て冬木す栲似楮色白とあるをもて此字をたくと訓し其皮を剝て木綿等造り又衣衾ともなし紙にも用る成へしされハ神風抄信濃ノ國に麻績ノ御厨あり信濃山中に級布（シナ）あり紙布藤布太布などを出せり神樂歌にもゆふ造るしなの〳〵京と見え太平記に棟木を上けんとて綿巻の綱に信濃皮むき千束入へしと番匠組色を出せりと見えたり諏訪神社の御裝束及鎧のたゞし馬のかざり船の綱などにも用う栲ノ字をよめるハ心得がたし、

あなひ　神代紀に莫々然をよみ文選に亜字又蕨拶又扶疎颯纚をもよめり伊勢物語の眞名本に蘿ノ字を用たり柳のあなひ藤のあなひ花のあなひなどいふ是なり萬葉集に春山のあなひさかりて又立をなふ君がすがたともよめり級をはたらかしたる詞なるへし　○商人の詞にあなふといふハ相爲合の義成へし

あなぶくろ　信濃ノ國に級の木の皮を織て袋とす伊原山中に出すとそ、

あなぶる　俗語也ふり、反びよてあなびともいふあなえより轉したる語成へしあなほれるともいふあなび折れるの義ひを、反ほ也　○ひあなぶといふ俗語も乾あなほれる也、

あなめ　亜仁紀に匿ノ字をよめり新撰字鏡に圖をあなぶとよみ取物而藏と注せる是なり

あなめく　枕草紙にこき葉あなめきと見ゆ品めくの義なり　○源氏河海に辭多けれハ品少しといへり易に吉人之辭寡躁人之辭多と見えたる是也、

階をたてたるハ片低なれハ、かたとハつゝけたるなるへし、てるハ立るの略語なること、同十三に、師名立とかけるにて知へし、又つくまゝめかたとつゝけたるハ、そこハ階坂路ある所なれハ也、

歌

あなゝとれもへと　欲死雖思也、萬五、あなゝとれもへさはへなすさわく子どもをうつてゝハ、余ハ願辭也、同、いなゝとれもへと、古今ゆふされのまかきハ山と見えならんよるハこえしとやとりこるへく、

あなめる　日葉仁、匿（シナメル）、萬十、こと〳〵れハなけき先立けたしくも琴の下ひにつまやあなめる、

あなやか　差是（シナカ）、白氏、源少將橋、いときよけにあなやかなるわらはの、

あなふ　萬三、具木の葉のあなふせの山あめはすて、○日神代、其狀亜顯皇々然（シナヒテ）堀百いさなみに今もまたみむ女郎花あふふの姿あくときもなし、文選上林賦扶凍（シナン）、同天台山賦璀璨（シナヒテ）、長袖颯纚（シナヒタリ）、萬十、秋はきのあなひにあらむいもかすかたに、

あなへ　小竿なごのゆがむをあなふといへり、それより轉て、あなむといふ意に用る事も有にや、偽なすの意なるへし、答をいとなむと訓意の如し、俗語にかくうつりて行もの也、夫木抄二、をかみかいうきえにはゆるるくそれなつみあなへてもそこのみためそ、

あなき　源氏に見ゆ河海に白氏文集の差是をよむといへり心得がたし文選の長袖颯纚をあなやかと點せりあなひやかの義やかい助語成へし

あなをのまゆみ　卜部の書に日本武尊東北のひなをむけたまひて科野の山中にやどりたまふ夜弦うちの音あり尊（ミコト）あやしみて宿の翁（ガナ）に其弓乞取たまひしより官軍の守強し級緒の眞弓是也と見えたり級の木の皮をもて弦とせしなるへしされど萬葉集にみすゞかるあなの〳〵眞弓とよみたれハそを謬り傳へたるにやとぞおぼしき、

○あにいる　伊勢物語に見ゆ死沒の義也神代紀に沒をいるとよめり萬葉集にいのちにきと見えたり、

あににいぼれ　俗の罵辭也後漢書に死老嫗と見えたり、

あにするもの　萬葉集にあにするものにあらませばといへるハ死なるゝものならハの意也、

あにせ　俗語也爲似（シニセ）の義守世ぬいへり、

あにせん　死せんの義也あにせぬハ死せめの義ともに拾遺集に見えたり

あにのれほきみ　佛足跡の歌に見ゆ涅槃經に死王不免華嚴經に死王到時と見ゆ、

あにのはだゝち　死膚斷と書り後世云ためしもの〳〵類也賊盜律に凡殘害死屍本註に燒焚支解之類也と見ゆ、

あにみづ　死水の義也善見律有部律等に飲菩薩水而待死と見えたり、

○あぬ　日本紀に死をよめり歌にもいのちをなましみゆ去の義也さり反ふ

あなん　指南、文選東京賦、良久乃言曰、鄙哉予乎、予習非而遂迷也、幸見指南於吾子、注、桓譚上便宜曰、管仲桓公之指南、

あにかもあなむ　將死也、萬十一、劔刀もろはのときに足をふみあにかもしなむきみによりては、

あにする　死爲也、萬十一、こひするにあにするものにあらませハ、

あにめらふ　死めらんといふ俗語の轉訛也、鎌倉の比の方言なるべし、又可ゝ負をまくらふにともいふ事有りきまけめらんにの意也、沙石集三、或里に癲狂の病有る男有けり云々、例の病によりて、河へ落入にけり、あぶなかりける命哉とあさましく覺えて、獨言に死たれいこそ生たれ、生たらい死なまし、かしこくして死てんけるけうにあにめらふにとそいひける、是こそいはば、負たればこそ勝たれ、勝たらばまけなまし、かしこくぞ負にける、希有にまくらふにと申べけれとて、一座の比興にて侍りき、類名

あにもいきも　君かまゝ　萬九、あにもいきも君かまゝにとおもひつゝ、毛詩死生契濶與ゝ子成悦、史記、唯君死生之、楢

あぬ　小竹也、日神代、篠小竹也、此云斯奴、古事、あさあぬはらこしなつむ、萬七、いけのへのをつきかもとのあぬかりそね、

あぬ　萎也、あなふと同辭、萬三、ころもあぬにいにしへもほゆ、萬十、秋の田をあぬにたしなみたく露の、

あぬゝにぬれて　萎々濕而也、あさゝあぼゝなさいふに同し、ものにぬれてあなへたるさまを云、萬十、朝きりにあぬゝにぬれてよふこ鳥、同廿、あしかきのくまに立てわきも子かそてもあぼゝになきしそもいゆ、楢

あぬのめの　枕詞　人にあぬべば、あぬびてぬれば、萬葉十一に、秋柏うるや川邊の細竹（シヌ）のめの人にしめべはきみにたへなくに、また朝柏八河邊の小竹（シヌ）のめのあぬびてぬれば夢に見えけり、こいその川邊に生る篠ゝ群てふ意なるを、むれ反めなれば、あぬのめといひて、あのびと重ん料にれけり、古事記に訓小竹云志奴といひ、萬葉に忍ふを假字にハ志奴布と書たれば、古へハ小竹をあぬといひ、慕をも隱をも、あぬぶといひしこと知べし、冠

あぬふ　偃也、萬一、黄葉をハとりてそあぬふ、同十四、みつゝあぬはせ、同七、みつゝあぬはむ、紀に思悲纏憶共にあのふと点せり、順德院御製　もゝしきのふるきのきばのあのふにもなほあまり有るむかし也けり、式子内親王、玉のをよたへないたえねなからへいあのふる事のよはりもそする、楢

あねいと　字鏡、縠、紵織織餘也、志禰糸、今俗機ノ織アマリノ末ノ糸ヲ、ハタシネト云三同シ、シネハ也音にあらす、一説に過ぬ也すき反し也、神代紀に神去といひ死をまかるとよみ萬葉集に過去人と見えたりなにぬねのをよせにてはたらけり

○あね　日本紀に稲をよめり米をも訓せりあといと韻通せり又神代紀に秋ノ霍穎八握莫々と見えたれハをなふよりの詞なるへし○和稲荒稲祝詞に見ゆ米を和稲とし穂を荒稲とする也

あゝいと　新撰字鏡に縠をよめり織餘と註せり、

あねう　四書正解に之遜と見えたり○古書に工をこに作るもの多し庖言に如匠作匠作匠作運謂之隷變古有此例と見えたり、

あねくり　墓目の異名也あねといふ鼠ハ蔗の根を食ふものにて其聲此矢のなる音に似たり故にかくもいふなりと三議一統に見えたりひみずといふ鼠をあねといへり

あねんこ　竹實をいふ西土の書に自然粒と見えたり本草にいふ復也竹譜に竹六十年にして花を附れハ即ち枯といへり、

あねんこし　自然居士也泉州自然田村の人東山に住すといへり、

あねんおよ　野山藥をいふ自然薯蕷なるへし負喧雜錄に山藥本名薯蕷避唐代宗諱ゝ豫改名薯藥避宋英宗諱ゝ曙遂名山藥と見ゆ、

○あの　日本紀に篠又小竹新撰字鏡に篠をよめりあないふの義成へし又小蔑の義也といふ○美濃にて紙の木の皮をむきたるをあのといふあなの轉にや○綿筒を關東にてあのといへり○萬葉集の篠島ハ石見那賀ノ郡濱田の城ノ西俗にやの島といふ新葉集に伊勢の國篠島といへるハ志摩ノ國答生の内の篠間なるへし俊頼の歌にをふの海にあのまの海士のかづくてふ

にしへもほゆ、萬十、秋の田をあぬにたしなみたく露の、

あぬゝにぬれて　萎々濕而也、あさゝあぼゝなさいふに同し、ものにぬれてあなへたるさまを云、萬十、朝きりにあぬゝにぬれてよふこ鳥、同廿、あしかきのくまに立てわきも子かそてもあぼゝになきしそもいゆ、楢

あぬのめの　枕詞　人にあぬべば、あぬびてぬれば、萬葉十一に、秋柏うるや川邊の細竹（シヌ）のめの人にしめべはきみにたへなくに、また朝柏八河邊の小竹（シヌ）のめのあぬびてぬれば夢に見えけり、こいその川邊に生る篠ゝ群てふ意なるを、むれ反めなれば、あぬのめといひて、あのびと重ん料にれけり、古事記に訓小竹云志奴といひ、萬葉に忍ふを假字にハ志奴布と書たれば、古へハ小竹をあぬといひ、慕をも隱をも、あぬぶといひしこと知べし、冠

あぬふ　偃也、萬一、黄葉をハとりてそあぬふ、同十四、みつゝあぬはせ、同七、みつゝあぬはむ、紀に思悲纏憶共にあのふと点せり、順德院御製　もゝしきのふるきのきばのあのふにもなほあまり有るむかし也けり、式子内親王、玉のをよたへないたえねなからへいあのふる事のよはりもそする、楢

あねいと　字鏡、縠、紵織織餘也、志禰糸、今俗機ノ織アマリノ末ノ糸ヲ、ハタシネト云三同シ、シネハ

とよめる所也　○篠村ハ丹波桑田郡龜山城の東也源ゝ義經此を領せし時延朗に充て衣盂ゝ資とする篠村の八幡ハ尊氏の始て義を倡ひし所也○小竹宮ハ和泉ゝ國和泉ゝ郡尾井村に舊趾あり神功皇后三韓より歸て此にましませり　○篠原は加賀ゝ國也源ゝ義仲か平ゝ維盛平ゝ通盛等を敗りし所也近江の篠原ハ平ゝ宗盛の斬れし所也篠田の社ハ和泉和泉郡信太の鄉森村にあり

あのうつわもの　倭名鈔に瓷ゝ器をよめり音也、

あのぎ　刀稜をいふ鋼をよむハ字書に刀鋒曰ゝ鋼と見えたり鎬ハ太平記に出たれと字書にその義見えす本草に劍脊稜といふ是也あのハ篠きハ及をいふ成へし　○萬葉集にあのきを二つ手狹と見えたるハあのき羽とて鷹の羽にてはきたる上箭也といへり、

あのぐ　陵をよめり刀のあのぎより出たる詞なるへし萬葉集に菅の根しのぎとも秋萩しのぎともよめり　侵陵と熟せる意也言塵集にあのくこゆる也山をあのぎ雨をあのくなといへり　浪をあのき霞をしのくも同し常に暴をあのくなといへり晋書に常ゝ以ゝ才氣ゝ陵ゝ物と見えたり　新撰字鏡に傲又侮をよめり、

あのだな　篠棚ハ志野入道宗温に造り始めたる也宗温茶ゝ湯を好み香をきくに妙を得たりそ、

あのに　萬葉集にあぬにとも見ゆあのに物たもふあのに露ちるの類ハあなふの義なり繁き義といふハあらす

あのゝはぐさ　篠の葉草の小草の名也といへり草に淡竹あり是なるにや、

そのゝめ　萬葉集に細竹目を苦りめられ、反篠の誰竹の義也といふ○東雲をあるは虜の雲の細やかに明れたる篠の葉にたとへいふなるべし神代紀に細開磐戸、銭之と見えたる是その明行空の言、本也そ○藏玉集にそのゝめ草へ權なりと見えたり

そのゝたゞき　繁く吹風の名也といふりそのにふく風も同義なるべし

そのはこ　倭名抄に清器を訓せり尿の宮也類聚雑要に私宮と見ゆ今小便所の義なるべし說文に滅盪也國語、註に盪行清圊也と見ゆ

そのびあり　伊勢物語に見ゆ隱行の義西公にふ微行なり

そのびくるま　隱車の義也紋なしそ

そのびごと　日本紀に謀を訓せり妄言の義也

そのびで　延喜式に短手をよめり又短拍手とも見ゆそのびかしはといふ是也類聚本源には忍手と書り

そのびね　杜鵑によめり五月をこかの時さゝひ卯月をしのびねさゝそのびそのびに鳴音をふくなりといへり

そのびのもの　陰、者の義通形をいへり昔より伊賀甲賀に此道の達人ありて家に傳へり○東鑑に隱形符をふ事見えたり○游仙窟細も同し

そのびのを　胄にふ隱の緒也曝布を用ふといへり又兜の内に在て髪にふれざる様に付る物也古へ纖物に綿入て用ふるもいへり又兜の緒也ともいへり○大坂落城の時に木村長門守重成公も討死をはかりて出けるを例ありつゝ本田氏或ある死にして權現公も討死をはかりて出けるを例ありつゝ本田氏或

シイナト同語カ、新六、我戀はそのつゆ糸くりかねていかなるふしに出たゆらん、（シラシネ通證式十五祝目錄、林註）

そねや　死耶也、萬十一、うつくしとわかもふ妹はやもそねやけりともわれによるしと人のいはなくに、

そのゝ　淺名鞋篠、今まゝ竹と云、神功紀、遷小竹宮、小竹此云之努、古事記、其后及御子等、於是小竹（シノ）之刺杙、雖足跡（ヲト）破忘、萬葉九、古の小竹田（シヌダ）をのこのつまどひしも、同七、いもかりとわが通路の細竹（シヌ）すゝきわれし通ふ、なびけ細竹原、延喜大藏式、六月神今食篠竹八十枚、雜給料篠竹一百六十根、同、賀茂神祭齋院陪從等人給食料、筋竹一圍、同、五月五日節料云云、串竹三圍、同民部式、凡神祇官卜竹云云（皆小竹也）篠、山民中二多シ、高者五六尺、莖、箸ノ如シ、節々細枝多シ、葉簡竹ヨリ細シ、古

そのかけ　安宅謠、篠掛、信云、大峰ノ深山なれバ霧深きゆゑ、夫を坊ん〳〵のうは着なり、のごとし、凌羽也、萬十三、そのそはふたつたはなゝ、○鳥のそのを以てはきたる矢をいふ、增

そのさ　淺、天をそらといふ空にふくといふがごとし、やまの近つくの意也、水の出來て山右をひたすをいふ、

私の縣　武藏國私市（キサイチ）庄と云所あり、古き物にはキサイチ、假名付あり、今ハ略してキサイと云、熊谷の庄の邊也、此庄の邊の人、縣を組たるを私市（キサイチ）縣と云、それを略して私の縣と云也、武藏七縣の外也、私市久下川原是を私縣と云、又一說に外閘部人見を加て五流を私縣と云、久下と熊谷と所領訴論の事東鑑に見えたり、私縣の旗頭熊谷次郎直實、平家物語、源平盛衰記等に見えたり、眞雜

そのにをのはくにはまこもも　貫之集、そのにをのはくにはまこもおひにけりあらむ、及はらくにに爾のゝ衣なをそのにをのかけて、そゝきとよむる所の證なるべしかゝし、增

そのゝめ　萬葉集に細竹目を苦りめられ、反篠の誰竹の義也といふ○東雲をあるは虜の雲の細やかに明れたる篠の葉にたとへいふなるべし神代紀に細開磐戸、銭之と見えたる是その明行空の言、本也そ○藏玉集にそのゝめ草へ權なりと見えたり

そのゝたゞき　繁く吹風の名也といふりそのにふく風も同義なるべし

そのはこ　倭名抄に清器を訓せり尿の宮也類聚雑要に私宮と見ゆ今小便所の義なるべし說文に滅盪也國語、註に盪行清圊也と見ゆ

そのびあり　伊勢物語に見ゆ隱行の義西公にふ微行なり

そのびくるま　隱車の義也紋なしそ

そのびごと　日本紀に謀を訓せり妄言の義也

そのびで　延喜式に短手をよめり又短拍手とも見ゆそのびかしはといふ是也類聚本源には忍手と書り

そのびね　杜鵑によめり五月をこかの時さゝひ卯月をしのびねさゝそのびそのびに鳴音をふくなりといへり

そのびのもの　陰、者の義通形をいへり昔より伊賀甲賀に此道の達人ありて家に傳へり○東鑑に隱形符をふ事見えたり○游仙窟細も同し

そのびのを　胄にふ隱の緒也曝布を用ふといへり又兜の内に在て髪にふれざる様に付る物也古へ纖物に綿入て用ふるもいへり又兜の緒也ともいへり○大坂落城の時に木村長門守重成公も討死をはかりて出けるを例ありつゝ本田氏或ある死にして權現公も討死をはかりて出けるを例ありつゝ本田氏或

そのぶり　日本紀に兼摺延喜式に小松より小草よりなを見えたれば草の形をいふ付たる成べしといへり伊勢物語にも奉日野の若菜の

そのぶ　質る詞也歌沒とは各其義を辨へ看るべきにこそ日本紀に忍字をよめるは俗語のごとく意地忍の義なり願、字をよめるは願念の義にふるの意也萬葉集に思、字をよめりかしたぶふなど是也思度をよめるは萬葉の意なり萬葉集に偲、字をよめるは二合の義成べし又日本紀に悲歌をかなしみをよめるは悲哀の際に發する也隱謀をしのびのはかりごとゝよめりしのぶ草の者なども此意也隱流をしのびながしとよめり又密をもしのびの義古事記に忍び〳〵といふもしのびまでのふ隱なる此義也私をよめるも同し遊仙窟に偸盜をよめるは萬葉集に恻隱をよめるは殘忍のうへなれば忍ぶ情をよめるなり源氏繪合に忍、怨也と見ゆ又暮を義訓せしこともふ愛

あのゝはぐさ　信云、字鏡、萩、波久佐ともあり、秀をもよめり、繁の秀歟、八雲、あのゝはぐさ、皆あのといふものと心得てよめり、さて一よなど添たり、新古今戀、あらすなよあのゝはぐさのかりにても露かゝるべき袖のうへかは、また後の歌に小竹、シノとしてよめり、新勅撰　たきまよふあのゝはぐさの霜のうへに夜をへて月のさえわたるかな、

あのゝめの　枕詞　あく、一燃三、あのゝめのほがら〳〵と明ゆけばとあり、これほがらゝ〳〵といふに冠らせたるなるへけれど、萬十、稻目明去來理とあるに同し例なれば、猶ゝもほがら〳〵といふをへたて、明とつゝけたるなるへし、あのゝめとは、同卷、あのゝめにはうちふれてゝよめるに同しく、春來りて、はしめて小竹の芽のはり出るをいひ、芽を目とかよはしてあくとつゝけたる也、さて夜の明るにつゝけたり、これをいといひなりて、一燃三、あのゝめのわかれをしみなどあるは、明かたのことによみふせたり、又後世あのゝめの所々などゝもよめり、これは、夜のすこしあらみわたるほどを云、歌

篠原　和名之乃波良、催馬樂にあふみ路のあのゝをふきはやひかすともなどあれは、古へ篠たほかりしより、地名になりたるなるへし、兵部式、篠原驛馬十五疋、太平記十七、小笠原信濃守は野路篠原に陣をさる、枕草紙、原はあの原、十六夜日記、野路といふ所云云、うやしくれふるさとにもふ袖ぬれてゆくさきとほき野路のしの原、此歌を夫木十に載てあのはらをさゝはらにつくれり、東關紀行、野路といふ所にいたりぬ云云、あの原といふ所を見れは、西東へはるかに長き堤有、北には里人すみかをしめ、南には池のたゝえてことなく見わたさる、長門本平家物語十八、野路の篠原も打すきて、かゝみの宿にいたりぬれは、井蛙抄、古今　淺茅生のをのゝ篠原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに、右歌枕には山城とこしるして侍り、大原小野と同所とれもへるにや、續古今　露しけきをのゝ篠原いかにまた徐りて旅の袖ぬらすらん、續拾遺　旅人の宿かり衣袖さえて夕霜むすふ小野のしの原、これらは都近き小野とはえぬ也、近江國小野といふ宿あり、あの原といふ所あり、これらは旅の歌にも可二相叶一歟、行襲抄、篠原野路の東の野をいふ名所なり、但小野の篠原とよめるは中仙道なり、野路の篠原とよみたるは此所なりといへり、方角抄、守山の寅のかたなり鏡山の麓なり、

あのびゝ〳〵　忍々、古事記上、其建御名方神、千引石擎二手末一而來言、誰來二我國一而忍忍如レ此物言、然欲レ爲二力競一、

あのびた　私田也、萬七、やつこあれど妹かみためにあのびたを刈、

あのふくさ　信云、源夕顏卷、同總角などにあの

すり衣あのふのみだれかきりもられすとよめりあのぶ草を紫の根にて摺つけたる也さるをみちのくのあのぶもぢすりとつゞくるは陸奥ゝ國に信夫郡ある故なり信夫郡に石ありて岡部と云所の田中にありいつの比か岡より落といふあのぶ草のかたしたる紋あるをすり付る物也といへるは非なるべしもぢすりといへるも右のあのぶ草のかたな亂れすりたるをいふなりとそされど東鑑にも信夫毛地摺千端と見えたれは信夫を地名とするも一說なるへけれ○公忠家集に東にくたる人に白き物を青きものしてすりて火うちを入て贈るとて　うち見ては思ひ出やと我宿の忍ふ草してすれる也けり是はやまあるもてすれる衣といひはきは花すりなといへる類なるへしといへりされど新千載集には朱雀院の御時藤原親盛かから物の使にまかりけるに金の火うちに沉のほくちなあのぶすりの袋に入てつかはすとて讀侍ける櫃中納言敦忠ありて上ゝ句うちつけにもひやいつと故郷のさあり下ゝ句同し、

あのぶのたか　陸奥の信夫より出る鷹をいふといへり、

あのぶみづ　鷹詞に人の小便に餌をひたして飼ふをいふ　定家卿紅葉する柿のもとなるあのふ水とりてあかふの鷹にこふらん、

あのみや　逢坂の四ゝ宮を延喜第四の皇子と云はひが事也延喜より前のことなるへし小野小町家集に四のみこうせ給ふつとめて風吹に　今朝よりはかなしの宮の秋風やまたあふ坂もあらしとそおもへゝ是は今の四ゝ宮川の事と聞ゆ、

あのをつく　五月雨などのはげしきにいへり吉野拾遺に見えたり、

○あは　古今集に今もはとよめるはしの義也　○日本紀に枝葉をよめる、

ハ繁葉の義なるへし倭名砂郡の名に　漂葉をあはと訓するも義同し萬葉集に柴また小屋木をよめり今も柴薪をいへり葉柴の字ハ鄉談正音に見えたり○草萊をいふハ去聲によへり新撰字鏡に荊をよめり是も繁葉成へし一說に絲茅の音轉也といへり萬葉集に道のあは草新六帖に百歟の庭のきり芝と見えたり結縷草也といへり中山傳信錄に茸草如二茵極細軟柔結一寸許一連二土不一散布一滿山上一と見えたるも同し芝ゝ字をよみ來れど字書に其義なし古へ萊と通用あたる譯あるへきにこそ聖武紀に內裏生二玉來一と見えたるハ萊音來なれハ玉芝を玉來と書せしと見えたり○童蒙芝といふハ瓦松也外科正宗の瓦楞花も同しといへり○氏姓に斯波と云り又芝田あり○吉野の司馬の野ハ國栖にあり

あばうつり　鳥のあのびてたつ事也といへり、

あばうばゝ　四方拜也公事根源によるに寬平元年に始る內裡式に弘仁年中に起れり、

あばかくれ　蝦夷の俗に人に隱れんとするふに忽形を失ふ術あり是なをばがくれといふ遁形の術也、

あはがる　咳して聲の嗄るをいふ也平家物語にあはかれ聲と見えたり今俗あやかれ聲といへり○うはがれたる聲とも見えたり、

あばきり　東國の屋香にハ此草生茂れりいはつ也ともやが也ともいへり、

あばくらゝ　芝にて馬を競る也新六帖に　駒はなつ野へのうなるか芝くらへ永日くらす是やなくさめ、

そばくり　柴栗の義栗也さくり○一種のそば栗あり甚燒短にして實を結ず

そばそま　山路に柴をもて車とする也さくりの堀川百首に嶺高き牛の尾山に入ひと柴車にてたるなりけり西土にて柴車さくるハ柴門なさくふ如くかりそめに造れるをいふ

そばし　日本紀に且をそばめり苟且也今隣島の意にいふ

そば〳〵　頻をそばめり新撰字鏡に左また度も同しさまに數也と見ゆ神代紀に數高葉集に數々訓せり法華經に見ゆ眼をそばむる所あり源氏物語に　山からのそばにたけそば〳〵もこえんこなんこまる里人

そばす　十二月をいふ歲極るの義なるへし高葉集に昨日社年者極之賀と見えたり俗に此月を極月といふもはつる月の義也説には歲終をいふなり

そばすりころも　柴摺衣の義山路の體なり

そばさせたまへ　山婆の謠に見ゆ背し坐の義ます反なり

そばたつなみ　金葉集に見ゆ頻起波の義也○仙覺說に男波女波の間おひさき波のたつをそば波さいふと見ゆ

そばどり　初鳥の過て後鳴雞をいふさくりそば〳〵の義也

そばなく　鳥にいふ頻啼の義也萬葉集に見ゆ

そばのさ　柴門をいふ也石戸氏の詠　たのひとのなしとハいはし柴の戸に月も有けり花も有けり唐詩に草舍臨時有月花○柴垣ハ大嘗會に用ゐもらるゝ事延喜式に見ゆ源氏にも野、宮の事に物はかなけなる小柴垣などいへり

にかゝる候古

そばうつり　山家集片岡にそばうつして鳴ぎす立羽だしてだかゝらぬかな

そばくさ　蒸草也萬ニ立かはのそばくさみやこなりけれ今そのそばくさかれにけり名蒸草之波今芝字を用ゐ靈瑞の草なり和名抄草之波今芝字を用ゐ靈瑞の草なり和名抄がふくし、稽

そば〳〵　數々也萬ニそば〳〵も見さけ山な心なくものかくそふくしや同ニかはりのまなくそばなく稽

そばす　十二月也萬ニそばすにハ沐雪ふるそらのかゝらめの花をそふめらにして

そばこりしき　柴取敷也萬五そのこまみたにこそたりそばこりしきて

そばの芝野　中務內侍日記そばのゝなかよりの鳥のたつを

そばの野の枕詞　そば〳〵萬葉集國柄人のそばまんと同鳥の野のそば〳〵君を思ふ比かな　そば〳〵こそこその外縱意

そばふれつゝ　咳嗽告也萬十七こゑからしかけりにきそかくりてそばふれつゝ

そばん　師範後漢書七十下趙壹傳壹報曰君學成師範縉紳歸慕仰高

そばや　玉二中こゑおゝそねのそばやのゆしもにこれそ雪の友つらん夫木廿

里を見えたり

そばふ　芝生を書野くのそばふなどいふ

そはゆし　鹹をもいふ鹽味の義にや鹽を口に受るの味をいふ新撰字鏡にからきあちはひをもからしそはゆきをもいふにも通ず

そばひき　太刀にいふ芝居の義なるへし文選曳をいふ古書に外ノ輪を見えたり○相撲の手にもいふ

そばふね　柴を積たる船なり○源氏に柴つみ船をも見えたり○後れたる船をもいふ　そへ船も先たつ舟もなかりけりあら風のふきくる間に○本朝故事因緣集に出羽ノ國大泥沼鮫村に廣池あり每年五月五日にこれを祭る先立ち池の邊に臨んで大に祈る時に忽四五尺ほどさゝけて池中に浮み出ゆらめくこれを舟をいふなり〳〵遊びたはぶれ呼ぶる聲して其さゝけの所にかくり地に居つといふ

そばふるひゝを　源氏にこのかのかにおやしきそばふるひゝををいふ抄に老人をいふとみゆ小島のまゝに山がつそばふる人そとこそ見えたりまた柴ぶる人にするび反の也

そばまつ　柴松の義細小なるをいふにや西行物語に　柴松のこずゑがかにつまこめてとがが原に牡鹿なく也

そばん　鎧の指物にいふ幟牛の義小旗をいふか如しといふ○四年の小冊紙をいふ事成蹟記に見えたり○的の類にいふは小折敷を四に切て用ふと見えたり四年を書り○石坂をもいふ道路に石を敷なるくるなどにいふ

かとふ柴やのうちまでに心をさめむところやハある、
あはやま　後拾、いかばかりふる雪なれはあなかちりねなのあは山、
あはる　綿、宇都保祭使、くりやめをはりかけてうつ、
あはね　芝居、隆信集下、都人まれにいはねのあはねしてかいるなこりそほはらのさと、喜多院親王家五十首、あはねする山松かけの夕すゝみ秋れもほゆる蜩のこゑ、
あひ　椎也、古中、齒並ハ椎しなす、萬七、このむかつをにあひまかハ、同二、家に有ハけにもあいひをくさまくら旅にし有ハあひの葉にもる、
あひ　鮪也、萬六、あひつるあま、又人名、和名、鮪一名黄頰魚之比、爾雅注云、大者爲王鮪小爲叔鮪詩衛風碩鮪發々、
あひごと　誣言也、萬三、いなさいふにあひるあひのかあひかたり、同十二、つるはみの袷衣のうらにせハわれあひめやも、
あひごと　誣言、この詞に二ツのすぢ有り、誣言ハなき事を有さまにあひていひなすをいふ、また強事をもいふハ、事の行ふましき事をあひてつとめてなすをいふ也、萬葉集に此餠あり、後漢書四十九、清河孝王慶傳、太后崩後、竇皇后寵盛、以貴人姊妹並幸、慶爲太子、心内惡之、與母比陽主、謀、陷宋氏外令兄弟求其纖過、内使御者偵伺得失、後於掖庭門、邀遮得貴人書云、病思生菟、令家求之、因誣言、欲作蠱道咒詛、以菟爲厭勝之術、日夜毀譖貴人、母子丞漸見疏、
あひし　張物三用ホル具也、拾玉四、それもいさつめにあるしむ言のはのあひしとりたくたすきすかたよ、
あひ　柴の枕詞　葉がへ、拾遺集、はし鷹のとかへる山の椎柴の葉がへハすとも我ハかへせじ、椎の柴木ハ枯て後に青きが色かふるにやもらす、後撰集にこれをだにかたみと思ふ都をば葉がへやしつるあひ柴の袖、いづれも心がへ所がへの事に掛たり、故ありげに聞ゆ、はし鷹のとがへる山とハ、狩くらして山よりかへるを鳥がへりと云ぞそ、椎柴のみならず、なべて柴原にハ鳥のかくるゝを、狩杖さいふ物もて打たて、鳥を居させぬわざするゆゑに、眞柴榊柴よみあはせしが見ゆ、綴冠
あひむ　強留、夫木抄、あの原や佐野のくゝ立さかなにて旅行人をあひとゞめハや、
あひと　死人、知顯抄、あひと目をひらきにけり、
あひな　榮花、うら〳〵の別、御服たゞあひなにあひれて、（谷川氏ハあれとして、あわれの轉りといへり、）麻葉
あひなつむき　信云、宗吾記、公方樣御服と申せしに始りて元和中女樂の官禁ありて男倡に變し承應中官命ありて女形も年齡を憚ハす額髮を剃除し今の風となれり西土にてハ立役を生といひ女形を旦（シヨ）といひ童戲を淨（ジヤ）といふ敵役を丑（チウ）といふそ凡て役者といふ樂戸の類也○清康熙皇帝座右の聯に日月燈江海油風雷皷板天地大一番ノ戲場堯舜且文武ノ末ハ生の類脚色ハをぐみ也○奥州膽澤郡にあはひの社あり神名式に云志波姥神社也、
○あひ　强ノ字をよめり孟子に强酒といへる類也つよむると意通す誣も同義也菅家萬葉集に見ゆ神代紀に固もよめり○椎も諸書にあひと書り古事應神記の歌ハあひゞとよませたまへり通小町の誹にいちひかあひまていはひとならべいへばもとハ香椎をもいひしにやすいの音を轉して訓とせるなりといへど繁實の義なるへし歌に四位に寄るも後世の事也椎の枝とよみてひのえをかくせる歌ありあねと書へからす參州苅屋の城主より貢するを最上とす○新撰字鏡に椹をあるあひとよめり薩摩のあひハ甜櫧也○筑紫の方言ハ龜脚をいふ貝の形椎の實の乖たるが如し
あひ　俗に自身髮ゆふ事をいふ自髮なるへし　榮枯物語に自ら髮する事を自剃と書たり、
あひし　新撰字鏡に椅をよめりされど一字心得かたし　俗に簇ノ字をよめるハ小竹の義によれるにやあひし絹張ハ職掌の婚禮にも必すこれありといへり　强篠の義なるへし
あひしゝ　椎柴也薪にいへり○椎柴の袖ハ喪の服にあひの色を用る也と

いへり又法師にもいへり○あひそはの山紅葉せぬ山をいふといへり○あはぢ
稱する一種の樹あり薩摩椎の葉に似て夏赤き實ありいにしへにいふ椎柴
い此木なるにや徒然草にもあひそはのぬれたるやうなる葉と見えたり、
あひそし　源氏に見ゆ強殺の義也といへり、
あひつ　羅山集に我朝年甫寫字者皆稱二試筆一官家先儒學士博士之
文集未レ見レ之宋六一居士有二試筆一詩唯言二試筆之好惡一也と見え
たりされど遯菴詩集歸有園稿なるに試筆一詩あれい明儒より起れる成へ
しともいへり○禁裡試筆の硯水い伊勢鈴鹿郡山邊の御井を用ゐらるゝ
も大和の秋篠寺より獻るともいへり○紙筆の字い荀子に見えたり、
あひな　倭名鈔に糀をよめり強根といふにや今こぶといふ是也、
あひね　倭名鈔に瘤をよめり強根といふにや今こぶといふ是也、
あひら　梁塵鈔に褶也といへり源氏にあひらだつものゝみえたりうい裳の事
也男い袴の上にきる女いから裳の上にきるなりといへり　倭名抄にういみと
見え日本紀にいひらびともひられびともよめり
あひり　瘠也といへり澁る義にや　麻痺をもいへり○あひり京へ上れるといふ
俗諺あり笑府に俗云脚麻脚麻上二鼻頭一謂以二柴芒一貼二鼻端一即止と見
えたり、
○あふ　強又誣をよめりあひる也ひる、反ふ也續日本紀宣命萬葉集なと
同し又彊も同し又暴をよめり、

あゆはたゝはたゝかしてまいらせよ（よりいふ）あふきよしてまゐるあふきそ（ふやうのん法師）是いよりいふが許にて人々遊ひけるに、あゆはたゝと申いなゝ、さかなにしてはべりけるに、ふやうのんと申法師の有けるに、あふきといふものを着にてありけるが、まことにあしく覺えけれい、是あしともいはで、見ぬたりけるに、あゆはたゝの、いとよけなるを、人々くのゝしりて、かく申たりければ、きゝもあへず悦ひながらつけたりけるとかや、蜻蛉日記、ありへのかたなるいけ水、あふきといふ物れひたるといへば、さりもてこといへばもてきたりけるに、あへしらひて、ゆなをきりにうちかさしたる、いとにかしうれぼへたる、

しふく　俗ニシアルトいふと同し、新古今、高瀬舟しふくいかりにもみちばのなかれてくたる大井川かな、注キシル心カ、百錬抄十四、神殿御戸不レ被レ開、元日七日安平被レ開了、今日澁固有二其恐一事也、○しふく　清輔集、霜かれのあしまにしふくつり舟や心もゆかぬ我身なるらん、

あふく　契云、重吹也、風吹（シク）歟、東野州云、シフクハキシル事也、夫木集四、花さそふひら山たろしあしければ櫻にあふくあかのうら船、清輔集、霜枯のあしまにあふくつり船や心もゆかぬ我身なるらん、林葉○宇治拾遺七、あさみ風にあふかれて、谷のそこに鳥のゐるやうにやなら落にけれい、

あふ　柿漆をもいらいへり○澁る意也條の菓蔬の類にいふも意同し一説にあふの音を轉せし也○四分い長官次官判官主典也
あふいち　四分一の義銅四分の一銀を雜るをいふ也臘銀也といへり○壁などにいふも石灰四分の一をもて法とする也　○天文家の器にもあり星の分野と地平の度を考るに用う、
あふかい　秤をいふ爾雅に繳皮也と見ゆあまかいともいへり
あふがふ　習合と書り神道に儒道を合する也といへど儒釋道の三教ともに幸合するをいふ兩部といふも金胎兩部の義にして神佛の兩道にあらず唯一といふも天人唯一の義にして神道唯一教といふにいあらず、
あふぎ　習宜と書り古姓也習宜阿曾麻呂あり今の氏にあひきと呼り○祝儀をもいへり字尺牘雙魚に見ゆ、
あふきやう　永保二年神祇官移文に執二行社務一と見えたり今京師祇園にいふ是也法性寺の執行吉野の執行なと同し、
あふく　重吹の義風あふくなといへり○船にあふくといふい物にさゝりて行かぬるをいへい澁る意なるへし新古今集に　高瀬川あふくばかりにもみち葉のなかれてくたる大井川かな
あふし　東鑑に見ゆ俗にいふ米饅頭の事也といへり晉書に蒸餅上不レ析二十字一則不レ食といひ書言故事に蒸餅十字瓊肌と是也麪を醴にて造れる物内に餡なし長崎にて市人制すばんと云、
あふ〳〵　枕草紙に見ゆ澁々の義なるへし、
あへたぐる　徒然草に見ゆ虚また冤をよめり今せたぐるといへりあへ反せ

時服　名目上古より有之、續日本紀卷十二云、聖武天皇天平八年冬十月戊申、施唐僧道璿波羅門僧菩提等時服、○祿令云、凡親王年十三已上皆給、時服料、春絁二疋絲二約布四端鍬十口秋絁二疋綿二屯布六端鍬四挺と見えたり、貞三

おぶし　謎、夫木二、鶯の聲まだおぶくきこゆ也、またちのなの、春のあけぼの、榮花ゝりべの、おぶおぶにてかへらせ給ひぬれば、源少女、うへおぶ〳〵にねぼしめしたるを、類名

おぶ〳〵　物のうかめ意の有時の、いらへおさまないふ、にぶ〳〵ともいへり、蜻蛉日記上、かくてやなどたひ〳〵おぶ〳〵の給へい、よひのほどに參りし時しもこそあれ、あなたに人の聲、それいそくなどの給ふに、聞もいれねばよひまどひし給ふやうにきこゆるなうむつかられ給へはやとの給へいめのどなくともとて、おぶ〳〵なるに、ものあゆみ來てきこえたてい、のどかならてかへりぬ、類名

おぶめりおぼし　源平盛衰記卷卅九、頼朝重衡對面の條ニ云、兵衛佐澁塗ノ立烏帽子ニ白直垂着シテ寢殿ニ出テ着座、空色ノ扇ヲカヒテト云々、此おぶめりと云は、物おぶにてめりたるにてはあらざるべし、うるはの色を赤黑くかきおぶの色にしたるをいふなるべし、おぶ色めりといふ事を略して、おぶめりといふなるべし、後三年合戰の

おぶる　澁をよめり俗におぶくるといふ莊子に疾則苦而不入と見えたり苦もおぶるとよめりきしむ意也といへり或は槲をよめり○志武志は薩摩の地名武備志に見ゆ

おへ　心瓣の音にや讀心をわらへべといひ花瓣を花のおへといへり後拾遺集に花のおへ紅葉の下葉と見えたり倭名抄に蘂を訓せり○緒にも類

おへ　也誕せたるの義にやひせ反へ也靈異記に弊なをへたげとよめり

おふて　新撰字鏡に瞳を訓せり朧也と註せり、

おふし　性質にいへり著聞集に見ゆおひふさき義なるへし、

おふにりつ　十二律也律は黃鐘大簇姑洗蕤賓夷則無射をもて六律とし陽也呂は林鐘南呂應鐘大呂夾鐘仲呂をもて六呂とす陰也合せて十二律といふ十二辰に應し十二月に配す、

おふねし　執念の音也といへり源氏におぶねき人と見えたり埃嚢抄には詩を引て忍の字をよみたり或は靱をよめり字書に忍と通ずといへり辨慶狀におぶねふしてとよめる是也、

おぶふねに　おぶる意にて運きをいふにや、

おぶみ　伊勢ノ國安濃郡に澁見村あり古事亜仁記彦坐王の子に志夫美宿禰ノ王ありて神名式にも志夫禰ノ神社と見ゆ今社地を見るに王を葬せし塚なるべし所祭三座也、

おぶもつ　什物と書り後漢書に出たり什具も同し、

おぶや　澁谷をよめり相摸國の地名也元暦の戰義經の將に澁谷重助あり、

おぶめり　澁谷をよめり俗におぶくるといふ莊子に疾則苦而不入と見えたり苦もおぶるとよめりきしむ意也といへり或は槲をよめり○志武志は薩摩の地名武備志に見ゆ

おへ　心瓣の音にや讀心をわらへべといひ花瓣を花のおへといへり後拾遺集に花のおへ紅葉の下葉と見えたり倭名抄に蘂を訓せり○緒にも類

絵に、かきおぶ色の細をほしを着て馬に乘たる武者一人絵がきたり、黒うるしの定りたるおぼしの色なれども、だま〳〵にかきおぶ色、むくのみ色などもありしと見えたり、貞三

おぶん　自分、前漢書五十四、蘇武傳、武曰自分已死久矣、

おぶん　何れの官にても四分ごて、一役に役人四人つくかゝる也、四分と云はかみすけ、おやう、さくはん是也、かみは大頭也、すけは小頭也、かみのたすけをする也、おやうは一役の内にてのせわやきにて、まり役也、一役中の取まりをする也、さくわんは筆者にて、役に付たる諸書付書き留等をする也、かみと云字は卿頭、大夫正長官督守と書く、すけと云字は輔助亮佑次官介佐、おやうと云字は丞允尉祿進判官、さくわんは錄屬令史主典目志などゝ書也、官によりて文字かはるなり、貞四

四分一　室町殿日記、御臺子すみ〳〵の金もの四分一にてあるべく候、裝劒奇寶、合四分一方、銅拾匁銀二匁五分、但銅に銀を四ツ一ト分合す、故四分一の名ある也、右共に吹合せ用、但其位下品の四分一也、又方銅拾匁銀五匁右同法、是中品の四分一なり、又方銅拾匁銀六七匁同法、是上々の四分一にて、宗珉宗與などの用ひられし地がねなり、

○あほ　鹽をいふ白穗の義なるべし萬葉集に鹹鹽と見えたり神代纂疏にも鹽土、老翁始て造れるといひ西土には宿沙氏より始るといへり出雲國古老の傳にも大己貴神より始るといふ神詠に　あほ汲んあふこのうらのたわむまで月をそ荷ふ素鵝の里人あふこのうらいふ枌の末をいふ此神詠より五十田狹小汀をあふこの浦と稱すといへり○奥州伊北郡月ノ輪ノ庄に大鹽といふ里ありてそこに鹽井あり此井を汲て鹽を燒り業とする民家多し海へ四方さゝに四日路なりといへり西行法師の歌　あまもなく浦ならすして　陸奥の山かつのくむ大鹽の里古今集にあほの山さしでの磯とよめるも甲斐の國也甲斐にも海なしされど其山に溝ありて鹽出といへり伊勢飯高郡丹生に近年川に潮汐ありてあほ水となれり其山をあほ田山其谷をあほた谷といふもよしありしなるべし凡そ海へ至て近き所五里餘なり弘法大師の歌とか　細くびの南の浦にさすをあほ丹生の内外のみそきなりけり茅原村近しそこに細くびといふ所ありさそ大和吉野郡大名持神社妹山にあり川原屋村に屬す社前に潮生淵あり歳ごとに六月晦日潮水湧出すといふ又下野ノ國鹽谷郡鹽湯の遥遠州掛川の近邊にも出といふ河内國錦部郡横山鹽穴寺の鹽石皆石鹽也○はなあほと稱するハ印鹽也近來佐渡より戎鹽を出す青色也○鹽燒ハ男の業鹽汲ハ女の業なる西土の風も同し○朝しほハ潮をいひ夕しほハ汐をいふ也○七月中旬の頃潮の大に溢るを盆潮といふ西土杭州にて八月十八日大に潮至る此を浙江潮といふ○物のほどよき時節をあほといふも潮の指引より出るなるへし月の

ほふれ　草名未考、草ノナニ、シナキトイフハアリテ、和名抄ニモ見エタレド、シフハキ、オヨハズ、隆信集物名ニしふれ、のりにたくことのはにことにをしふれど猶はかなきハ心なりけり、林葉

ほべ　藥、源のわき、花いかきりこそあれ、そゝけたるしべなども打まじりし、

ほべ　後拾雜、祭主輔親、花のしべもみぢの下葉かきつめてこのもとよりやちらんさすらむ、袖中ニ、引綺語抄ニ云、薄のほへのかきりをぬきて云々、ほべをハ俗にハすべといふ也、夫木廿七、あし引の山はとのみそすさめけるちりぬる花のほへになるみハ、林葉

ほへたぐる　扈、ものをまひて取さまたいふ、取を俗にたくるといふハ、糸萬なとを引よするをハたぐるといへれ、その意より轉てかくいふ歟、この詞古への記にハ見えず、歌物語にもなし、雅語にあらず、俗語にして、儒書佛典の訓に見えたり、徒然草上、顔回ハ志、人に勞をほとこさじと也、すべて人を苦しめ、物をほへたぐることハ、いやしき民の志をもうばふへからす、類名

ほほ　散木七懇上、水のうみされつる泪ハなりにけりあふつきしほもなきさなくより、萬代々、仁和寺入道二品親王、みをちゆく夜舟のさをやとゝむらん月の出しほに千鳥なく也、宇つ保藥宴下、松原に汐のみつた、ふかみどりみちひてそむる出しほ入しほ稻のかりほなと是也　○人をよむも味の濃淡ハ鹽の多少により紅の深淺ハ入の度數によれるゆゑ成へし一説におふの音轉なりともいへり　○いたゞ鹽類聚雜要に見ゆ自然鹽といふハ讃岐山田郡寫本の産鹽地に海水をそゝき日に晒す數次霜を生するを待て刮取海水をもて淋瀝したるを名て垂鹽といふ是を池中に貯置ハ其底に自然に凝結したるものにて小豆島土庄の産も亦同し本草に吳錄を引て婆斯出白然ノ白鹽如細石子といへるに同し俗にたらんだ鹽といふハ紅毛人持來によれり　○鹽津ハ近江淺井郡也義貞の皇太子を奉して抵る所也足利義詮も後光嚴院を奉してこゝに走る　○垣田ハ信濃の所名北條義政の後也義政信州に閑居せし時鹽田殿といふ又攝津にあり　名寄に鹽田の川とよめり　又鹽谷（シホヤ）氏あり

ほほがま　鹽盤をいふ鹽を燒竈也明律に鹽場竈丁ノ人とも竈戶とも見えたり鹽場ハほほやき也代醉編に鹽竈の字見ゆ奥州鹽竈明神に古代の物と見えて釜四ッありもと七ッありしか三ッハ失たりとそ　延喜式主稅式に陸奥國各鹽竈ノ神料一萬束と見え朝野群載に陸奥ノ國浮島鹽竈鳥ノ海三箇ノ社と見ゆ式外也　○箏の名にも見ゆ拾芥抄に出たり枕草紙にハ和琴の名とせり　○ほほがまぎくハ馬先蒿也といへり　○櫻の品にもいへり葉まて見事なりとの義也といへり後水尾院御製　浦の名ときこえハ遠き陸奥の花ハ軒端にちかの鹽竈　○顯昭いはく在中將のみちのたくまて歌枕を見るにも我御門の六十余國のおもしろき所々の中にほほがまの浦になん心をとゞめて侍るとこそ紀の國わかの浦丹後の天のはし立

浦の松いつれのほほにいろまさるらむ、人もれすそめわたりつる袖の色もけふいくしほとみるそかなしき、幾入ニ往時トヨセタリ、アテ宮ノ人内ヨナケキテ、源中將ノヨメルナリ、夫木廿六、たれもみなうれしきまほにあひにけり浪もわけさせぬよもの海哉、續古今　紋上、里のあまのたくもの烟心せよ月のてしほの空はれにけり、林葉

ほほあひ　汐あひハ沖に汐の滿あふ處也、大祓の祝詞に、汐の八百路のやしほぢのやほあひにいへり、

ほほう　源鑒、まろかやうにしほうなるしれもの、物語ハありや、同槇柱、しほうなる人のゆるさところあるましきなどて、とりよせもてかしつき、

ほほげのみかをれるくに、鹽氣也、萬二、しほけのみかをれるくに、日神代、唯有「朝霧」而薄滿之哉、萬略二、潮の滿くる時曇をかをるとゝ云、

ほほさゐ　鹽さわき也、わきの約ゐ也、萬一、鹽さゐにいらこか島へこく舟に、同三、ほほさゐの波をかしこみ、榕

ほほたる　ほほたるハ泣事をいふ、延喜の神祇式の忌言のうちにも、泣事をハほほたるといふこと見えたり、今も花などのなえたるをみて、うちをなたれたるをハ、ほほたるといふ、花のほほみたれたるが如く、人も泣時にハうちふす物なれハいふならん、萎垂

ほほだち　鹽斷の事婆娑論正理論などに見えたり

ほほたる　源氏にいたうほほれたまふと見えたり遊仙窟に泣涙をよみ齋宮式に哭ノ稱鹽垂と見えたり藻鹽をたるゝよりいふ成へし

ほほづゝのをお　神代記に鹽土ノ老翁と見えたり潮汐のさし引か如く人を指導する老人の稱也といへり

ほほのまつ　灰の名鹽の松といふにや應仁の頃より出たり土をよくいりた

の意也、源氏桐壺、たゞこの人故にて、あまたさるまじき人の恨みなどひしなて〳〵ん、かうちすてられて、心をさめんかたなき、いと〳〵人わろうかたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなんと、うちかへしつゝ、御ほたれかちにのみたはしますとかたりて云々、松島の盬のさま屋もいかならん須磨の浦人ほたるゝかな、大鏡第八、同君の延喜大井の行幸に、富小路の御息所の御はらの皇子の、七歳にて舞せさせ給へりしば、かりの事こそ侍らざりしか、萬人ほたれぬ人はべらざりき、源氏須磨、うきめかる伊勢を盬を思ひやれもしほたるてふすまの浦にて、類名

ほたるゝ　盬垂、あなるゝ盬の名にかへん、意もまた似て異也、是ハ盬のあわぢに、盬焼時に釜に潮なくみ入て、煎てほたれこず故に、それを形衣などのなへほむに、云よせていへん、盬垂を萎に云なせしもの也、あなるゝハ、あハ助語にて、打なり云、又あなりといふも、あなへなるの意なるもあり、菅家萬葉に、芝折と書れし芝ハ假名にて義なし、源重之集　水くさのあわひにやどる君ゆゑにはかなくほたれてけるかな、拾玉集　あさりするあまならなくにわか袖のうちほたれていつち行らん、類名

ほとけ　盬解、清原元輔集、よとゝもに心ひとつを焼盬のとくさもなしに消そあめへき、契沖云、盬のあまりてへり行をゆともいへり、今れもふに盬の滅なハ解といふ、物のゆるむをも盬解のするど、俗にいふ、この事なるへし、類名

ほひし　盬干潮満也、萬十七、あしつのゝみしほひしほみちきハあれといつれのときかわかこひさらむ、萬六、たきつしまありその玉もしほみちていかくれゆかハれもほしぬかも、

ほひのかた　盬干の滷也、萬六、妹にこひわかの松原見わたせハしほひのかたにたつ鳴わたる、

ほひのやま　信云、萬略一、いきおにいふたつのうみをいとはしみちほひのやまをおめびつるかも、契沖云、花嚴經云、何能度二生死海一入二佛智海一云云、潮干の山といふハ彼岸也、ほのひたるを生死の海のかわきたるにたとして、それをおのぶハ無爲の樂果をねかふ也といへり、

ほふね　潮船也、川舟に對して海舟をいふ歟、萬十四、をくさ男と小くさすけ男をしほ舟のならへて見れハなくさかつめり、同十五、くしかはゝさけく有まてしほふねに眞楫繁貫わかかへりこむ、楢

ほまつ　待潮也、日安康、大草香皇子對言、僕頃患重病不レ得レ愈、譬如二物積船以待一レ潮者、然死之命也、何足レ惜乎、萬十五、しほまつと有ける舟をおらすしてくやしく妹をわかれきにけり、

ほみかれ　萎枯也、萬十八、まきし畑もあさこ

云、盬のあまりてへり行をゆともいへり、今れもふに盬の滅なハ解といふ、物のゆるむをも盬解のするど、俗にいふ、この事なるへし、類名

ほひし　盬干潮満也、萬十七、あしつのゝみしほひしほみちきハあれといつれのときかわかこひさらむ、萬六、たきつしまありその玉もしほみちていかくれゆかハれもほしぬかも、

ほひのかた　盬干の滷也、萬六、妹にこひわかの松原見わたせハしほひのかたにたつ鳴わたる、

ほひのやま　信云、萬略一、いきおにいふたつのうみをいとはしみちほひのやまをおめびつるかも、契沖云、花嚴經云、何能度二生死海一入二佛智海一云云、潮干の山といふハ彼岸也、ほのひたるを生死の海のかわきたるにたとして、それをおのぶハ無爲の樂果をねかふ也といへり、

ほふね　潮船也、川舟に對して海舟をいふ歟、萬十四、をくさ男と小くさすけ男をしほ舟のならへて見れハなくさかつめり、同十五、くしかはゝさけく有まてしほふねに眞楫繁貫わかかへりこむ、楢

ほまつ　待潮也、日安康、大草香皇子對言、僕頃患重病不レ得レ愈、譬如二物積船以待一レ潮者、然死之命也、何足レ惜乎、萬十五、しほまつと有ける舟をおらすしてくやしく妹をわかれきにけり、

ほみかれ　萎枯也、萬十八、まきし畑もあさこ

水一飲之曰二如嘗一、此誓約者永盡二于食鹽一者也、此誓ノ事起二於律志磨島一而後竟二爲一天下之通規一也、今之潮契是也といへり

ほみつに　神代紀に潮満瓊をよめり又潮涸瓊をほひるにとよめり

ほむ　萎をよめり絞るに通せりにしまぼみたるきめなど物に見えたり凋も同し新撰字鏡に喋もよめり欲レ干也と注せり又被もよめり

ほやけ　海の焼て氣のたちのぼるをいふ荒海にいたひ〳〵ある事也といへり明和庚寅の大旱後七月廿八日の暮かたより七ッ頃まて北に赤氣見ゆ京にても若狭と見え若狭よりも戌亥にあたりて見ゆといふ諸國一同の事にて江戸人加賀人土佐人備中人なとハ親しく聞りよひハ一面に赤く夜半よりハ間道立て見えぬ次第にひろこり東西になびきたり八九十歳に及ふ人もいまた見あたらぬよしいへり西國にてハ海火事ともいふそ此夏内海ハ甚清て魚鱗の色を分たりしも皆人めつらしき事にいふめり後深草院寶治中に七月八日有二赤氣一見二于北方一狀如二野火一白氣數通変二其中一蔽二北斗一須臾滅と百練抄に見えたるそ近し續通鑑宋、徽宗建炎元年正月元日の夜に見えたるも亦近し

ほらし　盬らしき味より出たる詞なるへし居家必備に女人醜陋謂レ之無盬と見えたる意通へり

ほる　打をほるゝなといへり盬人の義にや新撰字鏡に醱ノ字をよめれと醱ハ醸の俗字説文に厚酒也と見ゆ古事記に八盬折酒あり伊勢物語に涙にそぬれつゝほるとよめり眞名本に盬流と填たりをほるとハ意少異れり源氏に目をほりつゝ見給ふなといへるは老人なとの見えかめるをおひて目

をすりめぐひなどして見る意なりといへり枕草紙にせみ聲におぼり出しといへるも同し

おぼる　絹布などにいふ綾ノ字なるへし かたみに袖をおほりつゝとよめる是也

おぼり　なといへりおぼるゝより轉せる成へし 油をおぼるハ搾ノ字也 酒も同し○伊勢物語に倉にこめてをぼりと見え落窪物語に物なくいせそをぼりころしてよと見ゆ

おぼをふむ　鹽を賤の義ふむハ實行をいへり 丹後風土記に天女恨和奈佐老夫和奈佐老婦曰無異竟鹽と見えたり 俗におぼにもまるゝといふも同し一説に火ノ闇降命の潮滿瓊にたしなめられし時に足を擧て溺苦の狀を學ひたまふより出たる詞なりともいへり

おほま　島嶼又洲ノ字をよめり 或ハ嶼をひらしまと訓る水中に土のおまる所也渚ハ水中に洲の出來たる也 瓠ハ水中の高地也 一説にすみと通す水中可ノ居の所をいふよて萬葉集に八洲知といふ事を八隅知ゝと多くよめりといへり梵語の四摩也ともいへり○國の志摩も島の義也古事記にみゆ續日本後紀に伊勢答志郡と見えて 伊勢を分てりといふよて 伊勢島なといへり或ハ名と伊勢參河の中間に在りしか海の爲に淪沒せられて後來伊勢の東邊を割て志摩ノ國とすといへるも 地形を觀察するにさもありぬへし 畔乘のあたり伊雜の浦に數千尋の海底に鳥居のありし物語も證とするに足れり○おまの湯ハ 上野吾妻ノ郡にあり夫木集に　よとともにおたにたくひいなけれとおまねのみゆハ さむるよもなし○伊豫に土中より 赤く光る石の如き土を出す是を島と名け田の養ひとす ○絹布におまといふハせいらす島の如く嶋國より出たるかたの名なるへし緯をよめり 平島といふ事國初の令に見ゆ、

おまだい　島臺を書りたのころ島を 表し丈と姥ハ 諸卌二柱ノ神の體等を木間把とハ祓除の義を取たるもの也よて婚禮などもはら是を用ゐるといへり

おまひ　素舞の義なるへし 周禮大舞の注に無所執以手袖爲威儀と見えたり、

おまる　緊縮の意まる反むる也 ○門戸などにをまりといふハ關鍵の意也古事記に柴垣やふをまりをまりもとほしと見ゆ、

おみて　染而也、萬四、紫の心に染て、同三、酒にしみなむ、同六、紅にふかくおみにし心こそ、

おみら　紵也、萬十三、あかねさすひるはしみらにぬば玉のよるハすからになけき云々、

おみゝ　おみ〳〵の略語也、俗にいおめ〳〵といふ、おめる意とり互に轉ていふ也、おみ〳〵の略語とも云へし、夫木抄七、種まきし室のはやわせ生にけりおり立田子の雨もしみみに、散木抄、たれきかん巨勢のさ山の杉のたれに雨もおみみにくきら鳴也、類名

おみゝ　繁々の意にて、木にいへる也、後に染意によめり、山家下、雪さくるおみみにおたくからさきの道行にくきあしからの山、林葉

おみ〳〵　心におみてたほゆるをいふ、おむい染と同し、徒然草、家居のつき〳〵しくあらまほしきこそ、かりのやどりといへど、興あるものなれ、よきの如く嶋國より出たるかたの名なるへし緯をよめり 平島といふ事國初の令に見ゆ、

おまだい　島臺を書りたのころ島を 表し丈と姥ハ 諸卌二柱ノ神の體等を木間把とハ祓除の義を取たるもの也よて婚禮などもはら是を用ゐるといへり

おまひ　素舞の義なるへし 周禮大舞の注に無所執以手袖爲威儀と見えたり、

おまる　緊縮の意まる反むる也 ○門戸などにをまりといふハ關鍵の意也古事記に柴垣やふをまりをまりもとほしと見ゆ、

おみて　染而也、萬四、紫の心に染て、同三、酒にしみなむ、同六、紅にふかくおみにし心こそ、

おみら　紵也、萬十三、あかねさすひるはしみらにぬば玉のよるハすからになけき云々、

おみゝ　おみ〳〵の略語也、俗にいおめ〳〵といふ、おめる意とり互に轉ていふ也、おみ〳〵の略語とも云へし、夫木抄七、種まきし室のはやわせ生にけりおり立田子の雨もしみみに、散木抄、たれきかん巨勢のさ山の杉のたれに雨もおみみにくきら鳴也、類名

おみゝ　繁々の意にて、木にいへる也、後に染意によめり、山家下、雪さくるおみみにおたくからさきの道行にくきあしからの山、林葉

おみ〳〵　心におみてたほゆるをいふ、おむい染と同し、徒然草、家居のつき〳〵しくあらまほしきこそ、かりのやどりといへど、興あるものなれ、よき

人ののどやかに住なしたる所い、さし入たる月の光もひときはあみ〳〵と見ゆるぞかし、類名

あみふかみ　染深の意なるべし、繼なとの心のふかきを、今俗にもあみふかきなといへる事有り、まらつくともいふ俗語也、夫木抄一、君をこそ淺澤のらにをはきつむ賤のをふさのあみふかく思へ、類名

あむ　染付意也、身にあみるなどもいふ、美留の約り武なれい、互にいはるゝ也、また美と武とハ相かよひてもいふべし、凡河内躬恒集　さゝの葉にたく初霜のよゝ寒みあみいつくしも色にいでめや、紀貫之集　雨なれどまくれといへくれなゐに木のはのしみてちらぬ日ぞなし、

あんか　仲賀、慶賀を申也、壽詞も同し、白氏文集廿五、喜錢左丞再除華州以詩仲賀、

あんかう　信向、後漢書十六、寇恂傳、恂與門下掾閻業共說訊曰、郡鄣扳起、難可信向、

あんかう　信仰、信向後漢書明月記、文曆二年閏六月廿九日、次奉書神輿之儀輕忽有恐入洛穢惡路頭、全不可然之趣、誦數多詫宣、訓釋之間、神人皆流涕云々退出、道俗皆讃歎信仰云々、後漢書六十一、皇甫嵩傳、初鉅鹿張角、自稱大賢良師、奉事黃老道、善養弟子、疏拜首過、筒水咒說、以療病、病者頗愈、百姓信向之、同六十五、劉焉傳、犯法者先加三原、然後行刑、不置長吏、以祭酒爲理、民夷信向、

あんく　眞紅と云いまことのべにそめと云事也、あかねなどにてべに染の似せ物ある故、ほんの紅染と云事を眞紅と云、貞三

あんさく　掛酌、後漢書廿二、馬武傳、世祖見之甚悅、引置左右、每勞饗諸將、武趣起於前、世祖以爲歡、文選出師表諸葛孔明、至於斟酌規益、進盡忠言、則候之任也、

あんじ　眞實、勝髮經、我聞佛音聲、世所未曾有、所言眞實者、應當修供養、義疏六、眞實者聖體周備非譏曰眞至德凝然、無虛曰實、

陣僧　室町將軍の古例、軍陣には必僧を一人伴ひ給ひし也、是を陣僧と云、今山城國淀の南橋本の東北に淨德寺と號して、曹洞宗の寺あり、是ハ春庭座元と云僧の開基也、春庭ハ天文の末長享年中の人にして、將軍常德院義尙公の陣僧にてありし也、貞二

眞俗　眞ハ僧也、俗ハ俗人也、是出家の詞也、貞二

神通のかぶら矢　上さしのかぶら矢の事也、實弓兵鏑に云、神通の鏑やぶさめに用る也、上矢の事也、根いめく不(本マヽ)歸本を赤漆にぬるへし、是ハ筑紫の宇佐八幡にて天子のあそばし候矢なればとて、紫の糸にて卷たる故、それをかたどりつく　源氏にみゆ今の口語に同し染着の義なり古今集にあみいつくともなどもよめり

○あむ　占をよむハ占地の類下をよむハ下居の類標をあむとよむに通へり

○盛衰記に朕あめ思召女也と見えたるも占の義なるへし　○染をよむハそむと通せり東歌の内に初をあめともよめりともに萬葉集に見えたり　○使令などをよむハあむ反す也又戰國策に以奉魏注に以猶使也と見えたり　俾使也と注し遣使人也と注し敎使之爲也と注す爲ハ國語の注に使也と見ゆ致をよむハ後漢以下に多く見ゆ又着字をよむ使の如し　○水などのあむといふハ滲入の意あめる義也める反む也又入の音を綿索經にあむとよめる意にや

あんがり　殿をよめり後狩の義也軍退くにハ殿を功とす俗にあつはらひといふ後拂の義也或ハ破をよめり序破急の破なるへし

あんき　新規と書り新法といふか如し、○俗に懊惱の意にいふハ心氣の字なるへし西土の俗語に蜫氣と見えたり蜫音陶也陳元贇か說にハ性急の唐音明の俗語なりともいへり　○屢氣の義もあり

あんこおき　神今食と書り元正紀に始めて見ゆ私記に古者謂木爲介(ケト)故今云神今食者古謂之神今木(ケ)と見えたれいもとおんこんげと呼しにや年中行事に六月十一日天皇幸中和院奉天照大神手船調齋膳以祭之と見えたり十二月、祭同日也神嘉殿に幸してタへより曉まで御親あく祭らせたまふ即月次、幣を諸神へ奉りて公にてハ諸神を親祭りましめよて相嘗祭といへり神今食と其新嘗に對へてつくる字なるへし四時祭式に相嘗祭とある即此事なり

あんさう　新造舟の字ハ棠陰比事に見えたり　○今士大夫の新婦を稱せり深窓なるへし源氏によそほひ深きまゝに居てとあり　○娼婦をいふハ唐詩に新粧本絕世と見えたり

あんじ　說文解字に天垂象見吉凶所以示人、字從二垂一日月星也、益觀乎天文以察時變示神事也所以鬲福禨祥神祇之字皆從於示と見えたり

あんおやう　尋常の音あるへき樣にといふ意也といへり尋常に勝負せよなどいへる是なり今はなげなる意に心得るハあらし　人の容貌をいふもよのつねの意なり風流の意に心得るハあらしさのみ目だつ何となく品よきをいふ詞なり

あんどり　延喜式江次第に後取と書り後取の大臣後取の采女などいふ名目あり榮花物語に殿上にあんどりといひてあひのゝりてと見えて名目抄に後取元三、御藥除夜藏人定其人と見えたり供御脇、御齒固に屠蘇白散あり藏人式に侍臣拜大飮者奉仕すと見ゆ　○大神宮の事にいふハ奉幣の日にあり儀式に後執者一人以下人充之隨忌部入立と見えたり

あんめい　神明、社と稱するハ天照大神也漢書の註に神明ハ日也と見ゆ熟田に稱するハ國常立尊也といへり　○漢郊祀志に東北神明之舍西方神明之墓也といへり、

あんまく　俗に恪勤者を身莫者などいへり天台文句に般特か偈に守口

り今も赤漆をさす、是を神通卷と云也云々、貞丈云、神通の鏑矢と云物いなき物也、射手方に入用なし、古傳書に無之是ハ田村草紙にいふ古き物語に、神通の鏑矢とあるによりて、後の人の妄作したる也、かの田村草紙にハ、神通の鏑矢のみにあらず、神通の劔神通の物の具神通の車なども見えたり、佛法の說に、神通といふハ奇妙不思儀に萬事に通達する事をいへば、其物をほめていはんが爲に、神通の何といひたる也、其こしらへ方の式あるにハあらざる也、然るに後人其名に依て妄作して大切の事にいふ也、又天子のあそバし候と云事ハ、ある說に用明天皇豐前國宇佐八幡にて、始て流鏑馬を射給ふといへり、此事ハ日本紀其外正しき記錄に見さる事なれバ信用しかたし、如此の妄說取にたらず、貞十

ゑんでん　寢殿と云ハ即主殿也、上公卿の間也、貞衡云、寢殿の屋の上ハ下を檜皮葺にして、其上を茅葺にする也、御成次第記に云、最初に先寢殿へ入御候云々、條々聞書に云、式の御成の時ハ、先公卿の間へ御成候云々、寢殿と云ハ公卿の間につゞいたる所也、別所にあらず、主殿の一名を寢殿と云、道照愚草に云、花御所御寢殿に、後土御門御座より、於彼御殿ハ萬之御祕言參也、晩飯も是御殿にて參也云々、條々聞書に云、御十殿ハ四方ながら部

接意身莫犯の語に據也また愼莫にや字魏志に見ゆ

○ゑめ　日本紀倭名抄に標をよめりゑめゆふゑめさすゑめし野なと是なり○注連なわといふも萬葉集に標繩と書り又繩延と書てゑめはへてとよめり萬葉集天智天皇大殯の時の歌に　かゝらんと豫(カネ)てゑりせバ大御舟はてしとまりにゑめ結(ユヒ)ましをと見えたるも尻くめなハの意なりといへり七五三をよむハ繩の法をもて義訓せるなり○矢にいふハ四目と書り骲箭の類也中原高忠の聞書に此物目ハ四〝あるへき事本也但し三〝にもする也されど略儀也といへり木はもとよりにて竹根にてもする也○文の上書又ハ商家にいふハト〻字を書り標の義也けさう文にはさたかならずりといふ字を書也といへり○倭名鈔に鴻をよめり青小雀也と注せり三才圖會に鉄砲といへる是也といへり○ゑめゆるめといふハ緊緩の義也○俗に今開事をもいへり

ゑめす　皇帝をよめり似も音通す賈島カ詩に十年磨一劒今日把似レス君又明人の書牘に見えたり標の義なり○濕潤の義にもいへり○古事記に故能見志米岐其老所ニ在故其地ヲ謂志米須也とみゆ

ゑめのうちびと　神事に預る人をいふ標繩の內なる人の義也又禁中をいへり人を禁して妄りに內に入ゑめさる意なり

ゑめやか　日本紀に徐〻字又深沉をよめりたる体をいふ也增鏡にゑめ〳〵と物かたりしてといへる同意成へし

ゑめる　神代紀に衰をよめりめる反むも也下と義通へり源氏にも雨の脚ゑめり又風すこしゑめりてと見えたり○濕をゑめるといふも義同し陽氣を受めをいふ滋い水の物を浸す也　○門戶をゑめるといふ俗語も下居なといふか如

にて御座候、此內殿にて正月晩飯被下御祝も御座候とあり、右道照の文と聞書と合せて考知るべし、貞十四

ゑんなさうな　眞名草名の事、吉部秘訓抄第二に云、報牒可加草名近代眞名也、又云吉書〻署〻事中少辨次第云、內案加眞名正文加草名と見えたり、(報牒ハ狀の返事也、吉書とハ禁中にて正月吉日に諸國の鎰を給りて、不動倉とて藏をひらかんと奏聞する申文也、その文に連名をかく　署といふなり、眞名とハ名乘を書く也、草名とハ判を書く也、內案とハ內々の案文あり、正文とハ本紙の事にて、表むきへ出す書付也、貞九

ゑんめう　身名、後漢書四十四、楊震傳、論曰先公道而後〻身名可謂懷王臣之節、識所任之體矣、

ゑめ　鵲小鳥也、和名鵲之女小青雀也、萬一、班鳩此米イカルカ、シメ、同十三下枝にゑめをかけ、仲枝にいかるかかけ、或書高雀あをゑ〻と云、楢

ゑめさす　標刺也、萬七、ゑんざゝましを、同十、たれかあめさす、

ゑめさむ　將帥也、玉篇、帥以〻事告人曰〻帥、萬四、にほどりのかつく池水門有ハ君にわかこふこゝろゑめさむね、帥又視之省歟、楢

ゑめ〳〵　物めれてひめこと也、俗にゑかいふ、ま

た霖雨のつよくもふらす、またあがりもせぬを、あめ〳〵降雨などもいへり、この事すでに古き世よりいふ歟、源順集、ふくれつゝうつろふ見れい菊の色をあめ〳〵と降雨にさりける、類名

あめたて　標立也、萬十八、大伴のとほつかむたやのたくつきいしるくあめたて人のあるへく、

あめなは　標縄也、古上、布刀武命以尻久米〔シリクメ〕縄控度其御後方白言、從此以内不得還入、日神代、中臣神忌部神、則曳以端出之縄乃請曰、勿復還幸、和名注連之利久倍奈波、萬十、はふりらかいはふやしろのもみちはもあめなひこえてちるとふものを、

あめのうち　規裏、文選、あめの意いあめはゆるの下にいへるに同し、文選、射雉賦潘安仁良遊ヲトリ呃喔、引之規裏、注、徐定曰、言雉呃喔其聲、誘引令入可射之規内也、類名

あめはゆる　立標、あめい標也、今の世にいあめい注連縄の事とのみ思ひて、神社にのみいふい僻事也、あめ野といふも、こなたに領得たる野をいふ、そこにい必傍示杭を立て、これよりこなたい誰の領知所といへい、義訓に標をそのまゝよむ也、あめ縄もこれより内い、神のちり給ふ所にて有とて、注連縄を引也、されどもその事たのつから二つ也、ましうべからす、射雉賦の規裏を志米乃宇知と訓るも、あきりの内をいふ也、俗にあめきると

いふ詞よくかなへり、禁野をあめのといふも、外人を入れさるをいふ也、拾玉集　山さとのそともの小田のひらせまちあらさめはへて種蒔にけり、類名

あめゆふ　その所をあめと、我物とするをいふ、神のいかさま注連ゆふにたとへたり、伊勢集、亭子のみかとの御前に前栽うゑ給ひて、朝露にけるをめてさせ給ひて、歌よめとの給ひければ、うゑたてゝ君かあめゆふ花なれい玉と見えてや露もたくらん、萬代集、たつね來て今そあめゆふ玉たすき雲ゐる山のはつさくら花、類名

あめる　夫木抄六、心さへあめる三月の暮の雨

あもぐもり　霜曇也、萬七、霜くもりすとにかあらん久かたの夜わたる月の見えぬたもへい、今俗霜をれといふこれか、檜

あもと　簑字書を考るに簑笠同、又方言、木細枝也と見ゆ、笠衣益切、竹索也とも見えて、是にてい竹にて作れる縄にて、今の伊勢火縄是也、さるに方言によれい、木の小枝といへれい、今も樵夫猟童の薪爪木を束ぬるにい、直に小木の枝にてすれい、方言の方をもたがふ事なしとすべし、筑字の注に與箍同以簑束物と見えたるに符合すべし、あからい歌にあもとゆふかつらき山と讀りしも、そのあもとい幹楚等いもとより用れども、此簑を用るもまたあしかるべからす、拾玉集

おやう　狀いありさまなるを書札を狀といふい居家必用に其義見ゆもと官へ訴ふる文をいふに据なるへし○門戸笈櫃の類におやうといふい萬葉集に櫃に鏁刺とあるをさうとよめる是也　○俗におやうのこはきなといふい情なるへし

おやうえ　王制にい貴賤となく常に烏帽子をかふふり布衣を着たるをもて神古質朴の風のまゝ白はりの布を用ゐて淨衣といふ也裁縫の制い狩衣に同し太上天皇も内々御社參に若御ありといへり○八幡宮放生會に神幸の時い供奉の公卿い束帶或い衣冠也還幸の時い烏帽子淨衣にて供奉せらるゝなり

おやうぎ　界尺をいふ常規と書り或い繩木かさらいをようと書へし○加賀の俗に屋根板のいまた片に引ざるものをもいへり○鄙俗に椀をいふ常器なるへし

おやうぐんづか　盛衰記に桓武天皇平安の都をたて長久なるへきやうにて土にて八尺の人形を造り鉄の甲冑をきせ矢をもたせ東山の峰に一丈餘りの穴をほりて西向に立てうつまれけりと見ゆ是泉涌寺の上方なる塚なり或い知恩院に在所の花園院の陵を謬稱し或い上粟田北白川の勝軍山の事とす勝軍山い勝軍地藏堂あるをもて呼り一説に地藏を金剛幢大軍と號す是を將軍地藏といふ或い勝軍地藏圖雛王の稱あり又泉涌寺の上方なるい園大暦に見え花園院の陵のことい薩戒記に見えたり鳴動のことも保元元年にありしい大亂の兆なりまた治承元年にありて清盛入道福原遷都の兆なり明應二年のことい親長記に見え享祿三年の

うき身にいおゝまをたにもえこそせね思ひあまれハひとりうたれて、

おもゝとゆふ 枕詞　かつらき山にとあり、大歌所、おもゝとゆふかつらき山にとあり、おもゝとゝいふ景行紀に、茂林、雄略紀に、弱木村、式に、楮なとあり、俚にいふ、ヲヲヒ也、山人これをきりて、さて葛なもてつかねる心にて、楮結葛とハつゝけたる也、歌

おもものふりは　霜のふるといふをのべていふ也、ばやといふ詞に同し、續後撰集秋、水くきの岡のあさちのきり〳〵す霜のふりはや夜寒なるらん、今思ふに蟋の鳴時ハ羽をふりて足もて摺てなけは、それをいひかねて霜の降とよみ給へり、類名

おもふり　霜降也、萬一、おしへゆく鴫の羽かひに霜降てさむきゆふへハやまとしもほゆ、

おもゝれくへく　霜可置也、萬十、秋山のこのはもいまたもみちねハけさふくかせハ霜もおきぬへく、

おもや　下屋、宇都保しかけ、おもやに雑仕してありけるなん、

おやうあい　鐘愛、明月記文暦二年十二月廿三日、大相禪門最愛姫君、十一、自廿一日危急之間、又聽心力口鐘愛之故被悲歎、於今者又存命歟、

おやうげ　齧牙と云ハ白米の異名也、齧牙と書てくしかのきばとよむなり、白くつきをらげたる米がくしかと云獣のきばに似たるゆゑなり、（玉造小町といふ草紙に、食ハおやうげをくらふとあるハ此事也、東鑑巻之六三云、給齧牙人別一斗云々、貞六

こゝハ後太平記に見えて倶に足利將軍の時なり近くハ慶長三年八月にもありて不日に豊太閤薨せり西土の詩にも將軍塚鳴洛陽ゝ東とも將軍塚靜家〻無〻難とも作れるなり貫氏談錄に華嶽金天王ゝ廟玄宗御製ゝ碑ゝの自鳴て數里にきこゆるこゝを書せり河州こんだの八幡の陵同國聖徳太子の廟大和多武ゝ峰の廟堂津の國多田滿仲の塚も鳴動せるこゝあり

おやうげ　物に御生氣の方生氣の色なと見えたり今生家に作る月令廣義に生氣ゝ方正子二丑ゝ順〻輪十二月亥とあり唐の法帖に往〻東都ゝ遂〻生氣とも見えたり陰陽寮豫ゝ十一月進〻撝文ゝ以〻天子來年御當卦ゝ戴ゝ之生氣者八卦方位之名也○神宮に産屋を生氣といひて五十日忌といふ事砂石集に見えたり○西宮記に御生氣ゝ御服も見えたり雲圖抄に陪膳ゝ尚藥者〻生氣ゝ唐衣と見ゆ○障礙の音にもいへり

おやうけい　上卿と書り上ハ上日長上なとの上つかんまつるとよめり公卿若干の中に二人專に其日の事を掌る人をいふ也節會の内辨に等しといへり

おやうお　庄司ハ治安三年に院ゝ莊司見ゆ中世以來諸宮及朝臣の國々にて地を賜はるゝ庄園といふ其家々より司人を置て主維せし也よて國衙と庄園と別々に命令をなす頼朝よりハ國々に地頭を置ていつとなく庄司の號もなく庄園も武家の威權に押へられ鄕司保司なと稱せし也されと豊太閤の時まて熊野の八庄司なとありき

おやうおん　野菜海草の類を精進物といふハ古き語なり朝野群載御齋會加供ゝ解文に精進物と書し青苔曳干和布曳干海松昆布なと見えたり○醋食といふも精進のことなり○精進落ハ西土にいふ開ゝ齋なりまた開葷といふ杜詩に多年病酒開ゝ視滴ゝとある開の字義にたなし○精進の語ハもと美食せさるをいへり今魚肉を食さることさするハ佛氏の意なり

おやうたん　上段と書り坐席の上段にて一段高く設くるをいふ高位尊客のためにす○世話に上段をいふといへるも是なり

おやうもお　唱門師と書り今朝家の左義長土用ゝ水合なと勤る役也二水記に洛外有〻唱門師村と見えたり物に金皷打者といへり

おやうや　農人の長を庄屋と稱するハ庄司莊官の遺名也といへり治平略に村長明律に管莊人と見えたり里正も同し

おやうらふ　職原追加に不〻謂是非二三位ゝ典侍號〻上臈公卿ゝ女號〻小上臈諸大夫良家醫陰陽道等ゝ女號〻中臈諸侍加茂日吉ゝ社司ゝ女號〻下臈と見えたり○大諸禮に高座を心がくるは田舍人のわざなりひとり上らふとてかたらいたき事也と見えたり

おやうゑん　莊園と書り地を封せす田を賜ふをもていふ湯沐の田外家に譲り功田子孫に至り寺に施入せし類私領と名け官より給賜するにあらさるものを庄園とする也これ郡にあらす境界も定らすなりしより諸國に何の庄といふ其名の遺り也といへり○正統記に中古となりて庄園多く立られ不輸の處出來しより亂國といへり

おやか　胡蝶花なりといへり類〻射干ゝと見えたるをもて射干の音を轉訛せ

かの浄瑠璃御前の物語をうたふ故、おやうるりをかたるといひし也、それより以來外の人の事を作りたる物語をも、ふしを付けてうたふなば、たしなべて浄瑠璃をかたるといふ也、京都將軍よりいはるか後にはやり出たる事也、貞二

おやかうすり　婚入り道具の記にあり、麝香をすりこなす小き茶碗の様なる物也、すり棒もやき物也、何れも唐物也、麝香にけおやうの水などに入る也、右のおやかうすり外に燒物の藥かゝりて、内にすやきにてつちのまゝ也、貞八

淨衣　白き狩衣也、裁縫替る事なし、布本也、或は生絹也、是を着るに衣單（キヌヒトエ）等をかさぬる事、狩衣の如し、貞五

借家　康富記、近所之借家、

おやつきやく　俗言也、京都將軍時代の方言也、今の世にもさつきやくといふに似たり、実張様の意也、下人の語にも、おやつきばるといふにも似たり、伊勢家禮式、人の前へ出て禮をする事、あまり又久しく禮をするもわろし、又あまりおやつきやくにあたまたりきも、びろうにてわろし、類名

おやびたふ　奢靡、さび、後漢書廿四、馬廖傳、上疏長樂宮、以勸成、徳政、曰、臣案前世詔令云々世尚奢靡、故元帝罷服官、

おやめん　赦免、さめん、後漢書六十二、董卓傳、僅等恐之先遣使詣長安、求乞赦免、王允

以爲一歳不可再赦、不許之、

舍利濱　奥州外ケ濱にホロツキといふ所あり、此海邊に舍利濱あり、回國修行の者などいふ、此舍利石をひろひ、大に尊信する事なり、殊に奇なるは、磯近く海中に廣さ五十間程の舍利母石あり、此舍利母石より、常々舍利を産し、其舍利落て、此濱に打あげ、古今絶せず、此故に舍利多しと也、其舍利母石水面より餘程深くあづみ居て、濱邊よりは見えかたし、此邊の漁父に頼めば、海底に入りて、玄翁にて打わり、取あかる事なり、此故に此舍利母石を得る事は頗る難し、されど珍敷ものなれば予も指の頭程の舍利母二三を得て歸り、其全躰の色は薄黒く土の化したる石のごとくにして、其中に米粒のごとき小舍利夥敷孕めり、誠に奇なる石なり、又此舍利濱の先に今別といふ所あり、二三里もへだゝれり、此所の濱を瑪瑙濱といふ、此濱に入る前後に、自然の石門あり、甚奇境なり、夫より内凡半道餘、めのふ石の濱也、尤常體の石も半まじれり、瓦石もめのふも大さ大抵拳の程よりたまごのごとく或は小きい豆のごとし、皆々明徹にして、京都にて緒おめにするもの也、世に津輕玉といひ又は寶石ともいふ、人馬往來する濱なれば、足元に玉石みち〳〵、殊に日光にきらめきて、目眩する斗也、云云、かくのごとき濱、京近くにあ

おやま　國を置て惠ませたまふといへりされどかゝる御名の皇子はましまさず　蟬丸を延喜帝の皇子といふかことしそ　唯神名式越前、國丹生郡に雨夜ノ神社あり　○今せきたふといふ　内典に多寶佛塔石塔沙塔泥塔等ありといへり　○近江、國蒲生郡石塔寺のごとい　拾芥抄源平盛衰記等に見えたり

おやぢく　大雨を如車軸と譬へたるい法苑珠林に見えたり　祖庭事苑に涙如車軸とも見えたり　○卿にいふい葉のありさまの似たるよりいふ　鳥凰花也　常陸にさんぼはさといふ、

おやら　風流の意におやらくさしなどいふい　洒落の音なり　○花卉に一種の樹に名て　夏白花を開く　潜確類書にいふ沙羅樹にや　夏つはきともいへりばんやの類にも沙羅樹あり　本卿木綿の條に見えたり　又七葉樹一名娑羅樹と見えたりとちの木なりといへり　今涅槃像に畫けるものに似たり、

おやれ　人情世態を熟したる人をおやれものといひ色におやれ　栃栃におやれき天靈蓋をしやれかうべなどいふいされの義おや反さ也されいさらせる意らせ反れ也

おゆいん　物に手印と見えたりされい朱墨ともにいふへし手印い今いふ手形のごとのよし周禮の疏に見えたり　○こゝいんも朱印にむかへて黒印といへど物に朱き國印とも見えたり古へ毎國印あり山城、國印大和、國印のごとし又毎郡にあり近江、國山田郡、印大和、國高下郡、印のごとし又朱の御手形吉野拾遺に見えたり　○徐官か説に朱儒の簡札にまゝ

らば、守る人も嚴敷、門戸などもありて、みだりに見る事だにもゆるされまじきを、かゝる人なき邊地なれば、道行人の取に任せ、誰一人禁ずる者なし、めづらしき地也、東遊記

おゆう　自由、白氏文集廿五、閒行律、衣食單疎不是貧、專掌圖書無過地、遍尋山水自由身、

宿衣　衣冠の事也、禁秘抄下、御膳事ノ篇ニ宿衣トアルニ、愈非義知傍注ニ衣冠ノ事也ト見タリ、眞ニ

おゆけん　入眼、下學集下、入眼、日本世俗、成就之義也、

しゆさ　すき、取舍、文選東方朔貴葵炎候孝者、至ル如身爲漢隸而跡入魏幕、源流取舍、其亦文著之謂、

おゆのう　受納、後漢書六十八候覽傳、以佞猾進、倚勢貪放、受納貨遺、以巨萬計、

出世　清僧なるをさして云也、又山伏などをも出世ゝ云也、故實雜々聞書云、門跡の出世ハ、大略御供衆ゝ對々たるへき歟云々眞ニ

おゆちやうづきん　剃髮の者のかぶる頭巾也、源平盛衰記、太夫坊覺明ハ、首丁頭巾ふしなめの鎧を着る又首丁頭巾ゝ腹卷着たりなんどしてとあり、又平家物語に土佐坊昌俊黑革鎧

墨をもちゐ元ハ青をもちゐ皆禮制に朱を用るに忍ひさるゆゑなりといへり

おゆくし　宿紙と書り、海人藻芥に五人職事內裏に宿直し仆ゝ紙をもて綸旨を書下すより宿紙といふと見え又古へ鮑書の類を紙屋川に濱してすけり宿をふるをもて名く又其意をもて俗に薄墨と稱すといへり一說に延喜式にいふ熟紙をすみてよめるなりともいへりされど熟紙ハ唐書に見ゆ生紙に對しいへりたうさ紙也とそ

おゆくばう　今大寺に參詣する人ハ其塔頭(タッチウ)を宿坊とす○神宮雜例集に離宮院ゝ宿坊號齋殿雜事記に祭王之御坊なと見えたり

おゆつくわい　述懷の字文選に見えたり俗語の意ハ轉訛せるなるへし○懷舊ハ詩に懷古とも見ゆ文選に據二懷舊之者念一といふに据れり述懷と少異あり

おゆつせ　仕官して幸ある出世といふハ出身と同し義と心得れともあたらす是ハ佛家の語より誤る成へし佛家にハ出世間と云て世間を出離する故に出家の大德を稱する語なり出京なとの語も同しといへりをのてにはをにゝ謬りたるなり

おゆにまおはる　徒然草に衆に交ると見えたれハ世諺の朱にまじわれハ赤うなるといふもと衆に交れハ萬事明らかになるといふ義なるへし又家語に丹之所藏者赤とも見えたり

おゆぼく　筆法を入木といふハ王羲之か故事也書斷に筆入木三寸と見えたり

着て首丁頭巾を着たりとあり、鎌倉年中行事に、成氏の出陣の事を記して、御力者或ハ十人或ハ八人又ハ六人、何も出長頭巾さて、黑布にてくゝりてうしろの方をハ廣くして、中一所ばかりおとしたるをかぶり、白き素袍に染たる小袴引敷付て太刀をはくとあり、首丁頭巾も出張頭巾も同物也、又頭長頭巾とも書也、出陣の時ばかりかぶる物にて、常に用る物にハあらさる歟、眞三

おゆふく　修復、後漢書卷一、光武紀、詔修復西京園陵、進幸二湖陵一征二董憲一、

順のかまち　異本曾我物語、河津助道すゝみ出て申やう、憚多候へとも、昔より申ならひし候ことく、順のかまちにはつれぬるハ、人の數にあらすやらん申候、同し座につらなりながら、身一人御角力にもれ候ハんも、いひかひなき事に覺え候、云々、今いふ順の舞といふに同しき歟、今の方言に敗居をかまちといふ、かきりといふ意なるへし、類名

淳和院　淳學院の別當　此二ッの院ハ、源氏の學文所の名也、源氏の長者たる人其學文所の支配するを別當ゝ云、將軍家ハ源氏の長者たるによりて、淳和并學兩院の別當になり給ふ也、又學館院ゝ云ふハ橘氏の學文所也、後世堂上衆に橘氏絕てなし、依之橘氏の長者なし、後世九條殿學館院別當に成り給ふ也、梅ノ

おゆん　朝家の公事に旬あり張說詩に旬宴美成功と見えたれハ唐制に沿者也といへり內裡あたらしく造られて初て南殿に出させたれハしまを新所の旬と申位につかせたまひて政にのそみたまふを萬機の旬と申と年中行事歌合に見えたり朔旦の冬至なれハ祥瑞とし旬を行はるゝて臨時の節會あり夏の初冬の始に扇を賜ひ氷魚を賜へりよて物事にその時に至り其度に申るを俗に旬といへり字書にも徧なりとも滿なりとも見えたり○鞦韆にハ日をゝゆんといへり正保中越前ゝ舶漂流の話なり滿州字式に舜ゝみゆ

おゆりけん　手裡劍と書り鑿劒の術也といへり南史齋靡訶傳にいふ銑銀なりとす

おゆら　俗に石を引事を修羅といふハ阿修羅帝釋と權を爭へる事梵書に見えたり帝釋を大石とする也

○おようろ　如雨露の義花史左編に賜宴と見えたる是也といへりみづふきともいへり、

およぐる　觸穢と書り濁穢の義にあらす梵書に淨觸とも成觸とも見えたり又東司ゝ具に觸杖觸桶なと禪家にいへり色聲香味觸法の觸も同し

およし　所司の名ハ內裡式に見え拾芥抄に行事勾當公文謂之所司と見ゆ京都所司代職ハ足利家の時より起る京の所司代都築氏ハ貞和元年に見え京極持清後花園ゝ院の寶德元年に侍所司に補せられし時に多賀豐後守中原高忠をもて所司代とせしより今に所司代と呼來れり所司代源高忠ハ海東諸國記にも出たり又周防州山口所司代とも見え伊

宮の社家(シャケ)どもい橘氏にて、九條殿に付き隨て官位の願をたのみ申也、依之九條殿ハ、おのづから橘氏の長者の如くに成たる事也、九條殿ハ藤原氏なり、眞四

おゆめう　壽命、後漢書廿三、樂恢傳、臣壽命垂盡、臨死竭愚、潛夫論述赦篇、先王之制刑法也、非好傷人肌膚斷人壽命也、

叙位　正月五日六日の比に行はる、是ハ人々に位を被仰付時の政事也、近代ハ叙位除目ともに總て行はれず、眞四

おようう　資用、後漢書十八、吳漢傳、王莽末以資客犯法、乃亡命至漁陽、資用乏以販馬自業、

承仕　剃髪の者也、承仕法師とも云也、海人藻芥三云、承仕法師ノ事、仙洞執柄家以下被召仕、至宿老皆叙二法橋法眼、御室門跡不レ詳僧綱雖レ然觀音院等皆預二僧綱上令レ着座一云々、他門承仕連綿叙二僧綱一歟、眞四

職事散事　職事とハつとむべき役儀ありて、其官の事をつとむるを云也、勿論位もあり、散事とハつとむべき役儀なく、無官にして位ばかりなるを云、(職事の二字シキジとよめり藏人の事也、職事散事の時にハシヨクジとよむべし、眞四

およさい　如在、式目に如在禮尊なきいへるハ、祭如在云々の字をとりて用ゐたり、それよりつねの俗言にも、如在なきなどいふも轉語也、論語(第二爲政)祭如在祭神如神在子曰吾不レ與祭如不祭、

序跋　愚問賢註序、藤原貞基、都のつと同、空穂(藏開卷)彼書の序に、いひて侍るやうにも云々、もんその詞、はつかなる女子あるべきにあらず、(コレハ入唐ノ間ノ日記ヲ、漢文ニテカキタルナリ、此頃ノ日記、漢文ナルベシ、林葉

除目　官を任せらるゝ時の政事也、正月ハ縣召の除目とて、諸國の國司を任ぜらる、秋ハ京官除目とて京都に居る人を官に任せらるゝ也、又臨時除目とて臨時に行るゝ事もあり、大臣ハ除目の時任せず、節會を行て任せらるゝ也、任大臣節會と云、眞四

おとめい披露　をよめいハ疏銘とかく也、東山左大臣實熙公の名目抄云、毎年誕生日維那僧持參祈禱疏乞銘、仍書姓名遣之云々、疏とハ御祈禱の意趣をかきたる書付也、銘とハ其書付に其願主の姓名を書遣す也、眞四

叙留　官位ある人、一段上の位にのぼりて、官ハ元の如くなるを云、位ばかりすゝみて、官ハのぼらざる也、眞四

諸禮者　今の世に江戸にて諸禮者といふハ、多くハ小笠原流を名のりて人に指南する也、其元祖ハ小笠原右近太夫貞慶の家臣に、小池

り草ともいふ○あんこといふハ女中詞也

おらが　新撰字鏡に繭をよめり白髪の略なり○俗に辛苦することを髪の白くなるといふハ漢の光武の語に毎一發兵不覺頭髪爲白と見えたり

おらがさね　白重也卯月朔より練貫の綿を召る、也といへり又まさすけに白きうす物をはんびたがさねにきる也といへり澁臨草に冬の更衣にもてうらともに白く菊の意か或ハ露霜の色に是を用うと見えたり俊成卿夏くれハ衣かへしてやまかつの卯の木垣ねもおらがさねなり

おらがつく　萬葉集に木綿の頭餅にいへり白髪着の義似たるといふなり又直に木綿をおらがともいへり　四のふねはやかへり來ねおらがつけわか裳のすそにおそく待なんと遣唐使に賜ふ御製ハ木綿を御ぐしに着て裳裾までをさせたまふは古へ神祭のいもあの時のさまなりといへり

おらかみ　嚴下放言に士人郭量寄妻誤封一白紙去細君得之乃寄一絶云と見えたり俗語にやるそ白紙文とよめといへる是なり

おらき　新羅をいふおらハ斯羅也きいくに反きなれハ國の義也といへり○新羅東方一別島に細羅國あり三代實錄に見ゆ○永承七年に始行新羅ノ祭と見ゆ新羅明神ハ叙山の麓にあり○木にいふハ婆羅得也といへり白木の義實にて油をとり鉄の器に盛る也天台の書にいふ三衆花に同し國土の菓子ともいへり○一種の品にいふハ椒橿也といへり

おらぎく　菊ハ大要黄を貴へり詩人の賞する所藥用に入るもまた同しさるに歌に多くかくよみしハ新羅菊の義也といへり花史左編に菊品新羅一

名倭菊千葉純白を見えて群芳譜に標榜高雅非尋常比といへり一說に此品我國に出る名を得たるをもつて白菊と詠人も詠せり西土の人そらの訓によつて新羅の字を填たる也と云〇衣の色にいふ花もて白うるはしう也といへり〇蜀記に白菊、神祠を見えたるは今の御香宮式に山城、國紀伊郡御諸神社をあるは是也今猶重陽には菊花をもて祭るといふ神體は神功皇后也といひ俗に〇妙音院、相國熙田宮にて彈し給ひし琵琶を白菊と號す今も尾張にあるとぞ

まらげ　日本紀に精兵をえらびつゝものゝよりすぐれ物をえらぶといふ米よりも出たる也新撰字鏡に勝をよぐらげと訓せり〇倭名抄に精米をよげよね糠をしらげのよね糠をひらげのよねと訓せりまた良の義ひらは並々なるといふ也新撰字鏡に精をよぐらげよねを粳をよねひらかよねと訓せり

まらげうた　古事記に見ゆ精を日本紀にえらげとあり

まらすゝ　神代紀に治、字知、字御、字をよめり伊勢物語にまろしてかりにけりといふも治、字の意あり知をよむは今、知の義也所知もよめりまろ反をえらに同し唐韻に知、國事、なと見えたり〇白洲の義懐抱鍵に一雨洗沙去庭除如白洲、と見えたり又白砂の義あり歌に苔むすまでらの庭さよめり〇魚にいふは北戸錄に蒼魚と見えたり

まらたま　日本紀高葉集に眞珠をよめり延喜式に白玉と見え長暦宮所に白玉幾丸といへり宮處にまことの玉といふ語あり〇高葉集に水良玉にも作るまら反をえらや反ら也全浙兵制に帽子を沺西と譯し西瓜をまくわうりといへり

非ニ好者也穴賢

年號月日　水島ト也　元成

右の如く見えたり古事新事交合あるを以て卜也が色々つくり事をしとらへたる知るべし眞一

まらあわ　白沫、拾遺愚草下、雪をのみだにつもるまらあわに夏きえて秋をもこゆるたのみはなみ、

まらえめ　まられめる也、れをえらふも古言の一格也、高玉、おとりするおのこをもひさにいへり

まらかし　白樫也、日孫行、このもとまでかし人にたゝみもくりの山のまらかしかへをまくらにさせこのこ、高十、おしひきの山のまらかしまらかしの枝もとゝに雫のふれゝば、後拾遺、紅葉ある秋の山邊のまらかしの下はかりこそ道と見わけれ、秋萩子、木のまらかしなと云ものまして深山木の中にまらかしほそく、三位二位のうへのきぬをかるたりはかりそ、葉ながたに人の見るものそたき事をかしき事にまくらのふるに見まがへられて、

まらがつけ　蔺草の清白にはそたるなくし、高三、まらがつけのふるつけはてよめる、柳の枝に蔺をつけかへ緒をつけて、神をまつるひのむたいふなるくし、

まらかひ　源竹川、わかき男のこゝろかひもなやこゝみ

よめり〇大神宮式及儀式帳に瑩結紫、緑加美阿氏、帛白玉とつゝけり神代紀にも瑩擊にまくる珠の事たいへり法華經にも珠入在瞳中不ニ失ニ眼人と見えたり〇炮書に赤眞珠あり金色の者たいふにや頗珠に黒眞珠あり又青色なるものあり〇催馬樂葛城に江の葉井にまら玉まつやとあるは光仁紀の雷詩をうたふなるにより光仁紀今の本に白璧とつゝやとあるは好璧とつゝやとありて光仁の御諱も白璧と稱するは誤にて白璧なるくしとつゝの解も璧にては通しかたしとは度會光隆の說也〇神祇詞に白玉赤玉青玉をならくいへり臨時祭式に赤水精八枚白水精十六枚青石玉四十四枚と見ゆ

まらたまびめ　赤人の歌に見ゆ霞をふるといへり喜撰式には若詠、緑時まらたまびめと云と見えたり

まらさほふ　高葉集にたひたゝまに冠らしめたり白糸を經て緒にする意に感けたるにや上野歌なれは說る成くしをにひたゝまに小新田山也といへり、

まらなみ　山城の白波といふは後漢の白波、賊をいへり又山立をいへり高葉集古今集をもて漢津白波立田山を處かの拾遺集にはよき人のよつの山とも見ゆれと本は白波とありて盜人の非なるをよかみしなるくし龍田山に賊人ありし事は扶桑略記に見えたり是をふまえたる也とぞいへり

浮導の一葉なるをうかべれたるひなかたを興津ら浪

まらにぎて　神代紀に白繒幣を書り古くゆふなといふ書をは今は紙をいふなるくし

えあらかひさまよふほどに、(巴抄みえあらるゝ也)、今昔十九、飯ヲモ皆泥形ニメ、蹈ミ成メ嚥シ身カフ音ヲ聞テ、同廿八、追シラカヒテ、枕冊子、(物のあはれあらせかほなるもの)、常にみえあらかひてありく、

白木の弓　ぬらぬ弓也、是も三所藤をつかふ、弓馬故實に白木に藤つかふ事有ましき事也云々、是ハ三所藤の外に藤つかふへからずと云事也、白木ハ本式の的弓也、貞十

あらきなの　新羅斧也、日欽明、十五年冬十二月、百濟王聖明獻好錦二疋甚銳一領斧三百口於我天朝、これによれハあらきよりも貢せしならん、萬十六、はしたてのくまきのやらにあらきをのたどしいるわし、楢

あらくも　白雲也、萬四、こしにありてつくしやいつしあらくものたな引山のかたにし有らし、

あら雲の　枕詞　たつ一別、あら雲のたちなむ後とあり、雲の起な旅だつによりてつゞけたり、

あらくる　壬生忠見集、年かさにまつらんかすいきねそみんいたゞくかみのあらくるまでに、

あらこゑ　信云、異本枕、鷲いさまかたちよりはじめうつくしう云云かばかりあてにめでたきほどよりハ、夏秋の末までありて、あらこゑになくと、だいりのうちにすまめどそ、いとわろき云々、

あら〳〵し　源重之集、よそに見る物とそ見めあらゝ雪のあら〳〵しくもたもほゆるかな、

あらせし　領也、萬十六、たきつくにあらせし君かそめやかた、

あら露の　枕詞　むく、一戀、あら露のむくといなげきあり、露の置を起によせてつゞけたり、又二秋上、白露のむくにあまたのとあるハ、置を奥によせたる也、歌

あらとりの　枕詞　とは、さき、萬四、白鳥能飛羽山松之とあり、あら鳥さハ、何と定めたることハなく、只白き鳥をいふ也、さてとぶをとぼとかよハしてつゞけたり、(白の字心なし、)又同九、白鳥ノ鷺坂山とつゞけたるハ、心明らか也、歌

あらなく　不知、あらぬといふに同し、なくの縮ぬなれハ也、無の意にハあらす、紀貫之集　なけきこる山路ハ人もあらなくに我心のみ常にゆくらん、

あら波の　枕詞　うちあらる、三戀四、あら波の打あらきりつゝとあり、波のひまもなくたちくるを、なすわざのつゞくにかけてつゞけたり、源桐壺、あまりうちあらるをり〳〵いとあるも、更衣の御ときのぬひまなくつゞくをいへり、歌

あらに　不知也、不をにといふハ古言の一格、日葉神、あらくをあらに、同應神、ぬなはくりはへけくあらにぬくひつく、河俣江のひしからのさしけくあらに、萬十五、さよふけてゆくへをあらにあかこゝろ云々、いへへをにといへるにも不成へし、

見めあら雪のあら〳〵しくもたもほゆるかな、

あらぬひのつくし　不知火の筑紫なり萬葉集に白縫ノ筑紫と見えたり景行天皇筑紫にくだり給ひし時に夜暗くて御船つくべき便りなかりしに忽火の光を見て岸につかせ給へり其事日本紀に見えたり是海火也今も雲打くもりたる夜ハ海上に火多く見ゆといふ肥前肥後ともさハ火の國といひし同義なる也倭名抄に肥前ひのみちのくち肥後ひのみちのしりとよめる豐後國宮古ノ郡甲浦(カン)の奇火ハ別の事なるへし古事記に筑紫ノ國謂白日別とも見えたり

あらぬりのすゞ　延喜式に白塗鈴と見えたり定家卿應ノ歌に　勅ありてみゆきふりぬるくたら野の鷹の鷲毛もあらぬりの鈴萬葉集長歌に詠白大鷹に白塗の小鈴と見えたり○鷹の鈴は近世關の則船を名工とす

あらは　衣を白羽と稱するよし舊事紀に見えたり長白羽(ヲ)神あり白羽の矢といふ西土にも直に箭を指て白羽なといへり

あらはた　日本紀に素幡素旆白旗なと見えて皆降首の時に用たり西土の法も同し○世に源氏のあらいたといふハ源平盛衰記に平家ハ赤色を捧け八幡殿の家にハ白色を捧け刑部殿の家ハ黑色を捧くなど見え兼實公の記にも藏人行綱か云く當家先祖より白綾無文の旗をもちゐ來れりと見えたり新編纂圖にハ其家の祖貞純親王に大將軍の宣旨ありて月花門(ヒバ)混白の幡を賜りしより事起るといへり二條院の御宇信頼義朝か叛せし時官軍入二大內一扳二白幟一立二赤幟一の事あり是平ノ重盛公の謀也○白旗の城ハ備前に在リ赤松か据し所也

あらはた　日本紀に白癩をよみ倭名鈔に白瘕をよめり白膚の義なりそろうさに同し

あらひ　仁賢紀に顧懇をよみ繼體紀に通ノ字天武紀に有意の字を心をらひとよみ源氏にいひあらひつきあらひあへあらひ新拾遺集物ノ名にことをらふ徒然草に引あらふなといふめりらひ反り知の義なるへし或ハ爭をよめり

あらべ　菅家萬葉に調をよめりあらぶるともいへりぶれ反べ也明白の意成へし枕草紙にわづかに聞わたる事をハ我もとより知たる事のやうにこそ人にもかたりあらべいふをにくしと見えたり

あらゆふはな　萬葉集に白木綿花と見ゆ木綿の花勝也あらゆふ花に落瀧津白ゆふ花に浪立渡るといへるハ浪の花をいふなり

あらゝ　あらゝといふ物語ハ十訓抄に見え紀の國のあらゝの濱ハ紫式部日記によめり伊勢のあらゝの濱西行の歌夫木集に見えたり根倉とよみ合せたる歌も傳れハ倭姫世紀に白濱の眞名胡の國といへる所成へし

あらを　白尾の義一條院の御宇御狩行幸に應古山をたもひ出て氣色あしかりけれハ源ノ政頼卿應の尾二きりて鵠のきみあらずにて繼けり應尾の上の白きをみて雪のある心ちして春を忘れ古山のたもひ絶たり後西園寺殿應百首に　朝明の霞(シモヲリ)のうちの遠はまりあら尾つがずハをかけ見ましや

○あり　後又尾をよめり下居の義なるへし神代紀にかくれとよめり伊豫につべ備後にこつべ相摸にでんぼといふ○源氏にあり〳〵となかく引てといへるハ裾の事也建武年中行事に關白御あたかきねのあり〳〵とよませて殿上にかへりいつといふも同しありをつくるも古記に見ゆ束帶のかくをたつる事也

ありうこと　後言をよめり源氏にありうこちとも見えたり今いふかげ言也

あらぬの　白布也、萬十、わかためさたないたつめのそのやさにねるあらぬのいたりてけむかも、織女にハ白きをいふ例歟、楢

あらぬりのすゝ　白塗之鈴也、式、八十島神祭料注文之中に白途鈴八口、萬十七、あらぬりのすゝとりつけて、

あらひ　スコシ隙體ヲシテノ意ナリ、ヒコシラフ、比部引シラフノ轉カ、あのひねよ、すこしうちあらひ給ひて、濱松四、ねひあらへる人の、同三、すゝなさ、さらぬかほにまぎらはしもて、かくい給ひつゝ、はぢしらひ聞え給ひて、林葉

あらひも　白紐也、萬八、春山のさきのをゝりにわかなつむ妹かあらひもみらくしよしも、

あらびやうし　信云、徒然草、多ノ久資が申けるハ、通憲入道舞の手の中に興ある事ともをえらびて、礒の禪師といひける女に敎てまはせけり、白き水干にさやまきをさゝせ、えぼしを引入たりけれハ、男舞とぞいひける、禪師がむすめをまさいひけるが、此藝をつげり、是白拍子の根元なり、佛神の本緣をうたふ、其後光行多くの事をつくり、後鳥羽院の御作もあり、龜菊にをしへさせ給ひけるとぞ、信按、興福寺延年舞の古譜の中に、白拍子と云曲あり、其詞のさま又ふしはかせをつけたる趣、今の申樂の諷本にいとよく似たり、見て知るべし、又春日若宮の神樂歌の中にも之良拍子と云曲あり、あかれハ白拍子の歌曲を再諷ひたるによりて、やがて舞女の稱とさたるもの也、七十一番職人歌合に、白拍子の壽あり、下髮の女烏帽子をハ着す、扇をもて傍に敲あり、詞に所々にひく水ハ山田の井どのなはしろ、歌に、つゝみうち見はやしけるもいちじるく月にかなづる白拍子かな、わすれゆく人もむかしの男まひくるしかりける戀のせめかな、判、昔の男舞、戀のせめなど歌めきたるに腰の句つかすきこゆ、此歌合の比ハ、白拍子昔さハ少しかはりたりさきこゆ、

白拍子　遊女也、是ハ鳥羽院の御時、島の千歲和歌の前といふ、貳人の女舞出しけると也、始ハ水干に立烏帽子を着て、白鞘卷をさして舞ければ、男舞さも申ける、然るを中比よりほしたばかりにて、水干ばかり着て舞けるよし、平家物語に見えたり、水干ハ多くハ白色に用る物なれば、かの島の千歲和歌の前の着たる水干も白かりしによりて、白拍子と名付たるなるへし、朗詠集、ある詩歌などをうたひ舞ふものなり、いまも猿樂の能に白拍子の形をして舞ふ事有り、古の白拍子の體をまなびしよりまなびきたりたるものなり、貞ニ

あらべいふ　清少納言記ニ、わつかにきゝわたる事をハ、我もさよりありたることのやうにも、人にもかたり、あらべいふもいとにくし、後明思ふに、春曙

子と云曲あり、あかれハ白拍子の歌曲を再諷ひたるによりて、やがて舞女の稱とさたるもの也、七十一番職人歌合に、白拍子の壽あり、下髮の女烏帽子をハ着す、扇をもて傍に敲あり、詞に所々にひく水ハ山田の井どのなはしろ、歌に、つゝみうち見はやしけるもいちじるく月にかなづる白拍子かな、わすれゆく人もむかしの男まひくるしかりける戀のせめかな、判、昔の男舞、戀のせめなど歌めきたるに腰の句つかすきこゆ、此歌合の比ハ、白拍子昔さハ少しかはりたりさきこゆ、

白拍子　遊女也、是ハ鳥羽院の御時、島の千歲和歌の前といふ、貳人の女舞出しけると也、始ハ水干に立烏帽子を着て、白鞘卷をさして舞ければ、男舞さも申ける、然るを中比よりほしたばかりにて、水干ばかり着て舞けるよし、平家物語に見えたり、水干ハ多くハ白色に用る物なれば、かの島の千歲和歌の前の着たる水干も白かりしによりて、白拍子と名付たるなるへし、朗詠集、ある詩歌などをうたひ舞ふものなり、いまも猿樂の能に白拍子の形をして舞ふ事有り、古の白拍子の體をまなびしよりまなびきたりたるものなり、貞ニ

あらべいふ　清少納言記ニ、わつかにきゝわたる事をハ、我もさよりありたることのやうにも、人にもかたり、あらべいふもいとにくし、後明思ふに、春曙

あらりうたげ　尻打上の義ちあ反た也敏達紀に踞坐又踞ノ字なとをよめりあらくめなハ　神代紀に端出之繩をよめり倭名抄に注連をあらくべなハとよめり字顏氏家訓に見ゆ藥の尻をこめたる繩也今のもゝ繩即是也○左繩とも見ゆ左繩ハ日道ノ左旋を象るといへり西土にて左搓打繩をもて鬼子を縛すといふこと道家の術に有ともいへり

あらりさや　萬葉集に劒後と書てたちのしりさやとよめり毛太刀に同し虎豹猪鹿の皮毛を表になして劒の鞘にかけたる虎ノ皮ノ尻鞘水豹尻鞘唐皮尻鞘赤皮ノ尻鞘蛇ノ尾ノ尻鞘なと記錄に見えたり○繪の尻鞘といふあり絹にて尻鞘を造り虎豹の類を畫きたる也といへり鰐形尻鞘左筆ノ尻鞘ともに管見記に見ゆ大臣公卿以下遠所行幸の時或ハ賀茂祭石清水臨時ノ祭なとの舞人何れの太刀にも入る也、

あらりせば　知爲者の義夢さありせばさめさらましをとよめる是なりをて反せ也老せハ絕せば死せばなともいへりたらばの時ハてあ反せ也知てあらハの義ありなばさよまんにハりな反らなれハあらばに同し

あらりぞく　退ノ字をよめり日本紀に斥ノ字また逡巡をもよみ童蒙頌韻に擯を訓せり後にそく也祝詞式に退字をそきとのみよめり土佐日記にありへにもそきにもそきてとも見えたり

あらりたちて　伊勢物語に見ゆ日本紀に隨後をよめり、

あらりひ　源氏に見ゆ細流に後弱きなりといへりあらひ歌なといへり六百番歌合の判に後手と書り文章に龍頭蛇尾なといふか如し

あらりへで　神代紀に背ノ字後手なとを書り今うしろてといへり被除の事呪詛の類にいへり○儀式帳に短手二段拍畢時ニ後手一段拍罷向といふ事見え神祇式に拍後手退出と見えたり齊王御拜にもある事大神宮年中行事に見ゆ

あらりへのみや　後宮の訓也天德立后の宣命に斯理幣の政と見えたるも後宮の政事なり

あらりね　尻居の義尻臀を直に席に着るをいふなり、

○あるし　知識等の字をよめり唐山の俗語に知道といふ道字意義なし○萬葉集に領ノ字をよめり伊勢物語にあるよしといへる是也今も領知といへり西土にも何の州を知といふ知つかさどる意なれハ義通へり○汁をよめり日本寄語に羹云水路と見えたり庭訓に豆腐羹といふ豆腐汁辛辣羹といふハ辛み汁也羹湯のみならす何の液汁にても通していふ也○祝詞式に汁にも穎にもといへるは大忌祭に和稻荒稻といへる同し意にて汁ハ酒を指る成へし○濃に對してあるしといふハ稀の義道路なとにいふハ濕の義也○倭名抄に醑をよめり酒薄なりと注せり

あるし　神代紀に醴をよめり又効驗契印證等をよめりあるしと通せり又萬葉に驗をまるくしもよめり○朝野群載國務の條に國印倉印文印見ゆ○塩竈抄に龜をあるしと讀と見ゆ龜トの意なり○著明をいふハ白しの義也○日本紀に氣字兆ノ字候ノ字圖ノ字をよめり表も同し又何ノ益をなにのあるしかあらんとよめり○標もよめり坐すへき所のあるしにハ版を置き立へき所のあるしにハ標を立るなり續日本紀に限伊勢大神宮之眼樹標とも見ゆ○論語に徵をよめり○記號をもいへり○徒然草に人つく牛ハ角を

抄にあらべい調にやと有るいあたらず、あらべいひあらへつゝ、ありうたふなどいへる類ひにて、良敝〔ラベ〕の反ㇾ禮なれい、あれの禮なりに通いしてもいふへし、あれ者などいふ語もあり、あらい敝い牛溺にいふ、類名

あらます　覺也、與のさむる也、座のあらけるといふ、鼻あろむのしろむも同し、山家下、山里のこゝろのゆめにまどひねれは吹あらまかす風のたゞ哉、宇都保さしかけ、てにふれで久しくなりにけるに、聲ありあらます、（琴ヲヒク也）、林葉

あらませば　萬九、くやしかもかくあらませばあを

によしくめちごと〳〵見せましものを、

あらまゆみ　白眞弓といまゆみの木にて、けづりたる白木の丸木弓なり、古歌などにあらま弓とよみたるい此事也、又やぶさめに用るあらま弓ㇾ白巻弓也、あらまきを略してあらま弓と云也、白巻といふ黒ぬりの弓に白き藤を巻たる也、すなわち重藤の弓の事なり、寶弓兵鑑にい、流鏑馬ㇾ神通のかぶらにあらま弓を持べしとあり、射手方聞書にい、流鏑馬に弓ㇾ重藤矢ㇾかぶら也と有り、古歌によめるあらま弓といふ別也、眞十

ありうごと　後言　尚書、無面從退有ㇾ後言、

ありうごと　枕、我ㇾ生れさせ給ひしより、いみじうつかふまつれど、まだたゞしの御衣一つ給はめぞ、何かありうごとにいきこえん、などの給ふがたかしき

きり人かむ馬ㇾ耳をきりて其をるしさす律のいましめなりと見ゆ

あるしのすぎ　源氏の歌によめり印ㇾ杉と書り童蒙抄に伊勢の國あふぎの郡の事を出せるいぶかし萬葉集に　みわの山ふもとめぐりのよこかすみあるしの杉　のこれなかくしそ　詞林採葉に祝ㇾ大物主ㇾ神以ㇾ杉ㇾ木ㇾ爲ㇾ主と見ゆ今も社邊に一株の老杉ありて此名をよへりとそ　○大武有國卿任はて、京にのぼるとて香椎の社にて　五とせいまるしの杉につかへてきこしㇾ梅の花のみやこへいかや杉をいふなるへし

あるしのつるぎ　伊勢風土記に標ㇾ劒と見ゆ節刀成へし、

あるしのはこ　紫式部日記に見えたり神璽の御箱を申奉るなり

あるしのやま　標ㇾ山と書り大嘗宮の前に兩國の國司列立すべき所のあるしの木に山を造りさま〳〵の作り物をかざりて引立る事續日本後紀に委く見ゆ○淳和帝の大嘗祭に凡玩好金銀刻鏤等ㇾ飾一切不ㇾ用標以ㇾ賢木ㇾ造之用ㇾ橘幷木綿ㇾ類ㇾ書悠紀主基ㇾ字著ㇾ樹杪ㇾ以ㇾ清素供ㇾ神事ㇾ耳と類聚國史に見えたり

あるす　注記書錄等をよめり知の義より出たり○識ㇾ誌に同し

あるべ　應神紀に導者をよめり菅家萬葉集にい指南をよめり識方の義なるへし○孝徳紀に爲ㇾ師をあるべすとよめるも意通へり

あるまし　日本紀に惟ㇾ字相ㇾ字などをよめり臆（シヨウ）欲の義にや新古今集に哀人けふの命をあらませいㇾ難波のあしに契らさらましをあらませもあるましとかよへり

○あれ　竹取物語に心ちたゞあれにあれて葉花物語にあれかたくなしきなど

に人々わらひめ、信云、あたうかたりと同言ときこゆ、

ありくさ　信云、今關中にて蘭に似て小き岬の田溝などに多きな、鷺のありさしといふ草ぞ、

ありくさ　見安鷺のありさしといふ草あり、和名鵠鷺兒刺似（完而細堅宜爲ㇾ席、萬十一、みなとあしにましれる草のありくさの人皆ありめわか下思ひを、

ありぞく　退、正治二年百首、雜房、何とかや風にちりそく鳥の名になけきて年を渡るさそ聞、

ありはつる　知果、ありはたすといふに同しく、むりてのつまり、まてを知きはめたふする也、拾玉集なか〳〵に物のあはれなるありはてん人にい見せし春の明ほの、

ありひ　河海、ありおとあり、シリヨクル事也、源梅枝、なほ〳〵しきことにあり〳〵て、なひくいとありひに人わろきこそや、（拾遺ㇾありをにしたかひ、小櫛ㇾありひによれり、傍例考ふへし）、林葉

ありびなる歌　耳底記上、下句よはくいひたらぬやうなるをいふ也、尻きれありひ同しやうなるものにて、その内分別有り、

ありめ　後目、挾衣一、ありめはつかしげにみいれつゝ、源夕顔、ありめに見たこせて、同みとつくし、

女君ありめに見たこせて、

ありや　後屋、小馬命婦集、みまやのありやにいに

見えたり○れのかありかを人にあれつゝなどよめるいあられつゝの義也

あれもの　源氏にあれものゝ物語せんと見え枕草紙に犬をゝしてかくいへる事見えたり本朝文粹東鑑等に白物とかけり萬葉集に愚人をあれたる人とよめり左傳ㇾ注に無慧ㇾ所ㇾ謂白癡と見ゆ

○あろ　代をよむい神代紀に見えたり知事の知の如し皇代紀に實をもよめり○常に苗代といひ日本紀に草代庭訓往來に桑代などいふい直に其物を指の辭なりよて商家に代物の辭あり　○頃を日本紀にあろとよめり畝百ㇾ爲ㇾ頃といへるにい合かたし土左ㇾ國に五十餘萬頃海に沒せし事日本紀に見えて土佐傳ふる所あぜなし千町といへり千町即一萬石の地にて吾川郡にあたれり是代の義なるへし倭名抄に頃ㇾ今之法ㇾ六町六段二百四十歩と見えたり後に代といふにい異れるにや　拾芥抄に七十二歩ㇾ爲ㇾ一代ㇾ五十代ㇾ爲ㇾ一段ㇾと見え三代格に令前ㇾ租法熟田五十代二百五十歩ㇾ爲ㇾ五十代ㇾと見えたりよて十代田五百代小田などいへり又東代西代といひ田を平らにするをあろすかといふめりあろをかく鷹のあろなかへるといふ詞も同し後世幾代と音によふも是なり　○今ㇾ俗價をあろといふも代の義也○城をよむい白聖より名くる成へし又領知の意にや小城は堡障也○樋代舟代土代壁代などあり實の義也○城を姓にい音に呼り

あろうるり　徒然草に見ゆ白瓜の説　よろしうるり反り也されど其えぼしたやの牘親僧都さへうるり物を我もあらずといはれたれい打まかせてあれい事をあれたりとすへしともいへり或ハ渾沌をよめり

あろかね　銀をいふ白金の義也天武天皇の時より始て我邦に出たり　延

たりて、すまひして、今昔廿七、人皆靜リテ後屋へ出ケルニ、

汁　宇つ保祭使、くりやめ、くろき、こいひけにいれて、さはやけのするして、もてきたり、玉勝間云、甘露寺元長卿記、於姉小路三位亭有汁、又云、内藏頭有招事、汁張行、今の世にも田舍にて汁といふことあり、客たの〳〵飯をはたのが家より持來て、其家にハ菜と汁をまうけて、あるじする也、是を國によりて、汁講ともいふぞ、林葉

あるき　いちあるきも同し、記室をも記り、夫木抄一、春日野のわかなもあるく春きては霞わたれる片岡のはら、紀貫之集　かより火のかけもあるけれハうは玉のよ河のそこハ水もよえけり、

あるく〳〵　知なからさいふに同し、拾玉集　ふち川になとやけふまて身をなけぬ有るにかひなき身とハあるく〳〵、

あれ　この詞中比よりまゝ有り、あれ者あれわらひの類ひハ、あせものあせ笑といふに似たり、されどいふ詞も有り、左禮の音語とし、又ハ洒落の音語なりともいふべけれども、左志ハ音かよへハ、あれと同し語にもあらん、義經記八、武藏ハ敵を打はらひて、長刀をさかさまに杖につきて、二王立にたちにけり、ひとへに力士の如く也、一口笑ひて立たれハ、あれ見給へ、あの法師、我等をうたんとてこな

喜式にも太宰府より毎年銀八百九十兩を貢すと見えたり後佐渡伊豆より出せり○五雜俎に唐ノ大宗賜房玄齡黃銀帶則黃銀非金明矣漢ノ武帝紀收銀錫造白金則白金非銀亦明矣と見えたり○ちやぼ銀重さ一錢半ばかり圓形錢の大さの如く面に矮雞を鑄つけたり京室町の養林菴にもと數百粒ありしか今十餘粒のこれり此寺加藤清正の菩提所也といへり朝鮮銀なるにや○いたがねハ鈑銀也○銀ハ愚ハ吉野山にあり征夷將軍與(陸奥)良の反せし所也

あろぎぬ　日本紀に俗を訓せり白衣の義續紀の宣命に出家人も白衣もと見ゆ俗俗を綿素といふ義也梵書に白衣居士華嚴音義に西域ノ俗人皆著白色衣也なども見えたり○日本紀に紈をあらきぬと訓せり素之輕者と注せり○神宮の人參宮に白衣をきるハ淨衣の意也○今ノ人喪服に白きを用るハ清朝の人の長崎に來るも同し往古よりの禮にて素服といふこれなり

あろし　白をいふあるしの義明らかに見ゆるをいふなり○攝政頼通公曰若定頼才能賢則賢然緩怠亦甚我聞博雅才人之筆管絃无所不通而天下緩怠白者也定頼豈甚耶白者猶言知名者見小右記○傳燈錄の注に印度以一年爲一白と見ゆ

あろしめす　神代紀に知ノ字又奄有の字祝詞式に知行の字所知食の字などをよめりろし反り也めすハみるに同し知看といふ意也萬葉集にをらしめすとも見ゆ

あろたへ　常に白妙と書りよて文字に就て白く妙なると說ハ謬れり白とハ

たをまもらへ、あれ笑ひして在けだ事ならず、近くよりて打るなとて、左右なく近付者もなし、大鏡第三、左大臣師尹、御をひの八宮に大饗せさせ奉り給ひて、上戸にはすれハ、人々あいらて遊ばんなどはぼして、さるべき上達部たち、さく出るものならハ、おハしなどかしきさまにさゝめさせ給へと、よく敎へ申させ給ひけり、さこそ人がらあやしてあれ給へれと、やむことなきみこの大事にし給ふ事なれハ、人々あまた參り給へりしも、古代なりし、類名

あれ　癡、うつほとしかけ、めでしれて云々、○續世繼かかさの松、たてまつらざらんハ、あれこじなりといさめければ、○方丈記、かくわびしれたるものどもも、ありくかとみれハ、○土佐日記、ありとあるかみしもわらはまで、あひしれて、○今昔廿八、極三白事ニ非ズト云テ、○同同、郎等ノ片白タル有ケル、糸見苦シキ麁口ヲナム、常ニ好ミタル、中略木ヨリ片白タリケル男ノ、○源少女、れやのたちかはりもりゆくこゝハ云々、○枕冊子、まみとりとて、あれものはしりかゝりけれは、同、びんしくなかしき君達も、隨身なきハ、いとをら〳〵し、林葉

あれたる　癡、あれ者の類ひも同し語にて、或ハ老あれてなどもいへる、癡人をあれものと訓れハ、たゝかなる意有り、蜻蛉日記上、是を初めにてまたも〳〵たとすれど、かへりことも せざりけれハ、ま

染めをいふ妙ハ假借の字もと絹布の名也よて萬葉集に白細布を訓せり白栲の袖白木綿の吾衣袖とも書り又白妙の藤とつゞけたるも藤爲の布をいふなり又白妙の麻衣きてとよめるハ喪服をいふ也○古語拾遺に植穀造白和幣と見えたりされハあろたへハ穀の皮をもて造れる布也よて白栲をよめり白にぎてハ木綿也といへハ白木綿とも書る也○白妙の雲庭白妙に白妙にほふなど萬集葉よりたゞ眞白なる意に轉してもいへり

あろむ　倭名抄に擣押をよめり油の事にいへり今ハあむるといふなり○新撰字鏡に犒をよめり牛乳也と注せり

あろめ　白錦をいふ建保職人歌合にあろみの鏡見えたり白銅鏡なるへし○遊女白女ハ丹波ノ守大江國淵か女なり古今集に見えたり大和物語にハ源ノ告か女江口ノ遊女記に江口ハ則觀音爲ノ祖中ノ君、小馬、白女、主殿、蟹島ハ則宮城爲宗、如意、香爐、孔雀、三牧、神崎ハ則阿弧姫爲ノ長者孤蘇、宮子、力命、小兒之屬と見えたり

あろもの　貨物を代物といふハ日本紀に草代之物兵代之物延喜式に倉代ノ物なと見えたり○禁裡詞に鹽をあろものといふ海人藻苅に見えたり○あわ　倭名鈔萬葉集に緑をよめり肉輪の義なるへし文選に波をよめるも同し古今集に波のあわとよめり新撰字鏡に誠に作りあわむとよめりあわくむも同し

あわざ　神武紀に習俗を訓せり作業の義成へし又事字をよめり又云爲、爲行、行業、所爲、所行、行能をよめり伊勢物語にするわざといふに同し

あわし　鄙吝をいふ緑より出たるにやあわつこともあわつけなしともいふなり

○をるれ　榮花物語に御覆だゝをれにをれと見えたりをれの轉せるなり

○をゝや　萬葉集に見ゆよしをゝしの略語也をゝし

○をゝを　山犬の名なるべし○惡にゝふ紫錦を書り○魚の名にもよし

○をを山　越中又加賀能登に跨れり延喜式能登、國羽咋郡志乎、神社見えたり

をゝに　倭名抄に見ゆ紫苑の音也をゝり衣の色にゝふ河海に我もう裏もえき也と見えたり古今集物の名にもこしたにはびえとゝより葉小に茎にして白花なるを姫紫苑と呼り女苑とす黄花のものハ黄苑なり釋名の青苑もまた別種也花の色綠也○反魂草も同類也本草に見ゆ

をゝり　山に入に木の枝を折かけて道のしるしとするをゝふ折の義又柴折の義なるべし日本紀に折取枝葉、と見ゆ栞をゝふ也刊も梨も同じ字書に栞、糕識也周伯温が說に貫爲、山栞木謂、隨所行林木所、其枝、爲、道、識、也と見えたり新古今集に西行法師　よしの山こゝのえをりの道かくまだ見ぬかたの花を尋ねん○近世文房の具にえりと名けし物あり幾綴をもて小幅を造り右の歌をかゝり讀書いまだ卷を終ざる時に栞子間に挾て後日の標識とす古今其止所にこゝろに勝れりまた慈圓の歌もかゝりかゝんとて重なる山のみねごえにまどふ心をえりにやせむ○魚にゝふ即まんなう也○城廓にもゝふ

をゝり　柴折戸の義なるべし○今昔物語に折立門とゝふる見えたり

をゝる　新撰萬葉集に折を書りをゝつけ字折をなをゝる意成べし萬葉集白し

をろたゝむき　白腕也、日仁遠禮しのをろたゝむ、古上、たゝつのをろたゝむき

をろたゝく衣　萬十　君にあひて久しき時にたるはだのをろたゝくこうもありつゝまてに

をろな紬　椎名と云所より出る紬、椎名は河内國にある鉄、眞土

しをゝや　よしをゝしの上下略の辭也、今よしやゝふに同し、萬四、しをゝらく〳〵をこりこをゝや、同、しをゝわかせこだくもらかゝらも、同十一、君にはしをゝ、同十一、しをゝや命のしけくもなし

をゝり　六帖、をゝりしゆかましものをあひつゝ山こえよりまそふ道そのせば、源氏中納言物語、河陽縣后、うきよにはをゝらで入にけく山に何をて人のたつねきつらん、今昔ホハ、憑ン山ニ栖ヲシカバ、シヲリテ尋ネンモノ、祭リ主ヤラン、

をゝり　信云、正治二年百首、柴の戸の跡もゆばかりをゝりせよおもれぬ人のかりにこそさゝ、

をゝる　伊勢集、人心あらしの風にさそはれぬ水のめもらす枝をしをゝる、中務集　なやみせぬ雨にしをれてこもりつゝ今夜ふしぬさゝはこさゝが、

をゝる、この義有て、假名同しからず、綴ぢる也、又ぢゝむ綴語にて折也、引をゝる意なるもあり、栞をゝりと訓も折也、新撰萬葉集にも、

栞集にも梅の花雪にをれてと見えたり吹からに秋の草木のをれふせる意也をるにあらず○伊勢物語に倉にこもりをゝをりたまふとゝるも責る意なれば同義なるべし

をれ　神事に詞也醴折なと書り、

須の部

す　爲字をゝむなる也又せる反せん反也將、字をゝむる同しまさにをゝむ再讀するハ欲然也と注す意なるべし且も古文に見ゆ乖向をゝむは背違已後多しこゝろはをゝむなを萬葉に令、言令、聞と書りをゝむる也又らるれうの動語をさしをせをにゝふ皆令の意なるべし○不ハ濁りてよりまる反也又ぬと同韻也未ハ已の反對也弗ハ不之深也と公羊傳に見えたり又匪を弗の字義とするものあり厥を匪、解ヲ匪、用、其良、の類是也匪弗ハ音之轉也をゝり匪ハ非也推古紀憲法に非齋非、同と見えたるもまた不齊不、同となして看べし古事記にハ勿を不、字のごとく用たり○助語にをゝり伊勢物語に夜も明なんと思ひをゝふかゝしをと通ゝり○後撰集に　松もひさわかなるつまなりのをゝたゝしいかゝはやも咲なん是は松も引ず若葉も摘ずの意兩向を貫きたるなり不飲酒食肉をゝふかゝし物語にも多く詞にて歌には多く見及ばずそ○本のまゝにつゝをゝはず物のまゝの事にをゝふ素の轉音也をゝくをゝの略なるべし又むなしきを意にゝふ徒手の類也徒手ハ空手也又無益の意にゝふ徒仁徒法の類をゝにをゝす○酢ハ酸の義也神代紀に酸をゝりと酢にあまりをゝふ事職

芝折と書れしハ假名也、後撰集雜、人心あらしの風の寒けれハこのめも見えす枝そむなるゝ、

○

す　爲也、萬七、あさりすといそにわかこしなのりそを、

す　渚也、萬六、たきつすに鳴なるたつの曉のこゑ、同七、たきつすに鳥ハすたけど君ハたえせす、

す　酢也、萬十六、ひしほすにひるつきかてゝ、和名酢亦作醋須、温無毒云々、

ず　不也、萬七鳥ハすたけきみハたえせず、

す　簾、源氏宋、女の物やハらかにかきならして、すの内より聞えたるも、同竹川、大方のこゝやかにまきるゝ事なき御有さまどもの、すのうち心はつかしう覺ゆれハ、こゝろつかひせられて、

す　巢、枕冊子、鼠のいまた毛もたひぬを、すのうちよりあまたまろはし出たる、

すあふ　素襖の事、襖之字ハ玉篇ニ云書に袍襖ト注したり、袍も襖も一類なるゆゑ、玉篇に袍襖ト續て云ひたる也、袍襖ハ上に着る裝束にて禮服也、此禮服ハ官位ある人ハ綾などを以て縫ふ也、無位無官の者ハ麻布を以て縫ふゆゑ素襖ト云也、素ト云ハかざりもなく麁相なるを云也、（襖字の音ハアク也、アの音轉してアヲトよみて和訓のごとくなれり）公家の朝服に（朝服とハ朝廷へ出仕に着る服也、朝廷ニ禁中の事

人歌合に見えたり酢のすきたるといふ諺も鴨、長明か歌に見えたり萬年醋あり萬浦醋あり六月醋あり和泉酢ハ建長二年ノ記に和泉ノ郡御酢ノ荘貢ノ酢と見ゆ今も酢垣内の名存せり　○陸奥松島より三里の高木といふ所へ行道に酢川といふあり水の味酢のごとし地中に明礬ありといひ傳へり　○物につけていふハ子の音轉也扇子臺子鏡子の類也　○簀ハ透の義簾のすきかけなどいふも同し　○簾をすとのみいへること多し儀式帳に前簀といへるも是にや又廁簀葦簀などあり　○窠ハ栖の義なり栖をすとのみもよめり　○物の中の虛なるをすといふも窠より轉したるなり　鬆ノ字の意也　○洲をよむハそう反音也其證古事記に見えたり　○渚をよむハ洲より出たり　○湍をよむハ古語拾遺に安河原を八湍河原に作りせと通音也　○神代紀に沙をすとよめるハすなの略也

○すあう　素襖の音也といへり源氏にすあをとも見えたり布を用ゐて唐綾の襖に對したる名也といへり大雙紙にすきまあうハ越後ぬのを染たるをいふと見えたり又射手すあう見えたり懸素襖ハ略也袴なく烏帽子なし　○大坂にハ元祿の末まで庶人の葬禮に素襖を着たり時の奉行禁止せしとぞ

すあし　天武紀に徒跣をよめり生足といへる如し

○すい　俗に不言而知其理二者をすいといふ職人歌合にも此詞あり粋ノ字なり文選に魏國先生有粋ノ其容注に孟子曰君子生色粹然見於面不言而喻と見えたり　○事物に就てすいするすいきるといふハ推度の意ありてずゐなどいふハ猜度とみゆ、

也）袍と云服あり、襖と云服あり、衣服令ニ云古書に、文官の服を袍と云、（文官といハ學文を本として世を治る、政事を專に執行ふ司也）是ハ縫腋の衣也、（縫腋とハ兩方の腋をぬひつゞけたるをいふなり）武官の服を襖と云、（武官といハ武道を本として天子を守護する司を云也、大將中將少將左衛門右衛門左兵衛右兵衛の類なり）是ハ闕腋の衣也、闕腋とハ兩方の脇をぬひふさがずあけてあるを云なり）此襖の事を後代ハ闕腋の袍と云、本名ハ襖なり、貞丸

すい　今の方言に純一なるを粹といふ、よく物にとほりたる也、文選六臣注に、魏國先生有粹其容といふ注に、劉云、孟子曰君子生色、睟然見於面、不言而喻と有によれハ、この睟字を用へき歟、あざやかと訓すれハ、よく物のことわりにあきらかなる也、類名

すいかい　透垣、源末摘、すいかいのたゝすこしもれ殘りたる、かくれのかたに立より給ふに、同橋姫、あなたにかよふへかめる、すいかいの戸を少しれしあけて、同、あなたのたまへハ、竹のすいかいしこめて、みなへたてたることなるを、

すいかん　水干と書りもと糊を用ひす水張にして干たる絹の名なり末代に鞘裝束になりて一流の服の名となれりといへり、

すゐくわ　水火天神ハ大應寺の伽藍神なり、

ずいさん　吏學指南に斷約年月實ノ人指使者名ヲ曰隨身即今ノ典履身ノ良人也と見えたり舍人也劒を帶し弓箭を持て供奉する者をいふ　○隋身所ハ攝家清花家大將經歷の家に此あり二方に廳懸あり武家管領職の家に鞦所あるハ此據準也とぞ　○小隨身といふハ本府の隨身の外中少將左右衛門兵衛等の召仕ふ隨身をいへり　○口語にずいさんといふも文字ハ同し

すいだう　水道の音なるへし、

すいとん　蔬食譜に水團林粉色包糖香湯浴之と見えたり雞卵と稱するも同し、

すいなう　漉水囊の略なり茶經に見ゆ今の制篩（フルヒ）に似て馬尾羅と俗事方に見えたる是なり、

すいばち　水撥なるへし花池をかくる用とす形三線の撥の形の如し、

すいはん　水飯なり源氏榮花などに見ゆ今の世にもありてひめといふ物なりといへり本草に飧飯を水飯なりといへり、

すいひやう　頼朝公の時遠勇にして捍禦に堪る者を出入近親す是を隨兵と號す東鏡にみゆ凡隨兵を撰むハ譜代弓馬容儀此三者を兼るにあらされハ採なかれとも見えたり、

付る、前に一所後に四所付る、紐ハ丸組の緒也、きくぶちも紐の色も不定、前の紐ハえりの上かどに付る、後の紐ハあり後の裏中に付る也、前紐短く後紐長し、大的の時ハ紅、栃葉、水色等の水干、人々の年の程によりて染べし、紋ハ主々の家の紋をぬひ物にすべしと、大的の書に見えたり、武家にハ紋を付る、公家にハ紋付られず、今時蹴鞠の時水干として着する物ハ、水干にハあらず、直垂に似たる物也、（蹴鞠の水干も飛鳥井家にて私に作り出したる物也）水干官服にあらず、官位なき人も着る物也、今昔物語巻十六、伯耆守經國が盗人を殺したる物語に、在廳の官人をつかハして藏をひらかせて見るに、年三十ばかりの男のいかめしきが、水干裝束したるを引出したり、又巻二十二、觀視上人在俗の時、賊を助て絹布を得たる物語に、五十ばかりなるおそろしき男水干裝束して、打出の太刀帶て、郎等卅人計具して出あひて云々、右の卅計の男も五十計の男もめす人也、古ハ盗人だにも水干を着たり、況や平人ハ猶水干着べき事推て知るへし、水干ハ官服にあらざる故、誰も着たるなり、新野問答、野宮定基卿云、凡水干と申事ハ甚しき臆説候へとも、愚案聊申試候、此服ハ遊宴の服に候、殊内々の儀に候、干の字水涯の注有」之候へは、川遊遙

すいぶん　李端詩に隨」分獨眠秋殿」裏と見えたり、

すいもん　水門の音なるへし閘を水門也と注せし是なり○水問ハ今云水ぜめなり、

すいれん　水練と書り水に得たる者をいふ○はたけ水練といふこと良基公嵯峨野物語に見えたり今俗はたけ水練すべきの精兵うさぎ兵法などいふめり皆知すして知る眞似するをいふ○列子に人有濱」河而居者習」於水勇」於泅」說文に泅浮行水上也、源朝樂事に泅兒とも見え弄潮も同し事文類聚に戒」弄潮」の文あり

すいろう　枕草紙に見ゆ拾芥抄笛」部に水龍と書り江記に天曆」御宇」寶物と見えたり、

○すう　日本紀に鎭坐をすう雜居をまぜすうとよめりするすわると用る故也

すうき　後漢書に管」樞機」と見えたり俗に少緣をすうきあるなと云是に同し、

すうみん　司命の唐音なり今長崎の港に來る清人菩薩（ホサ）と稱し祭る神多しそれか中に司命を祀り神を降し禍福をいはしむ時俗是を荒神使と呼て其靈驗を語る是浮屠氏の阿尾奢」法に似たり阿尾奢ハ遍入と譯す鬼神を請降して人の支體に遍入せしめ將來の善惡災祥を問て謂しむるなり藏中に阿尾奢」法一巻あり巫風妖術の類のみといへり、

すうわり　俗語なり體貌の艶なるをいへりすわるを强くいふ辭なるへし、

○すえだ　八雲御抄に楚を訓せり直枝の義なるへし

などに用るより、出來哉と存候云々、貞五

すいせん　水纖（庭訓往來二見エタリ）碎螺（ライセン）（尺素往來二見エタリ）同物也、すいせんかんの事條々聞書に見えたり、葛の粉をねり砂糖を入て薄くひろげてさまして、短尺の如く小く切りたる物也、黄と白と二色を交る也、本ハ水仙羹なるへし、水仙の花の色也、古いたれみその汁につけてくひし也、今ハいり酒につけて食ふ也、古ハいり酒などハなかりしなり、貞六

すいひやう　隨兵と云ハ、將軍家御拜賀の御參內、（御拜賀とハ、御官位にすゝみ給ひし御禮を、禁裏へ申上給ふをいふ、御參內とハ禁裏へ御入あるを云）又ハ神社へ御參詣等の時に、式正に行列を正さるゝ時、名ある武士幾十騎も幾百騎も甲冑を着して御供するを云、何も騎馬也、外の御供の面々ハ水干直垂狩衣素袍等の裝束也、隨兵ハ主君を守護し奉る役なる故、甲冑を着し、弓矢を帶して御供する也、賴朝卿の仰に、隨兵ハ三德を兼ね備ふる者必其役に候ずへし、（候ずとハ勤るを云）三德とハ、譜代の勇士、（代々武勇ある也、）弓馬の達者、容儀の神妙（容儀ハ其身のかたち男ぶり也、神妙ハ其生付見事なるを云、）譜代といへども其藝に疎きハ鑒衛の侍なし用意有へし云々、右賴朝の詞、東鑑巻廿三に見えたり、貞四

すえる　日本紀に酸餡をすえりくさるとよめり酸味を生して損敗するなり倭名抄に冷酢をひいすゆるとよめるも同し

○すたろし　應にいへり萬下の義なり

○すが　清をよめり神代紀に清々之と書てすが〳〵しとよめり清地も訓同し○菅をよむもすが〳〵しきものなれハ名とせる成へし○俗に纐糸ないふも清の義なるへし○涎（ヨダレ）金もすがといへり

すがう　速香をよめり速く消盡る惡香の名也といへり、

すがゞき　歌にたしねかるゝづかすかきとよめるハ菅垣成へし○箏の譜にいへるハ清掻の義なるへし蘇合香の樂にすがゝきの說といふことありと體源抄に見えたり源氏にあづまをすがゝきてと見ゆ花鳥に和琴に菅攪片攪とて神樂催馬樂に用る事ありといへり

すがき　屋にえつりといひ床にすかきといふ簀掻の義なるへし後頼歌に　山かつの蘆屋にかけろ竹すかきふしにくゝしもれもひける哉○蛛のすがき拾遺集に見えたり　萩の葉にすかく糸をもさゝかにの七夕とてやけふハ引らん露にもいへり玉葉集に　夕されハ野もせにすかく白露のたまれハかてに秋風そ吹、すがこも　續古今集澗り江に生るすがこもとよめり菅を菰と二項なるへし、

すかし　文選華陽をかざりすかしとよめり今もすかしぼりなどいへり透涼ともみえたり

すがしめ　古事記の歌に見ゆ清し女（メカ）なりしハきの略くいしめといふ如し、

すかす　令透の義かす反く也胸をすかす竹をすかすなどいふハ疎通の義

すいきよ　吹噓、白氏文集明本四十四、與陳給事書、何者率不過有望於吹噓剪拂耳、

すいさつ　推察、後漢書廿一、邳彤傳論曰、凡言成事者云云、斯固原情比迹、所宜推察者也、

すいしん　隨身と云ハ、左近衛右近衛の官の下役に、將曹府生番長近衛などゝ云役人あり、此役人何れも弓をもち胡籙を負ひ太刀をはき、大將中將少將に付たがふを隨身と云、左右衛門督同佐、左右兵衛督同佐などもめしつるゝ也、眞四

すいそやのおゆう　出車、衆の事、車に乘て後より御供する人に、車を借給はり乘る人を出車衆と云、紀河原勸進猿樂日記云、上樣御所樣御成已前御興也、出車衆云々、出車衆トハスイシヤ衆ト云(スイシヤ尤、ヒトタマと尤云なり、ひとたまひとハ副車ト書く、倭名抄云、漢書ノ注云、副車後乘也、又花鳥餘情に、土車をハ公方より點せられて其人に給ふゆゑに人給となつくる也云々、人給とハ人に車を借し給はるを云也、人給の車と云へきを、車を略して人給とばかり云ひ習はしたるなり、眞四

須可　和名須加、神名式、須加神社、難太平記、伊勢ノ國ノ蘇我ト云所ノ領家モ、基氏ノ妹婿トカヤ聞及シ也、勢陽雜記、須賀村ありて、松坂より乾行程二里とハへり、應仁記、須可ノ積善寺、行嚢抄、南高岡村ヲ出テ、神戸前迄ハ畷路ナリ、須賀村ハ畷路ヨリ左ニ見ユ、此村根岸ノ名物ナリ、上田百樹云、今須可村有リ、按、當國ニ須可ト云處所々ニ在テ、凡テ海邊ニアル洲處ヲカノ義ナラン、此須可郷ハ今海邊ニハアラザレドモ、古ハ此郷ノ邊迄モ海ナリシ地勢ナリ、

すがかさ　菅笠也、萬十一大きみのみかさにぬへる有間菅、同、まのゝうらの小菅の笠をきすてきにけり、

すがく　巢かくる也、後拾遺秋上　さゝかにの巢かくあさちの末ごとにみだれてぬける露の玉、後撰雜四　さゝかにの空にすかける糸よりも心ほそしやたえぬと思へは、

すがしめ　清女蚊、古下、こゝを社すがいらといはめあたらすがしめ、續後紀歌、よのなかのいすかしわさをそへかさり云々、いハ發語にて清所爲スカワサにや、楢

すかす　人をいつはりていひくらますをいふ、俗にだますといふに同し、又なごめるかたに通ふも有り、拾玉集　人ならばうらみもすべしいかにせん我をすかすハ我心なり、類名〇雖、續詞花戲咲小大進、きてかへる物ともあらで夏衣ひとへこゝろのすかされにけり、大和物語、さて時々かよひけれど、いかなる人のすかすならんと、つゝましかりけれ

すがたゝみ　菅疊也神武帝の御歌に見えたり、

すかなかる　新撰字鏡に嘻囉をよめり又さく〳〵しともよめり心中不悅樂貌とも坐歎貌とも注せり不好の意にや

すがぬき　菅貫と書り茅ノ輪をいふ輪二丈六尺圍八寸葉をもて造り茅を心さし紙をもて纏たる者也、内侍所の調進ハ茅のみを用ひといへり法性寺ノ入道殿下六月祓ノ詩に未知何物號菅抜結草如輪令首蒙と見え實治百首に　あはれまた我いくとせのけふにあひてあさちすかぬきみそきまつらん

すかね　生鉄をいふ宇治拾遺に見ゆ、

すがのね　菅の根なり萬葉集に長き春日又いねもころなどつゝけり山菅なりといへり、

すがはら　續日本紀に土師之先出自天穗日命云々改以爲菅原姓〇神名式大和ノ國添ノ下ノ郡菅原神社すがいら村にあり今天神とす〇古今集に菅原朝臣と出たるハ例他に見えず是ハ大臣と大納言とのあはひのやうに菅たるならんと覺ゆ延喜二年に左遷の宣命を燒棄られて左大臣を贈り給ひつれと獨藤原家にはゝかりて贈左大臣と書かたけれハのかれてさハ書しなり百人一首に菅家と書しハ崇めたる詞なるへし、

すがふ　歌に生すがふなどよめりがふ反ぐ生次の義なりすぐいつぐ也源氏に打すがひとも見ゆ顯昭説にいまがふと同しつがふ意なり〇姓にいふハ菅生とかけり河内の郷名也

すがほ　素顏也紅粉を粧ハさるを云なり楊妃外傳に虢國夫人不ノ施脂

粉自美飽常〃素面朝天を見えたり素面を音にもくり

ますかゞび　俗語なり素寒貧の字を填たり○此間もますかゞよめり集要に此間此處也と見ゆ

ますがめ　俊名鈔に眇を今新撰字鏡に瞎また眺をよめりますがふ目なるし平、忠盛の眇なりしを誄誄によそはやせし事平家物語に見えたり○俗にだめつますがめつさふ矯つ直めつの義なるべしまた物だめるには一目

眇にするぬにや天〻目一箇命の名も木匠の神なれば此義也とぃくり

ますかも　出雲風土記に見ゆ菅蘇の義なるべし萬葉集に　宇治川に生る菅藻を川はやみこそ来にけりつゝにやまし

ますがら　終夜をよもがらと今古語拾遺に大夜ますがらと見え日本紀にも夜ますがらと見ゆ新勅撰集に夢もますがらとよみたるはつゝしまた通ますがらともくり古事記にはかもる大刀ますがらかしたる木のそや〳〵とあれはますがらかぐらも訓せり多の部考令まくし身ますがらふ詞も同義成べし

ますかり　酒を濾ヲの布巾を云其他にも此詞あり皆透の意かり反なり○ますかびかび反きなれば同義にや二言集に　山かつのますかる竹かき枝もませタかはなれりますかび〳〵に

ますかる　物の末になりて盡なんとするをますかるといふ末杜の義成べし純字をよめるも此義あり金葉集に露のますかも草の葉もしとよめり庭訓記にもの語萬葉集に見えたり大神宮式に須我流横刀、羽纏之名の柄以鞆、羽纏之を

ますがた　容貌也、萬四、見し人の言出ますがたにもかげにしてと同十一にはくる妹かはねます花のあかものますがた夢にみえつも

ますがたゝみ　皆蘆也、古中ますがたゝみやまやしろ斯而、類名、其地作、宮坐、故其地常於、今云須賀、須賀也、斯而、類名、其地作、宮坐、故其地常於、今云須賀、須賀、

ますかゞみ　速敏河海抄〻物に速の意をしてはや〳〵その事也なとゝいへれど、たしかならず、すべよかゞゝふ詞の略に似たり、中略なればますかゞみなり、また久敷を約れば古なる、その古加をまた約れば、加之なれば、これまた同し詞をつゞまる也、神代紀に蒸嚢鳥等の御事にいくるも、御心のすこやかにして堅固の意なれば、速きその意遅しと健なるを訓べく源氏物語桐壺〻かくいまゝしき身のそひ奉らんもいと人聞うかるべし、又見奉らでは又もあらんと、さしもうのたまはせ給ふ、思ひきこえ給ふ、ますかゞみもまたらせ奉り給つゝなりけり、毋后の、あなたそろしや、奉仕の宮の女御のいさまかなて、桐壺の更衣のあらはにはかなくなれしためしも、ゆゝしと思しつゝみて、ますかゞみしうもたはしたらさりけるほどに、古事記上、故是以〻其速須佐之男命、宮可〻造作之地求〻出雲國爾到〻坐須賀此二字以音、地、而詔云、吾來〻此地、我御心須賀須賀、

ますがのね　枕詞　長き、たゞひさたれて、ねもころ、萬十、菅根の長永日乎さありつゝ思ふに上つ也、山菅をよめる歌も多く、此三例のごとくも山菅の根なるべくみゆ、さて山菅の根は、細く長くはひひろごる物なれば、長きをつゞけたり、又同四、菅根之念乱而とあるは、根のたよりにはひみだれたる心にて、思ひさまよふたとつゞけたり、又同十一、菅、根、側隠云、吾君をあるは、根の凝ほぐされたるやうになれる物なれば、根もまた菅蘆也、古中ますがたゝみやまやしろ

ますがのねの　菅之根也、萬十一、ますがのねのねもころ君かむひたる、菅の根はくみからみたはゆるものゆゑ、ねもころにかたらふにたとふ、又菅のねのたもひみだれそよくるる菅根のごとみだれそはゆるゆゑあるふ歟、山菅を和名に菰門冬となましば、こゝもたかくの古歌人くりの、もころとふことに如ふ成べし、檜

ますがのねの枕詞　長き、たゞひさたれて、ねもころ、萬十、菅根の長永日乎さありつゝ思ふに上つ也、山菅をよめる歌も多く、此三例のごとくも山菅の根なるべくみゆ、さて山菅の根は、細く長くはひひろごる物なれば、長きをつゞけたり、又同四、菅根之念乱而とあるは、根のたよりにはひみだれたる心にて、思ひさまよふたとつゞけたり、又同十一、菅、根、側隠云、吾君をあるは、根の凝ほぐされたるやうになれる物なれば、根もまた菅之根也、萬十一、ますがのねのねもころ君かむひたる、菅の根はくみからみたはゆるものゆゑ、ねもころにかたらふにたとふ、又菅のねのたもひみだれそよくるる菅根のごとみだれそはゆるゆゑあるふ歟、山菅を和名に菰門冬となましば、こゝもたかくの古歌人くりの、もころとふことに如ふ成べし、檜

ますき　杉を訓せり新撰字鏡に椙とも見ゆ日本紀に椋ともよめり集韻に杉也と見ゆ面に生ふるもの故に名とするとし萬葉集抄に見えたりけにもから神木とし正直の表物なれば日本紀にも石上振之神椋萬葉集にも三諸の神の神すぎとも見えたり我邦の産まれる事今歴事類に見えたれども此邦の産にや本草にも倭國に生るものを倭木とふと書せる也神名式にも榛もよめれどこれ榛〻字の誤にて訓もの當にあらず椙〻字をよめるは三代實録に見ゆ椙を錯りたるなるべし○いとすぎあり杉也温杉也とふ吉野杉の上品をべに杉とふ猿猴杉あり姫杉あり綾杉あり鬼杉あり○弘永二年六月の大風に外宮の杉多く倒れたりしはあり

雄略○一書に柄頭を鳥にして葉の鍬を掛たる鳥ゝ風也とふくり

紀に蜾蠃を訓せり細腰蜂也とて萬葉集に腰細のますらを娘子とよめり俗語にますかりとふ是也古今集にますらを鳴秋の萩原とよめるゝ此虫也後人鹿となしとよめるの多し謬なりとふくり俊名鈔にもさそひ訓せりとゝ

ばなともふ常陸にかりと云出羽にしへ峰をますらふ仙臺にますがのとふくりの○香のますかゝ本草に尾煙を見えたり

ますき　日本紀に椙、字鈕字鏁、字なとをよめり新撰字鏡に鯉をよみ鮨也を注す又鮭をよみ鮫也と注せり古事記の歌にますはのごとよめり美濃にはますの一ッを両人にて把てすく柄ゝ木の枝の如し是耕耘にやとふくりの土を撈上る器也とて名とす○俗に嗜好ものするなとふくりの物ますなとふ是なり○日本紀に次、字をますとよめりつゝ通せり畑ますの大蠶なとふゝ朱蠶也○主基も次也

さらふありて十六かゝりありといふ○常陸國大田、社造營の時杉の神材の中に鹿島大明神の文字あり左右造分明也よて一ハ鹿島に納め一ハ當社に納む其社ハ建速男、命建津分、命也○杉なりといふ杉樹の形の森の如くなるをいふ内々行事に赤飯杉成の高盛を見ゆ神杉の御飯をもるにや○神代杉と稱するハ箱根の湖の水底より出るをいふ土佐杉なと同じく木理を賞せり椒玖杉ハ酒家の樽に佳とす○日本紀に村をよめり韓語也ときらにも見ゆ○杉葉ハ詩經の荇也杉、葉に似たり接續草をもらふ筆頭菜ハ此花也○杉の澗ハ叡山にあり杉山ハ相摸、國土肥、鄕にあり順朝石橋山の殿に敗走せし所也

まきうつし　臨書をいふ也透寫の義也、

まきかけ　能なぞにいふ透影の義なり、

まきがくし　天工開物に還魂紙を見ゆ本朝にハ清和帝の崩したまひし時女御藤原多美子生前に書所の御筆の手書を潰改めさせて經典を書せられし事也に見えたり此を始めとす十訓抄にハ反古色紙をいひ東鑑にハ薄墨色紙を見えたり或ハ宿紙をいふ是也といふハ宿を經て成より名とすとぞ

まきつるま　透車なるべし新六帖に　おはなを賀茂のみそぎの車かもりて渡るまきなりけり、

まきこと　後撰集伊勢物語源氏物語にみゆ好意をいふ好事の義也まきものといふ意同し古說に物を過て好むをまきといふハ新撰字鏡に僞をまかたくなどもよめり一說に數奇事の義なるべし性質の偏僻なるを數奇者といふに意同しといへり續成筆記にも數奇人をハ秀人也と見ゆ數奇は史の李度傳に見えて命數の耐ず時に違はざるをいふより自氏文集にも文人數奇詩人薄命を見えたり○伊勢物語のまきこといひかる女を眞名本にハ相子と書れハ源宮にやうかくしし女の名を見えたりよて下文に私言をいへる也源氏に内侍のかみの御もとにて中納言の君のわたくしごとのやうにこそ歌あり

まきまま　透縫と公家名目抄に出たり庭上の繩の時に地を裾の透をまの事ならんといへり、

まきく　源氏にみゆ次々の義也といへり、

まきさ　透の義物にさすこといへる義通へり字彙に空虛無物曰赤を見えたり赤地赤貧なと云是也まつきりといへり出初にいふ也、

まきにし　眞名伊勢物語に過往と書りまきにし也後撰の詞書に過ぬるうたあるハ過ヌイヌルなり、

まきはひ　生業をいふ世を過るなりはひの義也西土にも過活といへり生理生意常業活計も同し節言に口すさぶといふ

まきはら　註子にいふ裾原也裾ハ虛なり、

まきはら　紙にいふハ播磨、國杉原の里より始て是を出せしによるといふ楮紙なりといへり○姓に杉原あり尊氏の時杉原利孝あり、

まきびたい　透額を書り冠にいふ少年の時に用ひらるゝなり厚額ハ十五歳まて薄額ハ十六歳以後といへり、

まきふね　杉を船材とする事神代紀にみゆ續古今集に　熊野川せきの

ますらを　夜ますから、夜ハ夜ますから也、身ますから、ますらをの略語也、ますなくに通音同、

ますかの山　枕冊　ますかなく　萬葉集、心にハたもふ事なくますかの山ますかなくのみや戀わたりなんますかなくハ略語也、ますなしといふハ通音同、

ますかのはゝのきふる雪　顯昭云、ますかのはゝのきふるこハ、宋祁云、淺者陋也といふ云々、然ハ陋といふ雪の落のはゝにふりかゝるを心歟、ふるといふもそのふるをいふなる心也、古今歌云　たく山のますかのはゝのきふる雪のけぬかにはんこひのみをせん、萬葉にハますかのはゝあるを、是ハますかのはゝあり、雪のふりかゝらんにハ、ねんごろし心ぞ、或本にハ、ますかのねにかゝり、ひかゝる歟、又ますゝ同音なるゆへ歟、後拾遺に、たく山のまきのはゝのきふる雪のいつまてくしをかきなでかなこれもまきのはゝにふかくつもる心也、神中、

ますかのみ　眞之賀也、高七　妹かゝますかのみそぎゆきしわれ、

眞の山　枕冊　ますかなく　萬葉集、心にハたもふ事なくますかの山ますかなくのみや戀わたりなんますかなく　略語也、すけなしといふハ通音同、

ますら　夜ますから、夜ハ夜ますから也、身ますから

さいふ詞有り、身ばかりさふに似たり、金槐集　あしのやのなたの鹽やき我なれや夜るハますらにこゆのわたらん、同、思ひ出てよるハますらにねなくに有し昔の世々のふること、續名

ますかやか　すくやか也、健也、狹衣一上ますかやかなるけしきにて源相公だにうく〳〵しき御なやみにもあらて、ますかやかにはしたなけるほとに、孟津、迷也、（女三ノ宮ノ急ニテマヨヒタルヲイフ、）增鏡　內野の雪、八月十日ますかやかに太子にたゝ給ひぬ、林葉

ますかり　後撰、おゝ法師の源等朝臣の家にまかりてゝのますかりたにしてけるを、おしたにれくるそて、うたゝねのさにこそまれる白玉ハ君かれきつるつゆにや有らん、私、法師のまをいふくるし詞ゝゝかいまさゞりにし、ますかりたものゝいふひやうしに、こゝだかなたらやなどしてゝ云、信云、此文自本になし、契云、數珠の記千也、爲家抄云、ゝゝの啼千也、

ますかる　縋左傳、物だよりとしてすがなどに取つきこと高き所へも上り、又下りもするをいふ也、拾玉集　朝つゆにぬるゝ袖のはにますかれる露なよにやハ見る、金槐集、道遠し腰ハたゝくにかゝまれり杖にますかりて此まても來る、後漢書六十二董卓傳、帝步出宣陽城門、臨河欲濟、岸高十餘丈、乃以馬縋而下、縋音直類反、續名

に渡す杉舟のくなに和のなれにけるかな

すきま　破綻たるふ透間の義なり萬葉集に人風をよめりすきの風なとゝいふ是なり○源氏にすきまなきあかつきの空とかつましきをいふ

すきまくら　年中行事歌合神今食の歌に見えたり杉枕にや大嘗會坂枕の類なるへし

すきもの　事を好む者の義なりよき色好みする人をもいふなり眞名伊勢物語に好者を訓せり好と通ふ同しすき〳〵しとも見えたり歌に梅にはよもとよめるは酸物なれは也新撰字鏡に酸をすきものとよめり

すきや　茶寮なといふ數寄屋の義記に稱する者なりとくの橋、直ッセキの文に固知儒業之拙總是數寄之源也と見ゆされは透屋なるへし透垣の類なり

すきやう　源氏にみゆ誦經の音也とて寺〳〵施す事にもいへり眞名伊勢物語に修行者ありとよめり

すきやき　禁中料理にあり杉の折に種々の物を包みたるをいふ也

すきやしろ　杉社の義鎌倉右大將集に　今つくる三輪のはふかり杉社すきにし事にやあらむとも

○すく　嗜好をすきのむといふ是也歌にもよめり○透徹をいへり直來の義なるへし○田を耕し紙を漉し網を結ひ髮を梳り魚を捕なとすへていふすくの義なり○日本紀に透徹をいひ又すき〳〵しき新撰字鏡に精をいひ又すきやかなりなとは物語源氏物語に松の葉をすきと見えたりすくよりうつれる詞なるへし宇治拾遺にむかしよりあやしき佛のおはしけるにやありけむなとゝいふを聞

すぐ　直、字、たよめり○過をよむはすぎる也言の反心也○紙をすくといふはけなりけるの反なり

すぐさま　直樣なり直にともいへり一氣たゝしなる同し

すくせ　宿世を伊勢物語長谷本に見ゆ鮑胎野鵝賦に開宿世之高價を見えたり○すくせは前世の果をいふ佛語也ふるくは見えす歌によめるは伊勢集に水とのかよはかりをすくせにて大和物語に行すゑのすくせもさ見えたり

すくなし　少をよめり元、過の義成へし出羽にてはそなたといへり

すくなみかみ　日本紀の歌に見ゆ少御神也少彦名、命をいふ萬葉集に大汝すくなみかみの造りたるらむ此の山を見れはしよしも

すくね　宿禰を書りさはそねといひて足禰を書り大宿禰といふ非也見えたり舊事紀に近宿、禰内、を見えそこにねとの義なるへしくりされた釋に稱王子、云、大兄、稱臣下、云、少兄、と見えたるを本義なるへき今武内宿禰ありて始めて官のこゝそて後の姓となれり少兄ス、ウェ、ト、なと反禰也

すくばる　強直反張の意なりまゝなるの義

すくふ　三代實錄に救たいふ助くるより轉せる詞也○物をすくひあくるといふ抄取する事也倭名抄に漉をすくひとるとよめり非歟經に漉、入天、魚、と見え又撈、字、たより正韻に沉取曰、撈言沒、入水中、取、物也と見ゆ○巢を倭名抄にすくふとよめり鳥の巢は口に喰くて作るものなれはいふ也

すくよか　強直たいふ直身の義なるへし舌のすくむと同しまたふるふを姓

倒なといふ俳諧に縦ハ短也と見えたり紫式部日記にすべたる本さも見えたり○一尺をすべなといふ第一分なといふに對する意なり

すべゆる　俗語なり押すべゆる往生すべゆなといへり

すべも　歌にすべたべ火なといへるハ炭の根をほりて燒なり又海邊にすべひ石なと濱所なといへるハ炭竈のあれりにハあらねともいへり新撰字鏡に稍をよりの雜也と注せられたるハ火なといふに同しけれハ後に黏土をもすべものといひ又黐して砂土をもいへるなるへし一種木、葉の粉なる如き物を土中より堀出し薪とする是をもすべものといへり江州能州なとにあり越後の燃ル土に同しきにや○すべも石ハ石灰なり○すべもの城ハ備中にもあり土左にもあり

すべやか　健をよりすべよかなといふやかなるやかなるやすこやかなるやすこやかなるなと見ゆすべる意也○源氏にすべ〳〵しくといへるも見也竹取にすべ〳〵と大きに成ぬるなと見えたり

すべよらし　宿曜師を書し禁秘抄果鑑に見ゆ河海に廿八宿九曜の行度を見て人の運命を考へ考なと見えたり

すべろ　すべろの薄なといへり末葉の義なるへし山をやまて後に生出るをいふ也其後の歌にたのめおきてもすべろの義なるへしと此語にも古葉集の誤字より出たれハ无事なるもいへり

すべろく　雙陸の音なり和名抄に見ゆ後人甚好之のよし栄、洪遵謬雙に見えたり○高葉集にすべろくの市城をつくりけるといふ也○官位雙陸あり五雑組にハ陸官圖なるといへり

まきはこ　透箱、落くぼ四、こかねしてまきはこなと衣はこのたぐひをもにおほせて、林談

杉のみ　杉實、中務日記、みつなりなる杉のみのたれたるを、新古今戀一、をんなのするのみをつゝみてたにもて侍けれハ、實方朝臣　たれそこのみわの檜原ゆふならなくに心のするの我なたつゆる、

杉むらの枕詞　れもひ過ぐさ、高葉集、いその神ふるの山なる杉むらの思ひすぐさき君ならなくに、言なくたゝ、杉村の過ぐかしのみ、續紀

すく　河社製、うつほ物語、源の少將ハ山にこもりにし日より、穀を斷ち燃たゝて、木實松の葉なとすきて、六時おこたりなくて、泣たゝ海をたゝ、なけきを山さとにほしてなきおはしたるを、帝より初めて、奉りて、たしかなしおぬ人なしと云々、皇極紀にハ逆似たゝひみたすくようあり、類名

すく　漉、保憲女集、みちのくのまゆみのかみもすきおほせて、

すくし　宿紙を云ハ、山城國神屋川にてすきいだすかんしの紙也、神屋紙とも云、色うすく黒き紙なる故、うす墨紙とも云、今うすみの綸旨と云ハ、宿紙に綸旨を書て敕下をいふ也、上古古紙少かりし故、禁中にてもすかんしを用ひられたり、其古例によりて今も宿紙に綸旨を書るゝ也、庭訓往來に消紙依拠底用、反古候ともある也見えたり、鎌倉時代迄も紙少かりし也、きと時雖得候、用白紙云々、此頃よりの宿紙拠底也しを知るべし、貞十四

すくせ　宿世、源少女、物のはしめの六位すくせなと同同、だのつからすくせ〳〵に人となりたるなれハ、狹衣三、あからさまのすくせなりけり、

すくせ　くを清て讀、宿世、前世宿世の因縁をいふを略て、かのみといふ也、多く過去前生の時にはるゝなるの有しといふ也、過字につきて、すぐすと訓るゝからす、伊勢家集、親にかゝはらぬすくせなりけり、年ころくにけれハきつけてけり、云々、水くきのかよはぬ宿世にてやもあるらん、同　雲非にもかよふ悲しき思ひつゝ人に宿世にたがましものを、類名

すくせ　宿世、今古部法曹家にても古來相傳の故實なるべし、是をすくせと訓せり、くを清て唱ふる也、南北相違集にも此事を出せり、無盡藏經下、懈慢解怠難以信此法、宿世見諸佛菩薩如是教類名、まくへ　まくやかなりといふに同し、健の意也、ま

柱の代に大きなる木をもとれゝくなる事ありといふ
の音なり

ますげ　菅をおほがさ通ますげ〳〵しき意歌に白菅岩小菅などよめり殊に小菅は笠蓑などにも用るものにて菅のごとく也穢をはらひ放ふる
の名ども住吉にて六月祓を菅の祓と稱すといふ新撰字鏡に蓼の訓せり
○一本菅あり○菅のあら野の信濃也
○菅ますげ山菅也日光黄菅ありはゝかり渉菅也艇ますげ地楊梅也又

まくさ　笠花御笠蓑、うね川のそこにおひつゝ
ある菅菜に淡雪ふる、出羽秋田人大友直枝云、國言に去年の秋刈殘せる菅の事なり

まくろ　風雅集、奉山の陵野のまくろがきわけてつめる若菜に淡雪ふる、出羽秋田人大友直枝云、國言に去年の秋刈殘せる菅の事なり

まくら　信云、琴の糸をかくることを緒をすげるといふより、今も足駄に緒をすげるといふ、又きせるのらうをすげるといふ、

まくろ　風雅集、奉山の陵野のまくろがきわけてつめる若菜に淡雪ふる、出羽秋田人大友直枝云、國言に去年の秋刈殘せる菅の事なり

まくふ　笠花御笠蓑、うね川のそこにおひつゝ

まくら　信云、琴の糸をかくることを緒をすげるといふより、今も足駄に緒をすげるといふ、又きせるのらうをすげるといふ、

まくろ　風雅集、奉山の陵野のまくろがきわけてつめる若菜に淡雪ふる、出羽秋田人大友直枝云、國言に去年の秋刈殘せる菅の事なり

所見なし、

まのだがさ　大神宮及諸社の鳥居側につけてあるもの菅の御笠といふ今正月の門松に添て造りかゝるものなし假なれど人を門、神に供ふといふ是も御笠を譏りたる物成べし、

まのにこもり　きり〳〵すなどいふ虫の名なるべし　ふる里のまがきの草に鳴聲やもすがの虫のすがのにこもり、

まげみて　口噤して舌強みたる義也源氏に口うまげみて又いたうまげみたる口つきと見えたり

まげる　物の柄又は緒などにいふ萬葉集に緒、字を用ひたり助るの義にや枕草紙に針に糸つくるをもまげるといふ、古今集に渡のまげてみゆ六帖に
筆の柄の折なんまだもまがらぬ浮世の中にかくもまがなど
○まこ　萬葉集に菜つむ須見ゆる山田もる酢見えるなど見えたり隆民をいふ
り男女に通ずる名成べしまつ反ずなれど約めていふなりえを内宮年中行
事にまごもも見えたり

まこうでや　思可然語を書り歐羅巴の内なり、

まこし　神代紀に少名彦のすくなしの略成べし○此をおほ無多也と注
せるによる萬葉頌證に云あり

まこし　和泉式部秋風はまこと吹るをゝひ紫式部日記にもまこうなるなど見えたり誠々の意也今も物まことまことなどいふべし○まことは
ごゝろといふ詞も是成べし○篠越を洲こしに寄よめる咏後撰集に見えたり

まこたん　俗語なるべし蝦夷の奥にある國の名ならむ
はつしたる事にいふは古よりいひ出るものならむ高國圖にいふ宝
幸こたんは國の訛言なるべし地方語なり

まこび　俗語なるべし後語考此の義なり

まこふる　頗字をよめり少しふる也字書にも頗少也と見えたり又姓多
曰頗多良久曰頗久儀有曰頗有るも注せり譯しよせどの義なり

まごも　延喜式に食薦又葉薦候名抄に食席をよめりまこもござ
もよめりその義なるべし類聚雑要抄に菅薦は竹を編て席の様に編て生ヒヲ平綱を
裡に付るを見ゆ萬葉集にも敷ヲ諸共ニ寝ましを荒薦ヲ誰か解けむ古事記に鋪設
薦、有物と見えたり後二條院御製　なはやふる神のまこもに結そえた其
あかつきを今もおもはん大嘗會の義なるべし大鏡のつぎの下にまこも
しのうつけたる事ますかに見えたり

まごもる　和名抄に敷をよめり菜隠の義也彼のまこもなどいふも同義な
るべし

まころ　雙陸の筆也もと天竺に出て波羅蹇戯といふ其後西土に到
曹植はじむるといへり

○まさ　墻壁に用るものといふ砂草の義にや埃雑抄に秘蔵をよめり薬まさ
麻まさ紙まさなどいへり○枕草紙に朱砂をまさと書り

まさ　源氏にみゆる儒者の言なるべし反也

まさ　物語に多く見えたり従者の言なるべし反也今いふまさしくの字
治拾遺にもまさしと見えたり

まさい　酸棗の義にや

まさき　洲崎の義歌にもよめり○厉州洲崎、荘絵大已貴命、江府洲崎
亦柳営秘蔵にみゆ

まさくなん　朱雀院なりまさくは吳音也○朱雀門は南大門也朱雀門よ
り羅城門まで大道を開かれしをまさく大道といふ此大道の東方を東の
京とし西の方を西の都をまさといへり

まさひ　源氏にたがうまさひ書たりと見えて萬葉集に吹まさひたるく草と
見えたりまさはさに反れはさびに同し口まさが爪のまさひなと慰む意なれど
も是も本は荒むの義なるべし事に怠り荒たるより非の出来るをいふなり
ひとをかたに通はして書なるべし或は遊字或は狎字をよめり

まさぶ　雨風などの降もり吹まさる様の事にいへり進む意成べし源氏に
ものうこといふなつかしくひきまさぶつまだとをかしうきこゆと見えたり

まさまし　荒涼たるまし反なれどまさみに同しまたましは欲、字の義なり
長明が歌に　火たにもぬ夏のまびつの心地して人もまさまさましの世や
源氏に人のまさまし事にいふなるべしの月夜のつもりなるべし出たる筐
日記狭衣枕草紙にも見えたり

まさむ　荒、字をよめりまさに通ふり源氏にむこれをはまさめたりさは
しまさりの義なるべし家物語に常緑樹成にまさむらんといふもの意未
まさむの義なるべし○風吹まさむ雨降まさむは吹も降も荒み衰へて止んと
するたいの関降をまさりとよむにも意通へり

まさめぬ　人もまさめぬ駒もまさめぬなどいへり不、愛の意也といへり進めぬ

まさめ　萬八、葬山之開乃平爲黒樹葬柴採殊之白紐見四倭四門、（此二句契沖カ誤也、本居氏ノ平鳥里アヲヤマトヲレバヨシ山ヲシヨシ出タル人マカルキヤ也）曾丹集、葬處だおしはきのふつのまにはふ山へのすそ野のくまは冬だなつむ駒そなはゆる堀川百首雑葬後拾葬上、あはつのまさごのまさつかそらせ、山のそのまさろ、拾玉三、すそのまさき、堀川百首雑葬小笠原まさごにやどる下草になつまてあるへつるふの駒、新六雑部、まさごは洗ふ、林葬

まさかふ　信云、日工集、俗云スケカラ明楼をあり、正字通俗作股切音鳥、俗謂屋斜用俗云々、本文まけの下可見合、

まけなき　無人曰寐（河海萬葉集日本紀私記）孟津抄にはからぬ心也とあり、思ふに人つきのなきを、今もかくいふより、ひのうきを云、木なとの枝もなく、幹のみ直に立のひたるをもまけなきといふ也、源氏物語桐壺、物思ひの給ふへきかたなくのてたかし事、心はせのなだらかにめやすくにくからかたかし事なと、今そはしいつみるも、まましき御もてなし放こそ、まけなきそなみ給ひしが、蜻蛉日記下、かくりこもるたに親ならに醜れて倒れあるを、一本つゝ刈取るこれをまけ取るこそ、是なつくしこそいふ、若狭遠敷郡の農人、雨がふらぬはまけたのあしきこそいふ、よりて人〳〵はた自つ物の生ひ出たるが雨なに違てまく言殿れるもの也、まけのこと清なこそいふり、さて古詞ハうつりたる言を聞ゆ、

まくろう　雙六、拾遺雑賀人まくろ、まくろのいなにたてるひこつまのあはなんなん物にやはらぐ、雅經集、雙六、十あまり五の石のかすへにはたてるひこつまのあはなんなん物にやはらぐ、雅經集、雙六、十あまり五の石のかす〳〵に